

真・這いよれ！ニヤル子さん 嘲章

黒兎可

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ただ無限の暗黒だけがそこにあった。 —— H・P・ラブクラフト

※一切合切ニヤル子がマジモンのニヤル様だったら、という冒読的天啓に基づいた実験ですよ実験！

※第三章完結！ 第四章鋭意作成中…

目次

01. ネクロノミコン計画

第五種接近遭遇（偽） | 1

名状しがたき美女のような何か | 6

この世ならざる奇怪なデートのようなもの | 12

冒流的戦闘と冒流的数の暴力 | 21

吐き気を催す大戦争 | 30

夢見るままに待ち、至る | 40

第五種接近遭遇（真） | 48

あなたは逃がさない | 58

世界は闇色暗黒の園 | 64

太陰曰く下手な真実 | 72

昔々あるところ未来の物語 | 81

アイ つくる | 91

次章予告 | 102

02. 虚飾に棲むもの

未知なるカナンに真実は求めない | 105

神話的殺人容疑 | 113

神話的完全密室 | 122

神話的境界戦線 | 132

第五種接近遭遇（再） | 142

神話的爆発物処理ごっこ | 151

神話的迷宮探索 | 161

神話的全員行軍 | 171

神話的探偵ごっこ | 182

	神話的接近遭遇	193
	虚飾 VS 偽史	200
	偽史 vs 推理	207
	偽史 vs 混沌	214
	あなたにできるあらゆること	221
	孤独の中の邪神の祝福	230
	次章予告2	239
242	おまけ：COC用サプリメントもどき（※ネタバレ注意）	
	旋律の前の閑章	
	マシユルフマイハート その1	245
	とある民俗学者の走り書き、あるいはネクロノミコン計画プロ	
	ローグ	252
	マシユルフマイハート その2	259
267	劉実ちゃん残留IF、あるいはネクロノミコン計画成功ルート	
	マシユルフマイハート その3	277
03	超旋律の影	
	さながらそれは初恋の味のように／R分岐	288
	作為のある取り違い／本線	296
	これが君のセッションである証明／本線	304
	時間と空間が死んだ世界／R分岐	313
	風惑う不確実世界／本線	322
	ベテランの有無に関係ない難易度／本線	332
	出題／本線・ホワイトグラウンド／R分岐	340

番外編：八坂真尋、私用によりハイドアンドシークに挑戦する

痕跡の前の番外編

論理的な正解へのいちやもん／本線・R分岐	350
砂上の王国／本線・R分岐	359
疑念と超時空貫通儀式／本線・R分岐	368
前提条件破棄によるタイムアタック／本線	377
絶対的相対性決着済／本線	387
Which is the next stage the	p
astor the future?／本線↓D分岐	395
絶対に疑ってはいけない前提条件／D分岐⇒本線	406
次章予告3（嘘）	420

01. ネクロノミコン計画

第五種接近遭遇（偽）

八坂真尋の目から見て、空は赤かった。なにもこれは時刻が夕方というわけでもなく、ましてや彼が疲れ目、かすみ、充血しているわけでもない。ならば何かと言えば、純然たる事実として彼の視界の光景はそれ以外の何物でもない。

住宅街、息を切らせながら走る真尋。何をそんなに急いでいるのかといえ、ときおり彼が振り返る背後にある。彼から一定距離を保ち、何か、彼に接近している。それはおおむね大人の男性ほどの体躯の大きさをほこり、四肢と頭を持つシルエットをしていたが、根本的な造形からして人間のそれではない。詳細なシルエットこそ赤い夜空のせいで見えないまでも、どこか悪魔的なそれを連想させる、頭蓋から生えた角と背部から生えた翼である。

直視してはいけない——、真尋の中の本能的な何か警告する。それが何を指し示すか連想することができると、今の彼に余裕はない。夜道、突如として現れた「それ」に接近された時点で、彼は全力疾走をしていた。その顔に目など確認こそできなかつたものの、しかし何故か「それ」が自分の存在を狙いましたように見たことに、真尋は自覚的であった。

「なんだよ、なんなんだよアレ！ 今どきライダーの怪人とかでも、もっとかっこいいデザインしてるだろって！」

卑近な言葉を上げること、現実感のなさ、と危機感に混乱した自分を落ち着けようとしているのか、しかし真尋の言葉に呼応するかの如く、背後で声が上がった。それは一言でいえば何かしらの獣の声であったが、音が複数重なり合った、何か人体の重要な器官と共鳴して破裂でもさせかねないような叫び声であった。恐怖感にかられる。

一瞬振り返り、背後に「それ」の影を確認したまま真尋は走る。

再び声上がる。上がった声に、真尋の脳裏には何故かふたたび「それ」の姿が見えた。一瞬しか見ていなかった「それ」の姿が、なぜかこと克明に、徐々にその真価を顕にしていくなか、己自身が「それ」を見たとき、全容そのすべてを把握するよりも前に逃げ出したと真尋は思っていた。何故逃げ出したのかということについては、得体のしれない怪物のようなものが目の前に現れたからだ、その程度の認識でいた。だが実態は違う。彼は「それ」を見て、あまりの風体の有様にその姿を瞬間的に忘却していたのだ。

その姿は、ある意味で悪魔よりもひどい有様である——人間という顔があるはずの箇所はかつてそれが存在したかのようなへこみがあるが、ただそれだけだ。こめかみから頭頂部にかけてまるで皮膚の内側から裂けるかのごとき有様で角が這い出ており、「それ」の呼吸に合わせて微々動く。皮膚の質感は海洋生物を連想させる深い色をしており、そして明らかに、先端が三又の槍のように分かれた尾を持っていた。時折びちゃびちゃと「それ」から垂れる何か飛び散る音が真尋にとってなぜか不快でしかない。まるで大きな虫でもにちやにちやと噛み潰して砕くようなその音が、たいそう耳障りで冒瀆的なそれだ。

「この、くそッ」

脳裏に焼き付いたそれを思い出してしまったせい、足を纏れさせながらバランスを崩しかけた真尋は、しかしてそのまま直進せず横の狭い路地に入った。単純に道が狭ければ自分を追う「それ」を撒けるかという判断があったわけではない。混乱しているため判断に全く余裕がなく、直感的、反射的にそう動いてしまっただけだ。だからこそその進行方向が行き止まりであることに悪態しか出てこない。眼前の単なるコンクリートの壁を殴り飛ばすが、出血と激痛に顔をゆがめる。いや、その痛みのせいでむしろ真尋は多少冷静さを取り戻した。

「なんでだ……！　なんでオレがこんな目に——ッ」

そしてついに、真尋は「それ」を直視してしまった。己の背後にい

るだろうそれを振り返った瞬間、真尋は動くことさえできなくなつて、そのまま後ろに倒れこんだ。完全に腰が抜け、ぱくぱくと、水中の魚が地上で呼吸をできずもがくように声も出せない。真尋にはわかつてしまったからだ。さきほどまで真尋が不快に感じていた音の正体が「それ」の咀嚼音であつたことに。人間の顔の輪郭のみをそつたような溝のある顔のようなそれが、縦に開き、捕食動物らしい鋭い牙をのぞかせ玉虫色の唾液を飛ばし叫ぶその有様は、とうてい一介の男子高校生が許容できる域にない。

絶叫を上げる。誰か助けってくれと声を上げる。しかし彼の意に反し、体は言うことを聞いてくれない。もはや真尋に抵抗するすべはない。いや、そんなもの初めからなかったに等しい。一体何がどうあれはこのような狂気的な名状しがたき怪物を前に平静でいられるものか。霊長類を騙る人類という種族が実際のところ単なる宇宙の塵芥が一つであると再認識させるに十分すぎるその異様たる威容を前にもはや真尋はただの畜生でしかない。振り上げられた長い爪も、びちびちと表面の痙攣する筋繊維が固まりのごとき腕も、もはや彼は正常に認識することが出来ないほどに混乱し、そして正気を失っていた。

空を見上げる。赤く正常な判断を失つた狂つた世界を前に、這いずることさえかなわず彼は叫ぶ。いや、吠える。そこにはもはや感情も理性的な判断も何も乗っていない、ただただ恐怖からの絶叫に他ならない。未知なる眼前の「それ」に対する恐怖。それそのものに対する恐怖と、それに何かされる恐怖とが折り重なつたそれは、しかし誰にも聞き届けられることなく――。

「Where there is Cosmos, Chaos lurk and fear reigns――, But by the insanity story have been told ferret, mankind was given hope of fake...」

何事か呪文のごとき女性の声が聞こえると同時に、肉を割き骨を陥没させたような音が鳴った。はつとしてみれば、眼前の「それ」が縦

に裂けた口を大きく開き絶叫を上げている。それも一目で原因を納得させられた。「それ」の頭頂部からは、明らかに紫色の、おそらく血液に該当するだろう何かの噴水もかくやという程に溢れ噴出し続いていた。あふれ出た血液のようなそれが天高くマグマ噴火のごとく舞い散り真尋にも降り注ぐ。鼻をつく濃縮された乳製品のごとき匂いで鼻をやられながらも、真尋は見た。

ぐらりと体を傾けて倒れ伏した怪物の向こうに居たその相手は、一目でおそらく十人が見て十人とも美しいと形容することが出来るだろう容姿の女性だった。年は二十代後半だろうか。首に赤いマフラーを巻き、黒い革のライダースーツをまとった姿。身長は真尋より高くシルエットはグラマラス。左腕肘より下に無数の時計めいた装置をつけ、腹部には中央のバックルが淡く輝くベルトには懐中時計のようなものがチェーンでつながれている。膝まで届くほどに長く艶やかな形容しがたいほどに美しい髪。まるでこちらを見下すような無表情が印象的で、そして非人間的な恐ろしさを真尋に抱かせた。

「語るに及ばず言うに及ばず、仕込みは十全にはしているものの中々スリリングなことになってしまっている感じですねえ」

ふとその超越者がごとき表情に人間的な色が灯り、にこりと向けられたほほ笑みはたいそう可愛らしいと形容できるだろう。少なくとも真尋の趣味の顔形ではある。しかしてそれに何かしらの反応も返せず、ぱくぱくと、やはり声が出せない彼。

「まあ、ちよつと待つててください。——ほら、逝つていいよ」

真尋に向けていた笑みをすぐさま非人間的なそれに変貌させ、彼女は怪物の頭上に刺さっていた何かしらの金属のそれ——一般的に言えばボールであるが、それを抜き、振り上げた。紫色の血液とともに先端になにかしら、怪物の角の根元が刺さったのか共に抜き放たれる。それを気にせず容赦なく、彼女は怪物の頭部に振り下ろし続けた。あまりの光景に声が出ない真尋であるし、しかしてそれ以上に胸元にこみあげてくる嘔吐感を抑えようがない。

やがて、直接的な表現を回避するのであるならば、くちやくちやに、くちやくちやに、ズタボロにされたその肉片を蹴り飛ばし、腕時計の

ような装置を外して真尋の左腕に取り付ける彼女。ひんやりとした年上の女性の指の感触に一瞬気が動転しそうになるが、しかしそれ以上に取り付けられた装置が気になった。それは一言でいえば小さな十面ダイスを二つ並べたものを円盤状のそれに取り付けたような道具である。そのダイスが、突如からからと回転を始めた。やがて何周かすると、真尋の脳裏に、96、という数値が思い浮かぶ。それと同じ時に、ぜいぜいと今まで出ていなかった声がいきなり発声できるようになった。まるで金縛りが突如解けたようなその有様に愕然としながら、目の前の有様を視界から外しつつ彼女を見上げる。

「あ、アンタは——？」

その問いかけに彼女は少し思案するような顔になって。

「きどまれた時計、夢まぼろしの霧に消える——うん、夢野霧子とでもお呼びください」

にっこりと笑いウィンクしたその彼女は、しかしどうしても偽名を名乗っている印象がぬぐえなかった。

名状しがたき美女のような何か

「やあ、どうもおはようございます」

「——え、」

「どうかされました?」

「あ、いや、なんでもない。おはようございます」

「おじやましてもいいですか? 外で話すようなことでもないと思いますし」

「あ、あー……、まあ、どうぞ」

冒流的かつ忌まわしき昨晚の出来事もそうそうに翌日の朝。あまりの事件に茫然自失とすることも一種のショック状態に陥ることもなく、ただただ普段通り朝食の準備をし終えたころ、八坂真尋の前に再び彼女が現れた。まあごくごく当たり前というか、家のインターホンを押して家主が出てくるのを待つ程度には普通の来客としてだ。何故真尋の家の住所を知ってるのかという謎はあったものの、そんな疑問は一瞬消し飛んだ。

こうして扉を開けた真尋が一瞬思考停止するくらいには、彼女はやはり美人といえた。

夢野霧子——明らかに偽名なのはわかりきっているのだが、呼び名がないのでとりあえずそう仮称しよう。長い髪、愛らしい容姿、グラマラスなスタイルでかつ背は真尋と同じか少し上。おおむね二十代中頃くらいに見える女性である。ただ服装は昨日と大きく異なる。黄色の肩だしセーター、ストライプのネクタイ。黒チエツクのミニスカートにニーソックスと、明らかに私服、オフの日といった格好だ。いや、しかして妙齡の美人の女性が、しかもスタイル抜群の女性がこんな格好をしているのだから、真尋からすればたまったものではない。思わず赤面するのを隠しながら、彼は家の中に霧子(仮)を案内した。

「朝食ですか。いいですねー、料理のできる男の子は嫌いじゃないですよ。」

「良かったら何か食べるか？ ご飯とみそ汁くらいしか出せないけど」

「はいよろこんで！ やっぱジパング民は味噌汁ですよ〜」

何か果てしない違和感を感じはするが、その正体がいまいちわからない真尋と、そんな彼の様子を気にすることなく対面の席に座る彼女である。

丁寧に手を合わせて朝食を食べる彼女。特に変わった様子もないといえないのだが、なぜか不思議とまじまじ相手を見てしまう真尋。彼女は彼女でそれを気にしてる様子もなく、白米、みそ汁、あとたくわんを平らげた。

「ふう、ぐちそうさまと。じゃあお話しますか。たぶんもう『SAN値』は戻ってると思いますから」

人心地つく間もなく、彼女は咳ばらいをしてにこりと笑った。

「あー、夕べのこと詳しく話してくれるって言ってましたっけ？ っていうかなんで昨日あの後すぐにとかじゃなくって今日なのか……。オレを助けた後、そのままどっかいっちゃったよな」

「それは、『真尋さん』が連鎖的にSANチェックに失敗しそうな勢いだったので、多少日常回帰してあげてからの方が良心的かなーと。自然精神分析ですねー」

「いや、あの、言ってることがよくわかんないっていうか。……って、あれ、オレ、名前言いました？ なんで知ってたんだ？」

「そこは、ほら。企業秘密ってやつですよ」

満面の笑みで指を立ててそう言い切る彼女。なんだろう、美人なのだがその仕草は異様に胡散臭い。ただ「冗談ですよ」とくすくす笑いながら、霧子（仮）は話を続けた。

「まあまず質問事項を整理しましょうかね。おおむね予想はつきませんが。」

①昨日真尋さんを追ってたあの化け物は何か。

②それを退けた私は何者か。

③SAN値って何か」

「いや、最後のは知ってる。アレだろ、海産物になみなみならない恐怖心を抱いた人間が書いたような類の……」

「おっと、予備知識があるのなら話は早そうですね。ことクトウルフ神話がここから重要になってきますので、そこお忘れなく。」

……っというより、意外と真尋さん、口が悪いんです？ 友達いなかったりするんじゃない？」

「うるさいっ、っっていうかほぼほぼ初対面の相手に心配されることではないわっ」

つい反射的に悪い口をきいてしまった真尋であったが、しかし霧子（仮）は特に怒らずにここにこしている。これが大人の女性の包容力というものか、あるいは単に話を適当に受け流しているとみるべきか。いまいちこの女性そのものについて、その存在自体に胡散臭さを覚えている真尋であるからして、そのあたり判然としない。

「ちなみにクトウルフ神話的な知識として、どれくらい知ってるか聞いてもいいですか？」

「大体、原作者がかかわってる範囲は知ってると思うぞ。深く海で眠り続ける巨大なタコ頭の邪神クトウルフとか、割と人類守ってくれるけど憑依されたら骨なくなるハスターとか、大体こいつが黒幕といっても過言じゃないかもしれないニヤルラトホテプだとか——」

「あー、結構です。十分っぽいですね。というより、普通に読んでるレベルの知識っぽいですね。高校生の読書としては中々重いものだと思いますが……」

「そんなことはどうでもいいから。……っというか、なんでオレの名前知ってるんだ」

「では丁度良いので、①から順当に説明していきましよう」

やはりにこにこ笑う彼女。だんだんとこれがアルカイックスマイルなのではないかと疑い始める真尋である。

ともあれ彼女の話をまとめればこうである。彼女が所属するとある秘密機関（名前を出すと消されるとか言っていたので無理には聞き出していない）とやらが、これまた別な秘密組織（なおこっちは表向

きの名前として挙げられたものを知っているレベルらしく逆に教えられないとか)が企てた人身売買の情報をキャッチする。相手組織に潜入していたスパイが入手したそのリスト。

「で、その人身売買のリストにオレの名前があつたつてわけ?」

「そうなりますね。情報が正しければ真尋さんをさらうこと、何かの儀式の時間が書かれていました」

「儀式?」

「まあ平たく言ってしまうえば、いけにえつてやつですね。選定条件は向こうにしかわからないのですが、それでも相手はちゃんと真尋さん個人を狙ってきてるつてことです。いやー、危なかつたですね昨晩は」

「マジかよ……」

「マジもマジ、大マジですよ。ちなみに私はそのリストに載っていた真尋さんの個人情報のおかげで、真尋さんのご両親が結婚十七年目にして十七回目の新婚旅行に出かけてることとかも知つてたりします。ご愁傷様です」

正直その情報を知られていることに関しては、返す言葉もなかった。情報を知られているという事実からして相手の言っていることの信憑性について、というよりも、年頃の息子一人をおいてTPOをわきまえずいちゃつくあの両親が長期で出かけていることについてだ。

気を取り直して頭を左右に振る。真尋はふと、重要なことを思い出し、そして気づいた。

「……なあ、まさかとは思うけど、その敵対組織とかつて、クトゥルフ神話とかに関係してたりするの?」

「おお、アイデア! なかなか想像力がおありですね」

「いや順当に考えればそういう話にならないか? この流れるに……でも、つていうか、そもそもそれつてマジなの? 本当に?」

「おおむねマジです。さつきからたいがいマジしか言つてない気がしてますがマジです。まー、しいて言えば邪神同士は属性があつたり敵対関係が直接存在してるつて訳じゃないみたいつてくらいですか

ねー。いくなれば全員、潜在敵と言いましょうか。敵の敵は味方に一時的になることはありますが、基本最後は蹴落とす姿勢ですね」

「なんだか邪神から直接聞いたようなこと言うなアンタ」

「って、発狂した友達がげらげら笑いながら言っていました♪」

「穏やかじゃないなあ」

いや、だがその話が実際真実なら、ある程度説明がついてしまう事柄がある。昨晚の真尋の身に起きた異常についてだ。怪物に追われているさなか、突如明らかに自分で自分の肉体や衝動が制御できなくなるタイミングがあった。そのいずれもが怪物の声や姿をとらえたときに起こっていた出来事ならば、それは怪物の有様がまぎれもなくこちらの正気度合——すなわちSAN値をダイレクトに削っているということだろう。

「クトウルフって創作じゃないのかよ」

「んー、ほら、御大のお弟子さんみたいな人にXXXXXって居たじゃないですか。彼がもう本当にそっちの秘密結社の人間で。体系化されるまでは予想してなかったと思いますが、世に知らしめることで彼らが目的とする神の存在を広く知らしめるのが目的だったみたいですかね。そもそも御大が海の手のものに強い恐怖心を抱いていたからこそ、あっちのチャンネルが受信できたんじゃないかと私は思ってますけど」

筋が通っているようなないような。しかしやはり、どっかで実際見てきたようなことを言う女性だ。

ともあれ、と彼女は胸を張りながら続ける。

「このままいけば日曜日か月曜日、つまり明日あさつてのうちどちらかで儀式を執行するような算段みたいですので、真尋さんがそんなつまらないことでコロコロされてしまわないよう、私が誠心誠意ボディーガードするっていう話ですね！」

「コロコロいうなコロコロ。って、なんでそんなとこだけ無駄にテンション上がってるんだ……」

軽く頭を押さえる真尋に、彼女はきよとんとした後、こう言っていた。

「だっていくら化け物とはいえ、合法的に、物理的にいたぶることが出来るじゃないですか」

このセリフを聞いた瞬間、ああ昨晩みたあの非人間的というか、冷血を極めたみたいなのは見間違いないかなかったんだなど、謎の納得を得た真尋であった。

この世ならざる奇怪なデータのようなもの

とりあえずプレゼントです、と、霧子（仮）は突如どこからか腕時計めいた装置を取り出した。十面ダイスのような何かだが盤の上に二つ埋め込まれており上下それぞれが軸となっている。そのまま上を軽く撫ぜればころころと回転しそうなものだが、しかし実際にやってみると異様に硬い。不可思議そうな顔をする真尋に、霧子（仮）は「自分でやるんじゃないですよー」と言った。

「その道具、S A N チェッカーっていうんですが、それは自分で使うものじゃなくって、自動的にダイスロールが行われるものです」

「自動的に……？　っていうか、昨日もこれ使ったよな。なんなんだこれ」

「簡単に言うと、スケープゴートというか、予備バッテリーというか。そんな感じのものになります」

いまいち要領を得ない説明のようであったが、しかし霧子（仮）の説明を真尋はなんとなく把握した。おそらくこれは、正気度、すなわちS A N 値が削れる場合に自動的に稼働して、こちらのダメージを引き受けてくれるという道具なのだろうと。そしてその事実に思い至った瞬間、からからとその装置が回転したあたりでその認識が間違いではないだろうことに納得する。どう考えてもT R P G であるところのクトゥルフ神話技能に相当する知識の獲得だ、S A N 値が削れてなんらおかしくはない。そして回転が止まっても昨晚のように数値が脳裏に浮かんでこないあたり、今回は正気度が削れなかったということか。

ともあれそのあたりの予想を話すと、霧子（仮）は「ははあ、やっぱりアイデア良いですねえ」と心配そうな顔を浮かべた。

「いえね？　ほら、T R P G でもアイデア、つまり想像力が高いプレイヤーキャラクターって結構簡単に発狂しちやいかねないところがあ

りますので、なかなか注意するべきところですかねえ護衛するとき
「そんな想像力豊かでもないと思うぞ？」

「いえいえ、でもその調整はしておかないと。この果てのない荒野
のような名状しがたき現実には、探索者に優しいキーパー、神秘の守
り手たるGMは存在しませんから。死ぬときは死にます」

「ごもつとも、と、これには真尋も納得の理由だった。」

「肌身離さず、そのSANチェッカーをお忘れなく。一度に一般人が
使用できるSANチェッカーは1つが限界ですし、上限値を越したら
一発でぶっ壊れますから。壊れたら容赦なく逝きます」

「了解。……って、その言い方だと一般人でないなら複数使えるみた
いに聞こえるんだが」

「使えますよ？ 私なんかは7つ使えますし。まあそうするため
は、神話的改造人間になるしかないんですが」

「なんだそのパワーワード」

「アイデア高めの真尋さんなら、なんとなく予想つくんじゃないです
か？」

「いや、別にオレ想像力そんな豊かでもないんだが……」

しかし癪なことに、霧子（仮）の言わんとしているあたりのこと
について、真尋はおおむね見当がついてしまった。厳密な情報を聞くと
おそらくまたSANチェッカーが稼働することになると思うのである
くまで想像の範囲に留めておくが、要するに神話生物とされるあたり
の存在とか、あるいは神話的アーティファクトとか、そういうもの
を埋め込まれたり、あるいは生物的に組み込まれたり、混合されたり
といったところか。どちらにせよ人間のキャパシティを破壊する操
作が必要になるということだろう。これ以上考えるとさらに危険な
領域に足を踏み入れそうだったので、とりあえず現時点で重要な情報
のみを整理する。現時点で真尋が所持できるSANチェッカーは1
つ。上限値を超えた場合に破壊され、それ以上のSAN値喪失を肩代
わりはしてもらえなくなる。

「……って、あれ、とするとコイツの上限値ってどれくらいなんだ？」

「99ですね」

「高いな」

「それでも逝くときは逝きますから」

なんとも非常に悲しい話だった。さすがにこれが現実の世界であるというだけのことはあるのか。

ともあれ、一通り真尋が欲しかった情報については入手できたといえる。

「ともあれ、まあ真尋さんにはお邪魔かもしれませんが、しばらくは周辺をうろちよろさせていただきます」

「あー、そうかい。聞きたいことはあらかた聞いた訳だが、オレはこのまま自宅に引きこもってあればいいのか？ 平日にしる休日にしる、どう考えたってこつちの方が安全だし」

とりあえず今後の方針について聞けば、霧子（仮）はむむうと思案顔になる。

「確かに室内に入っておくというのは間違いではないですが、いいんですか？」

「何が？」

「いえね？ もしここで襲われた場合、自宅の居間がひどいことになるですよ」

「なるな」

「その場合、正気度喪失は昨晚のような遭遇と比べてはるかにひどいことになります。というかそういう傾向が出てます」

「……なんで？ あ、いや、わかった」

そうか、確かにそうだ。自宅に突如神話生物なり何なり、口にすることもはばかられるほどに冒流的な怪物が自身の住み慣れた日常に侵入し蹂躪する。いや蹂躪されるかもしれないという程度だが、これはいやそう拙いだろう。たとえるなら自宅に突然ジェット旅客機のエンジンが落下してくるようなものだ。どう考えても単なる日常風景以上に酷い正気度喪失を経験しそうではある。

そして同情するように微笑む霧子（仮）に言われるまでもなく、だんだんと自分が本当に想像力豊かなのではないかと思いついてきた真尋であった。

「やっぱりアイデアいいですよねえ。というわけで、私としてはここでたむろするのはあまりお勧めしませんかね。すわっ！　って感じですよ」

「何だ、その感嘆句……」

「ともあれ、そんなわけで私のアジトにご招待しようかと思えます。これから数日間は私の自宅で過ごしていただくかと。四六時中、ずっと防御態勢になりますが、それについてはあしからず。私はソファとかで寝ます」

「えっ」

そして、真尋がその言葉に固まってしまったのは言うまでもない。何か問題でも？　という風にほほ笑みながら小首をかしげる彼女に、

改めて目の前の、夢野霧子（仮）を見やる。日本人離れした端正な顔立ちにすっと通った鼻筋。一見するとクールに見えるものの微笑むと不思議と幼さがそこに見え隠れするような不思議な印象を抱くが、総じて可愛らしさの残る大人の女性である。外見だけなら文句なしで、口調が時折おかしなことになっているが、いわゆる妙齡の美女というやつであろう。いわく外見的には魅力的な女性に映る（内面までは彼には察しきれていないが）わけで、そんな相手と数日間櫃屋根の下で一緒という状況は、たいそう宜しくない。間違いでも起きたら責任をとれないということ踏まえて、どうしても首肯することが出来ない真尋だった。

「あ、赤くなってますねえ……。ん、ん？　あ、なるほどお」

「その好事家みたいなにやにやした面持ちを止めてくれ」

「いえいえ、まあそういう『視点』も初体験というわけではなかったですが、ティーンエイジャー相手に抱かれるとは思ってなかったの、なかなかこそばゆいですね。照れちゃいます」

「わざわざ口にするなっ」

こっちの方が照れるわ、という内心をさすがに口にはせず、真尋は眉間を軽く抑えた。

しばらく両者ともに思案顔になる。どうでもいいことだが、想像力豊かと指摘された真尋の方はさっぱりアイデアが出ないが、おそらく

これは想像力の種類の違いだろうと判断した。クリエイティブな想像力ではなく、連想力というべきか。今回相手にしている潜在敵に対しては、むしろ弱点をさらけ出してに等しく、甚だ遺憾な真尋である。そういう意味では確かに、一番最初にSANチェッカーを用意した霧子（仮）の判断は十分優秀といえ、おそらくその判断を成すだろうだけの経験値を伺わせた。

やがてしばらくすると「アイノウー」と突如手を打つ彼女。

ただし発された言葉は、間違いなく真尋にとって予想外のそれであつたが。

「真尋さん。デートしませんか？」

「……は？」

どうしてそんな結論になったと回答を急ぐまでもなく、霧子（仮）は返答する。

「要するに外に出ていればいいのですよ。昨晚の真尋さんが襲われている状況からして、敵方もある種の結界みたいなのを張って自分たちの存在を外界に認識させないようにしているみたいですし。となれば、これが妥協案としてベストかなと」

「まあ、言われれば確かに妥当な気はしてくるのだが……。デートについてたって、オレ、そういう経験ないから全然それっぽいコースとか用意できないんだが」

「のんのんのん！ そこまでマジなデートとか求めてはいませんよ。外に出てればいいので最悪近所のスーパーで買い物と一緒にするとかでもいいですから。まあその場合、半日以上スーパーでつぶす必要がありますが」

「さすがに無理だな。あー、そうなるかどうか……」

外に出て時間をつぶすといっても、そもそも基本はインドア派である。わざわざ古い本を探すためにだけに区間五千円以上もかけて駅から駅で途中下車したり、大型本屋を目指して県を三つまたぐとか、そんなすっ飛んだ行動力とかもないインドアである（※編注：筆者は何度かやらかしました）。となると必然提示できるコースは彼が普段めぐっているあたりの趣味が中心となるので、要するにまあまあ、軽め

のオタクなコースである。こんな美人を連れ込んで良いものかとかいろいろ思案するところはあるのだが。

「真尋さんが用意してくれたルートだったら、特に何も問題ありませんよ?」

こう満面の笑みで言われてしまったのは、いち男子高校生としては断りづらいところがあった。

「ほえー、ほえー、ほえー」

「さつきからずつとそんな反応ばつかだなアンタ」

「いえ、そりやほえーつともなりますとも。なるほど、真尋さんの豊かな理解力とか想像力とかは、日本のサブカルチャー的文化によって育まれた感じなんですわね」

「つていってもオレだってここは初めてだけどなあ」

一概に否定できないところではあるが、しかしそれを肯定するのも何か釈然としない。やはり一緒に行くのは失敗だったかと思いはしたが、しかし存外目の前の女性は楽しそうに周囲の本を手に取っっている。片手に買い物かごをしてはいるが、おっかなびっくりという様子で漫画本を手に取ったりしている。

端的に言えば、真尋たちは専門店に来ていた。いわゆるコミック・アニメ専門店というやつである。表紙にはかわいい女の子が虎耳もっていたり、あるいは線が太く男らしい兄貴が店長やっていたり、しかしともあれ駅で言えば2、3か所、都心でいば電気街とかにもある何階建てかの建物に来てるこの二人。「外国人とかいないわけではないですし、私の容姿でも案外目立たないかもしれませんかねえ。うまいこと考えましたね真尋さん」と軽く頭を撫でられたりといったことはあったが、それはさておき。デートということで、普段絶対に行かないサブカルチャー増殖の一つへ行ってみようと思ひ、な

んだかんだ実行に移して現在、軽く後悔している真尋であった。来はしたものの、ぶつちやければそんなに買うものがない。わざわざインドウシヨツピング的なことをするためだけに紙幣一枚使用するのはそれはそれで癪なのだが、いかんせん現状が現状だった。まあもつとも、隣の彼女は彼女で意外と楽しそうではあるが。

「うわ、これは……。えっちいのはいけないと思いますよ、私」

「って、さも当然のように対象年齢18歳以上のゲームソフトを手にするなって」

「だって私、18歳未満じゃありませんし」

「オレがまだ15だったの」

「それは真尋さんの事情ですし。それに、結構こういうの好きなんじゃないんですか？ ほらよく小学生くらいの男の子とかにありがちな、誰も見ていないことを確認してから、えっちな写真集とかを手にとって、ポロリ写真をチラ見してるように見せかけてガン見したりしてえ」

「他人の過去を捏造するнатての」

「いえいえ。そういう衝動があつても、男の子ですから問題ないですよ。むしろないといういろいろ問題があるんじゃないでしょうか」

「ジエンダー周りの問題は最近色々うるさいから止めるぞ」

「そうなんですか？ うくん、地球のことは難しいですねえ」

アンタも地球人だろ、という突っ込みも面倒なので真尋は流すことにした。というかこんな美人とする会話でもないし、そもそも妙齢の美女がこんな得体のしれないものを手に持って平然とけらけら笑っている時点で目立つ目立つ。周囲はチラチラとしかこちらを見てこないのもまた、真尋の胃に悪い。

丁度そんなときであった。

「あ、いますね」

「はっ。——ッ」

唐突に霧子（仮）が腕を振り上げたかと思えば、その手の先には某宇宙大河活劇映画の光る剣がごとき何か（なお根元に風車が象られているあたりからして、元ネタは特撮番組に依存していそうだが）が握

られていた。そしてその腕を、ぶうん、と猛烈な速度で振り切った次の瞬間、はるか外の方角で、聞き覚えのある怪物のような絶叫がこだました。

「いきまますよ?」

そのまま真尋の手をとり、突如走り出す霧子（仮）。何をやったのか、と問いただすよりも先に、真尋は一つ違和感を覚える。眼前、店の中にいる周囲の人間の誰一人として突然の彼女の暴挙に見向きもしなければ、外の怪物の声にさえ驚いている様子もない。否、それどころか、カゴを適当に放り出して棚を蹴散らしながら走る彼女と自分に、だれも見向きさえしないのは明らかにおかしい。そしてここで、外に出る前に霧子（仮）が言っていた言葉を真尋は想起した。結果、境界とかいつていたか？

ふと左手に巻いたS A N チェッカーを見れば、猛烈な勢いで回転を始めている。どうやらまたぞろ、余計な知識を身に着けてしまったようだ。

表に出ると真尋の手を放し、霧子は突然セーターの胸元を大きく手前に引いた。と、そこに腕を突っ込み、大きく見えるようになった胸の谷間の間から、何やら取り出そうとしている。

「ちよつと待っててください」

「あ、アンタ何やってんだこんな時に!?!」

果たしてそこから現れ出たのは、懐中時計めいた装置の取り付けられた、中央のバックルが淡く輝くベルト。帯は革なのか、それがずるずると胸の間から出てくる。ときおり地肌にくすれるのか「やんっ」とかそんな嬌声を出しやがるからに、真尋の下腹部的には大層悪い。ともあれ取り出したそのベルトを腰に巻くと、彼女は指で、眼前に五芒星でも描くかのごとく動かした。

「だから何やってるんだって……」

ふとみれば、空は赤い。昨晩と比べれば明らかに昼間という明るさで、赤というよりはどちらかといえば赤紫という色味ではあったが、なるほど、これが境界内にいるという証左ということか。

そして視線を彼女に戻すと—— 昨晩見たライダースーツ姿、赤

いマフラーに大量のS A Nチエツカーという姿。意味がわからない。何故一瞬であの私服からこの姿に変化したのか。

「……は？ 変身でもした？」

「んー、形態変態次——ああ、だいたいそんな感じですよ。これ、かみくだくと変身ベルトみたいなものですよ。 ”
自シャイニングから輝く疑似球多面体” っていうんですけど」

真尋は混乱している。が、そんな彼を、もっと言えば彼のS A Nチエツカーを見て、霧子（仮）は表現を選んだ。

冒流的戦闘と冒流的数の暴力

「夜鬼ですかねえ、あのビジュアルは。昨日の今日で相手が同じ種族となると、勢力は一つに絞れそうです」

とかなんとか言っている霧子（仮）の横で真尋のS A Nチェッカーは高速回転中。脳裏に浮かんだ数字が「87」なあたり、一気に削られた気がする。

それもそのはずと言っているのかどうか。昨晚、暗がりの中で見た空を舞う怪物のそれを、正面からとらえてしまったからに相違ない。真尋のイメージでは慣れが発生するだろうと考えていたのだが、しかし日中、細部のデイトールがよく見えるような光の中での神話生物の直視は、あまりに真尋にもダメージが入っているらしい。姿かたちは昨晚見た範囲と相違ないものの、脈動する筋肉、呼吸音など昨晚まったく気にしていなかった部分などが視界に入り、ほとほと頭を抱えている。ちなみにそんな真尋をかばうように前に出ている霧子（仮）のS A Nチェッカーは、二秒ほど回転して止まっている。慣れているのだろうか。

ともあれその夜鬼、ナイトゴーストとも呼ばれるその怪物は、地面で苦しむようにのたうち回っている。

「どうしたんだ、アレ」

「ちよつとした魔法を使いました、多少ダメージを与えましたうまくいってれば羽根のあたりが多少切れてると思うので、昨日ほどすばしっこくは動いてこないと思いますよ」

言われてみれば、見るもおおぞましい紫色の体液とおぼしき液体が、顔料か何かのごとくものすごい勢いで地面を染め上げている。そしてそれに気づいた瞬間すぐ目をそらしたものの、残念ながらS A Nチェッカーの起動は止めることはできなかった。

なるほど、わずかに冒瀆的光景を見るだけでも正気度を削られるというのなら、99などという上限値はあつという間に消し飛ぶのも頷ける。そんな真尋の様子を理解してか「手短に済ませますかね」と肩をすくめる霧子(仮)。大通りへ向けて走り、歩行者天国の中心に落下しているそれに向けて、彼女はライトセイバーのごとき特撮番組のヒーローが使っているような武装のおもちやを向ける。ちなみにこれは、道中で彼女が興味を惹かれて真尋が買ったものだ(平然と万単位の金額が飛んだ)。

「興味本位でも、こつちを見ないでくださいね? あつという間にチエツカー壊れますから」

首肯したものの、彼女が何をするのかくらいは見ようとしたのがま
ずかった。

突如彼女は手に持っていたそれで、空中に何やら模様のようなものを描いた(当然その軌跡は空中で何も描いていないので、何が描かれているかはわからない)。がわずかその操作で、ステッキの先端から黒い粘液を滴らせた軟体動物の複数ある足ないし触手のような、巨大なそれが出現。ぬめぬめと音を立てながらぶんぶん振り回され、そして地面で今にも立ち上がりようとしていたその動物の首にぶつかり。ぶちん、とかぶちゅん、とか、そんな音が鳴るのと同時に、何かが空の彼方まで飛んで行った。飛び去ったそれは遥か高くを舞い、市中を走る列車に激突しただろう、遠く見える範囲でいう、あたり一面に紫色のシャワーをまき散らす。と数秒遅れてまるで忘れものでも思い出したかのように、胴体、「なぜか頭一つだけ背が低くなつた」化け物の首あたりから、噴水のごとく周囲に体液がまき散らされた。

からからとSANチエツカーが回転する。触手の正体について考えるまでもなく、なんらかの魔術なのだろうとかそういう他の推測を抱くも、目撃してしまった時点でその発想に意味はない。

72。

「……………」

「ふう、いい汗かいました。——つて、あれ、どうしました

？」

既に光るステッキの先端には、先ほどあった物体は存在しない。というか、その触手が「大きく口でも開くように広がって」、残った怪物の身体を丸ごと覆いつくして消失したあたりからして、すでにS A N チェッカー再起動と同時に、現在68である。早すぎる。あまりに早すぎる。一日経たずに50近く正気度が削られそうなこの状況に、早くも真尋は絶望感を覚えていた。

「な、なんでもないや」

「なら構わないんですが……。まあいいでしょう。今後は忠告を聞いてくださいね？」

嫌でも首肯してしまう真尋であったが、そのまま「じゃあデートの続きと行きますか！」と全く調子が崩れていないあたり、やはりこの女性と自分とは生きる世界が違いすぎると再認識したのだった。なお空は青空に戻っているので結界が解除されたのだろうが、どう見ても紫色の液体についてはフォローがされてなかった。

「いやー、今日はありがとうございました！ なかなか楽しめた一日でしたね。この本とか！」

「ああそうかい。……って、アンタはオレが夕食を作るのを手伝ったりするつもりは全くないってことでもいいのか？」

「私、海外生活が長くて、おそらく一般的な日本の文化にはなじんでいないですよ」

「名前、霧子とか名乗ってなかったか。日本人の名前だろ」

「え？ あ、それはですねー、えー、まあ日本人でも私、秘密組織のエンジニアですし！」

最後の方で急に慌ててわたわたとしていたが、まあもともと真尋の認識でも彼女は偽名を名乗っていただろうということで、詳しく追及

するのは止めた。デートが一通り終わって自宅、日もくれ夕食の時間帯。準備に追われる真尋と、興味深げにテレビをかけながら本日買ってきた本を読んでいる霧子（仮）である。何が面白いのか、手元のその美少女ばかり出てくる小説群をみて「んー、これはなかなか」など謎の寸評をしている。

「何か気に入ったのがあったのか？」

「いえね？ この、最後の最後でヒロインの正体が判明して、それで主人公のとなりにはいられないってなってるのに、最後の最後でクラスに転校してきて『これからも一緒ですね♪』ってエンディングが、なかなか悪夢的だなあと」

「悪夢的なのか……？」

「トラブルから主人公が一生逃げられないっていう死刑宣告でもされてるみたいで、なかなか楽しいじゃないですか♪」

「そういう感想を抱いたことと、その感想をして楽しそうとか言えるアンタの神経が俺にはわからん……」

たとえどれほど見てくれが綺麗でも、基本的に彼女は危険人物であると真尋は理解している。理解しているが、わずかばかりSANチェツカーがからつと動いてしまったあたり、あまり深く考えるのを止めた。深淵を覗くとき、深淵もまたこちらを覗いているのだ。狂気と戦い続けているだろう彼女への理解に踏み込むことは、すなわちこちらも狂気の世界へ足を踏み込むことなのだろう。

「おお、普通に和食ですね。焼き魚焼き魚と」

「楽し気なところ悪いんだが、これっていつまで続くんだ？」

「ほえ？ あー、そうですねえ。おおむね『私の仕事』としては『月曜日まで』で終わりかなと」

「それはつまり、儀式の発動タイミングまでオレを守り切れれば勝ちってことでいいのか？」

「おおむねそうなります。そうじゃないパターンもありますが、私が真尋さんから離れられないということと、SAN値を減らさない前提で考えるならほかに選択はないでしょうねえ」

うなづきながらみそ汁をすすする彼女に、真尋は肩をすくめる。

「察するに、相手と直接対決するっていうのは難しいってことか」
「そうなりますね。……やっぱりアイデア良すぎじゃありません？
真尋さん。説明が早くて助かりますが」

「アンタと会ってわずか一日も経ってないけど、なんだか自分でもそうじゃないかと思ひ始めてるよ。すでにSANチェッカー、60切り
そうだし」

「やばいですねえ。私も本腰入れてどうにかしないといけませんか
……」

言いつつ食事をしながらも、彼女の視線はテレビに向けられている。当然のように市中で紫色の液体が飛び散った光景について、まったく報道されている気配はない。いったいあれだけで何人のSAN値が喪失されたのかということについて、真尋は積極的に考えるのを放棄していた。自分の責任もないわけではないだろうが、時に身を守るためには人間は利己的にならないといけない。というかこの調子で続いたら、間違いなく自分は廃人コース一直線なので、何とかしてほしいところだ。もっともそのあたり、霧子（仮）にどうこうできる問題でもないだろうことは真尋にもわかってはいるのだが。

「やっぱり、その、オタクっぽい女の子の方が好きだったりしますか？

真尋さん」

「は、はあ？　なんだよ急に」

「いえね？　単なる情報収集ですよ、情報収集。護衛対象の」

「なんでそんな話聞きたがるのかがさっぱりわからんのだが……」

「私が護衛しているときに都合よくそんな女の子が現れたら、別な邪神か何かの姦計かなと疑うべきかと」

　　というかそれは、相手の方がこちらの好みのタイプを把握しているということになりかねないのだが。積極的にそのことについて、真尋は考えるのを放棄する。ここ二日二日で考えることを放棄するくせがつき始めているのではないかとおもわなくもないが、なにごともし身を守るためには必要不可欠である。

「別にそういうわけでもないぞ？　まあ突っ込みを入れ続けるのも疲れるから、落ち着いた女の子の方が好みではあるが」

「でも共通の話題があったほうがいいんじゃないですか？ 自分の趣味を認めてもらうこともあるでしょうし」

「あのな、一つ言っておくけどオレそこまでマニアックじゃないからな？ せいぜい特撮とかアニメとか、適当に流し見するくらいで」

「それでも十分マニアック扱いされそうな昨今だとは思いますが……。まあいいでしょう。あ、ちななみにちなみに、容姿とかはどうですか？ 例えば私とか」

「……………」

「なんで目をそらしたんです？」

割とタイプの顔をしていたから、とはさすがに正面きつては言えない真尋であった。

さすがにこの話題が続くのは思春期の男子高校生としては色々辛いので、すぐさま話題をそらす。

「そ、それはともかく。アンタ、昼間襲ってきたアイツのこと、夜鬼とか言ってたよな」

「言ってみましたっけ？ あ、言ってたかもしれませんね」

「なんでそんな重要情報忘れるんだよ。……夜鬼って、あれだろ？」

ナイトゴースト。レッサ・オールド・ワン」

「その分類自体、私からすればナンセンスな気もしますが、カテゴリ的には間違っていないんじゃないですかね？」

ナイトゴースト。やせ細った人型をベースにした生物で、全身が黒い海洋生物のような皮で覆われ、顔はのつぺらぼう。コウモリのような巨大な羽と長い尻尾、牛のような大きな角を持っている、とかだつたか。確かにおおむねその特徴には合致した姿かたちをしていたように思う。そして重要なのは、その種族が何に仕えていたかということだ。

「オレの記憶が正しければ、アレってノーデンスとか、這い寄る混沌に仕えてなかったっけ？」

「いやだなあ、真尋さん。そんなマッチポンプするわけないじゃないですかあ」

「は？」

「あ、いえ失敬こつちの話です。んー、まあどつちかといえばノーデンスの方が一般的ですかね。ニャルラトホテプがナイトゴーストを使うのは、あくまでも間借りみたいな関係かなと」

「はあんと、そういうものかと軽く頷く真尋。思えばノーデンスとニャルラトホテプとは、間接的に呉越同舟する間柄だったかとも書籍知識から思いだす。」

「そもそもノーデンス。故ダーレス氏、ラブラフトの弟子のひとりであるが、彼の四台元素分類での解釈においては、クトゥルフと敵対、対応する水、海の神とされる。実際そういつた要素を含んではいるが、直接的にクトゥルフと対応する神であるかは置いておくとして、旧き神とされる存在の最高神とも言われる。この神が何であるかといえ、比較的人類には友好的な神であるということだ。それが人さらいを企むというのが、よくわからない。」

「いえいえ、なにもノーデンスが直接真尋さんをさらうと考えているかは別ですよ？ ほら、彼らつて一応利害関係があるっぽい相手であれば、時に力を貸したりもしますし」

「とはいえど、ノーデンスと利害関係がある何者かっているのが、それ自体あんまりイメージがわからないというか……。まだしもニャルラトホテプが悪だくみしてるとかの方が現実味があるっていうか……。」「どうしました？」

「……いや、ひよつとしてアンタ、ニャルラトホテプだったりするか？」

「一体どうしてそんな結論になりましたか」

「軽く頭を押さえ視線を逸らす霧子（仮）に、真尋は半分くらい冗談めかして言った。」

「この状況、もし本物のニャルラトホテプが存在するのなら、一番ライブな感じでオレの右往左往する様を楽しめるのはアンタのポジションかなと」

「何を馬鹿なことを……。大体、そうだったら私が真尋さんを助けるわけないじゃないですか」

「まあそういう裏付けがあるから、冗談半分で言ったんだが」

すく、と立ち上がると、霧子(仮)は両手にアイドルゲーム発のキャラクターぬいぐるみを装備し、そのままぼこすかぼこすかと真尋にパンチを繰り出した。

「てい、ていていつ！ きりこばんち！ だぶる！」

「ちよ、止めろって、どうしたいきなり！」

「人を冗談半分で這い寄る混沌扱いしておいて、何平然と笑っていやがりますですか真尋さん！ さすがに懐の広さと母性に定評のある私でもとさかにきましたです！ はいはい！ ひだりひだり！ みぎ！」

「わ、悪かったって、さすがに……」

確かに言われてみれば、これは真尋が一方的に悪いといえるかもしれない。素直に謝るも、しばらく霧子の機嫌は直る様子がない。

「まったく、どうしたら許してくれるってんだ……」

「んー、じゃあそうですね。何か一つ、真尋さんが私の言うことを聞いてくれるのでしたら——」

「却下」

「なんでですか、いきなり！」

「会って一日二日の、得体の知れない相手に、そんな全権移譲めいた空手形渡せるかッ！」

しごくまともな真尋のセリフであるが、むむう、と何か諦める様子のない霧子(仮)である。大体からしてこの女性、真尋と相對しているときのこのキャラクターと本性とが別なのでは、と彼は疑ってかかっている。大体からしてS A Nチエツカー七つも使えるとはいっているが、逆に言えば「7も使わざるを得ないだけS A N値が減っている」人間なのではないかとも推理、解釈できるわけで。そんな相手がまともな人間であるかという点、果たして。どれだけ美人で見た目は好みのタイプでも、一線を譲るつもりはない真尋だ。

「むむう、仕方ないですね。それじゃ一旦この話は保留しましょう。保留ですよ、保留」

「忘れるつもりは毛頭ないのかよ……」

と、そういう話していると。びたり、と居間の窓に何かたたきつ

けられるというか、張り付くような音が聞こえた。一瞬、テレビの映像にノイズが入り、二人の視線が窓に向き。

「きやつ！ 真尋さん!?!」

窓一面を覆いつくす複数体のナイトゴーストと、その奥に見える犬と人間を混ぜ合わせたような汚らしい人型の生物群を前に、S A N チェッカーが一気にうなりをあげた。

吐き気を催す大戦争

ささやくような男の声が聞こえる——。ダイ、とかデッド、とか聞こえたそれは、しかし言い終えた後にぐるるとなり声のような響きを伴っていた。

窓の外に見た夥しい光景の直後、電気が消灯。窓の割れる音と共に真尋の耳に届いたそれを察知してか、霧子（仮）は「目を閉じて耳ふさいでください」と叫んだ。瞬間、地面に投げつけられた閃光。猛烈な光と音が窓向こうに投げられる。その効果は意外と大きく、犬のよな声がひるんだのがわかる。数秒後、蹲る真尋の手を取り霧子（仮）は入り口の方へ駆け出した。

「……窓に！ 窓に！ つてならなかったことを喜ぶべきか、そうでないか……」

「それだけ言えるなら余裕がありますね、真尋さん。いや、ちよつとあの数はさすがにないですね……」

既に臨戦態勢の服装に変貌している霧子（仮）であるからして、状況はかなりやばいのかもれない。いや、明らかにやばい。あれだけの怪物群がのどかな街の一角を覆いつくしていたことも問題だし、そんな街でスタングレネードが炸裂したという事象そのものも色々問題がある。入り口を出た瞬間、こちらの姿を視線にとらえたのか背後で犬のうなり声のようなものが上がる。うっはー！ と軽く驚いたような声を出しながらも、霧子（仮）は走る速度を遅くすることはなかった。

「なんだよアレ。いや、ナイトゴーストはわからんでもないが」

「^{ゾンビ}屍人、いえ^{グール}食屍鬼といった方が差し支えないですかね」

「そーいや連中、仲良いって設定とかあったっけ。ドリームランドだかなんだったか」

「おお、アイデア！ じゃなくて図書館ですかね。リアル読書知識が

あるおかげで、少しはSANチエツカーの減りが軽いと良いんですが……」

「そうでもないって。もう50切った。41」

「あ、これ気を抜くと直葬されるやつですね」

やりとりこそ余裕があるようであるが、霧子（仮）は笑みすら浮かべず冷や汗をかいている。状況はやはりまずいらしい。

「いや、今までの減り具合からして直葬はされないんじゃないか？」

「とはいえど、どうせ最後の最後は神様出てくると思いますので、もう一つくらいSANチエツカーあげましようかね」

言いながら、霧子（仮）は左腕のSANチエツカーを一つ外し真尋に手渡す。と、それをつけようとした彼の腕を止めて、真剣な声で言い含めた。

「いいですか？ 必ず、今つけているSANチエツカーが0になつてから取り付けてください。じゃないとかなりやばいことになりますよ」

「やばいって……？」

「……………脳みそが、破裂します」

「あ、うん、わかった」

冒流的事件に対するチートアイテムじみたものではあるが、その実やはりクトゥルフ神話のアーティファクトの類ではあるらしい。とてもじゃないが試す気にもなれず、真尋はそれをポケットに入れた。それを確認してから、霧子（仮）はここに来て少しだけ微笑んだ。

「まあでも少し時間はとれますかね。さっきのスタングレネードで境界の効力が切れたはずなので、彼らもおいそれとすぐには活動できないでしょう」

「境界が切れた……？ 境界って、アンタが作ってたわけじゃないのか？」

「ええ。わたしもちろん作れなくはないですが、基本、あれは襲う側が張るものです。自分たちの行動を外部に知らせず、こっそりロクでもないことを行って、何事もなかったかのように日常の闇に紛れる。そういう目的のため、ニャルラトホテプの信奉者団体が作り上げた

術式で、現代では広く使われているものになります」

「ロクでもないな這い寄る混沌」

「いえ、ロクでもないのは団体の方ですよ。ほら、ニヤルラトホテプ自身はそんなこと関係なくなんにでも変身できますから、気にする必要ありませんし」

「そうでなくったって、自分の信奉者たちくらい管理できないのかよ……」

「んー、ほら、宗教ってそういうものですか？ 拡大解釈、職権乱用、なんでもありありです。儒教とか正直ヤバイ類のもんですよ？」

「そういう話、全然詳しくないけど昨今怖いからスルーするぞ」

「ええ〜……」

なぜにそんな不満そうな顔をしているのか。まるで痴漢冤罪で捕まったサラリーマンがごとき、己の無実でも証明しようとして失敗したかのような落胆顔である。それを追及する意味を感じなかったので真尋はとくに聞かず、さきほどの霧子（仮）の言った話の続きを促した。

「こう言う大変かもしれないけど、表ざたに神話生物とか魔術師とかが活動しようとする、周囲の別組織とかからつぶされるんですよ」

「あ……？ なんでだ、関係ないんじゃないのか？」

「いくつか理由がありますし、組織によっても理由は異なる場合もあります。まあ端的に言ってしまうと『自分たちの情報漏洩』にもつながりかねないからですかね」

「自分たちの？ つながらないだろそれ」

「どうしてですか？ 例えば大パノラマの手前、都心とかで冒瀆的映像が流されたとき、その中で発狂していない人間がいたとすれば、結構な確率で『こっちの』業界関係者ってことになりますし。そういう可能性がある情報がほろりと出てくるだけでも、裏で色々企んでいる相手からすれば厄介なことになりかねないというのもありますから。まあもろもろ『俺たちの邪魔になるから止めるよ』ってところあたりなんでしょうかね」

そういえば、と。「アーカム計画」なる小説など例にもれず、基本的に狂信者やらなにやらは、最終的な計画実行時までにはこそ隠れて動いているのが常である。当たり前と言えども当たり前だが、一歩間違えれば核ミサイルをぶち込まれて終了というのも十分にありうるわけで、そういう意味では自己防衛のために関係する情報各所をふさぎまくるというのも、方法論としてないわけではないのかもしれない。そして少しでもだけSANチェッカーがカラカラ回るあたり、真尋からすれば本当どうにかしてもらいたいところである。今回は判定が成功したのか減少しなかったのでもまだマシだが、いかげん頭が痛い。SAN値が減って痛いというより、SAN値が減るのを阻止する方法が思いつかないのが痛いのだ。だが耳をふさぐ、目を閉じるというのは間違いなくホラー映画の死因の一種であるからして、真尋に真実との対峙から逃げるといふ選択肢は存在しない。ともあれしばらく走った先、歓楽街を抜け鉄道をまたぎ、どうにか広い公園に足を止めた。桜は散りすでに青葉が生い茂っており、なにより池だか川だかが凍っていない。それでも妙に肌寒いあたり、立地的な事情を嫌でも思い出させた。

さすがに疲れたのか、池沿いのベンチに腰を掛ける霧子(仮)。真尋も同様に疲れていたのので、隣にお邪魔した。

「さっきの数だと、さすがにアンタでも勝てないのか?」

落ち着いたところに、思わず真尋はそう尋ねた。対する霧子(仮)の返答はシンプル。

「真尋さんを守りながら戦うのは難しいですね。さすがに周囲すべてを覆い囲まれた状態で、両方に注意をもっておくのは難しいかと」

「そういうものなのか?」

「そういうものです。私の使える魔法というか能力というか、その関係でいっても、こちらが一撃成功させれば勝てるかもしれないんですけど、同様に私も相手から何発かもらったらその場でジエンドですから」

どんなに強化したところで、人間の限界値は神話生物とかには及びません、と。苦笑いを浮かべる霧子は、どこからかカプセル錠剤を取

り出した。

「ところで真尋さん、お薬水なしでも飲める人ですか？」

「出来なくはないが、率先してやりたくはないが……。なんだそれ、飲めってか？」

「ええ。万が一真尋さんがさらわれた場合も想定して、発信機です」

嫌に本格的というか、現実的になってきたなと真尋は嫌な汗をかいた。敵もなりふり構ってきていないのは察していたが、どうやら霧子（仮）もなりふり構ってられる状況でもないらしい。数日で体外に排出されるという説明にとりあえず納得し、そのモノトーンカラーのカプセルを無理やり呑む。うえつとなったところ、軽く背中を霧子に叩かれて飲み込んだ。

「保険もかけたところで……。うーん、しかしやっぱり動機面がさっぱりわからないですよ」

「うう……。まだ喉に違和感が……」

「泣き言いわない。男の子じゃないですか」

「そういう男女差別、良くないと思うんだが……。で、何だって、動機？」

「ほら、真尋さん言ってたじゃないですか。ナイトゴースト使役する以上はノーデンスだって」

「もしくは這い寄る混沌な」

「ノーデンスだって！ とはいえど、実際ノーデンスの可能性を真尋さんが除外したのと同じ理由で、確かに真尋さんをさらう理由が相手にはないんですよ。別にアブダクトされやすい体質とか、宇宙人受けする顔立ちとか、そんな人間基準の価値観とかもないでしょうし」「なんだアブダクトされやすい体質って。並の不幸体質どころの騒ぎじゃないなそれ……。つというかアンタ、這い寄る混沌の可能性を除外してるが、何か理由でもあるのか？」

真尋の至極妥当な問いに、彼女は確信をもって首肯した。

「ええ。ありえないといえます。もし本気でニヤルラトホテプがその類のことに手を出していたなら、そもそも今頃真尋さん正気じゃないでしょうから」

「えっ」

嫌な断定のされ方だった。

「直接相手に聞こうにも、そもそも襲撃している時点でこちらの話など聞く気はないでしょうし、まっとうなコミュニケーションに持ち込めるだけの状況を作らないといけないわけですが……。とてもじゃないですが、思いつきませんね。いっそ、県外に逃げちゃいましょうか？ 数日くらいなら行方をくらませられるでしょうし」

「行方くらましたくらいでどうにかなるのか？ それって」

「場合によっては私以外のエージェントも派遣されるでしょうし、そちらと協力ならば、といったところですかねえ。ともあれ時間は稼がないと——今みたいにです」

今みたいに、という言葉の真意を、真尋が問いたですよりも先に、霧子はそばに落ちていた木の枝を拾い、どこかに構える。そして周囲を警戒するように首を左右に振っていた。嫌な予感を覚えた真尋が立ち上がると、その瞬間に月光は青から赤に。そして周囲には、明らかに人間の原型を残し、しかし顔の形が犬を思わせる形に変形しているそれを目撃した。数にして周囲一帯を埋め尽くす勢いのそれは、ゆうに五十は超えるだろう。やや姿勢が悪く、ぎよろりとした鏡面のような目が真尋を見据える。わずかにゆがむ自らの姿を直視し、一瞬頭痛を覚えると同時にSANチエッカーがからからと回りだす。37。まずまずの数字だ。

「全力出すわけにもいけませんからねえ。メリーポピンズするには傘が必要ですし……。おい！ あのー、一応聞いておきますけど、何か取引できる話とかはありますかねー？ さすがに皆殺しとか、人さらいされる前に事情くらいは聞いておきたいんですけど。一、探索者のには」

霧子（仮）もやけっぱちなのか、そんなまともな返答が返つてはこないだろうセリフをのたまう。ところが意外なことに、この一言は功を奏した。がやがやと食屍鬼たちが顔を見合わせ、なにごとか話し合い始める。おや？ と二人して頭をかしげていると、上空からナイトゴントが一体下りてくる。とっさに霧子（仮）が真尋の頭を押さえ

て上を見させないようにしたので、おそらくそこにはやはりうじやうじやと化け物どもが闊歩（滑空？）していることだろう。

『That, s not what I was agreem ent』

聞こえてきたのは、なぜか英語だった。発声器官自体は彼らに存在するのだろうか、案外と普通に聞き取れるもので、SANチエツカーが回らないくらいだ。一瞬真尋に目配せした後、霧子が上空に苦笑いをする。

「Can you speak Japanese? It's very important for us」

『Sorry, but We cannot do』

「Oh……, Oh well……, Screw it. 真尋さんには私が翻訳して話します」

なんとなくだが、どうやら日本語がしゃべれないらしいことだけは真尋にもわかった。

そして何言か霧子（仮）が上空の夜鬼とやりとりしていると——
—背後の水面から、何かが立ち上がったような音が聞こえる。聞こえた音は一つどころではない。複数の何かが水面から立ち上がるような音。それと同時に食屍鬼たちが明らかに狼狽えている。この時点で真尋はなんとなく状況というか自分たちの背後の様子を察しはしたが、しかし想像することもなく思わず霧子の手を握った。

「ふえ？ ま、真尋さん？」

何も言わずに、くい、くいと背後を指さすと、霧子はそちらをちらりと見て軽く眉間を抑えた。

「あー、完璧インスマスな感じですね——って、おつとー！」

いきなり真尋をお姫様抱っこすると、霧子はそのまま前方に走る。食屍鬼たちはなぜかそれを避けるように移動した、そして真尋たちの背後、池の方に向かって走り出す。空中からも、ごう、ごうという音を立てて池の方めがけて降下していく連中が多かった。この時点で、背後からびちやびちやというか、びたびたというか、まるで大型魚が地面に打ち上げられてうごめいているような音と、引きちぎられる肉や

折られる骨や飛び出る血の音などが聞こえたりしている。背後を振り返らずとも、真尋の豊かな想像力は核心的にその情景を描き出していた。おそらく水面から上がってきたものは半魚人の類である。細かいビジュアルは想像することさえできないしするつもりもないので割愛するが、それに向かって冒流的な生物群が戦闘を仕掛けているのだろう。

「逃げますよ真尋さん。わかっているとありますが後ろは決して振り返らないことです。たぶん、SANチェッカー壊れます」

「そうかい、そうかい！ 嗚呼、まったく散々だなこんなタイミングになつて！ なんだこの理不尽な状況！」

理由もわからず得体のしれない怪物群とかにさらわれそうになつて、なおかつなんらかの儀式の生贄にされかかっている。この状況自体訳が分からないところではあるが、事態が転々としているのも真尋の認知コストを大いに削っていることだ。突然の魚人の乱入の意味も解らないが、さきほどまで真尋たちを襲おうとしていた連中が彼らを妨害する側に回っているのも意味が解らない。

そうこう走っているうちに空の色が青に戻った。とりあえず結果からは抜けたのだろうが、まったく安心できる余地がない。しかしこうして走っていても、霧子（仮）の手はほんのり冷たく、しかし外気よりはいくぶん暖かく、生きている人間の感触と熱を真尋に伝えてくる。心臓が張り裂けそうなほどに混乱を極めている状況もあってか、そして相手が異様に美人だということもあってか、彼の正気な部分は「あれ、これってつり橋効果とか働いてるんじゃないだろうか」と冷静な分析を下していた。実際、わずか2日ほどしか面識のないこの女性に、真尋はかなり好感情を抱いている。相手のことをそもそもほとんど知らないにも関わらずだ。さすがにそこまで軽い人間に育てられてはいないと彼自身が自負していることもあって、状況が特殊すぎるのが原因だろうと結論づけた。

「どうしましたか？ 真尋さん」

そしてちらりと真尋を振り返る霧子（仮）に、やはり心臓が一段と脈打つ。漫画とかだったら顔が赤らんでいるだろうが、あいにく現実

世界では単に挙動不審になったり、異様に汗をかいたりするだけである。そんな様子を見かねてか、彼女は一度速度を落とし「どこかで休憩しますかねえ」ときよろきよろ周囲を見渡した。

立地を考えれば、この場合は繁華街。何かの小説で探偵がバーに居たりする土地柄であるが故にか、休憩所と呼べるあたりからはどこことなくピンク色な雰囲気か漂っており、「ないない」と、ぼんやりしはじめ、頭を左右に振る真尋だった。

「アイア・アイア・クフウルル・フタグン」

「は？」

そんなタイミングで、突然聞こえた言葉である。変なアクセントと濁った声、妙ななまりに、思わず反射的に背後を振り返ってしまったのがまずかった。そこに立っていた2メートル近いシルエットは、鈍器のようなもので霧子(仮)の頭部を殴り飛ばした。理解が及ばず、真尋は一瞬反応が遅れ、そしてSANチエツカーが回転する。

「えっ」

その一言だけを言い、目を見開いたまま霧子(仮)は地面に横倒れになった。

「——な、お、おい！ アンタ、しっかりしろ、おい！」

膝をつき霧子を揺さぶるものの、彼女は驚愕したかのように大きく目を見開いたまま、びくとも動かない。まるで死んでしまったかのようなその有様に真尋は気が動転。脈をはかるよりも先に彼女のスーツ胸部に耳を当てる。胸の感触などより、ちよつと速度が速いもの、一定のリズムで脈打っていることに安堵。だが、安堵したと同時に真尋は腹を蹴り飛ばされた。ごろごろと転がり、仰向けになり、そして、目撃した。

霧子(仮)を襲ったシルエットは、トレンチコートにシルクハットを着用した何かだった。それはまるでがま口財布のように横に広がった口を持っており、2メートル近いその体系はわずかに小太りと形容できるかもしれない。いや、小太りという形容は正しくない。おそらくそれは「生物種として正しく」、首が太く頭とつながっているのだ。ぬめりけのある地肌がネオンの街頭に照らされ、てらてらと乱反

射している。一步一步真尋に向けて歩くごとに、ひたりひたり、という、薄い皮膜がこすれるような音が聞こえる。

「これが、かあぎか」

そしてシルクハットをはずし、その容貌の全容を顕にした。

左腕から電子機器が爆発するような音が鳴り、そして、そこから真尋の記憶はない。

夢見るままに待ち、至る

真尋が我に返った瞬間真つ先に行つたことは、上着のポケットからSANチエツカーを取り出してすぐさま左腕に装着することだった。そしてそこまでほぼ咄嗟に行つたせいも、回転するSANチエツカーとともに正気を取り戻した。いや、本当に取り戻せたかはわからない。なにせ、真尋の声は出なくなっていたからだ。まるで喉の筋肉だけ金縛りにでもあつたかのような、そんな不気味な感覚である。ともあれ彼は周囲の状況を確認する。体全体が寒い。室内が寒いということであろうか。上着らしきものが地面に転がされているのが、まるで詭えられたかのように不気味な印象を与える。腕、足ともに拘束されていなかったことから、状況としては軟禁されているに等しいのだろう。扉には潜水艇にでもついているような大型のハンドルがされており、室内の雰囲気や、妙に生臭い空気も含め、まるでここが潜水艇か何かのようでもある。咳ばらいをしたところで吸い込んだ空気は汚れているのか、むせる真尋。ともあれ落ち着くために外の空気を吸おうと、ハンドルを回して外に出た。

潜水艇という推測は間違っていたが、どうやら大きく外れているという訳でもないらしい。廊下らしきところに出た真尋。空を見上げれば赤い月であり、いまだに彼が何らかの結界にとらわれているだろうことを示している。周囲に音がないせいかみように脈拍だけが彼の耳を打つ。呼吸を乱しながらも、彼は廊下を一步一步進む。やがてドーム状の何かに覆われたデッキに出た段階で、おおむね彼は自分の所在地の推測が立てられた。クルーザーとまではいかないが、大型船に違いはないらしい。問題は、外に見える光景が一面海原であることである。いまだに海上を進むこの船が、何を目指しているのかが真尋にはわからない。

「——きが、つあいたか」

びくり、と。独特の、皮膜がこすれる様な音をまといながら、妙な訛りのある声に真尋は体が硬直する。だが眼前に迫る恐怖と相対すべきか、そうでないか。なぜか脳裏に一瞬、笑顔の霧子（仮）の姿を幻視して、気合を入れ、しかし恐る恐る背後を振り返る。

果たしてそこにいた者は真尋の想像通りのそれだった。シルクハットこそしていないものの、トレンチコート姿には見覚えがある。てらてらとした皮膚、たるみ脂肪とえらのある首。ぎざぎざとした肉食らしい前歯と、澄んだ色をした両目。果たしてそこに居た者は、半魚人としか言いようのないそれである。SANチエツカーの回転が止まると、脳裏には80の数値。なかなかどうして、気絶直前は大量に消し飛ばされたと見える。そして片方の手には、真つ赤に染まったビニール袋。メロンかスイカか、それくらいサイズの球状の何かが入っているのがわかるが、真尋はそちらから全力で意識を逸らす。

喉を鳴らせば、どうやら声は出そうであった。

「こおとうを、きておけ。じき、なあんきよくだ」

「……あ、コート？　というよりも南極って」

いや、そういえばと。この魚人を前に、真尋は思い至る。南緯47度9分、西経126度43分。通称で太平洋到達不能極。その場所には、いわゆる彼らが崇め奉るところの「神」たる存在が眠りうごめいているはずだ。

「なるほど。で、おたくらオレに何の用だよ」

「はなすひつおうは、なあい」

「話す必要はないと言われたってな……」

生贄とか言われていたかと、真尋は頬が引きつる。状況からみて邪神、おそらくはクトウルフ神話で最も有名だろう邪神クトウルフに対して、なんらかのアクションを起こすための儀式のいけにえとして使われるのだろうと予想は出来るが、しかして問題はそこにない。

「あいつておくが、にげよう、とうあ、かんがえるな」

そう言うのと、魚人はビニール袋を放り投げる。真尋の足元にごろごろとそれが転がる。明らかに血が流れ出ているそこから全力で目を逸らしていた真尋だったが、しかしその口から、はらりと零れた髪の毛

毛には見覚えがあった。……………見覚えしかなかった。

からからと音を立ててS A N チェッカーが回転する。いや、この最悪の想像を確かめる必要はない。何かの見間違えの可能性だってある。目の前の魚人は何かを言うこともない。ただ思わず膝をついた真尋を見下ろすばかりで、彼が何をしようともそれを止めるつもりはないと見える。だが、真尋の想像力はその対応から真実のにおいを如実に感じ取っていた。見下ろすばかりで何もしないということは、それはつまり「何を確認されたところでどうでもよい」という事実に等しい。S A N チェッカーが破損していないにも関わらず、がたがたと真尋の両手が震える。そして、袋を手を取った瞬間。ぬめりとした血の感触と共に、袋の口がずり落ち、その中のものの、右上のみを露出させた。驚愕に見開かれたような目。それでいて瞳孔の開ききつた目。付着した血液で赤く黒く染まった前髪と、あきらかに抉られたような鼻の頭。骨が折れているのか、全部が見えないまでもその顔面がややひしゃげているということは想像だに難くない。真尋からすれば必要十分以上の情報量だ。美しい顔は見るも無残な有様なのだろう。そして袋の中でぶらぶらと揺れているシルエットは、コの字を描いたそれと、そこからいくつか抜け落ちた白いピースの破片に違いあるまい。

震えながらも、真尋は袋の中に手を入れ、その目を閉じた。指先の感覚がない。まるでミイラの中にも入って、それを遠隔で操っているかのような錯覚を覚える。やがて震えは全身に伝播し、袋を置いた時点で真尋の両腕は大きくぶれていた。

「アンタ、なんで、そんな——、なんでだよ！」

真尋の叫びに、魚人は肩をすくめる。

「あいちぞうに、とありこまれるのを、きよあひしとうあ。かあだも、やつかあいだった。だから、ねじあきった」

霧子（仮）が、彼ら「深き者ども」の血族に取り込まれるのを拒否したから？ その肉体がなんらかの改造手術を受けていたから？

処分に困ったとでもいうのか。だから首をねじ切って殺したというのか。明らかなそれだけで説明がつかないだろう、このズタズタにさ

れた人体の一部は何だ。S A N チェツカーの回転が止まる。72。
なんとも示し合わせたかのように、中途半端に不吉な数値である。

嗚呼、真尋は両手を握り震わせる。この、気絶できないことのなんと
もだえ苦しむほどの悲しみと怒りよ。なまじS A N チェツカーに
より狂気へと走るのを妨害されてしまっているせいか。だが彼には
分っている。己が所詮は無力な只人でしかないことを。何をどうし
たところで眼前の怪物相手に太刀打ちできないだろうことを。

それでも怒りをもって拳を振り上げた瞬間、怪物は真尋の顔面にス
プレーを吹きかけた。

* * *

次に真尋が気が付いたのは、壁一面に何らかの模様、陣が描かれた
箱の中に寝かされていた時だった。げほげほとむせるが、そんな彼に
はお構いなしに周囲からは声が聞こえる。

—— アイア・アイア・クフ、ウルー・フタゲン ——

—— アイア・アイア・クフ、ウルー・フタゲン ——

複数の声に繰り返されるそれは、一体何を目的としたものなのだろ
う。いや、その声からして実際のところはおおむね真尋にも予想が
立っている。おそらく自分の周囲には複数の魚人がいることだろう。
声の方向からして四方を囲まれているのか。少なくとも一匹だけし
かないということは決してあるまい。それだけの膨大な数の
デープワンがいて、しかも自分がこうして身動きを全くとれない状
況にあるということは、必然これは儀式がすでに始まっているからと
いうことに違いあるまい。なんらかの声や呪文の詠唱めいたものが
飛び交うのが、真尋の耳に嫌にこびりつく。言葉の指示している意味
がわからないまでも、段々と儀式の熱が、場の緊張状態が上昇してい
ることが、音からでも十分に判断できたからだ。

この時点において真尋は完全に詰みだった。まず箱から逃げられ

ないし、そもそも両腕が縄か何かで縛られている。口もさるぐつわがされておき、動くことが出来ない。仮に箱から脱出したところでその場には数十はいるだろう半魚人。どうあがいても人間が勝てる要素がない。

こうなつてくると逆にやることもなく、一周回つて冷静になつた真尋である。殺されてしまつた霧子（仮）のことが脳裏をよぎるが、しかし、だからこそどうにかして生き延びねばと、そういう思いも湧き上がつてきた。どうしようもないなら、今自分にできることは何か。考えることだ。豊富な想像力をもつてして、奴らが何をやろうとしているかを想像するべきだ――。

そんなタイミングで真尋を拘束していた箱の蓋が外され、数人の魚人が中から真尋を担ぎ上げる。

やがて転がされたのは、船のデッキの上である。なんらかの魔法陣めいた文様がデッキに描かれており、その中心、つまり真尋のすぐ横には、魚人ではない一人の男が立っていた。

「はかせ、さあ、あぎいしきあを」

「――ツ」

真尋は確信した。これこそ自分が拐された原因であると。

「〃秩序あるところ、漆黒の混沌ありき。古来よりヒトはそれを恐れた〃――」

眼前に立っていた男は、黒い闇だった。黒いコート、白い神父服。髪は長く目元が隠れているがぎらぎらと光っているその眼光を隠しきれぬものではない。

「――〃しかし探索者たちの語る狂気の物語から、ヒトはそこに仮初の希望を見出したのだ……〃」

眼前、この状況。男の正体に真尋は心当たりがあつた。だが彼がその名前を口走るよりも先に、男が深々と真尋に頭を下げた。

「やあ、八坂真尋くん。私は――無涯だ。ちよつとした研究者だね」

無涯。むがい。Mがい。ンllガイか？ どちらにせよその正体を想起させるには十分すぎる情報量である。にこりと口は笑っている

が目は完全に据わったまま。明らかに正気の人間ではなく、そしておそらく人間でさえないだろう相手。ただ周囲をちらりと見れば、魚人共はこれの正体を知っているだろう風の素振りではない。彼の原典たる小説群よろしく、おそらくかなり巧妙な手段で取り入れたのだろう。少なからず正体を察せられない程度には。そしてそれができるだけの存在であることも、真尋は知っている。嗚呼、知らないはずはない。

すなわち、これこそが———這い寄る混沌。異邦の神々の代弁者、世をつかさどる夢の播神。すべてを嘲笑う滅びを遊ぶ闇。千変万化の邪神であると。

「状況は飲み込んでいるかな？　嗚呼、首だけで表現してくれて結構。さすがに私もさるぐつわを外すつもりはないからね。自死されても困る」

「———っ？」

「うん。まあ彼らに説明を期待は初めからしていなかったからね。では、良いかな？　知るということは、すなわち『そちら側に出向く』ということだ。これから私が語る論理が、すなわちそれを君が聞くことが、聞いて自覚することが、この魔術の根幹を成す。たとえば我々矮小なヒトガタがどれだけ足掻いたところで、そこには限界以外は何もあるまい。だからこそ我々は外なる宇宙の英知を頼り、我々の閉塞を打ち破らんともがき続けるのだ」

彼の言葉に、魚人共がオーディエンスかのごとく色めき立つ。

「えー、話を続けましょう。時に八坂真尋くん。貴方、ヨグソトスなる神性をご存知か？　ご存知でない？　いえいえ、どちらにせよ一度おさらいしておきましょう。かの神はありとあらゆる場所への門！　ありとあらゆる場所へとつながっている肉を持つ、強大なるもの！　その形は空間的な横軸のみならず時間的な縦軸にもかかずらつている。彼は多くの子を外に産ませ、自らの扉としての範囲をいまだに拡張し続けている。それはおそらく、この宇宙の外の、さらなる別宇宙においてさえも！」

そのあたり、言われずとも真尋とて承知している。

「そう！　そしてこの結界。この結界が有用なのか、知っていますか？　——これは、その神にかかわる魔術。時空間を人為的にずらす魔術だからです。だからこそこの世界に一般人が紛れ込んだところで、人間は認識することさえできない。せいぜいなら日常と変わらない毎日を送るばかりでしょう。なんらかのアーティファクト抜きに、ここにおいて己の正気のまま活動することは不可能だ」

突然の新情報に、真尋は頭をかしげる。神話関係の遺物を持つなり、あるいは魔術師だったり神話生物だったりでなければ、結界の中で活動できないということか？　いや、だとすれば何かがおかしい。くしくもその理由を、男は続けた。

「ところが。彼らディープワンたちの集めた情報によれば。君はそも最初の段階、つまり『彼らと敵対する夜鬼が』『彼らに儀式をさせないために攫おうとしていた』時点で、正確に情報を認識していた」

そうだ。そもそも霧子（仮）に最初に助けられた時点では、真尋はなんらそういった話に関わってはいなかったはずだ。にもかかわらず動けたということは。ある種、最悪に近い想像が真尋の中に浮かぶ。いや、それ以前にだ。あのナイトゴントたちは、ディープワズに儀式を行わせなかったため、真尋を攫おうとしていた？　とすれば霧子は敵対する相手を間違えていたということか。

だとすれば、あの場において食屍鬼やら夜鬼やらが一瞬足を止めたのも、まるで真尋と霧子（仮）をかばうように前に出ていたのもある程度納得がいつてしまう。だが、そもそもなぜ真尋にこだわらなければいけないのだ？　そう考えれば考えるほど、ひどく最悪な想像が脳裏をよぎった。

「——そう！　つまり。そもそも君はただの人間ではないということだ。それも、我々の調査が正しければ、恐ろしくそれこそ人間と形容するもおぞましいだけの存在であるということを」

いや、それはないと。少なくとも真尋の過去の記憶において、そういったことに関係するだろう事態には遭遇したこともない。生まれてこの方、ラブラブな両親のもとで育てられてきて。とくに大事故を起こすこともなく、誘拐されることもなく、平々凡々と言えばありき

たりではあるが、それでも大した事件もなく今日まで過ごしてきたのだ。それが何をもつてしてクトゥルフ神話に関係しているというのだろうか。

いや、真尋には嫌な予感がしている。そもそも最初にヨグソトスの名前を挙げた時点で。そして無涯は、真尋にとって決定的な言葉を語った。

「ここまで言えばもうおわかりかな? —— 八坂真尋。君は、ヨグソトスの落とし子だ。特異点ポータルと呼ばれる、ね?」

突きつけられた事実は、真尋にとって最悪に近いものであった。

第五種接近遭遇（真）

ヨグーソトスという神性について語る際に言えることは、かの神はクトゥルフ神話の中でも多くの存在に自らの子を産ませていることである。自身同様（いや存在規模でいえば自身より下にあたるが）の神性しかり、人間しかり。大概の場合、それは母親の形質と怪物的な形質を併せ持ち、具体的に姿かたちが固定されて断定できるものではない。生まれ方、状況によつてかなりのバリエーションを誇る。そこをいけば、自身のような、おそらく「9割以上人間のような」落し子が生まれても間違いはないのだろうと、真尋は頬が引きつった。それと同時に、盛大に自殺したい衝動にかられる。舌を噛みちぎろうとしてもさるぐつわのせいでは不能。腕は拘束されており、足もまた同様と、みれば左腕に着けていたはずのS A Nチエツカーが外されている。この衝動的な感情は、いわゆる一時的狂気のそれであろうか。冷静な判断を下している一方で、真尋の身体はさるぐつわを親の仇のようにかみちぎろうとしていた。

自分が、そんな得体のしれない神の子供？ 人間の、あれほど仲の良い父親と母親との子供でなく？ ただただその事実だけで、真尋の正気はがりがり削れているのだろう。彼自身の頭の中のどこかが、そう冷静な分析を下していた。そもそも自分が生まれる直前、母が大病して母子共に命の危険にあつたという。自分が両親にいたく可愛がられるのはそれが理由というのもあつただろうと思つていたので、事前情報が変われば、解釈も変わる。ひよつとしたら——その病氣自体、クトゥルフ神話に依存することが原因なのではないか。だとするならば、自分は、自分というこの生命体は。それが生きるのがなんと、ひどく冒瀆的な現実か——！

そんな真尋にお構いなく、無涯と名乗った男は続ける。

「一般にあまり多く知られてはいないが、ポータル、日本語的には特異

点かな？ ふふ。ともあれ特異点とされる落し子らが帯びている使命は、ひとえにかの神性が干渉できる領域の拡張にある。認識し調べ、『新たな時代を見聞きしそこに生きる』ことで、ヨグⅡソトスの侵入できる領域を増やすということだ。くしくもそう、君や、君のような特異点の存在こそが、かの神々が物語に語られるほどに万能な存在でないことを証明してくれたことにもつながるのだが、それは一度置いておこう。ともあれ、君は人間でない。その身は末端なれど、『ヨグⅡソトスとつながっている』ということだ」

顎の力がだんだん抜けてくる真尋。筋肉の運動量的に、単純に体力切れのようなものか。ともあれその疲労と疲弊とが真尋を多少は正気に戻した。コイツらの言っていることが本当に正解なのかどうかはわからない。わからないが、それでも、自分を助けて気にかけてくれていた女性が一人、殺されている。おいそれと、彼らの思い通りになってやるつもりは、真尋には毛頭なかった。にらみ返す勢いで無涯を見ると、彼は「実に結構」と心底楽しそうにくつくつ笑った。

「そう！ つながっているから。つながっているからこそ、君たちを私たちは逆に『利用することが出来る』。わざわざアーティファクトを探し、作り、頼らずとも。我々は君たちを介することで、かの神性の力の一端を引き出すことができるのだ」

それ故に私は彼らに協力した——無涯の言葉に、真尋の想像力はある種の答えを導き出した。それにはいくらかの論理的な飛躍があったが、しかしなぜか彼には、その考えが正解であるということが「わかってしまった」。言葉ではない。単なる直感でもない。何かしらの確信が真尋の中にある。

「さすがに君一人を使つて、彼らの神を呼び起こすことは出来ない。星はそろわず、時も止まらず。だがこの時代において、この、かの神殿の真上においてなら。かの神性の精神に、ふたたび揺さぶりをかけることも可能だろう！」

大振りに腕を振る彼の腕には、真尋がつけていたS A N チェツカーと思われるものが取り付けられていた。そこで違和感を覚える真尋。そもそもニヤルラトホテプ本人であるならば、そんな道具は必要ない

だろう。カモフラージュか何かの可能性が高いのだが、しかし真尋はなぜかそれに妙な引つかかりを覚える。だがその答えが出るよりも先に、男はしゃがみこみ、真尋の顔をかなりの至近距離で覗き込んだ。どろどろと濁った光を帯びた目が、真尋の姿を射抜く。

「そう。だから君には、ここで生体ユニットになつてもらおうと思つているんだ。かつてクリスチャンの大学で行っていた、私の、『神との交信』を科学的に説明するという実験の延長のそれをね！」

「——」

そんな研究どうせ総スカンくらつたのだろうと、なんとなくだが真尋は察した。察したが、だからといってどうしたものかということろだ。これから男らが何をするのかまではさっぱり想像がつかないが、生体ユニットと言っている以上、まっとうな人間らしい扱いはとうてい望めまい。だが反抗するにもどうしようもなく。とするならば、もはや何かの運に頼るばかりか、それくらいしかできることはあるまい。自らが何らかの神性の一部のような存在であるにしても、その能力そのものを振るうことができないし、間違いなく振るえば己は正気のままではいられまい。

嗚呼、だが現実はそのままで彼らに甘くはない。魚人たちが真尋を囲み、そして無涯が何らかの装置を取り出して真尋の頭に取り付ける。まるで古いバーチャルなゲームボーイのような道具だが、それを見ながら、彼は何らかの呪文を唱え始める。耳まで覆われる関係で音がこもっていてわかりづらいが、「ふんぐるい」だの「くとうるふ」だのといった言葉が聞こえる時点で、もうおおむねどういった類のものなのかは分かりきっていた。だが、果たしてもうどうしようもない——

異変はそこで起きた。どしん、と大きく船体が揺れる。何事か、という声が飛び交い、ガラスが砕け散るような音。そして突如空間全体が寒くなる。

「な、ナイトゴント！　なぜこの場所まで追つてこれた！　ここに来るまでにはハイドラが——」

「——あんなモンで押さえつけられると思つたか？」

全く聞き覚えのない第三者の声が聞こえる。と同時に、真尋の両手両足を拘束していた縄がちぎられた。頭につけられていた装置も乱暴に外され、軽く額が痛い。

「ッ……いっ……って、は？」

状況が全く読めない真尋。だが、眼前には二人の人物が新たに追加されていた。

一人は少女。真尋よりも年下に見えるワンピース姿の赤毛の少女は、半眼のまま真尋の顔を見ている。見れば、彼の両腕を拘束していた縄が「黒く焦げて」千切られている。と同時に真尋の体感温度が急激に上がり、嫌な予感を覚える。

「少年。もう問題はない」

見た目通り少女らしい声だというのに、なぜか真尋には猛烈な嫌な予感がする。この焦燥感が何に由来しているものなのか彼には理解ができないが、しかしさきほど語られた異形の出自からして、おそらく神話関係の恐怖感なのだろう。とりあえずそれだけ納得し、もう一人の人物を見る。

立つ男は彫の深い顔をした老人であった。長い白髪をしたスーツ姿。あごひげは適当に切りそろえられており、不敵に眼前の相手を笑い飛ばす様がどこかヴァンパイアハンターとかそういうイメージを起こさせる。ただし右手に持っているものはどう見ても海産物を挿す鉈の類なので、いまいちビジュアルとして閉まらないのだが。

上空には無数の夜鬼。それがヒットアンドアウェイを繰り返すように魚人と戦闘を繰り返している。中には海中に投げ飛ばしたり、はたまたこちらデッキの上で格闘をしあっているところもあったり、乱戦といったところだ。そんな中で老人は鉈を無涯に向けている。

「ハッ！ 意外と頑張って隠蔽していたみたいだが、最終目的地が割れば大して意味はなかったなあ」

老人とは思えない声の張りりと、飄々とした口調である。

「ば、馬鹿な……、とはいえど、正確な座標が割れるはずはないだろ！

結果発生の座標なんて一体『何百』あると思ってるんだ！」

「そうか？ お前、肝心なことを見落としているだろ。いや、見落とし

ているのはお前のところの魚人か。『星の知恵派』のプロテスタントん所の一人、ぶつ殺してるだろ。それがまずかったなあ。アレ、改造人間であると同時に体内に『輝くトラペゾヘドロン』入れられてるんだ。知ってるだろ?」

トラペゾヘドロン。そういえばと真尋は思い出す。霧子(仮)のベルトがそんな名前だったはずだ。端的に変身ベルトと要約されはしたが、やはりそれは本物のトラペゾヘドロンであるということだろうか。所持者の肉体の変容。あるいは這い寄る混沌が化身の一つを呼び寄せるなど、色々と問題のある機能が多かったはずだが。

「……なんだ、この新設定ラッシュ」

「少年、案外余裕」

「アンタに比べたらオレの方が上に見えるがな。」

「馬鹿なことを。あれは、そもそも人間が扱える代物では——」
「あー、だから『自ら輝く』って性質にしたモンにしたんだろ。そうすりゃバケモンも寄ってこないだろうしな。むしろなんでお前がわかってないんだ……? で、重要なのはだ。そもそもアレそのものは、よく一般的に言われてるオリジナルから作ったレプリカに過ぎないが、そもそもアレ自体、『這い寄る混沌を呼び寄せうる』機能を帯びているってことだ。それはつまり、どういうことか。——アレそのものが一種のGPSみたいなモンなんだよ。つまりは座標計って訳だな。つまり、必要があれば調べることができるって訳だ。俺くらいになればな」

「——は?」

老人の言葉に、無涯は啞然としたような顔をする。そんな彼らの間に、胴体が半分になった魚人が一体転がる。

どうやら戦況は夜鬼側が有利に動いているらしい。魚人は徐々に徐々に殺され、数を減らしている。それでも船の奥から湧いて出てくるように来るディープワンの数は未だに膨大だ。老人はあくびを一つすると、視線を少女と、真尋に向けた。

「お前は……、いえ、貴方はもしや——」

無涯の言葉など聞こえないように、老人は鼻で笑う。

「少年、がんば」

「は？——っ！」

少女がなぜかサムズアップした直後、真尋の身体は猛烈な速度で襟から引つ張られた。いや、正確ではない。襟をもって引きずられているのが正解だ。そして眼前の光景からして、どうもその引きずっている相手は無涯と相対していた老人に他ならない。そして老人は、バラバラに引き裂かれた生臭い半魚人の死体を踏みつけ蹴り上げ走り、夜鬼たちが侵入してきたと思われるドームの穴めがけてジャンプした。跳躍はゆうに身長の倍を超える勢いである。絶叫する真尋。外は極寒の海にほかなるまい、そんな中に当然のように落下しかねない勢いの老人は何を考えているのか、という世界だが、しかし老人は特に問題ないように、ちらりと背後を振り返り。

「——んがあ・ぐあ・なふるたぐん。いあ！　くとうぐあ！　いあ！　くとうぐあ！」

そして早口言葉か何かという速度でそれを老人が口走った瞬間。真尋に見えていた赤毛の少女のシルエツトが光り、まるで解けるように消え、次の瞬間には船そのものが大炎上、大爆発した。

絶叫が声にならない。寒さに喉をやられてむせかえる真尋。と、ちらりと背後、自分たちが落下しかけている方向をみれば、そこには「巨大な貝の殻」が口を開いていた。またその殻からは鎖が引かれており、海を覆わんばかりに巨大な、潮を吹いたシルエツトにつながれているではないか！

真尋たちが乗り込んだ瞬間、貝の口が閉じる。と同時に、猛烈な熱風と潮が閉じた貝の隙間からびたびたと侵入してくる。あまりの熱に大声を上げる真尋に、老人はかかと笑った。貝の内部はうすらぼんやりと緑に光っており、視界がないわけではない。また貝の一部からは、なぜか外界の光景が透けて見えた。

「大炎上だなあ」

老人の言葉通り、船は焼き尽くされていた。もうこれでもかっつてくらい大爆発し、原型が残っていない。うっ、と思わず口を押える真尋。

「まあ、これならいくら『混沌』であろうとも、しばらくは手を出してきまい。命拾いしたな少年」

「あ、あなたは……？」

「あん？ 知識にはあるんじゃないか？」

いや、確かに。こういう場合で多少親人間的で、かつ夜鬼を従えている存在など一人くらいしか思い当たらないのだが。しかしこの老人の姿はいくらか真尋が想像するかの神のそれではない。察するか老人は苦笑いを浮かべた。

「嗚呼。これは、^{アバター}化身してるだけだ」

「アバター？」

「化身を作ってるんだ。こうでもしないと、お前らの基準に合わせて行動するのが難しいからなあ」

どうやら彼本人の弁を信じるのならば。どうやら本当にこれは、ノーデンス、すなわちき旧き神の一柱のようである。化身というのは、身を窺すことを言う。己が姿を変え、あるいは能力を制限するなどしてこの世界に姿を顕す場合に呼ばれる呼称だ。だが、とするならば。真尋の脳裏に疑問がよぎる。

「……いや、ちよつと待て。アンタが仮にノーデンスだとしてもだ。

さっきの女の子。アレ、なんだ？」

「なんだって？ クトウグアの化身に決まってるだろ」

「………なんでそう平然と言うんだアンタ」

頬が引きつる真尋だが、すでに腕からはSANチェッカーが失われているので、どれだけ正気度喪失しているかは不明である。だがもつとも、このノーデンスの化身らしい老人が一切包み隠さずぼろぼろと話をするせいか、逆に一周回って現実感が薄い。そしてなにより、決定的にSAN値が減りそうなことを言わないのだこの老人。そのせいか、意外と正気のままにいる真尋だった。

「さすがにニヤルラトホテプ相手に化身で戦闘を挑むのは無謀だからなあ。こっちも『実績』があるやつを引っ張ってきたってところだ」
「へえ、はあ……。おいそれと力貸してくれるものなんですか？ それって」

「阿呆。だから人間の化身が必要になるんだよ。人間の形で召喚しなきゃ、奴らも応じちゃくれないんでな」

よく這い寄る混沌が人間の姿をとって、召喚儀式に立ち会うのと理由は一緒だ、と半笑いを浮かべる。と、ノーデンス老人はヤンキーみたいな座り方をして、真尋の顔を見る。

「しっかし、お前も災難だったなあ。単なる人間が、よく巻き込まれたものだ」

「いや、単なる人間って……。オレ、聞く限りだと、『門』の落とし子みたいなんだが」

「ん？ 嗚呼、それは勘違いだぞ。大した情報じゃないから教えておいてやる。特異点なんてモンは、『病気』みたいなモンだ。わざわざ自分の情報収集のために、自分を増やすのもコストが悪いだろうからなあ」

「は？」

「おおかた、お前が母親の胎内にいるうちに母親が病気にかかったんだろうよ。実態、それは病気ではなく『ヨグソトス』の端末の一部が入り込んで、拒絶反応を示していたってことだ。そして運悪く、当時赤子だったお前にそれが遺伝した。だから、そんな出自に悩むほどの話でもないんだよ。お前は偶発的に、一般的な人間の胎児に『門』の欠片が混じってしまったって程度の存在だ。お前に怪物的な形質がないのはそれが理由だろうよ」

半笑い。やや馬鹿にした風な態度のノーデンス老だったが、しかしその言葉は、いくぶんか真尋を正気の世界に引き戻すことに成功した。明かされた事実とは、いわゆる精神分析というやつに等しい。

だが——。真尋はふと、胸元に拳をやり、握る。頭だけを見せられた、夢野霧子を名乗ったかの女性の姿が脳裏に浮かぶ。色々行き違いがあつたとはいえ、彼女は死んでしまったのだ。殺されてしまったのだ。その事実だけはどうにも拭いようがなく——その女性に対して、単なる自分を守ってくれる人間であるという以上の、妙な親近感と好意を抱いていたという事実自体が、彼の中に滞留していた。

「あん？ どうした」

「……………アイツ、あの、オレを守っていた女がいたよな。助けたりしなかったのか？ できなかつたのか？」

真尋の言葉に、老人は鼻で笑った。

「なんで自らすすんで異形の神々を信奉するようなヤツ、助けなきやならないんだ」

「でも——」

「そもそも俺が、お前を助ける気になったのは——ん？」

と、突然老人が真尋の顔を見て、いぶかし気な表情になる。突然彼の目を覗き込む。あまりの病的な近さと、青い、まるで海底でも思わせるほどに深すぎるその瞳の色に、まるでこちらの自我でも溶かされ取り込まれてしまうのではという恐怖心が真尋に走った。老人を突き飛ばすようにして離れると、彼は立ち上がり、眉間を抑えた。

「マジかよ、なんだよコイツ。前提条件が間違っていたってことか？

あん？ だとすれば、そもそも……」

唐突にぶつぶつ言いだした老人は、いつの間にか再び手に鋸を構えていた。そしてそれを真尋の眉間に向ける。

「気が変わった。お前、殺すぞ」

「——は？」

真尋が反応するよりも先に、獲物の先端が真尋の眉間に振り下ろされる。と、幸運にも貝殻全体が一度大きく揺れ、老人はバランスを崩した。その瞬間に真尋はごろごろと転がり老人から大きく距離をとる。突然の言葉と殺意も感じさせない挙動。しかし一切躊躇いなく振り下ろされたそれに、真尋は気が動転していた。

「は？ え？ いや、アンタ、なんで、なんでだ？」

ノーデンス老は、ひどく面倒そうな顔をして。

「———そうか。つまりアレは偽物か。まんまと騙されたって訳だ」

そういうながら、やはり真尋に向けて刃を構え、走り出した。もはや老人は、真尋と会話をかわすつもりさえないようだった。

あなたは逃がさない

ノーデンスは真尋を即座に追いかけることはなかった。ただ一歩彼に向けて歩くばかりだ。慌てた真尋は立ち上がり叫び走るのだが、それでもノーデンスから逃れることは出来ない。いや、それは明らかにおかしい。この貝の中で彼と老人との距離は明らかに5メートル以上開いていておかしいくらいに、移動速度に違いがある。にもかかわらず、ノーデンスが2、3歩踏むだけで真尋の全力疾走程度の距離が稼がれてしまうのだ。理不尽にもほどがある。

「ここは、こっちの空間だ。何が起きてもこっちの自由だ」

無駄な抵抗だと言いつつも、ノーデンスが真尋を決定的に追い詰める気配はない。それが逆に不気味であるが、定期的に銚を真尋に向けてくるのでまったくもって油断が出来るわけでもなかったりする。なんにしても気を抜けば串刺し。死ぬことは確定なのだ。相手が殺すと言った以上、神性がそれを人間相手に言った以上、その意志は絶対であろう。真尋の想像力が決定的なまでに、彼にその事実を教える。

いや、と。真尋は少し不信に思う。そういえば、なぜそんな確信を自分が持っているのだろうかという点に。持てるのだろうかという点に。そして本来なら恐怖で身動きできなくなるだろうところを、何故それでも身体が必死に逃げようとしているのかという点に。

「オレがなんで、なんで、アンタ、オレを殺そうとするんだアンター」
「言葉、乱れまくりだな。だがまあ、知らない方が幸せだろ。ほらよつと」

足を薙ぎ払うよう銚を振るうノーデンス老。ふくらはぎに熱を感じ、真尋は体のバランスが崩れ倒れる。熱はじくじくと痛みに変化、伝播していき、涙と嗚咽が真尋から漏れる。ただ、それでも真尋は匍匐、這いつくばるように腕だけでじりじりと、ノーデンスから離れる

ように前進する。

嗚呼、そんな大した理由じゃない。この期に及んで意味が解らないまでも、それでも必死に生きぎたなく生き延びようとしている理由なんて、一つくらいいしかないじゃないか。

真尋さん——♪

あの綺麗な女性が。霧子を名乗っていた得体のしれない彼女が。自分を守って死んでしまったからという。ただ彼女に守られて、その結果、今生きているという。最後の最後で彼女が自分を守り切れず死んだのだとしても、それでも最初の段階で彼女がいなければ、遅かれ早かれ殺されることに違いはなかったろう。現に今、己を攫おうとしていた夜鬼の主たる老人が殺そうとしているのだから、その事実だけは変わらないはずだ。だからこそ、真尋はそもそも最初の段階で彼女に助けられたのだ。

嗚呼、声こそ出なかった。あの赤い月を背景に飾った彼女は、名状しがたき美女のような何かは、それはそれは美しく、尊く真尋の目には見えた。つり橋効果だつて構うものか、俗っぽいだのチョロいだの、なんとも罵りやがれ。痛みと混乱の中、真尋は開き直る。あんな美しい——もっと一緒にいたかった女性が、つないでくれた命なのだ。こんなところで、訳も分からず殺されてたまるか。ただそれだけの理由が、今の真尋を、生死の境という狂気から現実に取り留めていた。

「よくやるな。それもこれも、全部アレが仕組んだことだろうに」

「は？……アレって、這い寄る混沌か？」

「ほーう、想像力は中々あるみたいだな。さぞ生きにくかろうに。だが、まあそうだ。お前の今の状況も、おそらく今俺がお前を殺そうとしているこの状況も、全部アレのせいだ。『語るまでもなく』最初から最後までアレの掌の上で、全部が全部アレの『完璧な仕込み』だ。お前が今そんな『スリリング』な状況に陥っているのも、そもそも全部が全部、お前の自由意志が介在していない」

「そもそも俺自身が今はほぼ人間でしかないからなあ、とノーデンスは忌々しそうに吐き捨てる。」

「正直に言えば、アレの掌の上で転がされるのは癪に障る。が、お前を放置しておくのは後々のためにならん」

「オレがなんだっていうんだよ、アンタ」

『奇妙な歲月』って小説があるんだが、知ってるか？ 人類がアレの策謀の前に完全敗北する物語だ。お前が生きてる状況っていうのは、ちよつと誰かが手を加えれば、すぐソレと同じになるって話だ」

真尋の想像力は、それだけの情報でなにがしかの答えを導き出している。そして、その結論に対する違和感に真尋はついに自分自身のこの認識の異常さに気づいた。想像力があるというには、明らかに彼の予想は現実のそれを射抜きすぎている。霧子（仮）との会話におけるリアルクトウルフ神話小説群の知識から導き出されたり予想とはわけが違う。いや、あれももしかしたら実際のところは違つたのかもしれないが、それはともかく。少なくともノーデンスの言葉が正しければ。おそらく、自身は「這い寄る混沌により改造されたヨグⅡソトスの落し子」なのだろう、という予想だ。そしてノーデンスの顔を見るまでもなく、彼に確認をとるまでもなく、それが事実であろう確信があつた。その確信がやけに絶対的なものであるという認識が、まるで刷り込まれたかのように真尋の中に沸き立っている。そしてほぼ間違いない、自分をとらえたダゴン秘密教団のような組織の連中は、己の使い方を間違つたのだろうということも。

あれ、この被害妄想のような誇張の入つた刷り込みめいた強迫観念のようなそれは、これって不定の狂気にでも入ってるんじゃないのだろうか、と疑いはすれど、彼の認識自体が大きく錯乱状態にないことから何かが違うという理解もある。ただし現状、どうあがいても真尋自身の正気を真尋が証明することは不可能である。すでにS A N チェッカーは存在しない。この狂気の世界に、真尋一人で立ち向かうしかないのだ。

「わかるか？ お前が生きているとまずいってことが。じゃあ、わかつたら死ぬ」

そしてそれだけ言って、今度こそノーデンス老は銛を構えて投擲した。投げ槍の要領で放たれたそれは、明らかに速度を増していく。真

尋の身体が動くよりも何よりも、既に彼の目の前、刺さる直前の位置だ。このタイムミングに至り、真尋の中の時間が静止する。徐々に徐々に近づいてくる銚の先端をかわそうとすれど、彼自身の身体はびくとも動かない。状況に違和感を覚えると同時に、嗚呼、これはいわゆる死に際に世界がスローモーションになるというアレだと納得した。脳裏に数々の映像がよぎる。冒流的な映像だったり、母親や父親、学校の友人たちの顔やスピーカーフォンのような声も脳裏をよぎる。そして不思議と、最後に脳裏をよぎったのは、やはりというべきなのか、霧子（仮）の姿だった。記憶の中の霧子（仮）は、ひどくおかしそうに、それでいてつくしむような眼をして真尋を見ていた。

こんなところで死んでたまるかと。だが、すでに真尋にはどうしようもない。そして刃そのものは、もはや真尋には決して止めることができない。

そんな時だった。

『さどくえしじるむ』

真尋の声でない、聞き覚えのない声。男の声が、どこからか聞こえた。いや、どこからか？ ——それは間違いなく真尋の、喉から聞こえた声である。次の瞬間、銚が急激に錆びついた。真尋に激突すると同時にぼろぼろと原型をとどめないほどに崩れ去る。それに目を見開いたのはノーデンス。何事か、という顔を前に、真尋の方が意味がわからない。だが、わずかに真尋の視界の端にゼリー状の大型の楕円形の、牙のようなものを持った何かが見えたような、見えなかつたような。

おそるおそる周囲を見ると、しかし、それらがまるで気のせいだったように、まるで子供向け漫画にでも出てくるような星型をした黄色いマスコットキャラクターのような、顔のついたナニカが二つ。成人男性ほどの大きさを誇るそれらが真尋の両側に立っていた。わずかに

その体が震えると共に、くすくす、という声が聞こえる。

「星^{ツイ}から訪^ジれた者^{ター}か。……また気色の悪いバケモノ呼び出しやがって」

ノーデンスの言葉に、真尋は理解した。どうやら自分は本格的に狂ってしまったようだ。星から訪れた者。星の精と呼ばれるそれは、一番最初に真尋が見たときのシルエット通りの姿をしているべきである。つまり半透明のゼリー状に血液を滴らせ、ぎちぎちと牙のようなものを持っている怪物だ。だというのに今日に見えるこの『子供向け番組のフィルターでもかかったのような』、逆に不気味な光景こそが、すでに真尋の脳みそが異常動作を起こしている何よりの証拠だろう。

いや、それよりも待て。さきほど自分から発された声は何だ。いや、あの超加速された認識の中で、そもそも「普通に聞こえるだけの速度で」声帯を動かせるものか？ 自分の口は絶対に動いていない。喉も動いていない。だというのに何故そんなことが——。

次の瞬間、真尋は呼吸が出来なくなつた。

「!? ——ッ、っ、っ!」

次の瞬間、真尋は「強制的に」上を向かされ、口を大きく開かされた。感覚的には、まるで喉に向けて巨大な太い棒でも突っ込まれたかのような、そんな得体のしれなさだ。だが事実は違う。事実はより冒瀆的なことに、真尋の「体の中から」、口を出口として、一本の、黒い、太い触手が這い出てきていた。うねうねと蠢き、そのたびに真尋の口から黒い吐しゃ物があふれ出る。ぎよろり、と、触手に三か所亀裂が入り、そこから目玉のような器官が出現する。と同時に、真尋に見える光景に「フィルターがかかった」。触手は木の幹「のように見ええ」、目玉はまるで瘤のようである。と、木の頂点に花のつぼみのようなものが生まれた。それが徐々に、だんだんと、そして木全体を覆う程に強大なつぼみとなる。色は桃色、桜の花弁のようだが、おそらく現実に繰り広げられている光景ははるかにおぞましいだろう。吐き気と恐怖が真尋を支配し、彼は身動き一つとれず、だんだんと酸素が失われていく。

木の大半を覆いつくすほどに育った花卉は、一切ためらうことなく開かれた。果たしてその中から現れたのは――。

「――――せっかく気づかれないように色々苦心していたというのに。『私の』真尋に何をしてるんだい？」

夢野霧子を名乗っていた女性。――――姿かたちは、彼が初めて会った時のそれであったが。だが、浮かべている表情は明らかに異なっていた。どこか楽しそうに、どこか残念そうに、そしてどこか退廃的に。超然とした笑みを浮かべ、口調、声音ともに『涼やかな男性の声』を発したそれは。

もはやそこに立っていたのは、真尋が恋した女性ではなかった。

世界は闇色暗黒の園

ニヤルラトホテプ。ナイアルラトホテツプ、ナイアールラトテツプなど呼び名は様々だが、総じて意味合いは「這い寄る混沌」を示す。ヘラジカのような神性を庇護したただの妻にしたただの色々と言われてはいるが、その実態についてはおおむね謎に包まれている。人類の文明に出れば魔術や科学に秀でた存在として。あるいは世にも奇怪なこの世のすべてを嘲笑う圧倒的な怪物として。ともあれその神は、非常に性質が悪い存在であるとされる。趣味趣向は言うに及ばず、多くの運命をもてあそび、世界を混沌と破滅の渦に叩き込まんとふるまうことも多い。たいてい背後に回り裏から糸を引き、邪悪な企みを成就させんと行動しているのだ。

さて、この神の特徴として、さまざまな姿かたちを持つことが挙げられる。黒い神父をはじめ、顔のない獣、天にそびえたつ触手の頭を持つ怪物などなど、バリエーションはあまりに多岐にわたる。そもそもそういった姿が描写されることが多いだけであり、本当のところはかの神性がなにがしかに変状した場合、見分けることは難しいのだろう。そう、今この瞬間、真尋の目の前に立つ彼女のように――。「ニヤルラトホテプ――這い寄る混沌か。また悪趣味な姿しやがってなあ」

ノーデンス老の言葉に、特に彼女は、夢野霧子を名乗っていた彼女は態度を変えない。現れ出たと同時に周囲にうすらぼんやりとした黒い霧を帯び、どこか超然とした、神様めいた微笑みはしかして見ているものを不安にさせる。そして開かれた口から発されるそれは、どこか愛らしさの残った女性のそれではなく、涼し気な男性のそれである。

彼女が出現すると同時に、真尋の喉より這い出ている名状しがたい奇怪な何かは影も形もなく姿を消している。啞然として、そして茫然

とする真尋だが、しかし状況については冷静な分析を行っている。そう、おそらく彼女に飲まされたあのモノクロのカプセル錠剤。あれこそが、自分から這い出た何かの正体であろうと。

眼前に立つ霧子——ニャルラトホテプは、ごくごく自然体のまま続けた。

「だから言ってるじゃないか。『仕込みは十全』だとね。それよりも、おいノーデンス。君もまた、中々趣味が良い化身アバタイしてるじゃないか。いぶし銀だねえ。どうしたんだい？」

「はッ！ 特に理由はねえな」

「まあ、私も興味があるわけではないからこれ以上追及はしないさ。問題があるとすれば、真尋を殺そうとしたことだね」

肩をすくめる這い寄る混沌に、真尋は言い知れぬ薄ら寒さを感じる。その言葉、登場時の発言をふまえ、真尋の脳が導き出した結論によれば、這い寄る混沌は彼を己の所有物か何かのようにみており、事実そう扱っている節があるということだ。夢野霧子として接していたときの彼女からその気配は感じ取れはしなかったものの、実際、一体そのときからこんな視線を、こんな内心でいたのかと。その事実だけで、十分に背筋が凍る。ニャルラトホテプはそんな真尋の様子に全く目もくれず、ノーデンスに向かって薄く微笑んだままだろう。対するノーデンスは舌打ち一つ。明らかに面倒そうに、忌々しように眉間にしわを寄せている。

「まさかあれだけお膳立てされた舞台で、お前が立っていきそうな場所に化身でさえおいていないとは思っていなかった。おかげで無駄なところにクトウグアを使ってしまった」

「ははっ。今回は君が動きそうなのは読めていたからね。私も代役を立てさせてもらった。知ってるだろ？ 君が面倒を嫌って実績のある相手を用意したように、私も面倒は基本的に嫌う性質なんだ。しかし、無涯博士は真尋と違って想像力が貧困でねえ。今日のためとはいえ、こっちの世界に走らせるのに『五年も』かかってしまった」

無涯？ さきほど真尋を何らかの装置——おそらく邪神との「交信装置」の生体ユニットにすると言っていた、あの男。真尋自身、

当初は彼がニヤルラトホテプの化身なのではと感じていたのだが、だがその口ぶりからすれば全く違うということになる。ニヤルラトホテプの手によって狂気の世界に引きずり込まれた人間であるかのようには語っているが、いや、まて。五年、五年だと。真尋はもはや、眼前の存在を直視することさえできない。一体いつから、いつから今日という日を予見し行動していたというのだ。そしてどこからどこまで、この存在の語った何から何までが真実で、何がこの存在の仕込みだというのか。己の生まれも、その存在も、家族も、人生も、すべてが、すべてがこれの掌の上で踊らされていただけだとしたら？ 頭上から垂らされた糸で適当に操られていただけだとしたら？ 思考を放棄することが真尋にはなぜかできない。すでに自身はいくらか発狂しているだろうにも関わらず、しかしそれでもなお思考の一部がクリアに、正常に場を分析しようとしているのだ。

ニヤルラトホテプの横で、星の精がふわふわと揺れる。挙動からしてニヤルラトホテプに召喚され、彼に追従しているといったところか。

「わかってると思うが」

そしてそんな彼女(?)たちに向けて、ノーデンス老は軽く右手の指を向けた。

「ここは、こっちの空間だぞ?」

次の瞬間、星の精に猛烈な速度で銛が複数突き刺さる。四方から放たれたそれらは、妙な具合にそのシルエツトをゆがめさせ、全身から真っ赤な血液を噴出させた。ごひゅー、ごひゅー、とでも形容できようか。そんな悲鳴とも破裂音ともいえない奇怪な音を鳴らし、地面に落ちる星の精2体。そして、ニヤルラトホテプはやはり余裕の表情。みれば、彼女の身体にもその銛は突き刺さっているではないか——

「。四肢を拘束するように貫通し、さらには胴体を貫いたそれ。まるで地面にはりつけにされているかの如く。だが彼女は全く堪えた様子もなく、自分のこめかみに刺さった銛を一つ引き抜いた。

「——つと。死ななくても痛いし、喉の発声器官にひっかかるから頭狙いは止めてもらいたいなだよなあ。しかし、そっちこそ解つて

るのかな。私はそもそも君たちと違い『化身という概念が根本から異なる』から、この程度で殺すことは出来ないのだよ」

「嗚呼、わかっているさ。だから森を焼かれた時のように、直接的に大打撃を与えることが有効にもなるって寸法だ」

「わかっているって使い魔を殺すくらいだから、もう対策は打っているのかな？」

「生憎、これからだ」

「——少年、さつきぶり」

いつの間にやらか、ノーデンス老のもとに、赤毛のワンピース姿の少女が再び現れていた。現れた、ではない。いつの間にか現れていたが表現としては正しいだろう。ともあれ、そもそもすでに真尋はそれに返答することが出来るだけの正気度を持つてはいないのだが。しかしそれでもクトウグアの化身たる彼女は、真尋を一つの意志ある生命体として尊重でもしているのか、ひらひらと手を振っている。こころなし、無表情であるがちよつと楽しそうに見えないこともない。大してニヤルラトホテプは、相も変わらず表情も変わらずである。

「まあ、そう来るのは読んでいるけどね。それで？ 後何回『本体を召喚できる』んだい？ その化身の耐久度もあるだろう。TRPGでいうところの、SPあたりかな？ 人間という形態を伴って魔術を行使するんだ。それくらいのリスクは負っているだろうからね」

「ハッ。お前のせいで1回無駄になっちゃったが、何、焦ることはない。もう一回撃てれば上々だ」

既に会話は真尋の常識の外側にある。クトウグアの化身たる少女は、ぼんやりとニヤルラトホテプを見上げ、頭をかしげる。そんな様子を一瞥して、ノーデンス老はなにがしかの呪文を唱え始めた。

「フングルイ・ムグルウナフ・クトウグア・ホマルハウト・ウガアⅡグ
アア・ナフル・タグン！ イア！ クトウグア！ イア！ クトウ
——っえっくしよいッ!？」

そして、呪文の最後で盛大にくしやみをして、咳き込んだ。げほげほど、喉を抑える老人に、少女はやはり不可思議そうな顔を向ける。真尋の正気の部分は気づいた。この薄明りの中、つまりノーデンスの

貝の中。いつの間にか霧子だったものが出現したときに現れ出た、黒い霧のようなものが充満している。そしてノーデンス老の挙動は、明らかに異常だ。すくなくとも神が身を窺した存在であるはずのあの肉体が、この場、このタイミングで、こんなありきたりなミスを犯すはずはない。ともすれば——ちらりと、ここで霧子だったものは真尋に向けて、わずかにほほ笑む。嗚呼とするならば。この霧こそが、ニヤルラトホテプが仕掛けた罠に違いない。

「ダメじゃないか。クトウグア召喚、招来の呪文は、間違えると『面倒なもの』来てしまうのだよ？　いくら君とはいえ、『次元に近い世界に生息する肉食獣』がごとき何かを相手にできるほど、余裕はないんじゃないのかい？」

「——っ、げほっ、馬鹿が！　お前、正気か!?　いくら威力がそのクトウグアに比べて弱いからと言えど、無事で済むわけないだろうが、全部消えるぞここら一帯のものが！」

大声で叫ぶノーデンス。真尋の正気は、わずかに思い出す。クトウグア、生ける太陽を超える恒星がごときかの神性は、呼び出すのが危険である。それは神性そのものの性質はもとより、失敗時において現れる「別な神性」が、ことごとく邪悪極まりない性質を秘めているからだ。

そう、そして。やがてクトウグアの化身たる少女が立ち上がると、そのシルエツトが解ける。今度は真尋も真正面からその有様を見た。古い昔、怪獣王の映画で見たその最期の様、メルトダウンのような情景を思い起こさせる。そのシルエツト自体が輝き、マグマのようにドロドロとした何かに変色し変貌し、骨と共に崩れ落ちる。それだけでも十分にひどい有様であるのだが、今回はそこから続いた有様が更にひどかった。

それは、はじめ点から始まった。崩れ落ちたクトウグアの溶解物が一点に収束したかと思えば、それがまるで排水溝にでも流されたかのように、その点、否、穴に集中していく。そしてごぼごぼと、不可視のその奥から音を立て、原型もとどめない程の勢いを伴い、炎がほとばしった。ほとばしった炎は形を持たない。否そうではない、「この

空間では炎の全容を示すだけの空間が存在していない」というだけだ。

猛烈な勢いのままに、ノーデンス老を飲み込む炎。たとえるなら、そう、どう猛な獣。飢えたケダモノ。だてに「星々から宴に来たりて貪るもの」とは呼ばれていない。そして当然のように、その炎にニャルラトホテプの化身もまた巻き込まれた。ごうごうと燃えるそれは、彼女の全身のシルエットを消し炭に変容させていく。

「じゃ、今のうちだ。こっちも準備しよう。せつかくだからね」

そして、同時にありえないことが起こっている。目の前で焼かれているのは霧子だったものだが、その霧子だったものと全く同一の姿かたちをした存在が、真尋の背後に現れ、彼を抱きしめるように立ち上がらせた。その感触は曰く、人間の柔らかさではなく、ゼリー状、ゲル状の物体がまとわりついているような妙な柔らかさだ。だがそれがだんだんと固くなり、固まり、真尋が一度くらい体感した霧子(仮)の、人間らしいしなやかさと冷たさを帯びていく。

「呪文とか唱えたほうが『それらしい』んだけど、正直時間が無いからね。あんまり余裕な態度でいると、真尋まで焼かれてしまう。というわけで一応謝っておこう。ごめんね？」

全く人間らしい反応もできない、人形がごとき真尋に、這い寄る混沌は軽くウインクして舌を出した。そしてそのまま目を閉じて、真尋の唇に自分の唇を重ねた。真尋の正気の部分が、これによって一瞬完全に機能を停止した。様々なことがありすぎる。様々な事象がありすぎる2日において、これほど悪夢的なこともあるまい。具体的に形容するのもはばかられるほどの不快感と悲しみが彼の脳内で分泌されるが、それが彼の全身に伝播することはない。この場において、彼はすでに廃人と化しているのだから。

重ねた唇から、霧子だったものは舌を伸ばし、丹念に真尋の口の中を蹂躪する。と、それが離れると同時に、真尋と彼女の口の中に、唾液ではない「糸を引く」何かが存在した。真尋の目はそれを正確に映し出す。と同時に、その意味合いについて理解することができた。上位の神性、より巨大な神性の一部に自らを偽装することで火の獣を退

散させる、そういった文言。空中に浮かぶその文章を、霧子だったものは指先で書き換える。神性に偽造する個所を「自らが神性であり」「相手を取り込む権利がある」と変更すると、彼女はその文章を「どろどろとした液体とも触手ともつかない何かに変形させた右手」でつかみ取り、前方に掲げた。

効果は劇的だった。ボロボロと炭化した霧子だったものが崩れ落ちた丁度その瞬間。なにがしかの意志がこちらに標的を変更したのを真尋の正気が感じ取った瞬間。その瞬間にニャルラトホテプが行動し、そして向けられた敵意はとたんに消し飛んだ。そしてまるで、ニャルラトホテプの化身と真尋を裂けるように炎が隙間を開ける。

「——やっぱりそいつ、アル・アジフの原本か」

さすがに海の神の化身というべきか。ノーデンス老の身体は、案外と霧子だったものと異なり、この炎の中でいまだ原型を保っていた。だがもう長くはもつまい。霧子だったものは、「人間の姿かたちに戻った」右手の指を鳴らす。と、貝の上部が爆散した。否、外部からなにがしかの生命体が、こちらに向けて突貫してきたのだ。天井にいた穴を見て、ノーデンス老はため息を深くついた。

「全く。こちとらお前のように、ホイホイ化身できねえんだぞコラ」

「だから、それも狙いなんだよね。ともあれ私も真尋も、君には用事はない。退散させてもらうよ」

落下してきた生命体——真尋にはコウモリのような羽根を持つ何かには見えませんが、霧子だったものは真尋をつれて、それに乗った。羽根が大きく躍動し、この場を離れる。上空に飛ぶ。すでに貝は後方。いったいどれだけの速度が出たのかさえ分からない真尋。ただ視界の端でノーデンス老の貝が原型も留めないほどに燃え散ったことと、その日が飛び火したのか海中にいるクジラが猛烈に暴れているのだけが見えた。

「さて、色々済まなかったね。本当はこういう形で巻き込むつもりはなかったんだけど」

言いながら、霧子だったものは自分の腕のS A N チェッカーを一つ外し、真尋につける。

からからと猛烈な速度で回転。さながら暴走したモーターか何かの
ような音をたて、それはすぐさま爆発した。

かまわずふたたびSANチェッカーをつける。爆発。装着。爆発。
装着。爆発。装着、爆発――。

「――はい、これで7つ目。さすが私、さっすがきりこちゃん、計
算もばっちりですね〜」

やがて最後のSANチェッカーの回転が止まり、真尋の脳裏に「9
5」と数字が浮かんだ。それを見越して霧子だったものは、いや、そ
のまま彼女は再び霧子(仮)の時と同様に、「愛らしさの残る女性の声
で」得意げな顔を浮かべた。真尋は愕然とした。眼前の相手に対して
もそうだが、どうやら今までのSANチェッカーの破損をふまえて、
体の自由が返ってきていたからだ。

震える手を見つめ、霧子だったものを見つめ。なにごとか口走ろう
として。

「――寒ッ!？」

「おお、アイデア! って訳じゃないですけど、確かに寒いですかね。
ささ、真尋さんこれをお召しくださって……」

思い出したかのように体を襲う猛烈な寒波に叫ぶ真尋と、それを受
けてどこからともなく「真っ黒な修道服めいた」上着を着せる霧子
(仮)であった。

太陰曰く下手な真実

「あ、どうもどうもです。ありがとうございます、真尋さん♪」

公園のベンチに座り、にこにここと微笑みながら真尋の手から缶を受け取る——夢野霧子（仮）。まるで今日一日が何事もなかったかのように楽し気なその様子に、真尋は軽く頭痛を覚える。ただ左腕にとりつけられたSANチェッカーが回転することはなかった。霧子は缶の口を開け、無糖のブラックをちびちびと飲む。猫舌か何かなのだろうか。いや、特にそんな設定はなかったはずだ。単純に気まぐれなのだろう。そしてそんな彼女の口元、うすくも潤を帯びた唇やら舌やらを見た瞬間、真尋は自分の脳天にチョップを入れた。瞬間的に脳内に描かれた映像そのものを否定し忘却するためだったが、そんな彼の様子をちらりと見て、彼女は口元を押さえ、楽しそうだった。

これにはたまらず、真尋も口を開いた。

「……いや、なんでアンタそんな平然としてんだよ」

「平然とはしてませんよ？ さすがに北国、昼もそうでしたが夜も寒いですよ。まだ春先だつていうのに……。というわけで、コーヒーが美味しい頃合いなのですよ」

「そういう問題じゃないだろ。オレはなあ……」

「——なんだつたら、こういう私の方が良いかい？ 真尋」

とたん、彼女の声は「涼し気な男性」のものになる。異様なまでに落ち着いた声と超然とした微笑み。ほんのわずかな表情の作りの違いでしかないというのに、与える印象は大きく異なり、またその男性の声には言いようのない薄ら寒さを覚える。そんな風にして硬直した真尋を見て、霧子（仮）は再び声を戻して笑った。

「そんなに怯えないでくださいよ。こうして終始、有言実行で真尋さんのことお守りしたじゃないですかあ」

「それ以前の問題だろ。大体、ほとんどアンタのせいなんじゃない

のか？ ——ニヤルラトホテプ」

真尋の言葉に、少しだけ目を見開く霧子(仮)。表情こそ彼女のままであるが、その中はひたすらに闇である。本来白目が見えるところまで含めて黒一色に染まった眼を向けられては、さすがに真尋も現実を直視せざるをえないところだ。ただやはり理不尽なことに、神性らしさを発揮されていない時の方がやはり話しやすくはあるのだ。彼女もそれを察しているのか、すぐキレイな目に戻った。

ノーデンスから脱出した霧子(仮)と真尋は、そのまま謎の怪生物(真尋はあえて直視を避けていたが、おそらくシヤンタク鳥と呼ばれる類の名状しがたい神話生物)に乗ったまま、あつというまに元の家まで帰ってきた。惑星の極から日本までの帰還にわずか十分もかからなかったという事実だけでSANチエツカーが破損しかねないとも思うが、幸か不幸か現実感がなかったせいか、そこでの減少は発生せず。そしていつの間にもやら家自体は何事もなかったかのように修復されており、啞然とする彼に霧子(仮)は言った。デートしましょう。だが時刻はすでに深夜三時を回って、一歩間違えずとも補導される時間帯を過ぎている。しかし当然のように霧子は微笑んだまま。とくに例の結界とやらの中にもいるわけでもなく、真尋としては反抗することしかりであったが。

「なんだったら、真尋さんが聞きたいことなんでも答えてあげますよ？ 私のスリーサイズから、この世の狂気の果てまですべて」

最初のやつ必要ないだろ、と突っ込みを入れども、さすがに真尋も事実を話すというのなら聞いてやろうじゃないか、という心境であった。彼は眼前の相手が、例の這い寄る混沌であることを正確に認識していた。だがそれと同時に、彼女が言った通りに、一応は真尋自身のことを守ったのだということも理解していた。……それが盛大なマッチポンプだろうか何だろうか、それはひとまずおいておいて。一応ではあるが、ニヤルラトホテプも物語の後半、謎解きの解答編では饒舌になるときもある。それゆえ、今回の事件もおそらく収束したのだろうという前提で、その話を聞こうと判断した。コンビニでスパゲッティとサンドウィッチ、飲み物の缶を購入。

真尋から受け取った缶コーヒーを、霧子（仮）はやはりちびちびと飲んでいた。

「さて、じゃあ何が知りたいですか？　たいがいのことには『S A N チェッカーが壊れる直前まで』答えてあげる所存ですけど、話の整理もなしにいきなり衝動のままに質問したりすると、話がこんがらがっちゃいますからね」

「最初からだ最初から。全部。具体的に言えばオレのことと、今回の事件のあらましと、あとアンタについてだ」

「私について？」

「アンタ死んでただろ。オレは、その……」

視線を逸らしながら落ち込んだ様子で真尋に、嗚呼、と納得したように霧子（仮）は微笑んだ。

「真尋さん、私が死んじやったと思って、落ち込んでくれたんですね？」

「……………」

「大丈夫ですよ、真尋さん。私は何だかご存知ですか？　世界終末のラッパを吹きならす獣、嘲笑う播神、這い寄る混沌ですよ？　殺されたくらいで死ぬわけではないじゃないですかあ」

「そういわれると意味不明ながら納得の理由だが、釈然としねえ」

気持ちはわかります、と霧子は楽しそうに笑った。わかるんだつたら態度を改めろと思いはしたが、所詮は邪神の化身でしかないのだ、そんな彼の思いは無駄どころかちり芥に等しいことだろう。しばらく笑ってから、霧子は指を三つ立てて数える。

「では、①私のこと②今回の事件のこと③真尋さんのこと、という順番でお話しますかねえ。まあ知っての通り、真尋さんの隣にここ二日ほどニコニコ這い寄っていたのは、わたくし、這い寄る混沌ニヤルラトホテプに相違ありません。あ、ちなみに夢野霧子っていうのは『幻夢の時計』って本からとりました。あれ、私最後に霧になって逃げたからね。名前っぽくすると語感、悪くないかなーと思ひまして」

なんともまあロマンチックさの欠片もない由来である。

「まさかいきなり正解を引かれるとは思ってなくて、あのときはびっ

くりしましたよ。さすがのアイデア！ ですね」

「つて、やつぱりアンタ、オレの様子見ながら嘲笑ってたんじやないのか？ 単に」

「いえいえ。真尋さんを守るというのも私の目的でしたし、そのためにけっこう手間をかけて、私も組織に所属してましたから」

「はあ……？ あー、まあ、なんかの組織から派遣されてるとかいってたか。それはマジだったのか……」

「ええ。星の智慧派ってわかります？ よく私を崇め奉ってる組織筆頭に数えられるアレですが。あれ、実は2000年代初頭あたりから分裂しはじめてですね。いわゆる原理主義と革新派みたいな割れ方ですね。ノーデンスの言葉を借りるなら、カトリックとプロテスタントみたいなものです。このSANチェッカーはそのプロテスタント側が作った道具で、真尋さんをお守りするには是非ともほしい！ チートアイテムだったので、まあ、そんなわけで、化身すること早二十数年でしたよ」

無涯博士のときも五年かけたとか言っていたが、この邪神、もしかしてそういう仕込みのようなことは、案外ちゃんと時間をかけてやる相手なのだろうか。いや、わざわざ自分が目指す一瞬、一日かそこら程度のためだけに数十年かけられるその精神性は間違いなく人類のキャパシティを超えたそれなのだろうか。認識のスケールの違いに軽く眩暈を覚える真尋と、ちよつとだけ回転するSANチェッカー。「まあ、あの私の死体は、あつちで海の藻屑と消えているので大した問題ではないんですが。あとできちんと発見されることでしょうか」

「つて、そこもそういえば突っ込みたかっただぞ。なんでそんな、死んでるのに生きてるんだアンタ」

「そりや、あれもこの私も『化身』^{アバター}だからですよ」

「わかる言葉で話せ」

「そりや、もちろん♪ んー、とはいえど化身の基本的な意味とか、ニューアンスとかは知ってますよね？ ノーデンスの場合は、あえて真尋さんと接触するにあたり『人間規模のスケールでの世界の俯瞰の仕方』とかも含めて獲得するために、ああして化身してたよう

な気がしますけど、ともあれあつちには能力を制限されています。なんでかわかりますか？——本来、化身っていうのは、その神性本体からすれば『夢のようなもの』でしかないからです。目的をもって造り操りはすれど、おおもとの神性すべての認識、人格、能力が反映されない状態で活動する以上、まあ、ほおくん？　つて感じなんですよ」

「その擬音から俺は何を理解すればいいんだ……？」

だが理解できないまでもS A N チェッカーは回転を続ける。いまだに数字が出ず回転しっぱなしというのがあまりに不気味だが、少なくとも霧子（仮）のことを真尋は多少信用していた。ニヤルラトホテプ相手に何をと彼自身思いはすれど、まあ實際命を助けられているのもあつてか、敵対心が思いのほか強くないのも理由の一つか。だからといって目の前の相手が、人類全般に親し気な存在でないことだけは明らかなのだが。

「ですが、私は違います。私の化身は基本的に私の身体を『分裂させ』使用しての変身、原子レベルからの形態変化になりますから。つまりですね、仮想的な人格の作成とか、作成した人格に対してニヤルラトホテプが対応して演じる、『変心する』必要があるわけです。そこるところいくと、ニヤルラトホテプほどの宇宙のありとあらゆる知性体を観察してきた存在もないというわけですね。霧子ちゃんというパーソナルくらいなら、お茶の子さいさいなわけです」

「おもちゃにしてきたの間違いじゃないのか？　観察じゃなくて」「真尋さん、小学生のころにアルコールランプとか使いませんでしたか？　理科の実験とかで。ライターに火をつけてランプに移す感じの。ニヤルラトホテプからすれば、私がやっていることはそれくらいの感覚なんですけどねえ」

やはり人類と邪神とで、判り合うのは無理があるらしい。やはりわかつてはいても胸と頭が痛む真尋である。いくらなんでも初恋の女性が世界崩壊をもくろむ邪悪なる意志を体現した神性であったとか、しかも性別自体存在しない疑惑さえあるとか、あんな良い男の声したラスボス然とした状態でファーストキス奪われたとか、もはやその事

実だけをもってしてもS A N値が不定の狂気に落ちるほど削られてしましそうなところだった。吐き気を催す、とはこういう状況を言うのだろう。だが真尋はそれでもめげずに会話を続けた。

「……えっと、つまり、結局アンタはニヤルラトホテプ以外の何物でもないってことでいいんだな」

「んー、ちよつとだけニユアンスが。夢野霧子を演じてるニヤルラトホテプは夢野霧子以外の何者でもありませんし、それ以上にニヤルラトホテプが素を出せばニヤルラトホテプそのものだということです」

じゃあ次に移りますか、と霧子（仮）は指を一つ折りたたんだ。

「今回の事件についてですが、まあ、おおむね大きな流れは察してるかと思ってます。真尋さん答え合わせしようかと思いますが、どうですか？」

「あー、要するにアレだ。クトウルフとか、そこら辺の神性とかとデイープワンズが精神的な交信とか、そんなことをしようとしたと。そのためには特異点^{ポイント}が必要で、オレが狙われた。ノーデンスは、理由わからんがそれを止めようとして。で、その相手の中枢にはニヤルラトホテプが当然いると判断していた。だからクトウグアの化身をつけていっていたが、結局アンタに出し抜かれていた、と」

「うわお……。んー、アイデア！　すぎて私の話すことがほとんどないんですが……」

ええー、みたいな、ちよつと引いたような声を上げる霧子（仮）。半眼の真尋に「ち、違うんですよ」となぜか釈明のごとき言い訳をはじめめるが、一体何に対する釈明なのかは本人同士わかつてはいないに違いない。

「いえ違うんですよ。そういうことじゃなくてですね？　その、そう！　そこまであらましに予想がついているなら、今更真尋さんは何を聞きたいのかなーと」

「事件の根本的原因のところとかがすっぱり抜けてるじゃねえか。大体、それに対してアンタが結構な年数、仕込みをしてきたっていうのも説明になってないぞ」

「あー、それ言っちゃいます？　言っちゃいますかあ、……。ええい、

女は度胸！ この名状しがたき夢野霧子のようなもの、誠心誠意解説してあげようじゃありませんか！」

そして双方、深夜のテンションなのか微妙に声のトーンが高いような。大変に近所迷惑であるが、誰一人として公園に人影は現れない。「とはいっても大したことじゃありませんね。ああいう組織の動きっていうのは、めいめいあることだったので。問題はノーデンスに、真尋さんの存在を感じられることだったので。わざわざ化身まで出てきていた以上、私も適当に対応していたら色々大変なことになった感じですので」

「ノーデンスが出てくるっていうのは、いつわかつたんだ？」

「いやだなあ真尋さん、そんなの二十数年前からに決まってるじゃないですかあ」

こいつぶん殴ったほうがいいんじゃないだろうか、とニコニコ顔の霧子（仮）を前に、真尋の脳裏に誘惑めいた衝動が走る。

「なんでわかるのか、とか聞かないでくださいよ？ 真尋さんからすれば、中空にあつた雨粒が、そのまま重力に従って地面に落ちるっていう程度の認識に近いことなので。こればかりは生物的なスペックの差ですかね」

「認知機能の差ってことか？ ……なんだかラプラスの悪魔じみてるな」

いわく、すべてのものに働くエネルギー情報と、それを観測し処理しうるだけの知性が存在しうるならば、おおよそその知性にとつては世の中のすべては完全に予想することができるだろう、という感じのことらしい。俗にラプラスの悪魔と呼ばれる物理学の超越概念である。真尋のそんなセリフを受けて、霧子は胸を張った。

「そりゃ、一応これでも神ですし」

まあ確かに、ニヤルラトホテプレレベルであればそれも可能だと言い切られてしまえばそれまでである。少なくとも、真尋は彼女が本来持ちうる価値観や概念、スケール感を全く感じ取ることが出来ないのだから。逆に彼女が真尋たちに合わせることができるのは、いわば「大は小を兼ねる」という理屈だろう。GBAでGBのソフトが遊べた

り、あるいは初期型DSでGBAのソフトが遊べたり、NewDSでDSのソフトが遊べたりと言ったレベルの話だ。

「まあおおよそ二十数年前に今日、というかさつきまでの簡単な展開の予想が立ったので、これはまずいなあと。せっかく『準備してきていた』真尋さんをみすみす殺されるのも面倒だったので、まあ、画策したわけです。『私』に変身して例の組織に出入りして。でだんだんと条件が確定していったので、十年くらい前にクー子に私が燃え散らされるイメージも予想が立ったから、無涯博士も狂気の世界に引き入れて、行動を起こしそうな場所に接触させましたし。いやあ、『論文に化身した』のは久々で、案外大変でしたよー」

「もはや俺には、その化身っていう概念がわけわからなくなってきたるんだが……。つていうか、クー子？」

「クトウグアの女の子バージョン、つてことで、略してクー子」
「安直……」

「あら、では御大のごとき品詞ごてごての解説文じみた名称の方がよかったですか？」

「いや、それもそれで面倒だからいい」

既に眼前の相手自体、霧子（仮）だの霧子だったものだの散々に内心で形容してる真尋のセリフである。と、そんなことを知ってか知らずか、霧子は「しかし中々真尋さんもたくましくなりましたねえ」と嬉しそうに笑った。

「何がだ？」

「いえね？ だつて、今真尋さんと話してるのつて、這い寄る混沌ですよ？ 私のした所業、しうる所業、絶対知ってるじゃないですか。御大の原作読者な訳ですし」

「それは……」

「ま、あんまり興味ないんで別に問い正したりすることでもないんですけどね。じゃ、三つ目の疑問、真尋さんについてですね」

真尋の内心を知ってか知らずか、霧子（仮）は軽い調子で話を続け。

「ノーデンスもいつてましたが、真尋さん——あなたは特異点でありますが、それ以上に。私が13世紀くらいかけて作り上げた、死者アル・アッの書の原本。現代において唯一といえるでしょう、一切の欠損なき、完全な魔導書です」

ここにきて、真尋のSANチェッカーは再び回転数が爆発的に跳ね上がった。

昔々あるところ未来の物語

アル・アジフ。一般的な呼び名を使うならばネクロノミコンというべきか。世界一有名な魔導書の一つとして数えられる代物であると同時に、いまだその全容が知られていないという曰く付きの代物である。8世紀初頭、狂気に堕ちたとあるアラブ人によって書かれたかの書物は、記述者が読者に対してある種の魔術でも仕掛けたのではと思えるほど読者の精神を狂わせるとされ、大きく世紀をまたぐ前に禁書となる。だが裏ではその膨大な魔術の知識を求むる者たちの手により幾度となく表の世に出ては消されを繰り返し、現在残っている書物はたいがい写本、ないしページの部分部分が欠損した不完全品であるといえる。

ともあれ、この書物の何が問題かといえば、記載されている魔術全般にわたるものが恐ろしく神話的狂気と隣接していることにある。読者が発狂するというのは、すべからく書かれている呪文、召喚されるだろう神性や神話生物、発動に用いられる宇宙的規模の概念などが人間のキャパシティを容易に消し飛ばすためであろう。完全版のそれが現代に残っていないのが一つの救いなのかどうかは定かではないが、少なくとも残っていたところでまともな代物でもあるまいという予想が真尋にはあった。

「つまり、オレはまともな奴じゃないってことか」

そしてそうつぶやいた瞬間、猛烈な速度でS A N チェッカーがうなりを上げる。詳細を霧子（仮）から聞く以前の問題として、真尋の想像力はここ2日、いやもう3日となるか、その分すべての「嫌な予感」が直列で接続されたかのごとき悪寒を感じ取っていた。なにせ霧子（仮）は少女らしく笑いながら、こんなことを言い放ったのだ。十三世紀くらいかけて真尋を作ったと。十三世紀……、十三世紀？ 百三十年とかじゃなく、千三百年？ 邪神からすれば大したスケールではな

いのかもしれないが、もういつそ殺してくれといわんばかりに真尋の精神は疲弊しはじめていた。それでも倒れず立ち続けられるのは、SANチエツカーがひたすらに彼の狂気を請け負っているためなのだろうが、もはや一種の拷問である。と、そんな真尋の内心に対して、霧子は楽し気に笑った。

「そう落ち込まずにですねえ。……あ、ちなみにSANチエツカーでお辛そうにしていますけど、実際間違ったことではありませんよ？ SANチエツカー、ハスターあたりの信仰組織はMADロッカーとか読んで拷問具として使っていますし」

「は？ いや、何だそれ。SAN値直葬されるのを防ぐ道具じゃないのか、これ」

「だってSANチエツカーが肩代わりするのは正気度だけですから。精神的な疲弊とか、脳の負担とかまではみてもらえません。んー、たとえば、SANチエツカーをつけた状態で私の上司の前にいったとしましょう。すると……」

おそらくアザトースあたりのことだろうと、あえて上司なんてもつたいつけた言い回しをとった霧子（仮）から察する真尋。

「すると、どうなんだ？」

「脳みそが破裂します。頭がパーン！ ですね」

複数つけても破裂するとかいう話ではなかったらうか。

「んー、こう言う大変かもしれないですけどね。狂ってしまうっていうのは、人体の作用としてはある意味で正しい挙動なんですよ。人格を負担する器官たる脳に、無茶をさせ続けてそれでもなお停止させることもなく動かし続けると、挙動そのものがおかしくなり正常に機能しなくなります。しかし、これはその状態に適応しようとするからこそその動きですので、狂うことで狂う以前の状態からは解放されてる部分もあるわけです。SANチエツカーによつて精神を安定させられると、そんなことおかないしに常に正常稼働となりますので、結果、物理的に人体が破損します」

「しれつと何言ってるんだアンタ」

「大丈夫♪ 真尋さんの場合は他の人よりはSANチエツカーと相性

が良いので、そのままで大丈夫だと思いますよ。なにせアル・アジフですから」

「だから、なんでオレが魔導書なんだよ。っていうか完全版って……、あー」

そういえば、クトウグア召喚をおそらく意図的に失敗させて召喚させた、ヤマンソだったか。ノーデンス老と別な体の霧子（仮）に対して襲い掛かったかの炎の邪神を、退ける何かを真尋から取り出した霧子（仮）だ。ということはつまり、彼女の言っている言葉の正式な意味合いはともかく、実際それを成せるだけの魔術が記載されていたのだろう。確かにそんな話をちらっと見た覚えがあるような、ないようなという真尋である。霧子は一度咳ばらいをすると、超然とした微笑みを浮かべる。

「———この始まりはそう、ちょうどあのアラブ人が、かの戯曲を書いている時だったかな」

霧子（仮）では回想しきれる範囲にない情報だからか、声、態度ともにおそらく「ニヤルラトホテプ」の状態になった。一步後ずさる真尋に微笑む、霧子（仮）の姿をしたニヤルラトホテプ。おそらくそのアラブ人とやらは、アル・アジフ原作者だろう。ニヤルラトホテプは何が楽しいのか、思い出し笑いのように目を細める。

「そうだね。私が彼と出会った頃。丁度その頃、私は何をしていたか……。中国のあたりで水銀をすすめて為政者を何人が裏から暗殺していたかな？ そんな私の様子を、彼は『窓を作って』見ていた」

「窓？ ……当然、普通の意味合いじゃないよな」

「ああ。時空間に穴をあけていたわけだ。彼は本来、イスラーム圏ないしアラブ圏の人間だったからね。そちらの人間として神々に帰依するべきであったのだが、どういう訳かヨグⅡソトスに帰依したらしくてね。そんな彼は何を思ったのか、ヨグⅡソトスの力の一端、というか『肉片の一部』だろうね。それを通してあらゆる時代、あらゆる時空間の観察をしていたようだった」

最初の水銀の話聞いた時点でロクでもなさ満載のニヤルラトホテプであったが、邪神の肉片を使って魔術を行使していたそのアラブ

人もアラブ人である。

「彼も私に後ろを向かれるとは思っていなかっただろうが、ふと気になつてね。そしてついアドバイスしてみたわけだ。せつかくだから記録をつけてはいかがかとね」

「記録……？」

「そう。最初はちゃんとした記録として書いていたようだったが、少なくともその記録を私が改めて目にした時には、もはやまともな代物ではなかった。彼はあらゆる時代の『私たちの側の』神話や魔術を集め始めていた。彼が何を思ってそんなことをしていたかはまあ知つてはいるが、それさえ無駄だと知つていてもやらざるを得なかったのだろうね」

「……んー、性善説にのつとれば、アンタらに対する対抗策として残したつてことか？」

「さすがの理解力だ、と言つておけば『霧子っぽい』かな？ まあそれを残したからと言つて、後世、とくに私の目に留まつた時点で彼が予定していた通りの使われ方をするとは限らなかつただろうが」

戯曲、戯曲といつていたか。つまりそのアラブ人は、あらゆる時代における邪神たちが起こしうる物語と、それに対抗するための魔術を集め記載していたということか。ただそれが後世正しく理解されることはない。当たり前だ、著者自身が狂つてしまうような内容のそれが読者に正しく理解されるわけではないだろう。またおそらくその紛失したページについても、この眼前の相手が一枚どころでなく絡んでいるに違いないと真尋は半眼でにらんだ。

「そう怖い顔をしていると、将来的にモテないぞ？ 女の子つていうのは、たいがい見た目が九割だ。怖い顔、不細工な顔、挙動不審な顔がモテるには別なステータスを足さなければならぬ。意外と面倒なんだぞ？ 真尋」

「そんなことはどうでもいい。どうでもいいが……、さてはアンタ、その戯曲から魔術以外をにおわせる記述のところだとか、戯曲として成立しうる部分とかを適当に紛失させたんだろ」

「……………いやあ、さすがにわかるよね。ただ、真尋はその直感が『ど

「ここに端を発するものなのか」を十分に理解しているのかな？」

「何に端を発するって——えっ」

真尋の想像力は、ニャルラトホテプのその一言により、結論に到達した。

「まあ、その話はあとに回そう。ともあれそれが一度世に出回りかけたとき、私は直感したのだ。嗚呼、これ原本残したいけど残せないなあ、と」

「アンタの都合でな。いわば、攻略本みたいなものだってことだろ」

「嗚呼、そんなところだ。パワーバランスが滅茶苦茶なところで人間が抗うからこそ、それはキラキラして、はかなく、せわしく、美しく、そして悲しくて、どんな結末を迎えても大爆笑できるのに。攻略本を見られたら面白みが半減以下じゃないか」

「なんで大爆笑する必要があるんだ」

どう考えても人間の感性にないニャルラトホテプである。真尋のそんな反応を受けて、霧子（仮）の身体のまま楽しそうに笑った。いや、嗤ったが正解か。

「勘違いしてもらっては困るが、私は案外、人間という知性を高く評価しているんだよ。シヨゴスの例にもれず、人間のような存在が安定して私たちに立ち向かうっていうのは、この宇宙全体でみると結構珍しい方だね。だからこそ記録として残しておきたいと思う私の心理が、わかるかなあ、わからないかなあ。……まあともかくだ。そして私は、その記録を残す方法を考えた。物質的な書物として残すことはできない。というか、あらかじめ私が手を加えてしまったからね。写本してる背後から油をかけて火をつけたり、ずたずたに切り裂いたり」「つまり原本残ってないのはアンタのせいだろ」

「ああ、私のせいだ。そして丁度そのあたりで、かのアラブ人がいかにして死んだかを思い出したんだ。端的に言えば時空間を覗きすぎて、『猟犬』の目に留まってしまったわけだね。一度狙いすまされれば、よほど優れた魔術師でもなければ太刀打ちすることは難しいが故に、最後は影も形も三次元には残らなかった。血痕くらいは残ったかもしれないが。ともあれ、そう。彼はヨグソトスを使用して時空間に穴

を開け、私たちを観察していたのだ。だとすれば——同様の方法をとり、完全版の内容にアクセスし、その知識を引き出せば良いとね」だがそこからが大変だったと、ニヤルラトホテプはスケール感の違いすぎる苦労話を始める。

「肝心のヨグⅡソトスはなかなかこういうことに理解のある存在ではないからね。コミュニケーションも取り辛いし、そもそもアレの手前に立つご老公は私のことをいたく毛嫌いしてるから話さえ取り合ってもらえない。となるとあれが産み落とさせたものに手を加えるなり、アレが関係したアーティファクトを改良するなりという方法を考えるべきになったのだが、これも中々集まらない。さらに言うと、大概のアレが関係したものは、知識欲こそあれど自分の特異性を利用しようという腹積もりを持たない上に、初めから正気じやないのが多かったからね。化身するにしても私とて中々それに合わせるのも大変だし、『取り込んでみはしたが』意外とアレに近い能力を持っている個体と遭遇しなかったというのもあって、割と八方手詰まりになってしまった」

「……なあ、オレ、すごく嫌な予感がするんだが。もしかして、アンタそれ理由に——」

真尋の続く言葉に、ニヤルラトホテプは首肯した。

「ああ。だからこう考えた——『そうだ、都合よくヨグⅡソトスの能力を継承した存在を作ろう!』とね。というわけで、生まれた存在が特異点だ」

「って結局それもアンタのせいかつ!」

「ああ、私のせいだ」

平然と言つてのけるからに、やはりこれは霧子（仮）の元になる存在には違いあるまい。いや、むしろ自然体で言つてのけるあたり、こつちの方がより性質が悪いかもしれない。

「半分がアレの遺伝子であると、アレそのものが様々な領域に接続しているせいか、形質性質共に一定じゃなくなってしまった。だから後付けにして性質を安定させるように決めたのだが、これも意外とうまくいかない。いうなれば特異点とは、時間から干渉を受けないかわり

にそれ自体が時空に空いた一種の『穴』だ。時間の奥底に封印された存在に干渉する触媒にもなりうるが、私の意図としては、その穴がどこに繋がるかが問題だ。しかしこれ、調整が難しくて難しくて……。人種に関係するってことに気づいたときは、日本にもキリスト教が伝播していた頃になっていた」

そういえば織田信長が這い寄る混沌ではないか、とか提唱していた話がどっかにあったようななかったような。平然と戦国時代の日本についても知識を持っているあたりからして、いや、まさかそんなはずは。

「他にも色々遊びながらではあったが、まあおおむねアジア人に対応させることには決定したのだが、そこで目を付けたうちの一つが、八坂の家のご先祖だ」

「いや、まったくつながりが見えないんだが……。なんでだ、たまたまか？」

「いや、理由はいくつかあるよ。一つは真尋のご先祖のさらに先祖がかつて海賊をしていた折、異邦より来たりし月面の獣相手に、ノーデンス指揮の元、槍を手に立ち向かっていったというのがね。ちなみにその後発狂して、海を渡り隣国へ略奪行為をしたりもしてる」

「変な新説を作るな、新説をつ！ 本気にしたらどうする本気にしたらっ！ っていうか、え？ 何、そんなところで縁があつたのか」

「ああ。ノーデンスが君を助けに来たのは、そのあたりが理由ではないかと私は踏んでいる」

「……っていうか、月面の獣？ ってアレだよな。ムーンビースト。結局それもアンタのせいじゃないか」

「ああ、私のせいだ」

ムーンビースト。詳細は省くがニャルラトホテプの代表的な眷属のようなものである。

そしてどうでもいいことだが、SANチエツカーがずっと回りっぱなしで止まることを知らない。いい加減その回転音で、耳がちよっと痛くなってきた真尋であるが、安易に外すのはためらわれる。

「とにかく、君の家系はその時の役割のせい、ノーデンスの加護を受

けていた。これが意外と特異点作成と相性が悪くなかった。うまく説明はできないのだが、ノーデンスの加護を基準とすることで、どれくらいの時間と時代とを接続先としてずらし調整するかということ、かなり簡単にできるようになった。あとちよつと、あとちよつと、ということ、そのままずーつと、君の家系の結婚相手を調整してきただ。いやー、ああいう色々化身して人間関係を円満に進めさせて祝儀までこぎつけるような経験、なかなか他の神性ではできないだろう貴重な経験だったねえ。おかげで人間の好意について、色々学習できた」

「おい、ちよつと待て——」

「そして、そう。ちよつと君の母親だね。彼女を見たときに、電流が走るようなひらめきを覚えた。彼女は自覚こそなかったが、いわゆる『探索者』と呼べる存在だった。それも私が多少関わった案件のね。そして、この散々に調整してきた八坂の家と、君の母親と。これが合わさったとき、まさに私が望む形で、意図したとおりの特異点を発生させられると」

真尋の静止など聞かず、ニヤルラトホテプは嘲笑うかのように平然としゃべり続ける。そしてその言葉が続いた時点で、真尋の顔面は土色だった。

今言われたことが正しければ、戦国時代からこの眼前の相手は、自分という存在を生み出すためにいわば「品種改良」を繰り返したということになる。真尋一人が生まれてくるまで、その運命の背後に介入して手を加えていたというレベルならまだ理解できる。いや、理解したくもないがそのくらいならギリギリ人間の手で把握できる年代だ。百年は超えまい。だが今言い放たれた情報は、とてもじゃないが理解を拒むどころか、むしろ一周回って笑いが零れるくらいだ。ただし、頬が引きつってしまうのは当然と言えば当然だった。

いや、それどころか——ニヤルラトホテプは、そうやって手を加えた家系を真尋だけだとは言っていないのだ。それはつまり、彼同様に運命を翻弄された血が、いまだ無数に存在するかもしれないということである。

「特異点の作り方について、まだ話してなかったね。といつても大して難しいことではない。以前、アレの召喚を物理的に防いだ探索者がいた。その探索者はなんとね、驚くことに液体窒素とダイナマイトでアレを退散させたのだ！ で、丁度その時の破片を私が回収しておいたのが残っていたから、それを『人体に溶かし込めば』、完成と相成る」

「準備は着々と進めた。完成度を高めるために、今回は母体にまず溶かし込んだ。異物であるそれを母体が撃退するよりも先に、それは君の中に溶けてくれた。そして病院で『君を取り上げその産声を聞いたとき』、私はこう、圧倒的な勝利の余韻に包まれたんだ。……………」

「明かされる情報がことごとくひどすぎて、もはや真尋は頭を抱えて蹲っていた。」

「どうしろっていうんだよ、これ」

魔導書アル・アジフが世に生誕した理由 イコール Ⅱ アル・アジフが写本しか現存しない理由 イコール Ⅱ 特異点なる特殊なヨグⅡソトスの落し子が存在する理由 イコール Ⅱ 八坂の家が現代まで続き、真尋が生まれた理由 イコール Ⅱ ニヤルラトホテプ。

看板に偽りなく、大体ニヤルラトホテプのせいである。

「…………となると意味がさっぱりわからんが、やっぱりオレの直感とかの元になってるものは、アル・アジフの、戯曲部分ってことか？」

「戯曲に限らず、魔術的な部分についてもだ。そうだね、せっかくだからTRPG的な説明にしてみようか。いくなれば真尋は潜在的に、クトゥルフ神話知識の技能を最大値獲得している状態にある。ただ普段からその領域の知識に接続されている状態にはない。あくまでも真尋自体はただの人間だ。特異点であるというものは考慮に値しない」

「まあ、聞いている限りだと時空間に対して特殊であるって点以外、変わった能力とかはなさそうだしな……。現に、オレも肉体的には単なる人間だし」

「それに、基本的には私がロックをかけてるから普通はまず気づかれ

まい。だからこそ家系に加護を与えたノーデンスだから気づいたともいえるのだけれどね」

「つていうか、そもそも自分が加護を与えた一族にアンタがつきまどっていたら、それこそ気づきそうなものだが」

「そこは私が巧妙だというだけだね。傲慢じゃないが、私が本気で化身した場合『上司』以外見破れないだろうさ。ましてや私と違って人間スケールに合わせて物を考えることが苦手なノーデンスにはね」
圧倒的な説得力である。

慣れてきたわけではないが、蹲りながら苦笑いを浮かべる真尋。しかしそんな平和な状態は長くは続かない。

「まあそうだね。後は——私が君を取り込めば、それですべて完了だ。目論見通り、わたしはいつでも、かの記録を読むことが出来るようになる」

その一言は、非常識な経験に翻弄され続けたとはいえ、十五歳ぼっちの少年の精神を揺さぶるに十分な威力を持っていた。

アイ つくる

真尋は悟った。たとえばどれだけ自分が眼前の相手のことを想っていたところで、結局のところそれは夢幻。彼女が名乗ったとき同様、その事実はすでに霧に消えている。蹲っていた体勢から視線を変えれば、そこに霧子（仮）の姿はなかった。かわりというにはあまりに異様な、身長の高い男の姿が一つ。スーツはくたびれているが元が上質なものであるのが一目でわかり、それに身を包む男は長身痩躯。いや、あまりに長身すぎるともいえる。ゆうに2メートルは超えようというその身の丈に反してシルエットは華奢。頭部にシルクハットをかぶっており、顔面、手先は包帯で覆われている。そこからわずかに覗く肌は白く、いや、肌なのだろうか。皮膜のような何かに覆われた人体のごとき何かと形容するのが正しいと、真尋の想像力は正解を導き出していた。

「どこへ行くんだい？」

声は変わらず涼やかな男性のものだが、すでに真尋はその姿を視界に捉えていない。立ち上がりすぐさま全力で駆け出したのだ。先ほどの会話を振り返り、真尋の想像力は、否、彼に接続されているだろう魔術戯曲は、彼にある種の真実を伝えていた。そもそも真尋がある程度育ち切らなければアル・アジフへの接続がままならなかった。だから彼が育つのを待った。そして真尋がある程度の神話的知識を獲得することで、その想像力がアル・アジフへ接続するための鍵になるのだと。結果的にその目論見はうまくいき——ニヤルラトホテプが危惧した真尋が殺されかねない事象さえも巧みに使い、真尋をついにかの神性が望む状態に仕立て上げたのだと。もはやここに至り、神性のためらう必要は微塵もない。ゆえに真尋は逃げた。いや、逃げてしまった。彼自身気が付いたら、体が勝手にニヤルラトホテプから逃走を図っていた。

だが、数秒とかならず眼前にかの長身が回り込む。瞬間的に視界がぶれ、目の前に現れた姿は先ほどの姿と異なっている。どうやら変貌途中だったのかもしれないが、眼前のそれは完全に、いわゆるスレンダーマンとかいうあたりのそれだ。のっぺらぼう、髪もない人体の表面に白い皮膚のごとき何かで覆ったかのごとき異様、2メートルどころか3メートルにも届きかねないほどの威圧感を感じさせる長身、仕立ての良い黒いスーツ、そして服のほつれなど、シルエットが時々「複数の触手が重なり合ったような動き」をしてぶれる。その姿をとらえた時点で、S A N チェツカーが熱を帯びた。熱いと叫び外そうとするが、しかしその腕をニャルラトホテプに捕まれる。ざらざらと乾いた冷たい感触は、まるで死体のそれだ。

真尋は直感する。眼前の相手の顔を正面から見てしまったことか、すでにS A N チェツカーは限界を振り切りかけているらしい。ご多分に漏れず、創作都市伝説たるスレンディの性質である「見たら死ぬ」ないし狂うというそれを受け継いでいるらしい。いや、それはともかくS A N チェツカーである。そもそも霧子（仮）からのネタ晴らしにおいてさえ数値の判定が発生していなかったたので、この状況はかなり危険なのではないかと真尋は焦っていた。何かとてつもなく嫌な結末が起きそうで、そんな直感を抱きながら、自分の腕を持ち上げたニャルラトホテプをにらみつける。勢いで投げ出され、足元に散乱したコンビニで購入したスパゲッティやら何やら。買いはしたが食べる気にならなかつたそれらが、ニャルラトホテプの影に触れた瞬間、その姿を消した。……食べられでもしたのだろうか。

「真尋。そんなに怖い顔をする必要はないぞ。何も君という存在が消えるわけではない。ちよつとだけ『自分の定義が広がる』というだけだ。人間なら誰しも一度は最期に通る道だ」

「全く意味が解んねえんだよ、アンタ！　つていうか最期つて言ってる時点で死んでるだろ！」

長身の腕を振り払い、真尋はとつさに、転がっていたプラスチックのナイフとフォークを手取る。武装としては貧弱どころの騒ぎではないが、もはや真尋がつかえる武器はその程度しかない。おまけに

左腕はS A Nチェツカーによつて焼かれている。状況は最悪どころの騒ぎではないだろう。

「真尋——これは運命だ。君が生まれるはるか昔から、そう、前世よりもずつとはるか先から定まっていた運命だ。受け入れる。そして、『私となるんだ』」

スレンダーマンらしくとすべきかニヤルラトホテプらしくとすべきか、その背後から全身にかけて、黒くうごめく触手がわらわらと現れる。そして体の中心部。胸の中央には大きな穴と、霧子(仮)がつけていた「自ら輝く疑似球多面体」シャイニングトラペソヘドロンだろう物体が存在した。穴は徐々に広がり、その入り口には牙のようなものと、向こうにはさらに膨大な数の、何かしらの虫の幼虫のようなシルエツトがひしめきあっている。生理的な嫌悪から、真尋の口に吐しゃ物が上がってきた。だがそれを吐き出さず飲み込む真尋。軽く頭痛を覚えるが、それさえ無視してプラスチック食器を覆うビニールをはがす。そのまま両手を下段に構える、いかなれば宮本武蔵でいうところの「無構」のような体勢に。そのまま中腰にナイフとフォークを構え、真尋は全力で走った。絶叫。気合いで恐怖心を押し殺し、眼前の相手に特攻する。

真尋はなぜか確信していた。いや、おそらくこれも魔導戯曲よりの知識なのだろう。あの穴の中心にある多面体。発光するそれを破壊することができれば、真尋はこの這い寄る混沌を退けられると。球体自体はただの結晶体ゆえ、ある程度の衝撃で破壊することが出来る。だが逆に失敗すれば、それは自らの腕を相手の「口にさらしているに等しい」。すぐさまあの向こうにある名状しがたき口にするのも憚られる体内に取り込まれるだろうことは目に見えていた。勝負は一度きり——真尋は自分の想像力に、あるいはアル・アジフにかけていた。直前であれ、この状況を打破しうるその直感に！

「俺は、運命なんて信じない。だから————アンタの願望に付き合わされるのも、これっきりだ！」

「真尋がどう思おうが、すべては、かく、あるべしだ。私がなんでわざわざ『身体を開けた』と思う？」

次の瞬間、ニヤルラトホテプの胸部は閉じ、最初のスーツ姿のそれ

に戻った。

声が出る。困惑と衝撃と、はめられたという絶望感が真尋の脳裏によぎる。だがそれでも、すでに走り出した真尋は止まらない。それはつまり、ナイフとフォークがニヤルラトホテプに激突した瞬間が真尋の負けということだ――。

「っ」

運命は、決した。

『――嗚呼、お前の負けだ。ニヤルラトホテプ』

「!?!」

プラスチックのナイフは、ニヤルラトホテプの胴体にぶつかった瞬間に「溶けていた」。だが、フォークだけは、その胸部を貫き、結晶に突き刺さっていた。まるで意味がわからないとばかりの真尋と、表情こそわからないまでも真尋と似たような心境なのか慌てた様子でニヤルラトホテプ。真尋を突き飛ばすと、すす煙か黒い霧かを散らしながら、胸を押さえて周囲を見渡している。

「ノーデンスの声……? そうか。それは、失念していた。なるほど、最後に出し抜かれたのは私だったということか」

「……は?」

見れば。真尋の持っていたフォークは、プラスチック製だったはずのそれは、鈍く銀色に輝く金属のような色を帯びていた。だが珍しいことに、この事象に「全く理解が及ばない」真尋である。と、そんな場に聞き覚えのある声が――ノーデンスが化身していたあの老人の声が聞こえる。

『お前らの一族、戦士に与えた俺の加護だ。お前らが持った』又の分かれた穂先の槍』は、総てまごうことなく『邪神を穿つ』破魔の属性を帯びる』

どろどろと煙を立てながら、体が崩れ落ちていくニヤルラトホテ

プ。ノーデンスの声もそれきり聞こえなくなり、やがて朝日が昇り始める。ニヤルラトホテプだったものは、その日の光に焼かれじわじわと、その姿かたちを消した。

「は、は……」

息も絶え絶え。SANチエツカーの回転が落ち着いてきているが、いまだに数値をはじき出してはいない。しかし、彼も意図せぬところで、少なからず命の危機は去った。これが一時的なものであるにしろ、真尋にとってはとりあえずの安心材料に――。

「――という訳で、真尋さんは意外と戦闘力があるってことですね。わかりましたか？」

「う、うわあああああああああああああああああああああああああああつ!」

突如真尋を背後から抱きしめた声の主のそれを聞き、邪神の化身たる夢野霧子（仮）の声を聞き。倒したはずのその存在を前に、真尋の腕に巻かれたSANチエツカーは完全に壊れた。

「大丈夫ですって。別にとって食べはしませんから。ほら、深呼吸してください?」

混乱の極みに陥ったせい、にこにここと、まるで先ほどまでの光景が何事もなかったかのようにほほ笑む霧子（仮）に介抱される真尋。諸悪の根源がこんな美しい、ともすれば他者を安心させるような微笑みを浮かべるのだからとんだマッチポンプである。いや、そもそも今日日、真尋が遭遇した神話的事象そのすべてがニヤルラトホテプによる自作自演なのだから一切合切笑えない話であるが。しかし、それでも真尋は霧子（仮）のことをなぜか嫌えないでいる。そのせい、呼吸を整えられ、汗を拭かれ、そして茫然としたままの真尋は軽く唇を奪われた。

「ッ、って、な、な、何してんだアンタ!」

「んー？ ほら、ご褒美的な。『がんばっていきのこりましたで賞』って感じですかねえ」

「なんのぐ褒美だ、どれだけオレは趣味が悪いと思われてるんだッ」
楽し気にくつくつ笑う彼女は、介抱のついでにやっていたのか、その手に先ほどのプラスチックのフォークを握っていた。それをあらぬ方向に投げると、真尋の手を引いて立ち上がった。反射的に腕を振り払う真尋と「もう、つれないですねえ」と少し残念そうな霧子(仮)。「さっきまで人のことどうにかしようとかしていた相手が、何やってんだ。っていうか、アンタさつき倒されたばっかりだろ」

「いえ、ですから先ほど言ったじゃないですか。私、化身するのは本当に簡単なので、こう、ほこじやか出てくるの得意なんですよ」

胸を張るとその豊かな胸部が強調されるが、それはともかく、嗚呼と真尋は嫌でも納得させられた。実際彼は、眼前で彼女が焼かれたほぼ次の瞬間、自分の隣に新たな霧子(仮)が発生していたのをこの身で体験しているのだ。もうどうにかしてくれと言わんばかりに、真尋は腰が抜けた。

だが、霧子(仮)はとくに何もする様子はない。

「……………」

「あ、心配しなくてもいいですよ？ 最初から真尋さん、取り込むつもりはありませんでしたから」

「……………は？ いや、なんでだ、訳わからないんだが」

いまだ思い出すだけで震えそうになる状況と、ちらちらと不定期に襲う頭痛に顔をしかめながら、真尋は問いたです。と、霧子はあつさり。

「真尋さんが持っている武器の性能について、一応把握しておいてもらおうかなあと」

「……………ひよつとして、それ目的であんなことしたのか？」

「ええ。日本に帰る途中も言いましたけど、私、こんな形で真尋さんを巻き込むのは本意でなかったことは事実なので」

「こうなることを予見していたのには？」

「予見していたからといって、真尋さん個人に対してどう思ってるか

は別でしょ?」

「いまいち要領を得ない真尋に、霧子（仮）は楽し気に、そして少し寂し気に微笑んだ。そしてそのまま、真尋の後ろに回り、その肩をつかみながら、ささやく。」

「私という人格は、真尋さんに対して不快感をあまり抱かれないようデザインされてます。もちろんこの姿かたちも同様に。だから、ニャルラトホテプが演じている人格であるのだとしても、夢野霧子である以上は、真尋さん程とは言いませんが、そういう普通の常識とか認識とか、あるいは感情とかもあるにはあるんですよ」

「何が言いたいのか結論を言え」

「そうですね。言い換えれば——私、真尋さんのことが好きなんです。それこそ私が発生した二十数年前から、あなたをお守りするためだけに生まれたこの化身にとって、あなたは何より大事な存在であるべきでしたから。だから、私がニャルラトホテプの中に生まれた時点で、ニャルラトホテプは真尋さんを取り込むことをやめました」

「……………」

状況が状況である。そして語られた事情も事情であるし、正体も正体である。素直に喜ぶこともできずに、真尋は困惑を顔に表した。霧子もそれは当然わかっていのか、やはり表情は寂し気なままなのことがわかる声音で。続けた。

「だから、これでいいんです。ニャルラトホテプは探索者に退けられた。今私が出てきているのは、気の迷いです。SANチエツカーが壊れた、真尋さんが発狂して見ている、単なる夢幻です。だから、私が言うことなんて本気にしないでくださいよ?」

——私、私が生まれた理由が、真尋さんでよかったって、本当に良かったって思います」

「————」

「これにて私の物語は終わり。貴方は貴方の物語が、これからも続いていくのです。きっと学校に通って、おモテになるかどうかは知りませんが、きっとそこで知り合った女の子と添い遂げることになるん

じゃないですかね。そして、きつとこれからも色々巻き込まれることにはなるんでしょうが、今日あったことを忘れず、武器を持って、一人の尊厳ある人間として、あらん限りに常識とその豊かな想像力を武器に戦っていただくさい」

「……発狂してる割には、言ってることが妙に生々しい気がするぞ。アンタ」

ただ、それでも。最後に真尋は力の抜けた笑みを浮かべた。浮かべることが出来た。

「では、さようなら。お元気で」

「……アンタもほどほどにしておけよ」

真尋の言葉が言い終わらないうちに、彼の肩に乗っていた体重は重みと感触を消した。慌てて振り向いた真尋だが、そこには彼女の影も形もない。登りはじめた太陽が彼の視界を照らし始めている。ちゅんちゅんと鳥の鳴き声が聞こえ、どこからともなくジャージ姿の中年男性が走り込みをしているのが見えた。

帰ってきた、といえるのかもしれない。この光景は彼が見たことのないものでも、彼が住んでいる世界でありふれた一幕のそれに過ぎない。その一幕がどれほどに重要なのか。重大なのか。大切なのか。

「……………」

左腕に残った火傷を一瞥し。真尋は無理やり立ち上がる。

「今日は月曜日か。……いや。弱音は吐くものじゃないな」

拳を強く握り。わずかに一瞬うつむいたものの、それでも顔を上げて、前を向いて。狂気の世界に背を向け、日の当たる日常の風景へと足を踏み出したのだった。

* * *

「おはよう、八坂君。……何か疲れてそうだね」

「おはよう。あー、睡眠不足だ」

「珍しいね。昼休みはよく昼寝してるけど、朝からその調子だったっていうのは」

高校の教室。朝のホームルーム前の時間にて、読書が終わった後のがやがやとした空気の中である。真尋は級友の余市健彦に、疲れたように返答した。いや、実際に疲れてはいるのだが、詳細を語れない以上は苦笑いくらいしか浮かべることができない。クラス委員たる彼に心配をかけないようにというのもあるが、もつともそんな状況下であっても、きつちり宿題の英文翻訳をこなすあたりは、真尋もなかなかどうして無茶をしがちではあった。

やがて眼鏡の教師、クラス担任が入ってくると、あわただしく生徒たちが蜘蛛の子を散らすように座席へと帰っていく。女子生徒たちは相変わらずそれでも小声で話を続けたり、あるいは携帯端末をいじったりしている。男子は男子で堂々と話したりゲームをしたりして、教師から正面だった注意を受けたりしている。

普段通りの風景といえば風景だ。帰ってきたと言えば大げさであるかもしれないが、実質それが二日を超過する程度の時間でしかなかったのだとしても、真尋にとつてその冒険は、狂気の山脈は何物にも代えることはできないほど、濃密で、衝撃的な出来事だった。眠気を覚える頭という普段とは違う状況もあり、真尋はホームルームくらは寝てしまおうかと腕を組み、背もたれに体重をかける。と。

「えー、前々から言っていたことだが、今日からみんなに新しい仲間が増えることになる。みんな、仲良くしてやってくれ」

そういえばそんな話もあったな、と真尋は一週間前の話を思い出す。なんでも姉の仕事の都合か何かでこちらに来るらしい。女の子である、というくらいの情報しか真尋は知らない。教室に入ってきた彼女の姿も、目を半分以上閉じているから見えるわけもない。かわい、だの、モデルさんみたい、だの、そんな声が聞こえるような気がするが、あいにく今はそんな気分ではないのだ。

だからこそ、そのまま意識を手放そうとしていたのだが。黒板の前に現れた少女が、名前を書き終え、声を発した瞬間にその考えはもうくも打ち砕かれた。

「——姓は二谷^{にたに}、名は龍子^{りゅうこ}。お気軽に、ニヤル子とでもお呼びください」

立ち上がりこそしなかったが、それでも椅子から転びかける真尋であつた。果たして衝撃に目をひん向いた彼の視界に居た少女は、ひどく見覚えがある容姿をしていた。いつそ日本人離れたようなきれいな顔も、長い髪も、その声も。しいて言えば、それは真尋が知る彼女の姿から十年くらい時間を差つ引いたような、それくらいのスケールダウンが行われている。容姿には幼さが残り、声もまだ多少わんぱくな色がある。なによりスタイルが、高校生基準で見ればかなりグラマラスではあるが、彼の知るほどに大きくはない。

そして、真尋の脳内で結論が出た。すぐさま走り出した想像力が導き出したそれは、以前聞いたようなセリフである。

「これからよろしくお願いしますね? ——末永く♪」

——いえね? この、最後の最後にヒロインの正体が判明して、それで主人公のとなりになれないってなってるのに、最後の最後でクラスに転校してきて『これからも一緒ですね♪』ってエンディングが、なかなか悪夢的だなあと。

——トラブルから主人公が一生逃げられないっていう死刑宣告でもされてるみたいで、なかなか楽しいじゃないですか♪

「そんな伏線、覚えてる訳ねえだろ……」

この世の終わりのような声を出して頭をかかえた真尋であつたが。しかし、その表情は意外と嬉しそうなものだった。

【真・這いよれ！ニャル子さん 嘲章】

【プロジェクト・オブ・ネクロノミコン】

【END】

次章予告

(ノイズ交じりの視界)

(電気的な砂嵐が晴れると、無数の壊れた機械が散らばっている場所)

(歯車や巨大な針が地面に刺さっている)

(かさかさとそのうちのどこかしらがうごめき、くすくすという声が聞こえる)

(ぽつり、とその中でランプが灯るマシンが一つ)

(ノイズまじりの音を鳴らすそれは、一つのカセットテープレコーダー)

(外装はほぼはげ、基盤も一部露出している)

(上から降ってきただろう大型の時計が刺さっており、半壊している)

(カラカラとから回る音が鳴っている)

(内部にはテープが入っていないらしい)

(一瞬、暗転し視界が回復する)

(二三度、空回りする音を鳴らしたあと、レコーダーはがたがたと震えて静かになる)

(内部に真っ黒なテープが、いつの間にか挿入されている)

(テープが巻かれる音になり、時計の針が、かちり、と進む)

(レコーダーの再生音)

ニヤルラトホテプ (CVイメージ：井上和彦)

「あー、あー、テスト。本日は晴天なり本日は晴天なり、ただし所により血の雨が降るでしょう——それはきつと、貴方の血です。信じるか信じないかは、貴——」

(再び一瞬ノイズが走り音声の具合が変わる)

ニヤル子 (CVイメージ：浅野真澄)

「ニヤル子とクラー子の、予言のごとき未来リポートのようなものッ！」
クラー子 (CVイメージ：堀江由衣)

『どんどんぱふぱふ、ぬめぬめぬるぽ』

ニヤル子

「ガッ！」

さてさて一体どうなっちゃうんでしょう、真尋さんを囲うニヤルラトホテプの魔の手。

あなたはもう、この深淵の底なしの底から目を逸らせない逃げられない！

さて、そちらの状況はどうでしょうか！ 現場のクー子レポーター

！」

クー子

『

朝日は昇り

踏み出した場所はもはや過去も知れず

あたたかな日差しは狂気の鎖を解き放ち

混沌は空のむこう 遙か彼方の海を見上げる

己が居場所さえ知らぬ探索者がたどり着くのは 果てのない悪意と空虚な神殿

そして—— 偽りの火は踊る。

』

ニヤル子

「さて、一難去ってまた一難。 生生流転、森羅万象。 英語で言えばユニバアアアスツ！」

次回の見どころは、真尋さんの冴えわたる名推理と、ニヤル子の突撃！隣の人生ゲームです。

借金地獄でウンメイノー！ 一家離散でウンメイノー！」

クー子

『次回、真・這いよれ！ニヤル子さん嘲章。「ドウエラー・イン・アフエクション」』

ニヤル子

「次回もまた深淵に？」

ニヤル子&クー子

『ドロッパドロッパ』』

ニヤル子

「えっ、何々？ 続きはない？ 序章は序章で切られるウンメイノー？」

クー子

「ニヤル子、陳情案件」

ニヤル子

「クー子おお！ まだだ！ まだ終わってな——」

(ぶつり、と音声記録はここで途切れている)

02. 虚飾に棲むもの 未知なるカナンに真実は求めない

八坂真尋は迷子になっていた。いや、当然ながらそれは彼が今いる場所が既知の場所ではないからに他ならない。見知らぬ森をほぼ直感で抜けた際、巨大な落とし穴のようなスライダー状の何かに落とされ、気が付けば石造りの遺跡が跋扈するこの領域に落とされた訳である。

時折ささやき声というか、何か生き物がうごめいているような音が聞こえる——。真尋はひどく慎重に足運びをしていた。これは彼自身がすでに体感しているいくつもの不条理な経験に基づく判断力からくる行動である。抜き足、差し足、忍び足。真尋自身、思えばこういった行動もだいたい慣れてきたと思いはじめていたが、しかして考えてみればそういうあれこれは一週間、二週間も経過していなかったのだという事実が口を開けている。もはや考えるだけ無駄という世界の話ではあるが、世は中々不条理に満ち溢れていた。あるいは狂気が跳梁跋扈しているといえるかもしれないが、あいにくとそれを考える余裕は彼にはない。左腕に巻かれた腕時計状の道具、十面ダイスが二つ取り付けられたような装置の動作に気を配りながら、真尋は壁伝いに足を運んでいた。

「いやいや夢だよな、これ」

俗に夢の中において、それが夢であると当事者が自覚的である夢のことを明晰夢と呼び、当事者の想像力によりある程度の統制が可能であるとか言われているが、しかし残念なことに真尋の眼前に広がる遺跡からは、とてもそんな生易しい気配を感じ取ることが出来ない。というか、そもそも真尋の身体もどうかしている。声も違うし、視界はほんのり緑色のフィルターがかかっており、皮膚はざらついた感触。

こころなしが爪先は玉虫色の輝きを帯びている。現実には決してありえないこの状態であるが、しかしして八坂真尋という存在の実態、真実について考えた際はあながち的外れでもないかもしれない状況でもあり、それが彼の中に嫌な感觸を覚えさせる。

「これ地下鉄か？ ……妙に人類文明を想起させるんだが、ここ」

最初の落とし穴こそ土だの石だのといった作りではあったが、しかし抜ければ抜けるほど、地下に行けば行くほど、どんどんその場所は鉄やらコンクリートやらで出来た、れっきとした文明を感じる造形へと変貌していく。そんな中を、真尋は「得体のしれない何か」と遭遇しないよう注意しながら足早に、かつ音を立てないよう動いていた。と、生物らしき足音がこちらに向かってくる音が聞こえる。とっさに入った曲がり角は行き止まりで、下の方に横穴がいている。人間一人程度が入ることができそうではあるが、それがどれくらいの長さを誇っているかまではわからない。

とっさにしやがみ込んだ真尋。横穴は開けた場所には続いているが、すぐに壁伝いの棒梯子が下に続いている。横を見れば、どこか人間らしからぬ獣のような尾をもった影が見え、真尋にとつて判断する時間はなかった。すぐさま穴に入り、足を踏み外さないよう慎重に梯子を下る。

梯子は異様に長く、下方に明かりが転々としているがとても底が見える範囲にない。だが、下に降りれば下りるほど逃げ場はそこにないのだが、しかしなぜか真尋は下方に向かうべきであるという直感があつた。そこに何か、自分の探しているものが存在するという確信があつた。しかし「何を探しているのか不明慮である」というのが明確に彼の脳裏に刻まれてはいたのだが、そこに疑問をもてど、そもそもここそのものが当てのない場所である。事実上とれる選択肢がない以上、真尋にできることはもはやそこを下るばかり。

ふと思ひ出したように、真尋は口にくわえていた松明を見る。何故、ペンライトをもっていたはずなのにこんなものを持っているのか、そもそもこんなもの啞えられるほどに自分は顎の力があつたかとか、色々疑問を思い浮かべながら真尋は梯子を伝っていく。途中で休

憩するところもなく、ただひたすらにそれしかできることもすることもない。かつかつと、彼の足音だけが場に響く。他の音もなく、閉鎖された環境。周囲を見渡せば、どうやらここは何か巨大な壁の一角であるということだけは解る。しいて言えば、何かとてつもなく天井の高い通路の一角というのが正解か。松明を除けばぼんやりと紫色の光がどこからか灯っているのみで、これはこれで段々と思考が鈍化していく。ひたすらに下りることに注意を払わなければ、腕や足の筋肉が悲鳴を上げるのみだからだ。

と、そんなタイミングで視界の端に赤い光が見える。どうやらこのあまりに巨大な通路の奥側から、何かがちらに向かつて動いているような。ごうごうと風の音とも、それとも「巨大な生物の呼吸音」ともつかないそれが聞こえ、真尋は思わず止まり、その方向を見た。目を大きく見開き、わずかに体が震え、左腕の装置がからからと回転する。

「あつ」

一瞬注意が散漫になったからか、口から光源を取り落としてしまった真尋。だがさほどかからず、下方で光が散り、木目から割れるような音が鳴る。どうやらこのゴールは近いらしい。だが、真尋は本能的な恐怖からか腕が震えるのを抑えることができなかつた。気が狂う、ということだけは決してはいけない確信があるも、何か、人間がふれてはいけない、人間が見てはいけないものがこの奥で蠢いている——。その確信が全身にいきわたった瞬間、ここまでの蓄積していた疲労がいつきに吹き出し、腕も足も力が入らずそのまま落下した。

肩から激突した真尋は、痛みよりも全身の震えの方の感覚が大きかった。骨が折れている様子もない。大きな打撲をしたわけでもない。だが、とてもではないが動くことが出来ない。いや、震える以外の動きがとれない。

「な、なんだよこれ、なんだよここ——いや違う、オレはこれが何か知っている。知っていないなきやおかしい。いや、絶対おかしいだろ知ってたら。でも知っているはずだ。知っている。なんでここは——

——こんなに——」

次第に真尋の視界に、彼の記憶にない光景が映し出される。それだけの高さを誇る建物の天井に合わせたような「巨大なサイズの人類が」、中世風の服をまといこの場を歩き来している映像がフラッシュバックする。見渡せば紫の明かりはより爛々と輝いており、その場所でさらに人間が歩く先は、そしてその人間たちが何を目的にしているのかは——。左腕の装置の回転が止まる。21、という数値が真尋の脳裏に描かれると同時に、そのフラッシュバックは一度止むが、止んだところで彼の絶叫はとめられるはずもない。

気が付けば真尋は、まったく別な場所にいた。いや、これも記憶が混濁しているせいなのだろうか、いやに現実感を否定したかった夢と違い、さらに現実感が薄い。周囲一帯は暗い空に白い渦が巻いている。その割に自分の視界は異様にはつきりしており、ぐるぐると渦を巻いている雲の形も、やけに懐かしく感じる。そんな場所で真尋は膝枕をされていた。感触はやわらかく、だが決してそれはふくよかな感触ではない。必要な大きさ太さであり、かつ必要な弾力を併せ持っている。

ふと見上げれば、彼女は真尋の頬をやさしく撫でて微笑んでいた。肩の大きく開いた、赤いドレス姿。大きな胸部を強調する形にはなっているがいやらしさというよりも妖艶さを感じさせる。流れるような肩甲骨からのライン、白い肌に整った顔。頭には黒いベールをかぶった黒髪の女性。ワンポイントでレースがついており、そして真尋を見る目は慈愛のようなものが含まれている。目の色は赤く、額にはチャクラが一つ。長い黒髪は後ろにまとめられており、絶世の美女と違って差し支えない。だが真尋は知っている。この姿が一体何に由来したものであるかを知っている。これは自分以外の人間がみれば、大半は世を惑わせかねないような、そんな醜悪な悪意が裏にある姿である。

「選択肢は、貴方に与えられているのですわ。貴方が留まるか、それとも流れ落ちるかは」

「アンタは——」

「ただ、お気をつけなさってください、旦那様。留まるということとは、

常に走り続けるということ。たとえどれほど、わたくしが手を貸したところで、最後の最後で選り取るのは貴方なのです。それでも願わくば、わたくしは旦那様を愛していたいのですが」

だが何故だろう、真尋はこの女性を知っている気がする。

気が付けば場所は変わる。もともと自分が落ちただろう、上の見えない境界の壁。膝枕をしている彼女は薄く微笑むばかり。視界を下にそらせば、黒い、人間のようなシルエットの腕や足が転がっている。全体的なことと言えば暗所ゆえに見えないというのが、功を奏しているのかいないのか。

「あ——」

* * *

「——」

脂汗が唇を伝うような、妙な感覚を覚えて八坂真尋は目を開けた。

学校の屋上。はて、何故こんなところにいるのだろうかと真尋は違和感を感じる。いつものように教室で、彼の親戚である彼女（親戚を自称する彼女が正確）と他愛もない話をしていたはずなのだが、一体全体何が起きたというのか。腕時計をちらりと見れば、もう間もなく午後一時に差し掛かるか差し掛からないか。

風は春を少し過ぎているころ合いにもかかわらず寒さを感じさせる気候で、彼の居住区が本州北方に位置していることを如実に意識させるにもかかわらず、真尋の全身は濡れていた。寝汗というにはじつとりとしたもので、何か言い知れぬ違和感を覚える。

なんだと思いつながら現状を思い起こそうとするも、おぼろげな夢の記憶を放棄することができない。真尋の直感が、その夢が何か、これからの彼に必要な事柄を示していると如実に語っている。ただ残念なことに、うすら寝ぼけているせいもあってか、その記憶には異様に美しい、赤い女性のことしか残らなかった。

「つて、今何時だっけ？ ……あ、いや、やばいやばい。昼休み終わるじゃないか」

ぼうつとした頭を振って二度時計を確認し、真尋は慌てて立ち上がる。そのまま屋上出入口に走れば、扉の鍵は当然のように空いていた。あとで教師に教えないといけないか、と案外と真面目なことを考えながらも走る。途中、少し踏み外しそうになりながらも、真尋は器用にバランスをとって速度を落とさなかった。

「なんで屋上で寝てたんだ…？ いや、教室で寝てたっていうんならまだわからなくもないけど」

まあしいて、そんな意味のなさそうなことを自分に仕出かすとすれば彼女くらいなものだろうと苦笑いを浮かべる真尋だが、ふと、やはり夢の違和感を思い出す。異様に美しい、赤いドレスを着た女性。

「…そこはかとなく『アレ』の亜種にそんなのがいたような、いなかったような気がしないでもないが…。つて、いや、まああえてそういうのを、お約束みたいに網羅するようなヤツでもないか？」

他者が聞けば訳の分からない、しかし真尋にしては如実に真実を示すだろうひとりごとをつぶやきながら、途中ぶつかりそうになる生徒たちをかわす。

「しかし、最近あの女の顔、よく夢に見るような気がする。…例の、あの後くらいからか」

数週間前、真尋はこの世のものとも思えない凄惨な、この世と自身の真実に直面し、命からがら生還した。もつともそれが彼の現在の生活に何か影響を与えているかと言えば、まあ大きくはない。いつものように学校に通い、普段通り帰宅し、ときどき寄り道したりするくらいだ。変わったことといえば転校生が来たことくらいだが、意外と彼は、初恋の喪失感を感じずに暮らしている。

「いや、まあ喪失というかそれ以前の問題ではあるんだろうが…」
そして教室の扉を開けた瞬間。

——真尋の全身に、真つ赤な液体が降りかかった。

「……は？」

眼前。真尋の理性は理解を拒もうとしたが、しかし手遅れだった。真尋に降りかかった液体、間違いなく正体は血だ。人間一人の首を搔つ切ったものが、直接噴射され、まったく勢いを殺さず彼に襲い掛かったのだ。真尋の正気度はその襲撃、光景の鮮烈な赤さと充満する鉄の匂いと、人肌の生暖かさに近い温度に一気にやられた。

茫然と立ち尽くす真尋の眼前で、「彼」はフォークを使い、何度も何度も振り下ろす。搔つ切られた首からその威力に負け、ごろりと落ちた。

「まひ——」

「……、ッ、ッ、ッ、」

声が出ない。転がった、赤く染まった、驚愕に見開かれたその目が真尋と合った。わずかに口が動き、彼の名前でも呼ぼうとしたような音が零れたのが、彼を追い詰める。

見知った顔だった。数週間前から、彼を襲った事件に立ち会い、その後もなんやかんや転校してきた彼女である。もつとも彼女は、真尋を守護していたかの人物の「妹」に当たるらしいのだが、案外とそこに大した違いはない。日本人離れした綺麗な顔立ち。もつとも今やそれだけが転がり、まるで裏切られたかのような悲壮ささえ覚える状態だった。

震える真尋。動けない真尋。しかし視線だけは、未だ胴体を支える、フォークを握る誰かを見た。

よく見る顔だった。毎朝見る顔だった。それは朝起きて、顔を洗いに鏡の前に立つときに見る顔だった。水面を見れば見る顔だった。自身の生徒章に映る写真の顔だった。その顔が、顔を持つ誰かが。

「——つまり、これは俺のせいなんだ」

眼前の誰かは——真尋にしか見えない誰かは、自嘲げに、にやりと笑った。

神話的殺人容疑

真尋にしか見えない誰かは、手に持っていた血まみれのフォークと胴体を手から離し、真尋に向かって走り出した。そのまま彼を突き飛ばし、廊下の先へ走り出す。

わけもわからず茫然としていた真尋だったが、背中と頭を窓に打ち、はっと我に返る。走り去る自身の姿をした誰かの背を一瞬見て、そしてとつさに教室に入った。クラスメイトの視線が真尋に集中する。まるで恐れているかのような視線の中、見知った顔が震えながら声をかけた。

「や、八坂くん……?」

「余市、追いかけるぞ」

「へ?」

真尋としては当然のことを言ったままでなのだが、彼は全く意味がわからないといった反応だった。構わず真尋は転がっていたフォークを、武器替わりとばかりにつかみ取り、教室を駆け出た。

幸いなことに、相手の背中はまだ見える。見間違えるはずもないだろう、飛び跳ねた血が未だ相手の制服に付着しているのだから。もつともそれは真尋も同じくのだが、量が違う。相手の方が絶対的にべつたり、それこそ頭から真っ赤に染まっているのだ。当然誰も彼もが飛び跳ねるように避けている。それに続くように、真尋は全力疾走した。

「待てアンタ、一体なんなんだ——!」

叫ぶ真尋を嘲笑うように、彼は屋上に向けて走り出しているようだ。

上り調子、特段運動部というわけでもない帰宅部な真尋にとって、ノンストップでここまで走るのはさすがにつらいものがある。もつとも眼前の相手は何一つダメージを受けている様子もなく、飄々と階

段を飛ばして昇っていく。やがて扉を開け屋上までくると、彼はいまだ階段を上る真尋に一瞬嫌な笑みを浮かべて締めた。

「っ、逃がすか——！」

とつぎに真尋はフォークを振り上げ、がちやり、と音の鳴った屋上出入口の扉そのものに「突き立てた」。当然、本来であれば無意味である。フォークはひしやげ、真尋の腕から全身には鉄とコンクリートとの強度による跳ね返りの威力がダイレクトに伝わり悶絶するだけである。

だがこと、フォークを持った真尋に関してのみその事情は当てはまらない。

ある特殊な事情から、彼が持ったフォークのみは、それこそ「神すら打ち滅ぼす」特殊な力を持っていた。

その一撃はまるで一枚のガラスを砕くかのように、空間全体にヒビが入る。事実、真尋のフォークは扉に達していないにも関わらず、空中に「浮かぶように」亀裂が浮かんでいた。もう一度振り上げて下すと、亀裂が扉全体を覆うように達し、そのまま「扉が存在した空間ごと」蹴散らした。砕ける鉄片をハードルでも跳ぶような方法で飛び上がった。

向かってくる真尋を見て、真尋の顔を持つ誰かは目を丸くしていた。そんな意外か、自分がこんなことをするのが。構わず真尋は走り抜け、握った拳で彼の顔を打ち抜いた。肉と皮が歪み、セラミックの塊にでもぶつかったようなひつかいたような嫌な痛みが走る。が構わず真尋は数発殴り、彼の襟首をつかんで引き上げた。

「アンタ、何が目的だ。何が目的でニヤル子を殺した——！」

自分でもわからない程、真尋は怒りの感情が沸き立っていた。烈火のごとく燃え滾る感情が、彼自身の理性の制御を拒否していた。本来なら彼本人がここまで怒りを覚える必要も意味もないはずなのだが、しかしどうにも、嫌な直感が真尋にはあった。眼前で殺された、二谷龍子。あの死体は、おそらく「もう二度と彼と言葉を交わすことはないだろう」ということが。当たり前といえば当たり前であるが、そんな次元の問題じゃない。恒久的な別れが確定してしまったような

絶望と確信が、真尋の体内を燃え滾らせている。そして得てして、こういった真尋の直感には真実を貫いていることが多かった。

対する眼前の真尋は、半眼でへらへらと笑うばかり。殴られようとも血を吐こうとも、特に態度が変わることはなく、また真尋の質問にも答える様子はない。いい加減にしるとフオークを振り上げる真尋だが、それに対して男は――。

「――何するんですか、真尋さあん♪」

「ッ!?!」

その喉から発された声は、まぎれもなく彼が殺した少女のもので、真尋が義憤を燃やす原因となったものだった。だが何故それがこの相手から漏れた？ 瞬間的に思考が停止した、その隙を男は見逃さなかった。彼を突き飛ばし、げらげらと笑いながら走る。

「ふふ、ははははっは！ そんなに大事だったら、もつと近くで手放さないようにしないと、いけないよな」

「――、お前、誰だッ」

「君が知らない誰かだよ。決して、ニヤル子じゃあない。まあ僕の仕事もこれで終わりだし。それじゃ、アディオス」

その一言を聞いた瞬間、真尋は言い知れぬ違和感を覚えた。眼前の相手を見続けてはいけないという、理性からの警告を受けた気がした。しかしほとぼしる感情のままに、逃すまいと眼前の相手をにらみつけたままの真尋。それが、災いした。

眼前の真尋は、その全身が服も巻き込み、おおよそ信じられない程一瞬で「タールのような」色に変色した。かと思えばちらちらと玉虫のような照り返しをしつつ、顔面、眼球があつた個所が陥没した。いや、眼球どころではない。その全身が頭頂部から、強酸性の液体でもかけられたかのように、とてつもない勢いで溶解し始めた。ほんの数秒、それこそ十秒も経たずに、それはべしやり、と、粘液状の何かになり果てた。

真尋は腰が抜けた。そのままへたりこむと、両手が震える。粘液は

それこそ猛烈な勢いで屋上を這い、ついにはフェンスの下の隙間を抜けていずこかへと姿を消してしまった。真尋はそれを追うことができなかつた。ただただ、なぜか猛烈な悲しさが全身を支配していた。全くもつて意味が解らない。だが本来なら「ありえない」はずの現象が、龍子が殺されるという事態が起こってしまった。彼女の姉、偽名を名乗っていたが後に本名が「二谷劉実^{るみ}」であつたと教えられた彼女に続き、またしてもかど。常識の外側に潜む怪異に日常が取り込まれるかの如く殺されたこの現実を前に、真尋は五体を投げ出し、ただただ大笑いした。大笑いして、涙がひたすら零れた。留まることさえ知らないままに泣きはらし、大笑いするしかなかつた。

既に真尋は、理性の制御を完全に失つていた。正常な判断も何もかもができず、ただただ感情ほとばしるままに倒れて、何かしら「反応している」だけだつた。

やがてわらわらと、破壊された屋上出入口から教員と生徒たちが駆けてくる。生徒たちは野次馬だろうが、担任の英語教師が真尋に駆け寄り、その両手をもつて、縛る。狂つたように笑う真尋に、ひどく可哀そうなものを見るような目を向けた。

「八坂くん。事情は知らないが……、現行犯は現行犯だ」

違和感と疑問符を覚える真尋の理性は、しかし肉体の主導権を奪取することは適わなかつた。

※

いまだに真尋の状態は変わらない。狂つたように泣き笑い続けている。否、実際に狂つたまま泣き笑い続けている。彼の精神状態をまづまともにするところから始めなければ、という趣旨のやりとりがされていたことをおぼろげながら認識すれど、その話があつてからどれだけ時間が経過しているかささえ既に真尋の認識からは判断さえできない。

我にかえることもなく、しかし真尋の中にある理性は、現状を分析する努力を進めていた。通常、ここまで壊れてしまった場合は本人の

自助努力にかかわらずすべての認識が吹き飛んでいるはずだが、しかし真尋の中の何かが現在の自分が置かれている状況を冷静に分析することをやめてはいなかった。

やがて泣きつかれたように、真尋は自我を復帰させ、周囲を見回した。

場所はどっかの留置場か何かか。とすれば旭川の方なんだろうか、今の真尋にはいまいち現実感も実感もない。白い鉄製の扉、トイレが据え付けてある部屋、ベッドなど最低限の衣食住だけは確保されている部屋ではある。ひたすらに自身で料理することもなく、食べ物を食べさせてもらっていた覚えもあるが、ともあれ色々状況に理解が及ばない。

「……朝？ 夜？ あー、時計ないのか、ここ」

鉄扉のわずかな格子窓と、文字通り格子が付いた窓から見える景色は暗がりだが、しかし自分がどれくらい正気を失っていたか定かではない。思い出せばなにやら事情聴取をされていた覚えもあるような、ないようなといったところだが、それさえ本物の記憶かどうかは真尋にはあやふやであった。

「腹減ったな。……って、さすがに自分で料理は出来ないよな、ここ」
まず状況を整理しようと、水道水を一口。カルキ臭さに嫌悪と微妙な懐かしさを覚えながら、真尋はベッドに横になった。

ニヤル子が殺された——彼女の性質からして、実際そのことにはあまり気を配る必要はないのかもしれないが、しかし真尋の中のものしかかる妙な違和感と確信。もう二度と彼女に会えないかもしれないという、ひどく遠い疎外感と絶望感。なにもこれは、眼前で彼女が殺されるさまを直に目撃したから、というだけではないだろう。

八坂真尋は、魔導書である——現代において数少ない完成された魔導書である。とある神格が目を付け、調整し、誕生させた怪異の成れの果ての親戚がごとき存在である。その事実を知り、狂気と正気の狭間をさまよったのが数週間前だ。なに、ちよつとした「一時的狂気」くらいならば、慣れっこであると強がるが、しかし真尋の身体は隠しようもなく震えていた。

彼が己の正体を知ったその事件——その折、彼を護衛していたのが二谷龍子の姉である。現在、彼女は失踪中であり、その裏にある真実は、真尋と、龍子のみが知っていた。

ともあれそんな縁もあり、真尋と同じ学校に転校してきた龍子——どちらかといえば、真尋の護衛のために姉妹ともども引越してきていたというのが正解——であるが、別段真尋と極端に仲が良かったというわけではない。事情についてはそれこそ多くを共有していたし、向こうの馴れ馴れしさは悠々たるかにべったりしかねない勢いであつたが、だからこそ真尋は彼女と近づくことを、積極的にはしなかつた。

嫌でも彼女の姉を——初恋の相手と、その関わった異常な神話的事件にまつわる全てを思い起こさせるから。まあ、妙な時期の転校生である彼女と親しくしすぎて、歩くスピーカー（※情報通の意。この場合はクラスメイトの暮井珠緒を指す）に色々追及されても面倒だったというのも理由のひとつではあるが。

そんな折、今回の事件である。

「仕事、とか言っていたか。……不定形であつたことを参考にすると、さしずめシヨゴスってところか？」

ある程度正気を取り戻しているから、真尋は自身の知識を総動員して今回の事件の解析に望む。ドッペルゲンガーを疑いもするが、案外と真尋の現実はそれよりもごくごく怪奇小説的なそれだ。世にいう恐怖神話体系群、クトゥルフ神話に連なるそれに「おそろしく近い」何かこそが、彼の住む宇宙をとりまく真理の類である。なによりその変異を見た真尋が、通常ありえざるほどの正気の失い方をしたことからも、それを疑うことが出来るだろう。かの神話群の存在は、リアリティを喪失させるシヨックが大きすぎるため、それこそTRPGとかになぞらえるような症例を確認できる。事実、真尋は自身の身体をもつてしてそれを証明していた。

シヨゴスといえば、まあいうなればスライム系の怪物の祖とも言い換えて過言ではない。まあ厳密にはシヨゴスという種族そのものについては異説もあるが、この際は面倒なのでそう括るとする。

H・P ラブクラフト作の「狂気の山脈にて」というものがある。それ以降派生したスライム系のモンスターといえば人食いアメーバだの当然のごとく怪物的なそれであり、というかそもそもスライムというものの自体が危険物であることを考えれば、その派生も納得と云うか、当然といえば当然であろう。所謂ドラクエなどで有名な型のスライムが発生したのはそれよりだいぶずっとずっと後期、より現代文明に寄ってからのものであり、前段階の形態の一つに、ヘドロ怪獣を含むこともできるかもしれない。

ともあれスライムという存在についてだが、誰もが納得する点の一つに、ひとえにその正体や思考がよくわからないところがあるだろう。例えばミノタウロスという存在を言葉で形容すれば、牛の頭、人の身体、というのがテンプレートだ。鬼といえば角のある大男だし、ヴァンパイアといえば長い牙を持つ吸血するヒトガタの怪物である。その点スライムという存在を言い表すには、こう、粘液という表現だけでは本来のその不気味さ、異様さを伝えることはかなわないだろう。今でこそそういった表現のテンプレートが確立しているからこそ伝わりはするが、そもそも肉体らしきものもなく、思考をつかさどるだろう神経組織の集合体もない。脳みそがわからず、顔もわからず。

一言でいうなら、名状しがたい――。

つまりは今回、真尋が遭遇した一通りについて形容するに、十分たるそれである。

だが、当たり前だがそれを目撃したのは真尋ただ一人だろう。事実彼のクラスメイト達は、目の前で少女一人がフォークでギロチンされるというこの世ならざる光景を目撃こそしているが、真尋の乱入に対して異常動作を起こしているようには見えなかった。

そこから導き出される結論は何か。
「なるほど。それなら俺が捕まるか」

つまるところ、事実と名称を整理すれば一目瞭然なのだ。「八坂真尋」としか思えない男が殺し、その逃げた先に「八坂真尋」がいた。その場には、「八坂真尋」としか思えない男が残した凶器があり、「八坂

真尋」が拾い上げて駆け出して行ったのだ。当然、真尋も、あの相手も、どちらも龍子の血を浴びている。

結論からいえば、真尋が殺して逃走し、屋上で発狂したとしか見えない。

クラスメイトたちに、真尋が二人いるという状態は目撃されていないのだろう。……廊下を走っていたときの証言は、おそらく心神喪失したか何かの妄言として無視されたか、あるいは一時的狂気に陥ってそれどころではなくなったか。

「まいったな。なんでもかんでも神話的現象を使えば完全犯罪が成立するってもんじゃないぞ、これは。古典ミステリに対するリスペクトがないのか、リスペクトが」

言いはする真尋であるが、そんな彼とて日曜朝に放映された特撮ヒーロー番組の影響で「ロング・グッドバイ」に手を出し、途中で投げ出す程度の知識しかなかったりする。が、これは逆に、そんな卑近な話題を挙げることで現実逃避をはかっていると言い換えられた。

「なんでいきなり殺されてるんだよ。意味わかんないつての——」

涙は流れない。それは、意図して彼が流すまいとしているからだ。この胸に沸き立つ痛みを忘れないよう堪えているのだ。当たり前といえど当たり前だが、彼女の言動は何からなにまでもが彼女の姉、真尋には偽名を名乗っていた、二谷劉実を連想させる。ほんのちよつとした仕草にデジャビュを感じ、いたずらっぽいやその性格に少しだけ脈拍が上がり、なにより彼女と話していると、落ち着くことが出来た。「真尋から嫌悪されない性格である」と意識ではあるが自称してただけであり、確かに彼女と一緒にいるのは、少し鬱陶しいくらいで苦にはならない。そんな彼女と二度と会うことができないうな、この胸の内に沸き立つ違和感——。そう、違和感だ。真尋はその言い知れぬ感覚に、ひどく恐怖を抱いていた。

奴は言った。俺のせいだと。

真尋は、この現実にいる神話世界の住人達が、必ずしも神話世界そのものの住人たちでないことを十分理解している。だからこそ、龍子

へ牙を向けるために、あのシヨゴスがとつた武器がフォークなのが目どく引つかかっていたのだ。普通に考えれば、フォークで人間の首は落とせない。殺傷自体は不可能ではないだろうが、それでも動脈静脈関係なく切断することも、骨を叩き折ることも人間の揚力では不可能だろう。人間以上の力をあれが発揮していればまた違うかもしれないが、しかし真尋の見る限りにおいてそんな様子はなかった。

とすれば、それは真尋が持っている類の力——「穂先の分かれた獲物」を使った場合のみに発動する、邪神さえ殺せる特攻が発動したと判断するほかない。

「まだそうと決まったわけじゃないが……。希望的観測は持つべきじゃないな。元から、別に俺はそう運が良い方でも何でもない」

その力により、彼女の姉は真尋の前から姿を消したはずだ。くしくも、とするならば今再びその能力により、真尋の前から彼女が姿を消したかもしれない。

落ち込むよりも先に、真尋はその考えに至った瞬間、意識を手放し

「——八坂真尋、八坂真尋。取り調べの時間だ。……って、お前、起きてるかおい？」

第三者に叩き起こされるまで気絶していた。

神話的完全密室

一応は少年院に放り込まれたらしい、真尋の取り調べは凄惨を極めた——むろん、それは真尋の側からすればだが。

なにせ状況証拠は完全にそろっている上、真尋のアリバイなんてものを消し飛ばすだけの情報が後出しでぽんぽんそろってくる。監視カメラは当日、業者が入ってメンテナンス中につきほぼ機能しておらず、二人の真尋が走る映像はなし。また廊下を走っていたときの分と教室の目撃証言については、どちらも真尋の予想通りの推移を辿っている。なお廊下の目撃についてはプラズマ現象で幻覚がどうのこうのなどと言う学者もいるとかいう話を、大真面目にガラの悪そうな警察官に言われてしまい、反応に大変困った真尋である。

現在の有様で、真尋が幾度否定しようとも状況は覆らない。拘留期間が変わることはないが、心象は悪くなる一方である。が真尋とて言い分はある。実際やっていない上に説明ができないし、一度したところで鼻で笑われて「精神科医にはかかれんぞ」と拳を振り上げられかけた。実際に暴力沙汰にまでは発展していないが、時間の問題だろう。徐々に徐々に真尋の精神が削れていつているさなか。

「お前みたいなクズが一番嫌いだ。否定してればいいとか思ってるんじゃないぞ？ 絶対逃がさないからな。まともに大学出て働けなくしてやる」

その、あまりにも現役警察官から投げかけてほしくなかった脅し文句が、一番堪えた。

そもそも真尋のバックグラウンド自体が現実離れしている事情もあるが、それでも希望の芽をわずかでも摘み取るだろう一言はダメージが大きい。

さらに輪をかけて、両親が海外で新型インフルエンザにかかって倒れたと続報があった。旅行に出てその有様じゃ世話ないだろ、と突っ

込みを入れたかったが、しかしことは緊急を要するらしく、現在向この病院で隔離状態らしい。泣きつ面に蜂じゃないんだから、と言わんばかりに、膝を抱え悶々と緊張感が抜けない夜が続く。当然ロクに眠れるわけもなく、そんな中で更生活動も続けられるわけだが、実際折り合いは悪い。職員の心証が悪いのは当たり前だが、もともとそういうことを犯す人間でないこともあり、いくなれば内部におけるコミュニティに全くはいっていないのだ。話題だってそりや全くかみ合うこともない。いじめられないだけましといえましたが、ほとんど空気に等しい。

この状態が自白をすれば解消されるかといったところで、そういうことはない。痴漢冤罪とかと違って、罰金払えば仮釈放ということでもないのだ。さらには既にニュース沙汰になっており、色々と好奇の視線にさらされ続けてもいる。

ともあれ冤罪という一事がどれだけ当人の生活に影響を与えるか。果てはそれに対して、仮に真実が発覚しても周囲が誰一人として彼の名誉回復を補助してくれることはないだろうと確信するに至るだけの、人間の冷たさを思い知らされた。

いくなれば所詮、真尋のメンタルは一男子高校生の域を超えない。正気度合——すなわちS A N値を無理やりにでも削らない道具でもなければ、心身ともにすり潰されていくのは当然といえは当然だ。

拘留されて何日経過したか定かではなく、取り調べの二人もほとんど飽きた、呆れた顔を浮かべ始めるころ。

「——面会だ。クラスメイトからだ」

「えっ？」

ほんの少しだけ真尋に転機が訪れた。

※

「あ、よかった。八坂君もう大丈夫なんだ。なんでも錯乱したって聞いてたから、心配したよ」

真尋にそう笑いかけるのは暮井珠緒、真尋のクラスメイトである。真尋に言わせれば「ちよつと変な子」であり、いわゆる情報通、歩くスピーカーの類である。別にこの歩くスピーカーというのは真尋が考えた造語ではなく、同じくクラスメイトの余市をはじめ、多くの生徒間でなぜかそう呼ばれている類の話だ。ちなみに真尋がそれとなく事実を伝えると「私、そんなの聞いてないよ」と素で泣かれたのは記憶に新しいような、新しくないような。

が、しかし真尋は違和感を感じた。声の調子こそいつも通りだが、顔色が悪い。ポニーテールもリンスとかの艶が感じられない。体調が悪いとまでは言わないが、全体的に覇気がないという具合か。まあ眼前でクラスメイト惨殺なんぞ目撃したなら当たり前ではあるかと思いはすれど、しかしどこか、そうではないひっかかりを覚えている真尋だった。

「……どうした、擬態に失敗したワームみたいな顔色してるけど」

「何、その例え、ちよつと意味わかんないです」

「あ、いや、すまん、失言だった。普通に顔色悪いけど、大丈夫か？」
「あはは……。まあ、うん、大丈夫とは言い難いけどね。私もほら、えつとその、八坂君が教室から逃げて、しばらく錯乱してたみたいだし」

意外と彼女は感受性が強かったかと、真尋は内心頭を抱えた。

アクリル越しの彼女の様子をうかがう真尋。どうにも状況からしてさっぱり原因も目的もわからないものの、関係性でいえば自分たちの側、常識の外側の事態に巻き込んでしまったような、そんな状態だ。直接責任はないだろうが、真尋とて罪悪感を覚える。

そんな真尋の内心を知ってか知らずか、珠緒は少しだけ困ったように笑った。

「でも私も、翌日の朝にはちゃんと復活したんだよ？　ほら、寝たらすつきり、みたいな」

てへ、とウインクする彼女だが、しかし真尋には、彼女が今ここにいる目的がさっぱりわからない。そんな真尋の感想が伝わったわけではないだろうが、彼女は真尋を少し真剣な目で見た後、何度か頷い

てこう言った。

「うん。やつぱり、八坂君じゃないと思うな」

「……ん？」

「ニヤル子ちゃんにあんなことしたの、絶対八坂くんじゃないと思う」
「……………いや、目の前でその、見たんじゃないのか？」

事実そうではあるが、違和感を覚える真尋に、アクリル越しに小声で珠緒は決定的なことを断言した。

「——だってあの時、八坂君って二人いたじゃない」

「——ッ！」

嗚呼、錯乱したというのはそういうことかと、真尋は軽い頭痛を覚えた。あの時、あの場で真尋が扉を開けたとき、いくら凄惨な光景が存在したからと言って誰一人として「扉を開けた真尋」の姿を目撃していないとは限らなかつたのだ。とするならば彼女は二人の真尋を目撃して、そして何かしら「気づいてはいけない」この世の真理の一端にふれてしまったのか。ニヤル子風に言うなら「アイデア！」という奴だ。

思わず固まり声が出ない真尋をよそに、珠緒はひそひそと続ける。
「この話、実際目撃したのは私だけみたいなんだけど……。でも、みんなもなんで違和感感じないのかな。ニヤル子ちゃんを殺した真尋くんと、それを追っていった真尋くんとで血のかかり具合が絶対違つたつのに」

「…………その話、警察には」

「したって、とりあつてもらえなかつたもん。だから色々、自分で調べてみたの。本当は真尋くんに会って確信を得てから調べたかつたんだけど、なんでか全然、誰も彼も会わせてくれようとしなくつて」

そりゃあれだけ心象最悪な状態ならば仕方ないと思いはすれど、真尋は乾いた笑いが漏れた。

「大体、いまだに屋上の扉があんな壊れ方してるのに、誰もそれに触れようとしなないし。絶対おかしいって、あれが一番意味不明だし。余市

くんもしばらく認識できてなかったみたいだし」

「すまん」

「?」なんで八坂君が謝るの?」

おそろくだが真尋が使った力が、神話的スーパーパワーに由来するそれだからだろう。破壊された状態の具合を見て、おそらく大多数の人間が発狂するなり何なりして、その「壊された事実」から目を背けてしまうに違いない。その点でいえば、一度発狂したせいかわ珠緒はそんなりとその事実を受け入れていた。

「つて、ちよつと待て。余市、その言い回しだと今は認識できてるんだよな。錯乱しなかったか?」

「うん、してたよ。何かに気づいたみたいにはっ!」つてなつて、しばらく『俺は何も知らない、知らないんだ知らないんだ』つてぶつぶつ言いながら蹲つてたし」

すまないと再三、内心で頭を下げる真尋

「でも今はちゃんとしてるし、だから二人で色々調べてるの。八坂君が犯人じゃないって証拠を」

「……ありがとう。でも、なんで?」

真尋からすると彼女とはさほど接点があるイメージはなかったのだが、珠緒は一瞬、寂しそうな笑顔を浮かべる。

「だって、八坂君がニヤル子ちゃん殺すわけなんて絶対ないもの。あんな——生き別れた家族の形見でも見るみたいな感じの顔してた八坂君が」

「——」

「ニヤル子ちゃんを見てるときの八坂君、すごく嬉しそうで、すごく切なそうで、すごく寂しそうで、すごく遠い目をしてる気がしたから。少なくともそんな顔を向けていたニヤル子ちゃん相手に、凶行に及ぶはずはない。カンペキな推理でしょ?」

にっつと笑った後、得意げにウインクを撃つ珠緒に、真尋は声が詰まり、視線を逸らした。決してそんな顔を龍子に向けていたはずはない。はずはないのだが、しかしどうやら珠緒の観察力は、真尋の出来の悪いハリボテの向こうを見透かすくらいの精度があったらしい。

事実、隠しようもないほどに真尋は龍子に対して形容しがたい感情を向けていた。はじめは彼女の姉が小さくなつたくらいのも、そんな印象だった。だが違った。類似はしているが、決して彼女たちは同一の人格とは言えなかった。だからこそそれが、真尋の内心に重くのしかかつてきていた。

『姉の人格は、真尋さんをあの時に守ったことでその役目を終えましてから——』

かつて妹本人から、直接言われた言葉である。そしてこれこそが、真尋が二人を（根源はともかく）別人として考えるようになったきっかけだった。

真尋のそんな内心を知ってか知らずか、珠緒は少しガッツポーズをとる。

「だから少しだけ待ってて。これから余市くんが、録画持つてくるから」

「録画？」

「いくら監視カメラの入れ替えていったって、全く映像を残してないのは警備の問題になっちゃうから、何か予備の装置くらいは置いてあったろうって思って、先生に問い合わせたの。そこから業者を辿って——真尋くんが二人映ってた映像が残ってたのを見つけたの。今どき珍しいテープ映像だから、証拠能力はまあまああるんじゃないかと思う」

「すまん……。手間かけた」

「いいっていいって。だって、私たち友達でしょ？」

不意に涙が浮かぶ真尋。だがそれを流すまいと上を見上げる。弱音は吐いていられない。今は自分が解放されるその可能性にかけよう。そして必ず龍子が殺された原因をつきとめるのだ。あの龍子のことだから、何かしら起こった際にこちらで動けるよう手をつけてくれているはずだと、真尋は確信していた。ともあれ拳を強く握り、感謝の言葉を述べた。

「真尋くんは、犯人を捜すんだよね」

「ああ」

「うん。じゃあ、私も力かすよ。たぶん余市くんも——」

丁度そんなタイミングで、ノックとともに扉が開かれた。向こうからは見知った眼鏡の少年が入ってくる。こちらも珠緒同様にいくらかダメージを受けているようだが、真尋の顔を見ると気の抜けた笑いを浮かべた。

「やあ、八坂君。相変わらずの様子だね」

「何が相変わらずなのかさっぱりだが、まあ、とりあえずそつちも元気そうぞ」

クラスメイトの余市健彦と、真尋はお互いに苦笑いを浮かべた。と、健彦がふいに眼鏡のつるを抑えて——。

「——悪いけど、僕は元気じゃないよ」

顔面から外したその瞬間、顔の左半分が、眼鏡と一緒に外れた。

「え？」

「——っ」

眼鏡についている健彦の左目、鼻、口。顔に対して斜め線を引き、そのまま下半分が外れたような状態である。それが首を基部として、赤い皮と肉が伸びている。しかして問題としては、その内側に骨に該当する物体が何一つ存在しないことだろうか。粘性、血液がちちたとそこから垂れており、しかし本人は痛みも何も感じていないように微笑んでいた。

真尋の背後で、がたりと監視が倒れる音が聞こえると同時に、珠緒たちの方の職員も膝から崩れ落ち、泡を吹いた。

「ほら、暮井さんのせいで僕、こんなになっちゃったんだお」

声帯も引つ張られているのか、発音がやや怪しい。いや、そんな分析をしている場合じゃない。珠緒はアクリルガラスに背中をつけて、真尋の名前を連呼している。ちらりと視線が彼女と合い、しかし真尋はガラスに腕を叩きつけるくらいしかできない——。

「くそつ、フオークでも何でもいいから何かあれば……、いや、無理かこれ」

「まひろくん、まひろくん……？　へ？　何？　あれ、まひろくん？」
声が震え、焦点が合っていない。そんな彼女に向けて余市は歩きだし、手に持っていた眼鏡をはなした。重力に引っ張られるように、ぐらりと顔面が落ちる。いや、顔面だけではない。左半身、やはり体と同様の斜め線でも入れたようにそれが剥がれ、胸の上のあたりが「ペろん」とめくれあがっているような状態だ。そして服さえ含め、その裏側は血液と筋繊維の集合体のような有様で、グロテスクというレベルではない。

「お前、シヨゴスか？」

「——ねえ、ツイスターゲームしない？」

「え？　まひろくん、なにこれ？　え？　いやだよ、まひろくん？　なに——」

「ツ——、止めんか余市！」

一瞬にして真尋のアイデアは、彼が何をしようとしているか察した。脳裏には遊星から来たりし謎の物体との遭遇を描いた映画の映像がフラッシュバックする。

そして真尋のその想像の域を、余市は全く出ることなく実行した。ぐらりと上半身が伸び、ゆらぎ、その全身が全く持つて一部の隙もなく筋繊維と血液じみた液体の集合体であるということとをありありと見せつける。そのまま上半身を大きくひねった四足歩行になり、首と半分の上体を伸ばし、アクリル硝子に顔面を叩きつけた。割れるわけではないが、その衝撃に思わず真尋はたじろぐ。と、そのまま余市のこめかみから、大きな目玉が「生えた」。横眼に、延々と真尋の名前と疑問符のみを繰り返す珠緒の顔面に、己の頬を「くつつけた」。

そのまま覆いかぶさるように体をひねり、余市、いや、余市に擬態しただろう「何か」は珠緒の身体に中途半端な形で絡みついた。何度も何度もアクリルに拳を叩きつける真尋。しかし全くもって効果はない。後ろの気絶している職員の服をまさぐれど道具もなく、そして再び視線を彼女たちの方に向ける。

「——たすけてよお、まひろくん……！　みないでよお」
そこにあつたものは、もはや二人の人間の体を成してはいなかつ

た。

腕と足とは人間、それこそ各々の元の形状を残したそれであったが、中心を含めて既に肉の塊と化していた。それでも顔面は余市と珠緒、双方の頬がいびつに融合したそれである。頭部も含めて既に癒着から結合に移り始めており、珠緒と余市の、接触している側の目の形状と焦点がぐずぐずになっている。嗚呼、ひよつとしたら余市本人もこうしてシヨゴスに取り込まれてしまったのかと、真尋は心の底から深く絶望した。

「わたし、こんなの、いやあよ……！」

「暮、井——ッ」

変質した何かは、そのまま真尋に向かって突撃した。アクリル硝子は基部から壁から根こそぎ破損するかたちで吹き飛び、真尋ごと巻き込んだ。だが、真尋はとっさにそれを蹴り飛ばす。「痛い」という二人分の人間の声に、真尋は涙が流れた。

「意味、わかんないっての。普通巻き込まれるにしても、インターバルとか、あるだろうが——！」

とっさに転がった珠緒のバッグから、弁当箱を拾い上げ内部を開ける。幸か不幸か、その中には小さいながらもれつきとしたフォークが存在していた。

逆手に持ち手に取り、真尋はうるんだ目のまま眼前を見る。

「まひろ、くん、これ、ころして、よう……、ねえ、ねえ……」

珠緒は泣いていた。余市健彦の、既に人間性を欠いた顔面と違い、暮井珠緒はひたすらに泣いていた。

ただただ顔面を覆い隠し、みないでと全力で主張するようにしながら、それでもなお、真尋に懇願する。

一度だけ真尋は手元と、彼女の顔を見て——。

そこから先、数日間の記憶が真尋にはない。

ただただ手に、ひどく嫌な悲しい感触を残しながら。気が付けば、真尋は隔離病棟のような場所で、拘束服をもって身動きをとれなくされていた。

神話的境界戦線

「誕生罪、って言葉知ってるか？」

「存じ上げないであります」

「だよな。俺も知らない」

不意に脳裏に浮かんだ言葉を言い、返された返答に真尋はため息をついた。

現在の真尋の状態は、以前よりある意味劣悪だ。なにせ全身拘束状態。2時間に一度、トイレと軽い運動くらいのために外される以外は、どこかの隔離された施設の中で何もすることが許されない。さすがにテレビの刑事ドラマとかでもこんな状況に陥っているのを見たことはなかったので、既に彼は自分が法の通じる世界の外側に投げ捨てられたのだろうと判断していた。

しかしてそんな真尋とて、自身の生存までは脅かされてはいない。身動きをほとんどとれない代わりに、彼を世話する相手がいるのだ。た。

問題としては、その相手が既に真尋の理解を普段とは別ベクトルで上回っていることだが。

「……食事の時間であります。上半身と腕の拘束を解くであります」

「おう。頼む。……どうでもいいけど、なんで俺こんな風に拘束されてるんだ？ 精神病棟とかで錯乱して暴れてるって訳でもあるまいに」

「存じ上げないであります。わたくし、あくまでインプットされた使命は、超危険人物の逆鱗に触れない程度の介護、といったところであります」

この妙な口調で真尋の腕のベルトを解いている相手こそ、真尋の目下悩みの種だ。まず、三頭身である。サイズ感は五十センチか六十七センチ。おかつぱ風の黒髪にゴシック調のメイド服を着用した少女の

ような存在。時々「ぎぎ」とか金属がこすれる様な音がしたかと思えば「メンテにまだまだ問題あります」などと言いつつ、体の各所を「取り外して」グリスをさしたりと、色々現実を疑う光景が展開される。なによりおそろしいのは、そんな彼女の存在を見ても真尋が正気を失いはしないこと。つまりこれは、眼前の謎の存在は、絶対的に人間の科学力でどうこうされて誕生したそれなのだということだろう。

いや、謎存在とはいつたが、名前くらいは知っていた。

『ベータと呼ぶであります』

『ベータ？』

『試作品であるが故、それが適切であります。プロトでも良いであります。それが、それだと原初インターネットを想起させるでありますゆえ。別にわたくし、ロケットパンチやミサイルやレーザーは標準装備ではないのであります』

『何を言いたいかは俺、おおよそ分からなくもないが、アンタ明らかに世界観間違ってるだろ』

以前の真尋と彼女、ベータとの会話である。

ともあれ、真尋自身が決して認めたくない類の事実ではあるが、AI搭載の自律型起動装置、アンドロイドの類なのだろう。なお彼女本人が自称した場合は自律の字が自立である、という謎の主張が入るのだが、それはともかく。

現状、真尋は自身が置かれている状況について全く情報を得られなかった。少なくとも法律適用外の措置をとられていることは確実なのだろうが、直接、間接問わず、人間が真尋の周囲に誰もいないという状況はどういうことか。……残念ながら、おぼろげに真尋の直感はその理由を推察していた。

珠緒や健彦————少なくとも真尋のクラスメイトたちを襲った超常的な事態と、真尋がそれをどうにかしたという事実は、さすがにもはや隠しようもなかったのだろう。あまりの事態に、それを直視した人々は、もはや真尋と直接かかわることを放棄したのだ。それゆえの隔離措置である。ただ、こうしてアンドロイドを派遣されてお世話

をされている現状を鑑みるに、生存権くらいは認めてもらっているだろう。わずかばかりそれに感謝する真尋であるが、同時にずいぶんと従順になってしまったなど苦笑い。さすがに数か月、更生施設に放り込まれたのは彼の正気度によっほどダメージを与えたと見える。

「さあ食べるであります、食べるであります」

「またレンコンか……。いい加減他の材料はないのかアンタ」

「レンコンは完成された食品であります。煮てよし茹でてよし焼いてよし揚げてよし、加熱すれど疲労回復度はかわらないのでありますし、触感もまた調理方法で千変万化であります」

「言われずともそれくらいは知ってるが、食卓っていうのは彩とか、バリエーションとか、結構重要なんだぞ。別にコース料理作れとかは言わないから、もうちよつと何かないのか？」

「そうは言いますが、囚人様は平然と高いレベルのを要求してくるところがあるので、ベータは信じないのであります。さあ食べるであります、食べるであります」

諦めたようにレンコン料理一色の配膳に手をつける真尋。まあ、これくらいの軽口を叩けるくらいに彼女、ベータと打ち解けてはいる真尋である。季節感が妙に感じられない気候のこの監禁室と、毎日調理方法のみが異なって出されるレンコン料理の山を前に、既に真尋は自分がここに来てからどれほど時間が経過しているのかを忘却していた。いや、認識することができなくなっていた。正気を失っていた頃を含めて半年は経過していかないだろうが、話題も底をつきかねない状況での彼女とのやりとりなので、日々変わり映えしない毎日が続いている。

「まあ辛子レンコンは美味しい。さすがに料理の腕はこういうアンドロイドらしく完璧ってところか」

「……というより、その、料理のレシピの半数近くは囚人様から教わったのであります、教わったのであります」

「そうか？　とிட்டって、せいぜい男子学生が一人家にいるときにやる程度の腕だぞ。大したものでもないだろ、普通に考えて」

「とか言いつつ平然とカルパッチョのレシピとか、包丁の挿し入れ方

だとかについて語られた時は鳥肌が立ったのであります」

「アンドロイドのくせに？」

「もともと、わたくしの最終開発目的からすればあながち間違っていない機能なのであります」

ほら、と腕をぺろんとめくって見せるベータ。確かに鳥肌らしい凹凸のようなものがあるような、ないようなといったところだが、まあせいぜいが三頭身のデフォルメされたような幼女だ。まあ愛らしい、以上の感想は真尋には思い浮かばなかった。

「というか最終目的って何だ」

「黙秘権を行使させてもらうであります」

「そうかい」

「……………つて、普通こういう場合は追及するのがセオリーなのであります？ セオリーなのであります！」

「とはいったつて、本人が進んで語ろうとしないことを聞くほど、俺も野暮じゃないぞ。そこまで野次馬根性もないし、誰だって秘密を持つ権利は平等にあるはずだ」

「いえ、その、囚人様が一男子高校生を自称する割に価値観が妙に達観していて、ベータは困惑するのであります……。というかベータに対して全く興味がないのであります……」

どちらかといえば諦めの極致が極まったのが真尋なのだが、感想を持つのも個々人の自由なので特には何も言わなかった。食事を終え、用を足し、休憩をし軽く運動した後に再びベッドにバンドで拘束される真尋。まあ代り映えしないいつもと同じ状況といえば、同じ状況だ。いつものように彼女に「これっていつまで続くんだ」と問いかける。

「判決が下るまで、であります」

「判決つてことは、一応ここは日本ではあるのか」

「黙秘であります、黙秘であります」

これも変わり映えしないやりとりだ。故に真尋もそれ以上は追及せず、うつらうつら意識を溶かす。

夢に見えるは、やはり何かの遺跡と、そこで正気度を失い墜落し、赤

く美しい女に介抱されるあの夢。これもまた毎日のように見る、真尋から時間概念を失わせる原因の一つだ。代り映えが多少はする毎日でもこであるが、大部分が共通で、真尋も精神的な体力がすり減ったまま回復する様子はない。それでも手に残る嫌な感触から、自分がおそらく介錯をしたのだらうという認識と、巻き込んでしまった罪悪感とだけが強く胸に残っている。決して心休まることもないのに、日々繰り返すように似たような毎日。それが学生生活のように、自主性を発露する何かさえもない毎日であるならば、もはや自身がそういった類の機械であると、それに等しい勘違いのような刷り込みがされているよ
うな、妙な感覚が真尋には残っていた。

ただ、それでも真尋の理性は死んではいなかった。必ず現状を打破し、己が巻き込まれた事実を明るみにするのだと。そうでもしないと誰もかれもが浮かばれないと――。

気が付けば夜である。時刻はわからないが窓の外が暗く、照明のみがついている。テレビもなくラジオもなく、目覚まし代わりに食事の時間だけベータに起こされる状況だが、まあ最低限の健康な生活が保障されているだけマシかと苦笑いしつつ、視線を動かした。

「――？」

ふと、真尋は違和感を覚えた。普段なら何か、ベータが調理でもしている音が聞こえそうな具合なのだが、しかし今日に限ってはそんな音も聞こえない。ただ時折、何か驚いたような声が聞こえるくらいだ。

「そ――、では――、しかし、わ――、――」

小声でどこかと電話でもしているのか、と納得し、真尋は天井を見上げる。どのみち聞き耳を立てることさえできないのだ、人生諦めが肝心である。時にそれが己の精神性の正気を守ることにつながるなら、よろこんで真尋は理解を放棄しよう。あくまでそれが生命を脅かささない範囲でならば。

やがて戸が開き、向こうからベータが現れる。どうでもいいことだが身長が丈があれだけ小さいのに、どうやって大人が通るくらいの高さで設計されている出入口の取っ手を握ることが出来るのだろうか。

そんなことを真尋が考えているのとは裏腹に、ベータはどこか、つらいのを我慢するような、少し食いしばっているような顔をしていた。「どうした。レンコンが切れたか」

「……いえ、レンコンは無尽蔵に供給されるものなので、あまり問題はないのであります」

「無尽蔵って何だ無尽蔵って。だったらなんだ、その妙に元気がない顔は」

「そう、見えるであります？」

「それ以外どう見えるのかってことだ」

「……………囚人様は、ストックホルム症候群ってご存知でありますか？」

「知ってはいるが……、なんだ、俺の判決が下りでもしたのか」

「——つ、察し良すぎであります」

まあな、と軽く受け流しつつも、真尋の脳裏では龍子と彼女の姉が「アイデア！」と二人そろって言う姿が幻視された。

「それで、まあ反応からして、殺せとでも命令されたのか」

「……………」

「沈黙は是なり、か。あー、なんか悪いなアンタ」

「……………どうして」

「ん？」

「どうして、そんなに割り切ったような声を出すでありますか」

よく見れば、ベータの目元には涙のようなものが浮かんでいた。今にも目から零れ落ちそうなそれを見て、おいおい最新のロボットはヤバいな、などと現実逃避する真尋である。いや、確かに日曜朝の特撮番組とかでもアンドロイドが愛だの何だのうたって、ときに涙を流し友情を育んでいたりはするが、あくまでフィクショナルな世界だと切って捨てる程度には真尋は現実思考である。まあ、彼自身が巻き込まれている超常的な現実すら本来なら切り捨ててしまいたいという願望がそこには当然あるのだろうが、それはさておき。

「なんでアンタがそんな顔を浮かべるかが俺には分らないんだが」

「だって……、囚人様は、本来なら、無実なのでしょう？」

「そう聞いたのか」

「いいえ。でも、話していてわかるのであります。なのに、なんでそんな——」

「——正直まあ、詰んでるからかな」

もちろん無為に命を散らしたいわけではない真尋ではある。龍子の姉につないでもらった命だという自覚は当然あるし、だからこそ死にたくない、生きなければならぬという意志も決して消えてしまっているわけではない。ただ、彼は疲れてしまっていたのだ。ただひたすら今日に至るまで、こう長く長く、追い詰められるという経験が彼にはなかったのだ。だからこそ、当然世界には彼以上に不幸な人間も多くいるのだろうが。それでも真尋は今の状態から解放されたいと、もはやその程度しか希望を抱くことができなかつた。

そんな彼を前に、ベータは顔を手で覆い、涙を流した。元来、人間の世話をするような設計で作られているだけあつてか、どうやら彼女も当然のように情緒を解するらしい。泣かれてしまって、逆に真尋の方が困惑してしまうくらいだ。

しばらく震えているベータ。と、ふいに顔を上げたかと思うと、何を思ったのか、彼女は真尋の両腕、両足の拘束を勢いよく破壊した。

「何の真似だアンタ。大丈夫なのか、こんなこととして」

「駄目に決まつてるであります。だから、逃げるであります。わたくしが——囚人様を殺すより前に」

「どういうことだ？」

「わたくしの自由意志が保つのは、たぶん、あと数分でありますから、その間にできるだけ遠くに——ッ」

がくん、と、首が折れるように傾く。と、ふわりと彼女の身体が浮き上がり、真尋を見下ろすような位置に移動した。

『Maiden the Revolution——』
「つて、だからアンタ世界観が違うだろっ」

何やら機械のシステム音声（にしてはどこか何かを嘲笑するような響きを含んだ声）が、彼女の胴体から放たれる。それと同時に黒いガス状の何かが、ベータを中心として渦を巻くように展開、回転する。

このあたりで、真尋は猛烈な頭の痛さと共に部屋を逃げ出した。ついさつきまでの停滞感が、いきなりの彼女の訳の分からない機能により破壊され、封印されていた正気が呼び戻されたらしい。というか、あれあの後絶対なにか科学的な現象とか飛び越えた形態変形を成すに決まっている。真尋は詳しいのだ。主にヒーロー特撮について。さらには背後から「アウエイク・アップであります。アウエイク・アップであります」など謎の妄言が聞こえる。それをひたすらに無視して、真尋は廊下を走った。

近代的な室内に反して、外は思いのほか木造建築のようである。ただ各所、各々の寂れ具合から既に放棄された、何かしらの実験施設めいた印象を抱く真尋。現実こんな訳の分からない施設が現存していることも驚きだが、まああのベータを前提とすれば今更かと納得を放棄した。何か爆発でもしたのか炭化して破壊されている入り口を抜けると、建物の全体像が見える。旧い大学の研究所といったところか、しかして全くもって興味がわからない。ともあれ一旦建物を脱出したとしても、まだ終わったわけじゃない。

「北海道じゃないよな、さすがにここは」

陸続きの位置があるのでどこかしらの半島ではあるのだが、しかし真尋の前方、左右はともに海が広がっている。このまま海原に漕ぎ出せば明らかに難破すること必須であり、かつその脳裏に一瞬でらとした皮膚の醜いシルエットがよぎったことで、真尋はUターンした。建物の裏側を抜け、陸地へ走る。と――。

『わたくし、降臨であります』

そんな声とともに、研究施設が爆発した。爆風で吹き飛ばされながら、真尋は見た。炎をバックとして、そこには一つの女性らしいシルエットがあった。それはスレンダーな体系のメイド姿だった。身長は真尋よりは小さく、全体の構造はアスリートを思わせる締まり方をしているのに、胸は劉実を思わせるほど大きく、真っ白な髪が地面に垂れている。ぎらり、と真っ赤な視線が真尋をとらえたかと思えば、

次の瞬間に彼は首を締めあげられていた。少なくとも真尋が認識できるだけの速度ではなかった。彼女が伴っていただろう衝撃波が真尋の身体を襲う。うめき声をあげるが、それさえ眼前の、おそらくベータが変質しただろう彼女の万力は許しはしない。ぎり、ぎり、骨さえきしむ音を上げながら、その手は真尋の息の根を止めにかかっている。

「——ッ、ッ、」

『目的、排除。対象の、殺害。自意識、不要。命令違反、懲罰』

おおよそロボットもののテンプレートのような展開だ、と現実逃避したい真尋だったが、徐々に失われる酸素と止められた血流とが、真尋の意識を奪う。さすがに今度こそ死んだか、と思いはすれど、しかし何か、真尋は違和感を抱いた。決まっている。ニヤルラトホテプである。

幸か不幸か、真尋の運命はかつてほぼかの邪神——嘲笑う世界終末の獣、這い寄る混沌の掌の上にあったはずだ。だというのに、かの存在が、たかだか「自身の化身した」姿が破壊されたくらいで、こうも自分が手にかけて真尋を放置しておくものだろうか。否だ、と断言できる。真尋にはその確信があった。少なくとも、たった2日くらいしか実際に顔を合わせたことはなかったもの——しかしかつて真尋を守った彼女のことを、真尋はそれこそ、最愛の相手であるかのように信じていた。いや、事実、恋していたのだから世話ない。嗚呼、断言してやろう。この八坂真尋は、たとえ騙されていたのだとしても、二谷劉実に惚れこんでいたのだと。

だからこそ、そんな相手が何一つ対策を講じず、己をこんな状況に追い込んでいるはずはないだろうと。これはそういう違和感だ。

痛みで意識が薄れゆく中、しかし、なぜか違和感を抱いた瞬間から、真尋の首が締まることはなかった。うつすら目を開けてみれば、眼前のベータの口が中途半端な開き方で止められている。いや、そうじゃない。視線を見回せば、周囲一帯、爆発で燃え広がっているはずの建物も、その火の揺らめきが中途半端な状態で固まっているではないか。

何がおこつたのだと。まさか星辰が正しい位置について時間が止まり、かの海底に眠り神殿でも浮上したのかと、常人が聞けばかの正気を疑うこと必須な想像力が働き、妙な焦りを覚えたその瞬間である。

真尋をつかむベータの手に、真つ白な少女の手が伸ばされた。それはベータの腕を軽々と、それこそ「水あめのようにねじ切る」と、真尋の首から腕を外した。

地面に転がり、むせる真尋。そんな彼の眼前に、なんだかいつか見たような光景が存在した。

「少年、しばらくぶり？」

赤いツースイドアップの少女がそうにつこりと微笑み。

「——お前、さすがに気づくのが遅いぞ？」

銀の手袋を右手にした、金髪の青年が、真尋とベータの間に立ち半笑いを浮かべていた。

第五種接近遭遇（再）

「意外と出来がいいな、それ。——行け」

青年はそう言いながら鼻で笑う。と、ベータに向かって赤毛の少女が突進をかけた。瞬間、停止していた世界が元に戻る。足の裏から「ジェット噴射のごとく」火を吹く赤毛の少女と、それに巻き込まれ跳ね飛ばされたベータ。啞然とする真尋に、青年は肩をすくめる。金髪、真ん中分け。額にはサングラスをした美青年だ。日本人らしい顔立ちではない。右手には銀色の手袋をし、全身は季節感など無視した黒コートである。まあ北の大地住民である真尋からすればそこまでおかしい恰好ではないが、思わず真尋は、「アンタ日曜朝のなにかの番組に出てなかったか」と問いただした。

「出てねえよ」

「いや、それにしてもこう、右手のその動きとか顔の作りとか……。ほら、えっと、誰かに似てるって言われませんか？ 三う——」

「似てねえって！ 誰にも！ いい加減、銚で刺すぞっ」

額を右手の人差し指で小突く青年。と、その雰囲気というか、言動を辿って真尋はおおよそその正体に行き着いた。

「あ、アンタ……、ノーデンスか？」

「言わなくても分かるだろ。まあ、急ごしらえでガワだけ取り繕ったから、戦闘能力はほとんどないと言って良いがなあ」

真尋が己の正体にぶち当たり、正気と狂気の狭間をさまよったその折。彼を助け、そして這い寄る混沌の目的を阻止せんが為立ちふさがった古き神の石柱。当時はナイスミドルなヴァンパイアハンターじみた雰囲気をもっていたが、なるほどあれを若くすればこういったビジュアルにもなるかと、なぜか真尋は納得した。這い寄る混沌曰く、化身、自らの身を異なる形に甞す必要があっても、一度破壊されればすぐに完全な形での再生は不可能らしい。ノーデンスが老

人姿である戦闘能力を發揮していたことを鑑みるに、青年の姿というのが逆に不完全なそれなのだろう。いや、そんなことはどうでもいい。仮に目の前の相手がノーデンスだとするならば、一体彼は何を言った？ 遅すぎる？ 何が遅すぎるというのか。

真尋がその疑問を聞いたですよりも先に、ノーデンスは彼の左手を強引にとり、手の甲に何か文字を描くようなぞった。

「ッ!?!」

「よし、これで契約更新は完了か」

針で刺すような痛みを覚えて甲をみれば、一瞬そこに何かしらの文様が浮かび上がったかとおもえば、即座に姿を消した。意味が解らない。わからないまでも、真尋の想像力は、それが何かしらの儀式魔法の陣であることを読み取っていた。しかも、状況証拠からしてそれは一つの結論に絞られる。

「クトウグアの契約を、俺に、移したとか、そういうことか?」

「やっぱり察しいいな。微妙に違うが。厳密には『クトウグア未満の座標』の契約だ」

「はあ」

「ま、それはおいおい分かるだろ。お前なら特に何もなくてアレを使いこなせるだろうしな。ただ多用はするなよ? お前がいくら規格外の構成で出来ていたとしても、所詮は人間なんだ。魔力なんて2発も打てば底をつくだろ」

どうにも友好的というわけではないが、少なくともこのノーデンスの若い化身は、真尋と敵対するわけではないらしい。真尋はいぶかし気な目を向ける。そもそもこのノーデンスは、一度は真尋を殺しかかった相手である。むしろ、今の状況は仮にノーデンスが真尋を殺そうとしたところで、邪魔者がいない絶好の機会だ。そうであるにもかかわらず、何故凶行に及ばないのか。そんな視線を受け、彼は嫌そうな顔をした。口をゆがめて「やめんか」と辟易する。

「正直心底腹立たしいが、こっちじゃ『アレ』と俺は休戦協定中みたいなモンだ」

そういえばラブクラフト御大の原典的にそんな設定もあったな、と

真尋。多少ニユアンスは違うのかもしれないが、どうやらそう大きくは事実と異なっていないらしい。

「おまけに肉体ゴことならまだしも、『精神だけ』殺したところでバケモノ共の思う壺だ。それにまあ、意外と俺の加護も上手いこと扱えているみたいだしなあ。そこは評価しておいてやる」

「……精神だけ？」

「無視か。まあ別に大した話じゃないからいいが。つて、なんだ本当に気づいてなかったのか。いいか？ ——」

——今いるこの世界は、お前の見ている夢だ。

ノーデンスの一言に、今度こそ真尋は啞然とした。いや、完全に予想外だったといってもいい。一瞬思考が停止する真尋に、ノーデンスは半笑いをしながら続ける。

「現実のお前の身体は、『ちよつと』半死半生つてところだ。お前の学友とか『アレの化身』がついぞ傍にいて看病していやがるみたいだが、まあ状況は芳しくないわな。いっこうに意識が戻らんのだから」

「半死、半生……？ いや、それはともかく。じゃあ何か、俺の精神は今、ドリームランドにでも居るってことか？」

「正解だ。そして、目下絶賛『拷問中』みたいだな」
イクサクトリイ

そう肯定するノーデンスに、真尋は頬が引きつった。彼にとって非常に悲しいことに、現時点までの一連のすべてが直列でつながってしまったのだ。

ニヤルラトホテプが直接的に介入してこない理由についてはともかく、少なくとも真尋の精神を拷問するという目的であるならば、今日び、龍子惨殺にはじまった一連の流れは確かに真尋の精神に多大なる影響を与えていたといえるだろう。とするならば——真尋の想像力は、寸分たがわず真実にたどり着く。

「……つまり何か？ 俺の精神をズタズタにした状態にして、その状

態でこのドリームランドで、俺の——『死者の書』アル・アジフの力を振るおうとしたとか、そういうことか

「なるほど。察しが良すぎるのも考え物だな。話していて気持ちが悪
い」

「オイっ」

しかしなるほど、確かにそういう事情であるならば——取り調
べの不自然さも、まるで真尋の精神を狙い撃ちしたかのように続く事
件の連続も、領けはなくてはならない。

「だとするならば、主犯格が誰かとかわかるかアンタ」

「知るかつ。だが、まあ推測できなくもないだろ。アレが干渉するの
を『面倒がる』領域にお前の精神を封印するなんぞ、それこそ当人レ
ベ——」

——ノーデンスの上半身が、次の瞬間消し飛んだ。

遙か後方で爆発が上がる。ノーデンスの上半身、主に腹部めがけ
て、小型のミサイルが激突したらしい。なんだこの自由さは、さすが
に真尋の夢であるとみるべきなのか。いやしかし、そういう事情ゆえ
にかあの小型メイドロボットとかいう訳の分からない存在がいても
不思議ではないかもしれない。きつと真尋の夢だからだ。あんなも
の实在するわけではない(編注・当人は知りませんが、この世界ではベ
ータことベルティン・プロトのような電動侍女型機械人形の開発が行わ
れています)。そう現実逃避しながら納得する真尋の眼前で、上半身
が消滅したと同時に下半身が氷の結晶となり、そのままぐしゃりと砕
けて粉みじんとして消えた。

「つというか弱ッ！ いや、ガワだけとか言ってたし仕方ないのかも
しれんが……。つていうかちゃん標準装備じゃねえか、ミサイル、
あのメイドロボ……」

グロテスクな映像が目には極力映らないような配慮がされたかのこ
とき状態に、真尋は錯乱せず、ただただ「なんでこんなタイミニングで
だよ！」と半眼で、その「ミサイルを撃たれた」方角を見た。

一言で言えば、真尋にはそれが視認できなかった。決して発狂するだの何だのして視覚からその存在を「消し去っていた」わけではなく、単純に早すぎるのだらう。爆発、熱風、衝撃波と炎の海がちらついたり、その程度しか人間の認識には入ってこない。夢と言ってる割にこういうデイテイルが嫌に現実的ではあるが、ふとノーデンスの言い回しが脳裏をよぎる。真尋が現在、拷問を受けている——。とするならば、たとえここが真尋の夢であるのだとしても、その夢の制御が完全に真尋の手にわたっているはずもないのか。

だが、どうにもこの世界といえど、絶対的な物理法則そのものは存在するらしい。それは例えばリングを投げれば放物線を描き地面に落ちるといふような、当たり前といえれば当たり前の現象である。

『——エラー、解析不能、解析不能。危険、危険』

胴体、腕などからパーツの破片をまき散らしながら、地面に落下するベータ。エラーのアラートを続ける彼女と、それに対して余裕とあった様子で真尋の目の前に降り立ったクー子。さもありません、いくらベータが人間の技術の粋を集めて出来上がったスーパーロボットのであっても、敵はときに星系の恒星にたとえられるほどの熱重量を誇る異形の神、その化身である。活動期の太陽にいくら鉛弾を打ち込んだところで、結果は火の目をみるより明らかであろう。いつそ哀れにも見えるほどに、ベータは抵抗できていなかったことが理解できてしまった。

と、ふとクー子が真尋の手を取る。

「どうした？　って、熱っ」

「少年、逃げたほうがいいかも。かこまれる」

「は？　——っ」

クー子の指摘を受けた瞬間、背骨の内側をムカデか何かが這いまわっているような、言い知れぬ不快感が走る。ただそれにより真尋の身体に異常が起きるよりも先に、クー子は真尋を立ち上げらせ、背中に抱き着き、やはり足から火を吹いて空を飛んだ。

眼下に広がる半島。形状は鏡合わせになっているが津軽半島のよくなシルエットをしていることがわかった。わかった、その一帯に何

一つ建物がなく、またベータが倒れた付近から「うねうねと」、地面よりタール状の液体のような、見覚えのある何かが這い出た。それは一つではなく、複数の触手のような、粘液のような、筋繊維のような何かであった。

「とりあえず『出口を探す』のが得策。今は逃げ——はううう……！」

と、真尋を抱きかかえてジェット飛行するクー子が、得も言われぬうめき声をあげる。ちらりと下方、というか自分の首から下を見れば、きらきらと光り輝く、得体のしれない何かが口から流れ出ていた。それは強酸性の刺激臭と酸味を口一帯に広げ汚染し、なお己の身体を抱きしめる少女の手に容赦なくかかっている。どうも非現実的、冒瀆的光景を前に正気度が減退するよりも、現状のこの据わり心地、乗り心地の悪さに乗り物酔いめいた状態に陥っているらしい。いや、その自覚が全くなく、具体的に言えば「肌の触覚がほとんどない状態」になっているのは、間違いなく一時的に発狂している状態である。どうか、そのせいでおそらく昇ってくる吐しや物をこらえることもできずに垂れ流しなのだろうか。

クー子はややうめき声に涙をにじませながらも、それでも「ん……、んん！」と健気にも真尋の身体を強く抱きしめ、そのまま遙か彼方、「鏡合わせになったような造詣をしている」北海道へと入った。暗がりでも陸地のおおよそのシルエットが認識できる程度には人の明かりが存在するが、しかしその建物の様相はおおよそ真尋が知りえるような造形をしていない。いや姿かたちは間違いなく真尋が知る街のシルエットであるのだが、明らかにその要所要所が、こうしてみれば異様なまでに「デフォルメ」されているというか。例えば入り口もなぐ、扉も適当、屋根と舎の境もなく、まるでそう「興味がなからこそディテールが全く成立していない」とでも言わんばかりの手抜き工事だ。これが仮に漫画的なつるつとした造形であれば現実感も薄いだらうに、否応なくコンクリートだったりレンガ造りだったりと実在の建物の材質をもってして成立している建築物である。そうであるが故に。真尋を本格的な、現実感の喪失が襲った。確かにこれは真

尋の夢がベースなのかもしれない。なのかもしれないが、それにしたつてもうちよつと何かあるだろうと、思わず頬が引きつった。そしてそれにより垂れ流されていた吐しゃ物が、背後のクー子の髪にかかる。「はううあ!? はうう……」と悲痛な声をあげる彼女に、真尋は思わず「済まない」と謝った。

やがて飛行していたクー子は高度を徐々に落とす。と、その先にはデイトールの省略されていない建造物が一つ。なぜこれだけは左右反転した構造になっておらず、それゆえに妙にいびつに見えた。すなわち八坂家、真尋の精神にとつての安全地帯が一つである。

真尋を下すと、クー子は「うううううー!」と絶叫しながら両腕とか髪とかを燃やす。主に真尋の吐しゃ物がかかった個所を消毒でもするかのごとく、洗い流すかの如く燃焼させ爆発させていた。当然真尋にもその爆風がかかり、げほげほと咳き込む。と、気管に胃液が少し入ったのか、地面に倒れこみ咳が止まらない。

「少年、何か私に言うことがあると思う」

「あー……。悪かった」

「わかればよし」

案外と普通の少女のようなりアクションをとっているクー子であるが、大本の神性を考えるといろいろと謎である。這い寄る混沌にいわく、化身とは本体がみている夢のようなものであるらしい。であるならばノーデンスが人間の精神を模倣する形で化身することが出来るのはまだわからなくもないが、言い方は悪いが太陽が人の形をとったところで、こういう人格を発生させられるのかという謎だ。魔法とかも存在しているらしいこの世界だが、おそらく邪神まわりのベースはSFチックな論理がベースになっているだろうと信じて疑わない真尋であった。

が、それはともあれ。口を拭って立ち上がる真尋に、頭一つ半くらい低い位置からクー子の、何かを期待するような視線が投げられる。

「……………なんだ?」

「契約。あの、ひげの人から引き継いだやつ」

若い方はひげ生えてなかったんじゃないか、という真尋の感想は置

いておいて。

「すまんが主語と述語と目的語を明確にしてくれ。情報ゼロから理解できるくらいに俺は超人的な能力とか持ってない」

「? そう。契約。私の『火力』を使う代わりに、私のこの身体の維持に責任を持つ。そういう契約」

「……まさかと思うが、腹でも減ったか?」

「減った」

何か作って、と言わんばかりの、きらきらした目を向けられ、思わず真尋はため息をついた。そんな悠長な暇などあるのかという謎はあったが、しかし真尋の直感が告げていた。少なくとも半日程度は猶予が出来たという確信が、彼の根本にある何かから受信されていた。それゆえか家の戸を開けクー子を招き入れると、家の時計をちらりと見てため息。外はあれほど真つ暗だったにも関わらず、時刻は午前十時半を示していた。いや、それよりも注目すべきは——デジタル時計に示されていた日付が、それこそ「龍子が殺された日」から一日たりとも経過していないということか。

「……まあいい。リクエストあるか?」

「生ものの海産物は、飽きた。せめて加熱するか、さばいて」

「よっぽどだな、アレの食糧事情は……。とりあえずノーデンスよりは気の利いたもの出してやるよ」

言いながら冷蔵庫を開けレタスをさばき、卵を茹で、スパム缶を開け火を入れる。トマトをスライスしてパンを軽くフライパンで炙り、ジンジャーとマヨネーズをベースにソースを作る。素早い手際でそれらをサンドすると、冷蔵庫の中にあつたタッパーの「全く腐っていない様子もない」シロップ漬けのリンゴを取り出して、デザート代わりに皿に盛りつけた。ミックスジュースを牛乳で割り、お手軽なハンバーガーとデザートを配膳。

眼前に広がったそれに、クー子は目を点にした。

「……………カルチャーショック」

「どうした? カロリーはともかく栄養バランスは多少気を遣ってるが」

「カロリーは燃やせるから、無問題。すぐく、料理してる」

「そりゃ料理だからな。ちよつと手抜きだが」

「これで手抜きとか言ってたら、世の大半の男子は憤死する気がする。いろいろ綺麗」

いただきます、と食事を開始するクー子を見ながら、真尋もハンバーガーを一つ手に取る。久々の自分の料理の味に、ひたすらレンコン攻めだった日々からの解放によって多少の感動を覚えつつ。真尋はテレビをつけた。そこに映る、カナダに「全身が炭化した大型のザトウクジラ」が流れ着いたニュースを見て。

「……………思い出した。そういえば、この話を暮井としてたんだな」

そして真尋は、自身がこの世界に陥る前の「本当の」一日目を思い出した。

神話的爆発物処理(つこ)

昼休み、弁当箱を片付ける八坂真尋と余市健彦。「朝の授業、ちよつとわからないところがあつたから先生に聞いてくる」と意外な勤勉さを発揮して教室を出る彼に軽く手を振り、真尋は己の座席に着席した。窓際、後方から数えたほうが早い座席で、隅っこの方ではある。教室でもさほど目立つことのないポジションといえばポジションで、真尋はそそくさと、バッグから新聞を取り出した。

「やつほー。八坂君、昨日のニュース見た？ あれあれ、ザトウクジラが全身、骨まで炭化した状態でカナダに流れ着いたってやつ」

と、そんな真尋の様子を真つ向から無視するような勢いの暮井珠緒である。新聞越しでもわかる声の元気さと、後頭部でゆれている結つた髪をみて、しかし真尋はノーリアクションのまま紙面を見た。記事的に書ける内容が少ないのか、1スペースに圧縮するように、該当するニュースがかかかれている。昨日カナダにて昼前後の時刻、珠緒の言つた通り巨大なザトウクジラの死体が浜辺に流れ着いた。ただ死体が流れ着いた程度ではメディアで取り上げられもしないだろう、ということを考えれば、当然そこには不可解な点がある。が、しかし真尋はそれに思考を割くこともなく、別なニュースを目で追つた。もつとも口は律儀に彼女との会話を継続するあたり、彼も変わつていないえば変わつていた。

「まあ、載つてはいるな」

「不思議だよねー、ミステリーだよねー」

「普通に死体が屍蠟化してたとか、それが燃えたとか、そういう理由じゃないのか」

「し、しろ……？ 何いつてるかわからないけど、体長三十メートル以上のザトウクジラだよ？ 明らかに不可思議だよ、シロナガスクジラとかじゃなくてザトウクジラなわけだから」

「悪い、何に暮井が驚いているかさっぱりわからないんだが……」
「だって、クジラの大きさを比較したら、シロナガスクジラが最大で、次あたりマッコウクジラでしょ？ ザトウクジラっていったらせいぜい二十メートル前後なくらいなんだから、明らかに大きいと思うの」

「だいたい三十メートル以上だったら下手するとシロナガスクジラも超えてるし、と、本気の本気で不思議そうな珠緒である。一方の真尋は新聞に顔を隠しながら、頬が引きつっていた。まかり間違ってもその原因に心当たりがあるうとは言いだすことはない。もつとも、ちらりと新聞の隙間から視線を横に動かすと、実行犯(?)とも言える彼女は、気持ちよさそうに昼寝をしていた。」

「炭化も炭化で気持ちが悪いくれど、どうなんだろうね」
「一般的な哺乳類の骨を炭にしようとするなら、それこそ溶鉱炉とかみたいに千度超える温度帯にさらさないと無理だろ。けどまあ、そういうのはどっかの学者がいろいろと理屈つけて『それらしい』結論つけるだろ。そんなことより、今年はキャベツの収穫減るかもしれないってさ。献立、色々考えないと……」

「し、所帯じみてるね、なんだか」

「仮にも毎年一月近く両親が家を空ける(毎年新婚旅行に行く関係上)という珍事に見舞われてる真尋であるからして、それはもはや彼からすれば必然である。それはともかく、話題を逸らすことに成功した真尋は、地球温暖化がどうのこうのという話から、気が付けば政治の話に転換していた。」

「だから、国会の答弁、なんかおかしい気がするんだよね、ちよつと揚げ足とってるみたいを感じるっていうかさ。この間の、派遣の法律のやつだって。みんな複数同時に話してるけどさ、なんか全然話が前進してなかったし」

「とはいったって、マルチタスクで作業するってことは、よっぽど熟達でもしてなければ作業効率が落ちるんじゃないのか？」

「え？ あ、うん……、うん……」

「その分のパワー全部シングルタスクに注力すれば解決するかもしれ

ない問題があつて、なおかつそれがまあ、なんだ？ 人道的に正しいことなら、やればいいんじゃないかと思う。個人的にあれつて、『嗚呼、俺こんなに仕事こなしてるんだ』つて達成感くらいじゃないか？ 得られるものっていったつて」

「言いつつ八坂君、私の話と新聞とでマルチタスクだけどね」

「そりや時間もないからな。昼休みは有限だし。誰か俺の代わりに、俺の記憶に新聞の情報を書き込んでくれるようなのがいれば問題ないが、人手が足りなかつたらやらざるを得ないからだろ。効率の良さあしは別にして」

「あはは……。確かに効率は落ちるかな？ 集中力もそうだし、実質作業時間が膨れ上がることに違いはないから」

「……まあそれでも、やらないんだつたら、少なからずよからぬ思惑があるんじゃないかって勘繰つてしまうんだが、俺」

「でも、人間いっばいあつまつて話せば何かしら結論は出るんじゃないかな。まあ、女の子同士だと世間話の割合とか増えちゃう気もするけど……」

「はつきり言つて、よつぽど規則でもない限りは、男が10人を超えて集まるグループつていうとロクなことを考えないと思つてる」

「すごい偏見だね！」

「というか八坂君の過去に何かあつたの、と真尋の闇でも感じ取つたか、珠緒の頬が引きつる。なお真尋の脳裏に描かれてるそれは、複数の半魚人が彼を取り囲み何らかの儀式のために「いあ！ いあ！」と輪唱する姿であるからして、一般社会のそれに適応されるかどうかはまた別なお話。

「まあ双方に良し悪しがあるからなんとも言えないが、少なくとも俺はそれを判断する立場にない。よつて沈黙を選択する」

「選択されちゃうと、話ふつた私の立場がないんだけど……。うーん、どっちが悪いのかな、その場合つて」

「だから、なんでもかんでも二元論的に分析しようつていうのは、そもそも情報の取捨選択とか、分析が浅いんだよ。批判するにも、批判しないにも、必要なのは彼我双方の情報なんだから、できるかぎり冷静

に、客観的に、相手の正当性を担保する情報も確保したうえで、それに対する反論を持ち合わせて、はじめてまともなコミュニケーションが成立するんだろ。お互いその状態までできる限りもっていったって、はじめてお互いの不足分をとりあう議論が成立するんだろ。それさえできないのに、一方的に臭いものに蓋するように野次り続けたり追放したりっていうのが、そもそも間違ってるってだけで。何物にもまっとうな怒りとかって、あるだろ」

「そりゃ、まあ……」

「だから、語りえぬことには沈黙するしかないんだよ。沈黙考して、熟考して、それでもできる限り素早く結論を出さなきゃいけない。試行が許されないとこだからこそ、それを普段から想定して考える必要があるんじゃないのか？」

「んー、八坂君それが一般的な話みたいに語ってるし、私もそういうのいいなーって思うってるんだけど、世の中の人って八坂くんほどピュアじゃないからね、たぶん」

ピュア？ と頭をかしげる真尋に、彼女は首肯する。新聞を下ろしてみれば、くりつとした視線と正面から見つめ合う形だ。少し頭をかき上げれば、彼女は何かこう、子を慈しむ母親のような、柔らかな笑みを浮かべた。

「それってさ、いくなれば綺麗ごとでしょ」

「王道だ」

「うん、だから、つまり理想っていうか、努力目標じゃない？ 毎日忙殺されてる人たちに、そんなこと考える余裕はないって。たいがい今の自分の成績だとか、友達関係だとか、それくらいしか考えてないよ」
「ミクロ的にもマクロ的にも、両方失敗だと思っただけどなあそれ……」

「みく……っ？」

「あー、世帯とか個人の小さい視点と、行政とか司法レベルの俯瞰視点と、みたいな感じ」

「なるほど……」

「まあ、それはそれ、これはこれって言いたいののはわかる。実際、誰が

何をどう重要に思っただけで行動してるかなんてのは、ケースバイケースだしころころ変わるけどさ。でもまあ、なんというか、そこはかたなく嫌な感触が残ってるのは事実だからな」

他ならぬ俺自身がそうそう実行できてる訳でもないし。自虐的に笑う真尋に、珠緒は困ったような笑みを浮かべた。彼女にはわかるまい、というかわかられても困る。目下真尋にとつての悩みとしては、そう、沈黙こそすれどそこから先に一歩も踏み出すことができないでいるという現状だった。ちらりとみれば、未だ一つ飛ばして隣の机で気持よさそうに眠る二谷龍子がいる。真尋は一瞥するだけで、そこから何か思っていることに対して行動に移すことが出来ないでいる。それこそ沈黙考し、結論は出ているのだが、次のステップに踏み込むことが出来ないでいた。

と、視線を戻せば、珠緒が生暖かな視線を送っていた。

「どうしたんだ？」

「……別に。んー、『真尋くん』ってひよつとして、何か悩みとか、あったりしない？」

「いきなりすぎるが、別にないぞ」

「そう。ならいいんだけど」

いまいち珠緒の意図が読めず、真尋はまたもや疑問符が浮かぶ。そして再び視線を新聞に落とそうとした――。

ちょうどそのときである。真尋の視界が一瞬、すべて赤く染め上げられたのを見て、とっさに周囲を見回した。珠緒はそのまま真尋にはなしかけているようだが、しかし、真尋が立ち上がり動いているのを認識している様子はない。とするならば――真尋は経験則から、これがいわゆる、人払いの結界とか、そういう類のものであると確信した。数週間前に彼自身が遭遇したそれと全く同様といえるので、検証する必要もない。そして視線をいまだ熟睡するニヤル子に向けた瞬間、思わず頬が引きつった。

それは端的に言えば孔であった。空間を捻じ曲げて空いた孔、という表現は正しくない。例えば新聞でも強引に引き裂くように、無理やりペール状の何かを押しつけ引き裂いて腕を出した、といったよう

な、そのような絵面だ。明らかに無理をしていることが如実に理解できる類の光景である。そしてその向こう、鈍い銅のような色をした、怪しくも機械的に、ウェーブ状の波打つような模様のあしらわれた、人間ならざる手が出てくるのを見た。

それを見た瞬間、真尋はとっさに胸ポケットに入れておいた、プラスチック製のコンビニ弁当などにつけてもらえるフォークに手をかける。だがどうにも、その相手のモーションの速度に真尋自身の動きが追い付いていない。認識上はその一秒にも満たない時間が何倍にも引き延ばされた映像として再生されてはいるのだが、体がそれに対応することができず、ようやくと右手を胸の裏ポケットに入れるか入れないかといった段階だ。

一方の穴から出た手は、握ったその拳を開く。指の本数はくしくも五本だが、しかし嫌にそのシルエットがあいまいだ。かろうじて人間の腕のシルエットに近いのはわかるのだが、まるで雪の結晶か。ホログラフィックのような映像の不安定さである。ただ開かれた手から出てきたそれは、明確な形状を伴っていた。

それは手のひらサイズに入るものでありながら、赤青黄の三色のケーブルが巻かれた装置だった。表面には液晶画面で「03」の数字。側面には押下するだけのスイッチが取り付けられている。一見して得体のしれない何かだが、真尋の想像力は著しくさえていた。すなわちそれが爆発物の類であることを、一目見た時点で判断できていた。

真尋の手がフォークをようやく掴み、内ポケットから引き抜いたその時点で、既にその光る腕は装置のボタンを押していた。とっさに真尋は教室の状況を思い出す。仮にフォークで装置を破壊したところで、内部の火薬燃料による爆発は避けられまい。そしてその被害を一番に誰が受けるか――。

腕が孔の中に戻り、消失すると同時に、教室を覆っていた赤い結界はその存在を消す。と、考えるよりも先に、真尋の身体は動いていた。それはあまりにも、普段の真尋からはかけ離れすぎていた行動だった。ただ同時に、のちに述懐すれば真尋本人からして当然の行動でもあった。

椅子で未だに眠っている龍子。彼女の肩を突き飛ばした上で、机の上にあつた爆弾を腹に抱え、フォークを振り下ろす。かち、かち、という音が止まると同時に、制御盤が大きく欠損したのか、内部にすくっていた「目玉のある炎」と視線が合った。

「ッ」

瞬間、真尋の視界は突然ブラックアウトした。嗚呼、いわゆる軽い発狂状態だと真尋の想像力が結論を出す。明らかに小型爆弾の中にあつたのは、何かしらの神性の眷属であろうものを、SANチエツカー（精神の保護装置のようなもの）もなしにいきなり直視したのだ。そして次の瞬間、真尋の身体は大きく吹き飛ばされた。熱と猛烈な力がかかり、また耳に轟音が鳴り響く。まず天地の感覚を失った真尋は、背中から地面に激突する。と、激突した地面が明らかに「変形した」。真尋の身体の吹き飛ばされた威力に耐えられず陥没した感覚がある。が、いくらなんでもおかしい。それほどの威力で激突したならば真尋の身体もただではすむまい。にもかかわらずただ痛みだけで済んでいるということは――。1秒もかからず結論が出た。真尋の身体は再び空中に投げ出され、そしてそのまま鼻先から「地面に」激突した。

「て、天井だったか……」

背中よりも体の正面、鼻、胸骨と局部の痛みを覚え、気絶しそうな痛みを覚える真尋。と、その真尋の暗転した視界が揺さぶられる。嗚呼不可思議かな、他の何も見えないというのに、彼自身をゆすつている彼女の姿が、夢野霧子を名乗っていた二谷劉実の姿が見える。否、劉実ではない。その背は小さく、制服を着ているのだから、それは二谷龍子であるべきだろう。

「ま、真尋さん……？」

茫然としたように、口だけ不自然に微笑みでも浮かべてるような形で、彼女は目を丸くしていた。冗談ですよね、と今にも聞こえてきそうな具合である。真尋はとても珍しいものを見たという思いだ。あの、二谷龍子である。その大本を鑑みれば、おおよその世のすべての事象を見透かしていてもおかしくない彼女である。何だ、この

まるで何も想定していなかったかのような、そんな様子は。

「アンタでも、そんな顔するんだな」

「——っ、真尋さん、しっかりしてください、真尋さん！」

思わず口をついて出た感想と同時に、真尋の全身から残っていた余力と感覚とが抜けていく。腕に力が入らず、口の押えも効かず、ただ全身に妙な熱を覚えたまま。いつ意識を失ってもおかしくない状態ではあるのだろうと推測できるが、そんな真尋に、彼女は涙を流していた。

「やめてくださいよ、真尋さん——それじゃ、そんなんじや、私が、私が生まれた意味がなくなっちゃうじやないですか。私はここに、真尋さんのためにいるのに、これじゃ全く、なんでそんな——もつともつと仲良くなつて、それから、いっぱい、したいことも、やらなといといけないことだってあるの——」

涙を流し続ける彼女の言葉、しかしそのすべてを認識するよりも先に真尋の意識は消灯した。

* * *

「なんともいえない」

朝食を終えて片づけた真尋は、クー子に自分が意識を失う直前の話をした。すなわち覚醒世界、この夢幻郷に至る前の事柄である。まずは敵だろう相手につながる情報を探ろうと、そして少なからず彼女とて邪神の化身であるのならば、それなりの知識を期待してもよいのではと言う判断である。が、実際のところクー子は断言することはなかった。

「なんともっ」

「いくつか、爆弾、というより、私に近い眷属を置いていったところに心当たりはある。空間に孔をあけた、というところ、意外とすくない」「と言われたところで、こつちには推察するだけの情報ないんだが

……」

「一つは、『惑星保護機構』。もう一つは『文明保護機構』」

人差し指を立てながら、クー子は微笑む。どうでもいいことだが、見た目が十二、三歳程度の身長の高い女の子が胸を張って得意げになっっている様子は、中々に愛らしいものがある。多少その光景で癒されたのか、真尋の感じていた連日の不快感は、わずかに和らいでいた。「惑星保護機構は、銀河英雄騎士団。善き意志、善き知性を守ることを主とする、強大な星に仕える、天使」

「天使？」

「天使。ぴっかぴかの、ぼーぼーぼー！」

「アレもそうだったんだが、その擬音で俺に一体何を察しろというのか……」

もつとも腕だけとはいえその姿を目撃したかもしれない真尋であるからして、おそらく背中に羽根を生やした中世的な人間の姿をしているそれではないのだろうと、おおよその推測は成立した。そもそも天使というカテゴリー自体「天の使い」という以上の意味あいを持たないので、人間世界から乖離すれば乖離するほどその姿かたちは異形さを増していく。このあたりクトゥルフ神話に近いものがあるかもしれないと、真尋は苦笑いを浮かべた。

「文明保護機構は、時空をかける知性。形に縛られず、色々な文化や文明を探して、学んで、そして保護する」

「時空ねえ……。いわゆる『大いなる種族』ってやつか？」

「ドストライク」

前者についてはともかく、後者についてはおおよその正体に当たりをつけた真尋である。サムズアップをよこすクー子に少しだけ肩をすくめ、事実確認を続ける。

「整理すると、まあつまりだ。地球人じゃないどこかの組織が、アレを殺すために爆弾を置いた、と。んーそうすると俺が今ここにいる理由がさっぱりなんだが……。どう考えてもアレを殺すって作戦と、俺を拷問するって作戦がつながらなさそうだと思うんだが——って、何だ？」

真尋の目の前に、にこにこ微笑みながらクー子が右手を突き出して
いた。「お小遣い頂戴」とでも言われているような錯覚を覚えはした
が、念のため確認する真尋である。

「少年、お駄賃」

「って、情報料とるのかよっ」

「とるとる。網目模様の甘いやつがいい。橙色のだとなおよし」

どっちもないぞと、真尋は久方ぶりのようにさえ思える「脳に負荷
のかからない」頭痛に、こめかみを軽く抑えた。

神話的迷宮探索

「はうろう、甘いつ」

運よく(?)冷蔵庫にしまつてあつたメロンゼリーで妥協させた真尋である。が、果たして運よくなのかどうかは定かではない。実際問題真尋の夢の中なので、こういうデイテイルが雑でよいところは突然ふって湧いた可能性もある。ともあれ満足したらしいクー子を相手に、真尋はインタビューを続けた。

「まあ詳しい話とはかく、なんで俺が今ここに居るのかつてのがよく分かつていないんだが、何か情報もってないか?」

「関係ない」

クー子はぼつさりと言いつつ、テレビのチャンネルを変える。画面に一瞬「うー! にやー!」なる奇怪かつ名状しがたくも媚び媚びしい歌声と、意味もないほどに宇宙規模の映像とが発されたが、かまわずザツピング。どこかのアーティストのピアノリサイタル映像で止め、真尋を無表情に見つめる。

「少年が死にかけてると、こっちに居るのは別問題らしい。たぶん」

「いや、たぶんって……」

「ひげの人がいつてた」

「いや、ノーダンス若い方は髭ないだろうって」
「?」

そこで頭を傾げるなよと、真尋は疲れを覚える。いまいちコミュニケーションがちゃんととれているか心配になってくる真尋と、特にそういつたことに気をつかっている様子のない少女である。困惑する真尋であつたが、しかしノーダンス由来の情報ならばおそらく間違いはないだろうという確信があつた。そしてさらに、「ひげの人が言うには」とクー子が続ける。

「別口」

「あー、つまりその、惑星保護機構とか、文明保護機構とかと別なところが俺をここに追い込んで。まあ、だろうなって感じではあるが」

「でもどちらにしても、少年が自力で脱出するしかない」

「それもそうだろうが……。何かヒントとかないのか？ 皆目見当がつかんのだが」

「出口があるらしい」

出口？ と問い返す真尋に、そう、とだけ返すクー子。やがて曲が詩的な宗教的な調べにさしかかると、それに耳を澄ますようにクー子は楽し気に目を閉じた。それはともかくとして、出口というフレーズと同時に、真尋の脳裏に電流が走る。確かに出口があつてしかるべきではあるだろう。そもそも拷問とはいえど元は真尋の夢なのだ。真尋の夢であるということは、すなわち「邪神ヨグⅡソトスの眷属」の認知であるということだ。もともと元来、異邦、さまざまな場所、世界に接続されているであろうかの神、その「繋がる」能力を限定的に再現されたはずの真尋の存在であるならば、確かに時間概念にも干渉してそうなこの夢——具体的にいえばどれほど過ごしても時計の針が一向に進んでいないあたり——に、通常人類とは別な切り口で踏み込むことはできるかもしれない。問題としては。

「だからヒントがないのかつて。出口があるっていう解答例じゃ証明にはならないんだぞ」

「少年なら知ってるって、ひげの人は言ってた」

「まあアレも大概、元をただせば人間的な価値観とかわからないような存在だったし、俺が察しきれるか切れないかつていうのに問題をかかえていても不思議ではないが……。だったら何のために化身したのかって話だし」

そもそも問題として、肝心のノーデンスの化身本人が登場から数分待たず粉みじんになったあたりからして、そこを問うのはナンセンスか。ため息をつき、真尋は現状の情報だけで意図を推察しようとする。

「要は、俺が現状知りえている情報だけで推理することが可能だつて

ことか。その出口っていうのは」

「はい。あらん限りの常識と、豊かな想像力を武器にすれば、なんとかなるって言ってた」

「……ノーデンスがそう言ったのか？」

「？」

「いや首を傾げるなよ……」

いや、もしかしたらもっと重要な情報とかをこのクー子は聞いているのかもしれないが、いかんせん真尋のコミュニケーション能力でそれが引き出せるかは別問題である。ただでさえ邪神な相手である上に、化身した姿が年端もいかない少女なのだから、真尋に勝手がわかるわけもない。そもそも女の子の相手は苦手なのである。そういう意味では、暮井珠緒は少々珍しいケースといえるのかもしれない。

「少なくとも俺の持つてる基本的な能力で正解を導き出せると。……直接解答を言われなかったのは、そこまでやってしまうと色々あっちにも問題が出たとかか。あるいは敵側が操作している夢の範囲だから、その分の音声だけ聞き取れなかったり、あるいは不都合にノーデンス本人が殺されたり……。後者だな、たぶん。実際、敵の名前を言おうとしてすぐ殺されたし」

「少年、頭いい」

「そうかい」

「でももっと早く結論を出さないと駄目。少年に残されてる時間は意外と少ない」

「は？」

口調こそ変わらないまでも、声音の情緒は豊かなクー子である。それが珍しく真剣そうな声を出したので、真尋は違和感を覚える。

「少なくとも私と契約する前に、出口にたどり着いていくべきだった。それくらい出来ないと、たぶんもたない」

「もたないとは」

「少年は、外部の情報に頼りすぎ。もっと自分の能力を信じるべき」

「意味がわからないって言ってるだろ、アンタも。何度も言うが、基本的に単なる子供なんだぞ？　俺。何か、じゃあそっちの言ってること

が分かるくらいの狂気に、その知識に身をゆだねろとでも言うのかア
ンタらは。そんなもんは御免だね。俺は俺だ。人の平穏な日常を脅
かさなくてもいいからね」

「脅かしてるのは別に私じゃない。少年もそれはわかってるはず。私
に八つ当たりしても、私は受け止めない。そういうのはもつと別な相
手にするべき」

「……………」

「それに、少年の存在がそもそも普通の人間でないのだから、その論理
は根本から破綻している。いい加減腹をくくるべき」

「何を、覚悟決めろって」

「きつと少年が思っている以上に、少年の日常には日常じゃない何か
が既に紛れ込んでいる」

何を馬鹿な、と真尋は馬鹿にできない。実際、そういうことも考え
なかった訳ではなかったのだ。龍子が転校してきた時点で、そのクラ
スへの溶け込み具合が全く違和感がなかった時点で。そもそも真尋
自身の正体が正体であるのだから、色々真尋の知らないところで、
真尋の知らない悪意や何かの魔の手がまわっていても不思議ではな
いと。だがそれを気にしては、彼自身正気を保てない。一時それ
を忘却することで、日常を確保していたにすぎないのだから――
」。

「…………止めよう。たぶん平行線だ。少なくとも俺は日常に帰りたい。
それだけは間違いない。そのためにもまずはここを出る必要がある
わけだが…………、状況をもう少し整理しよう」

「うんうん」

「今のところ分かっている情報としては、相手方の動きと俺の夢につ
いてだ。一つは、相手は俺を殺さずに発狂させるなり何なりしたいつ
てこと。もう一つは、俺の夢は俺の印象に薄い部分は細部がかなり省
略されてるってことだ。前者は今までの話の流れからおおよそ見当
がつくのと、後者はまあ実際に見て回った情報からの推測だ」

「どれくらい省略されてる？」

「基本はシルエットとおかしくない程度の造形になってた。ただ

細かくは適当だと思う。……このテレビのチャンネルとかな」

実際は録画ボタンやらなにやらがついているはずなのだが、真尋が手に取ったそれは電源ボタンと番号のボタンと、あとはなんとなく適当に色がついてボタン「らしき」何かがぺたっと張り付けられているようなビジュアルをしている。

「一つのものに対しても、デイトールの細かいところと、そうでないところがある？」

「まあそうだろうな。……いや、待てよ。そういえばもう一つデイトールが細かいのがあったな」

真尋の脳裏に浮かんだのは、己が拘束されていた少年院なり監禁所である。あるいはベータという存在もだが、これらに共通する要素はかなり明白であった。

「——相手が用意したもの？」

「嗚呼。俺の中に存在していなかった要素だが、そいつらについては嫌にデイトールが細かかった。というか、俺自身が気づかない程度には現実の造形物と同じだったと思う」

「それが分かったのに、なんの意味が？」

「少なくとも相手が手を加えたものに関しては、一目で区別がつくってくらいだ。……まあしいて言えば、それが出口に繋がるかもしれないってくらいか」

「なんで？」

ほとんど真尋の直感であるが、こういう場合において真尋の直感は真実を射抜いていた。

「相手が俺の夢に干渉するにしても、『干渉に使われる入り口』がどこかにあるはずだ。それはもちろん、もともと俺の認識の中にあるはずがない。必ずどこかに辻褄の合わない矛盾点が出てくる」

真尋の脳裏には、例えばベータの存在がある。仮にあの衝撃的なアンドロイドが現実の世界に存在するものであっても、そんなものが存在するという認識が「真尋の中にあつたわけがない」。少なくともこちらで初めて知り、衝撃を受けたのだ。とするならば、それはもともと真尋の中になかった知識を夢の中で新たに学習したに他ならない。

「そいつを見つけることが出来れば、とりあえずは合格点なんだが……。どうしたものか。とりあらず、学校にでも行ってみるか」

「学校？」

「向こうの手が入ってるかどうかは解るだろ。少なくとも、俺がこつちで目を覚ましたのは学校で、その時点で違和感を抱かなかつたんだから、それが俺の認知に『眠っている』からこそのバイアスがかつたものだったか、それとも疑うまでもなくデイトールが現実のそれに準じていたからなのか、くらいは調べられるだろ」

「わかった。じゃあ、すぐ出る？」

首肯する真尋に、とて、とクー子は足をついた。とつきに台所からフォークを数本持ち出し、下駄箱から運動靴を取り出す。

「……っていうか全然気にしてなかつたんだが、アンタ、そういえばずっと素足か？」

「どうせ焼くから問題ない」

「いや問題あるだろ。痛くないのか？」

「慣れてる」

「慣れてるからいいってもものじゃないだろ。ちよつと待つてろ……」

下駄箱の奥を調べると、彼にとつては案の定と言うべきか、昔の真尋の靴箱が出てくる。それをいくつか探すと、中に小さなサンダルが入っていた。コメディ色の強い作風を全く感じさせない恰好の良い特撮ヒーローのイラストが描かれたそれを、とてとてと歩いてくるクー子に差し出した。

「とりあえず、これでも履いてくれ。多少はマシだろ」

「？ きょうだいでもいるの？」

「いや。単に物持ちが良いだけだ」

真尋が生まれる際に難産だった関係がほぼ直接の原因で、真尋にはもう弟や妹が出来ることはない。それ故に両親は彼を大事に大事にしているのだが、そのため彼の昔の物は結構な数家に現存していたりするのだった。このサンダルもその一つではあるが、まあそんな情報はノイズでしかないし、言つたところでこのクー子がそういつた情緒を解するかわからないので、真尋は詳細説明を軽く流した。クー子は

手渡されたそれを見て「はうう」となぜか声を上げてから装着した。サイズ的にはぴったりであるが、ますます小さい子じみた印象を見ている相手に抱かせる様相となった。

扉を開けると、足早にすすむ真尋とクー子。信号機のデイテールがしつかりしている割に路上を走る車が低予算アニメのような様相になっているのに辟易したり、あるいは道を歩く人間がジャージ以外が某名探偵漫画の犯人さんのような有様になっているがそれはそれでホラーである。思わず頬が引きつる真尋と「網目模様……」と八百屋を前に視線をロックしたままだったりしたクー子。それはさておき、この道順もほぼ一直線といって過言ではないルート構成となっている。わきの細道やら何やらといった細かい部分についてはぼっさり真尋の認識からは消されているらしく、夜道においてもあまり迷子の心配もなく、高校までたどり着いた。

「良かった。……いや、良くはないか」

真尋の予想通りというべきか、学校のデイテールは全く真尋の認知にバイアスのかかったような遜色もなく、当たり前のように学校である。学校の入り口の看板を見ても、正門にかけられた南京錠を見ても同様。ただ窓から見える教室の数か所に不自然に明かりがついており、それがいかにも「何か仕掛けがありますよ」と自己主張しているかのように真尋には感じられた。半眼であからさまに嫌そうな表情の彼の手を、なぜかクー子はとった。

「どうした、アンタ。……って、いや、暖かいな。カイロみたいだ」

「落ち着いた？」

「もともと別に混乱とかはしてないが」

真尋の言葉に頷くと、クー子はさっと手を放す。

「とはいえど、ここまで来ておいて入り口が封鎖されて入れませんじゃ、色々示しが見つからないよな」

「少年、登ったらいと思う。別に問題ない」

「今更不法侵入くらいでガヤガヤは言わないけどな。俺の夢だし。ただ前提として、俺、そこまで体力ない」

単なる帰宅部である真尋からして、懸垂一回でさえギリギリであ

る。明らかに扉や門を越えようとするなら、それ相応の腕力と気合が必要なはずだ。残念ながら真尋にはそのどちらもない。いくら敵対者の手が加えられているような場所であろうとも、前提となる真尋の認知というか、科学知識、物理法則が働いている世界であるだろうか。そして、さすがにそれをどうこうすることは難しいだろう。

「つまり、門がなければいい？」

「結論としてはまあ、そうなるな」

「わかった。ちよつと離れてて」

疑問符を浮かべる真尋だが、いや、すぐさま彼女が何をやろうとしているかについて推測が立ったので、言葉通り彼女の背後に回り、数メートル距離を置く。と、クー子は門の鉄さくを両手で握ると、「はうううう……！」と気合でも入れるように声を上げた。

変化は数秒も経たずに訪れた。まず彼女が手に持っていた個所が、夜目にもわかるほどに爛々と赤く灼いた。さらに時間をおかずその光は門全体を覆い、やがて何かこらえきれなくなったかのように「木っ端みじんに」爆発した。

「……いや待て、最後のがおかしい。熔けるならまだしも何で爆発したっ」

おおむね相手がクトウグア、火の神性であるのはわかっている故に「熔ける」までは想定しきっていたが、最後の最期で爆風に煽られ、わずかに目に熱風のダメージを負う真尋である。目を抑えてうずくまりながら、思わずクー子に文句を言った。半魚人を目視して気絶していた初期の真尋からしたら大した成長ぶりであるが、いや、確かにこういった物理現象に近いものの方が正気度の減少は少ないのだろう。大してクー子は「ノリ」と答えた。

「ノリ？」

「ノリ」

「いや、全然説明になってないんだが……」

「溶かしきると手がべたべたするから、ふつとばした」

そういえば真尋の吐しや物も燃やして爆発させていたか、と思いつく。どうにも手でも洗うようなノリで爆発を使っているのではない

か、と真尋は訝しんだが、要件は達成できたのでこれ以上の追及はしなかった。目薬を取り出して両目に点眼し、見るも無残に破壊されつくした校門に苦笑いを浮かべる。そのまま警備員が出てくることもない校庭を抜け、校舎の中に入る真尋とクー子。なるほど確かに、実際のところかなり省略されていてしかるべき下駄箱にも一つ一つ名前が明記されているからして、このディテールは明らかに夢としては異常だ。

「長谷部、秀太？」

と、そのうちの一つの名前を見てクー子は頭を傾げる。背後からの、なぜか上履きが存在しない下駄箱を見て、真尋はおや、と疑問符を浮かべた。

「どうした？」

「なんでもない。……シュータくんが居る？　いてもおかしくないけど、変な感じ」

「いや、だから意味がわからないんだが……」

もはや本題ではないのと、メロンに目が釘付けになったりするような彼女の性質からして、おそらく真尋にはよくわからない何かの情報をキヤッチでもしたのだろう。したのだろうが、追及したところでもな返答があるかは怪しいので、彼はクー子の手を引いて先行した。

そして数秒と経たず、先行したのが失敗だったと気づいた。

「いやいやいや、ちよつと待って……」

声を潜める真尋の眼前には、大量のゲル状の何かが存在した。いや、存在したという形容が正しいかはわからない。ただタール状の茶褐色をした、ぶつぶつとできものでもあるようなその軟体とも液体とも個体とも言い難い皮膚の集合体のようなそれぞれは、一階の廊下全土にまるで雑魚寝するかのごとく、大量の塊として堂々たる風に鎮座していた。

「これ全部シヨゴスか……？　いやいくら何でも多すぎるだろ」

「？　少年、なんで私の頭を撫でる？」

「特に意味はないが、こうしてないとなんか、正気が消し飛ぶような気

がする」

そして突然クー子の頭を「いい子いい子」とでもいわんばかりに撫でまわしまくり始めた真尋。妙にさらさらとした少女らしい髪の一つや質感に癒される彼である。「少年、それはすでに狂気」と、冷静に現状の真尋の状態について本人から指摘が入った。

神話的全員行軍

ふと我に返り直前までの行動の意味不明さに頭を抱えるも、真尋は思考することを止めていない。ただただ眼前の、致命的にどうしようもない光景を前に、それでも打開策を練ろうと――。

「いや無理だろ、この状況でスニーキングミッションとか出来るわけないって。高校生なめんなっ」

早々に潜入やら忍び歩きを放棄した真尋である。いや、確かに彼が直感するまでもなく、足の踏み場もないほどのショゴスの山を前にそんな余裕めいたことなど出来るわけではないのだが、いささかあきらめが早い部類である。単に眼前の光景を長時間直視したくないというのも、そこには含まれているのかもしれない。そしてそんな真尋のリアクションにも何一つ反応を返さず、不思議そうに見上げるクー子であった。

「階段はだめ？」

「さっきちらつと見た感じだと、あつちもあつちで駄目そうだったが……。どっちにしても、何がトリガーになるかわからない以上、調べる必要が―― Mad World？」

スピーカーのノイズ音が真尋たちの耳に届く。数秒もかからずに校内全体にシンセサイザーが響き渡った。真尋が口にした、古い海外の曲をベースとしたアレンジメロディ。何かの連絡などに使われるような具合に調整された、その割に妙にも悲しいそれを聞き、そしてぴくぴくと眼前の物体たちが脈打ち始める。それはタール状の液体からうねうねと複数の黒いムカデかワーム状の長い胴体を形成していく。そしてそれらが蠢きながら、まるで人間が直立したようなシルエットに集まっていく。あくまで人間に擬態しているのではなく、ワームの集合体という姿だ。シルエットの細部はどう見ても繕いきれない程に正気の世界の代物ではなく、また生理的な嫌悪もあいまっ

て、真尋はその場に体が根を張ったかのように固定された。ただただ夥しいほどの恐怖が真尋の全身を縛る。

ただそんな真尋の手前に立ち、クー子は右手を振り上げる。よくみればその右腕は既に何かしらの異形と化していた。手の甲には目玉のような文様が浮かんでいる。肘関節近くからは雄牛の角のようなものが左右に這い出ており、腕自体は既に「プラズマ化でもしているのか」炭化した骨のシルエットと、既に輪郭が崩壊しかかっている。そのまま彼女は、勢いよく右腕を振る。神々しく輝いていた右腕の、その骨以外の個所が剥がれ、というか勢いに乗り吹き飛ぶ。右ひじから下は角の生えた黒々とした骨のみが残る状態となる様もかなり酷いものがあつたが、しかして飛び散った腕の肉だったろう何かしらの物体の威力は絶大である。一瞬で眼前すべての光景が一切合切光と共に灰塵と化し、真尋はさらなる恐怖に固まったまま背中から倒れて、なお動くことが出来なかった。しゃがみこみ、真尋の頬をぺちぺちと軽くたたたくクー子。よく見ればその右腕は何事もなかったかのように回復しており、先ほどの光景が未だ彼女の本領の欠片も発揮していないことがうかがい知れる。こと火力、破壊力のみに関して言えば最強クラスの化身といえるかもしれない。いえるかもしれないが、再生した手だろうその右手のひらは異様に熱かった。

「って、いやいやちよつと待って……」

いろいろと事態が連続したせいか一気に正気を取り戻した真尋だが、その眼前、校舎の状況はなんともひどく形容しがたい有様だった。壁や教室、窓などについては木っ端みじんと吹き飛び、基礎もその存在した痕跡すらうかがわせないありさまであるというのに、どういふことか廊下と階段のパーツのみ、まるで何事もなかったかのように堂々と鎮座している。もともとが真尋の夢なのだから何でもありといえれば何でもありなのだろうが、しかしそれにしても色々と物理現象に喧嘩を売っている。我がことながら内心で突っ込みを入れる真尋であるが、しかしそれと同時に、この光景についての説明がついてしまった。

「……そうか。夢の中でもより存在が強固ってことは、それに紐づい

「ている別解が存在するってことか？」

「あー、つまりだな。そもそもここが夢の世界だっていうなら、俺自身
がより詳細に知っているとか、より重大に感じているものに対してイ
メージの強度が担保されるだろう、っていうのはわかるか？ この場
合の強度っていうのは、デイトールの細かさとか、あとは物理的な
強靱さも関わってくる」

「それで？」

「だからこそ、よりデイトールが細かいところが怪しいとにらんで
いたんだが……。総合すれば、その中でもさらに強度が強いところっ
ていうのは、つまり俺以外の相手のイメージの強さが影響してると考
えられる。学校そのものにそこまでの強度はないだろうからな。と
するならば、この階段の上を辿っていけば、ゴールって言っていていいか
分からないが、少なくとも目的とする何かにはたどり着く、かもしれ
ない」

「少年、弱気」

「仕方ないだろ、前例も何もないんだから」

人をそんな、なんでもこの世に起こることすべて己の掌みたいな神
様と同列に扱うのは止めろ、と真尋は心底真剣な声で言った。クー子
は興味がそこまでなさそうに「わかった」とだけ返すと、真尋に肩を
貸し立ち上がらせる（厳密には身長の関係もあるので、一度膝立ちを
経由するが）。ともあれクー子は、真尋の言わんとしていることをあ
る程度理解したのか確認してくる。

「じゃあ、これから学校、燃やす？」

「……………いや、止めておく。強度が高いのは確定なんだろうが、たま
たまアンタの火力で燃え尽きなかっただけかもしれないし、どれくら
いの威力に耐えられるかなんて見当もつかん」

「そう。……………お腹すいた……………」

ぶう、と少しだけ頬を膨らませ、不機嫌そうなクー子である。
ひよつとしたらだが、彼女の燃焼能力は文字通り、供給されたカ
ロリーを燃焼しているのかもしれない。もつとも「網目模様……………」とか

金額的に不穏なことをつぶやいているのが真尋の耳に痛い。決して真尋に落ち度があるわけではないが、彼がそもそも邪神に頼っていること自体弱みといえれば弱みであるし、クー子の趣向はなかなか財布をえぐってくる。

「もつと火力を抑えて戦うことと違って出来ないのか？」

「少年、面倒」

「そこをなんとか、本当に……。ほら、帰ったら何か作ってやるから」
「……少年の料理、意外と美味しかった。わかった、今日は任せられなく」

ぶい、とピースサインを突き出してくるその様は、場と状況の緊張度合いに似つかわしくないくらいゆるい印象を真尋に与えた。彼女の見た目もそうなのだが、その能力がそもそもあまりにも物理的に強すぎるのが原因の一端か。ここに来てからの経験によつて軽くトラウマになりかけているシヨゴスに対して、まったく妥協と容赦のない殲滅を繰り出す様は、圧巻とか爽快とかを飛び越えて疑問符しか浮かばない。「はい？」とか「今何がおこった？」とか、その類の現実逃避の疑問符である。

そしてそれ故にか、真尋は階段を上る際に警戒が緩んでいたのだから——珍しく、本当に珍しく彼の直感が危機を煽らなかつたのだから。

「っ!？」

真尋がその音を知覚した時点で、既に色々と遅かった。いや、音と言うのは正確ではあるまい。声、呪文のような文章の連なりであるが、しかし真尋が知りうる限りその音は彼の知覚に該当しない。該当しない以上それは「死者の書」^{アル・アジフ}に連なる系統から外れる類の呪文であるということだが、それはともかく。瞬間的に視界すべてが真っ白な光につつまれ、真尋から聴覚が失われた。いや、それはあまりにも大きな音と、強烈な、破壊力をとまなう光だった。決してクー子が行つ

ているような、熱エネルギーを基礎とするものではない。純粋な光エネルギーが破壊力を伴って放射されたのだ。

真尋の視界が徐々に回復すると、そこには頭部から雄牛の角めいたものをはやしたクー子が、真尋をかばうように眼前に立っている姿が最初に見えた。次に突き出された両手、その先に赤い円形のバリアのような壁、その隙間から見える、クー子の破壊と異なり「元から何も存在しなかったかのよう」に「消し飛ばされた校舎のパーツと、未だ残存する階段と三階の廊下。

やがて音が回復するころには、真尋は上空にたたずむ相手の存在を視界に入れた。

それは端的に言えば騎士だった。銀色に鈍く輝くそのシルエットは中世騎士の大柄な甲冑のようであり、しかしその様態はどう見ても華奢な女性でも中に入っていそうなくらいには細い。そんなシルエットが翼をもち、また右手に光り輝く突撃槍を構えているのだから、いよいよもって真尋の夢は世の限界を超えている。アンドロイドの登場の時点でも既に相当だが、このファンタジー感マシマシの有様はいかんともしがたい。

「ヴァルキリー？ ……まあ幻夢境だし、少年が拷問される前に目撃してもおかしくはないか」

「は？ いや、っていうかヴァルキリー？」

「はい。ヴァルキリー。評価値とか知らないけど、間違いなく戦乙女」「ひよ……？ いや、北欧の戦乙女ってのはわかるんだが、なんでそんなものが俺の夢の中に……？ って、いや、そこはなんとなくわかった」

おそらくだが、まさに真尋の危機察知能力を発動させないためのトランプとして、真尋のイメージを媒体に作られたのだろう。実際、クー子が動いていなければ「じゅわっと」蒸発していただろうことは確実である。

そもそも戦乙女、ヴァルキリーとは由来を北欧神話にもつ存在であり、概略だけ掻い摘めば「英雄の魂を回収することを専門とする天使」のようなものである。確かにクトウルフらしさは欠片も関係をにお

わせないが、まあこの立地——現世における「地上の神々」が緊急避難的に住んでいるこの場所であれば、目撃していてもおかしくはないかもしれない。

真尋のその予想が真実かどうかはともかく、クー子はいっになく真剣な声を出す。

「敵もきつと、あれが最高戦力。少年、さすがに私も負けるかも」

「マジでか？　今までの状況を見てるとそうでもなさそうだが……」

「少年が私を『詠唱して』使えば余裕だろうけど、そのかわりたぶん少年も巻き込まれる」

「だったら使わない方が賢明か……」

「というわけで足止めするから、少年は先に行くべし」

頼むと頭を下げると、やはり得意げに「ぶいっ」とピースサインを突き出すクー子。挙動の一瞬一瞬は完全に小さい女の子そのものだが、ことこの状況に至っては頼もしい限りである。背を向け真尋は、いまだちりちりと音を立てつつも全くの無傷の、強度だけ残る階段を駆け上る。

真尋が3階廊下に立つと、その瞬間に奥の教室の明かりが点滅する。まるで真尋に「こちらに來い」とでも言っているかのような様に、不思議と彼は苦笑いが浮かぶ。やがてそれを何度か繰り返し、目の前には真尋たちのクラスの教室。ついに消灯しなくなった教室こそが、この学校においてなにがしか仕掛けられているものなのだろう。真尋は家から持ってきたフォークを取り出すとおそろる扉に手をかける。少なからずクー子が戦闘中である今、戦えるのは真尋本人のみである。もともとの振り出しに戻ったと言えるかもしれないが、しかしてその先にシヨゴスがいらないことを祈りつつ、真尋は扉を開け——そして、絶望した。

「まひ……、ま……、」

「——っ、そういうことかよっ」

眼前の光景に、真尋は納得と同時に猛烈な自殺衝動にかられた。その場には誰もいなかった。ただただ椅子と机と、見覚えのあるような教室があるのみだった。——そこに倒れる龍子の死体を除いて。

そして、その死体の有様をみれば、なぜあそこまでシヨゴスが闊歩していたのかという事実にも説明がつく。まず最初に目につくのは切断された龍子の首だ。切断面から奇怪な緑色の粘液をまき散らす人間の右手めいた物体をはやし、頭を側面に向け引きずるように蠢く。周囲を見回すためなのか、上方、つまり頭の左側の目玉だけが「伸びて」、くるくると周囲を見回している。それは既に首単体で別な生き物と言っても過言でない有様だ。おまけに胴体は胴体で服を中心に亀裂が走り、強大なタコのような、と形容できるシルエットへと変貌していた。

真尋は龍子のその姿を見て確信した。真尋のこの夢に出てきた存在は、クー子やノーデンスを除き「すべからく」シヨゴスであったのだ。だからあれほどの数が存在したのだと。真尋をただ狂わせるために、彼の体感において数か月もの間、シヨゴスたちは一種の茶番を演じていたのだ。さらにこのシヨゴスはクー子と同様に真尋の夢の中に召喚された本物のシヨゴスであるのだと。

だが、そんなこと真尋にとってはどうでもいい。些末な問題だ。彼にとって一番重要なのは、ただただ眼前の彼女の姿と、己がそれに対して為さねばならぬだろう事柄に関してである。

「俺に、アンタをまた殺せっていうのか……？」

すべての希望が断たれたような声を上げ、真尋は膝をついた。眼前に蠢く龍子の首だったものと、胴体。既に双方ともにシヨゴスらしい挙動をしているが、しかして一方で元になった人物の個我を踏襲している。首はいまだ「真尋」と彼の名前を呼ぼうと、まるで生前最後の言葉を繰り返している。だが真尋にとっての問題はそこではない。そもそも真尋は龍子と「積極的に」交渉を持たなかった。彼にとって二谷龍子という人物は、意外とその人格を知らない存在なので

ある。にもかかわらず夢の中に投影されているとするならば、それは必ず、誰か別に元になった人物がいるはずなのだ。それが誰かなど、真尋が今更思い出すまでもない。二谷龍子の姉である、彼女。結局最後まで偽名を名乗りとおした彼女。真尋の恋した彼女――。

その成れの果てを殺せというのだ。いくらこれが夢の中であつても、それがたとえ真尋のイメージによつて構成されたそれを模したものであるのだとしても。もう二度と会うことができないだろう彼女を前に、真尋がどうこうすることが出来るわけではない。

真尋の精神は折れていた。こと、この夢の中で龍子の首が落された時点で。彼自身が思い出すことを拒否した記憶、すなわち二谷劉実の首が。無理やりねじり切られたかのごときひしゃげた、顎が物理的に千切れかかった、驚愕に見開かれた白い、あの頭が――。

そんなものを思い出したら、もう二度と真尋は立ち上がれまい。だからこそ、それを怒りに変えていたというのに。こんなものを今更見せつけられれば、嫌でもそれを重ねてしまうではないか――！

「まひろ、さん、にげ――」

嗚呼、そしてこれもまた果てしなく彼にとつて救いがない。例えシヨゴスが変態した姿であつたのだとしても、その踏襲された人格そのものは、生前の彼が知るそれではないようだ。珠緒や健彦を例に考えてみても当然といえは当然か。少なくとも殺された時点で真尋には違和感の欠片も存在しなかったのだから。それはつまり、踏襲された人格は人格で、本人がいたら為すべきことを為しているに過ぎないのだ。

とするならば、眼前の彼女はいかにその根本が異なれど、彼女に他ならない。乾いた笑いが漏れ、真尋は膝から崩れてうつ伏せに倒れた。ひたひたと音をたて、首が、胴体が真尋に寄ってくる。伸びた左目だけが、真尋に逃げろと繰り返す彼女の意識とは別な生命体のように彼の現状を観察している。やがて胴体が開き、中央からイカカタコかあるいはクリオネのそのような口のような器官が展開し、彼の左腕に伸びる。と、口部から黒いタール状の粘液を出し、真尋の左腕を

覆い始めた。おそらくこのまま微動だにしなければ、真尋はあの珠緒のごとく取り込まれてしまうのだろう——いや、それも元をただせばあちらもシヨゴスであったのであろうが。とたんに真尋はそれが不思議とおかしく、己の現状を嗤う。

胸をかきむしる程の自殺衝動は、すなわち今までやってきたことが無意味であったと決定づけられてしまったことへの喪失感もつながつているだろう。真尋はここにきて、彼自身の見通しが甘かったことに気づいた。もしかしたらこの教室に、何かしら鍵と呼べるものがあるのかもしれないが——最後の最期まで、真尋にとって最大の弱点ともいべき彼女の存在が出てこなかった時点で、これを予想しておくべきだったのだ。なにせ本質的には無関係であるにも関わらず、似姿一つでこの様だ。ばかばかしくて自分自身を嘲笑うくらいしか、できることがない。

「にげ、にげ、て——、まひろ、ろ、さん、まひろ、さん、」

「……本物のアンタも、同じ状況ならそういうことを言ってくれるのかな」

いや、状況次第ではきつとそんなセンチメンタルなことを言っていられないような再登場を果たすのだろうか、それでも真尋は、本物の彼女の首がねじり切られた後のそれを見ている。彼女の死に様を目撃していない彼が何か知ることはない。しることはないが、それでもなんとなく、自分を生かすために生まれたと豪語した彼女の面影が、眼前のシヨゴスに重なった。

「正直もう疲れたんだけどな。だけど、少しくらいは、何か反抗しないといけないよな。アンタに顔向けできない」

自虐しながら、真尋は仰向けになりながら、右手にもったフォークを左腕に振り下ろした——この時点で真尋は既に正気ではない。形式上の反抗として、「取り込まれつつある自分の左腕」を切断ないし消し飛ばそうとしていた。

——だからこそ、そこで違和感を覚えた。

振り下ろしたフォークは、確かに真尋の腕を貫通しているはずだった。実際、それだけの威力が放たれ、教室の床に刺さっている。にも

かわらず、真尋の左腕は全くの無傷であった。「腕をフォークが貫通しているのに」無傷である、という、明らかに夢だからこそ成立しうる矛盾がそこに存在した。

「……？ いや、最低でも切り傷くらいは負うだろ、その気で振り下ろしたんだから直撃してなくとも」

実際、真尋の持つ加護は破壊のみに特化しているそれであるからして、自分の人体を守る類の性能は持たない。自分のその加護を用いて自分に攻撃すれば導き出される結果は当然傷を負うはずだ。にもかかわらず、この現状は――。

「――つ、そういうことかつ、聞こえるか！」

何かに気づいた真尋は大声で叫ぶ。と、彼の脳裏に『少年、どうしたし』とクー子の返答が返ってきた。テレパシーの類なのかは知らないが、想像以上にクー子の性能はフィクションとかの神様らしいそれである。

そんな彼女に、真尋は大声で繰り返した。

「俺ごと、殺せ！ 爆発して燃やし尽くせ！」

『？ それでは、少年が危険なのは――』

「それが答えだ。嗚呼どおりで知つてるとか抜かす訳だ、だがそんな問題じゃないだろこれっ。『基本条件は同じ』くらいヒントを与えろっていうんだ」

教室窓の向こうでは、やはり人間には認識できないだろう速度と威力の、猛烈な戦闘が繰り広げられているらしい。時折光の柱や火柱が出現するのが見えるあたりからして、真尋は理解を放棄していた。

既に左腕が自分自身のものでなくなりつつある現状を無視し、真尋はクー子に叫ぶ。と、左手の甲に猛烈な痛みが走る。見れば複数の陣形と重なり合ったような、五芒星をゆがめた形状のサインが爛々と輝いていた。

『別にいいけど、呪文が必要』

「呪文？」

『少年なら知ってるはずだって、ひげの人が言ってた』

まあ知ってるだろう。知っていなければおかしい。これには真尋も一定の納得をしたが、しかし今の真尋がその知識を呼び出すことは難しい。初めて彼が魔術を使ったのは、這い寄る混沌自らの手による導きに従ってのそれである。彼自身が、彼自身の接続されているだろうかの魔導書に手をかけることは、難しいと言え——。

「——？」

真尋の視界に一瞬ノイズが走る。そこには夢で見た誰か、赤いドレスをまとった美しい女性が真尋を見下ろしている。彼女がうすく微笑んだそれを見た瞬間、視界が回復し——。

なぜか、本当になぜか、真尋は「クトウグア召喚の術式」を理解していた。

「——いあつ」

細かい詠唱など不要。神を限定する必要も不要。真尋の脳裏に浮かんだそれは、ノーデンスがかつて「深き者ども」を焼き払う際に使ったそれ、その原文ともいえる膨大な「魔法陣」。その認識のみをもつてして、真尋は左手の甲にフォークを振り下ろした。

瞬間、真尋の眼前にクー子が突然現れた。その彼女は全身を、いつか見たように人体の原型もとどめない程のメルトダウンを発生させる。以前と違うのは、そこから崩れ落ちることもなく、黒々とした骨のみを残し、体のシルエットを中心に淡い光が一瞬ほとばしり——。

真尋の脳回路は、文字通り『焼き切られた』。

神話的探偵(つづ)

「——少年、少年、おなかすいた」

ぺち、ぺち、と頬に軽い痛みともつかないやわらかな威力を感じ、真尋は目を開ける。

視界は真つ暗。体を起こそうとすれど、左腕に力が入らずバランスを崩し、再度仰向けに倒れる感覚がある。頭こそ打ちはしなかったが、倒れた背中の質感はコンクリートよりは柔らかく、しかし石づくりに独特の安定感と冷たさがあった。思考が成立していない真尋だったが、程なくして視界がちらちらと明滅しながら安定すると共に、焼き切れていた思考回路がつながり始める。体感的には酷く気分が悪い。おそらく強制的にテレビの電源でも落とされたようなものであると考える彼ではあるが、だからといって一度死んだ記憶まではそうやすやすと消し去ることはできない。だがそれでも、自身を覗き込むクー子に感謝の言葉を述べる程度には真尋は冷静さを取り戻していた。

「ここは……、見覚えがあるような、ないような」

クー子に起こしてもらいながら、真尋は周囲を見渡す。暗所、薄暗闇に輝く巨大な文明の跡地を連想させるそれは、しかしいかんとも真尋のような人間のサイズを基準に考えれば大きすぎるものである。少なくとも真尋の前方数十メートル先に「はつきりと」見える階段の段差でさえ、ゆうに真尋の身長は越していそうだ。真尋の身長を基準に考えれば、少なくとも5倍以上の開きがそこには存在する。

と、再び真尋の視界が真つ黒に染まる。ふと真尋は、おそらくこれは夢で拷問を受け続けていたことよって下がり切った正気度の影響だろうと判断した。いまだ左腕の感覚がないのも、シヨゴスにとりこまれかけたのが直接の原因か。

「少年、見えてない?」

「……………、大丈夫だ、今は見えてる」

数秒で回復した視界。自分の左腕の状態を見るために視線を下ろしていたのだが、復活した目によって見えた彼自身の服装は、ちよつと想定外のものだった。おそらく顔形そのものは変わっていないだろうが、服装が大いに異なる。それは根底を洋服の形式に合わせたものであるのだが、用いられている概念としては現代的なそれではなく、より古き時代のエッセンスを持ち、しかしかつ現代的な用法を前提としたデザインのものである。白いワイシャツのような形容に困る上着、外見の生地の厚さに反して異様に快適に動き回れそうな違和感を感じさせるパンツ。さらには首にはタイと形容するにはあまりに長く、しかしマフラーとするにはあまりに分厚くというそれが乱雑に縛られ留められている。

「物質的に俺、こつちに突入はしてないよな。とすると物質変換は起こってないだろうし」
「？」

不思議そうに頭を傾げるクー子に、劉実だつたらもつと良い感じのリアクションが返ってくるだろうと思わず苦笑い。彼女にそれを求める話ではないのだが、それでも確かに本人の弁の通り、真尋に不快感を抱かれない、というよりも真尋が接しやすい人格として成立していたのだろう。

もとよりドリームランド、幻夢境とは「潜在意識に存在する」並行世界のようなもの、らしい。異世界、パラレルワールドと言うにはもつと観念的な要素も強く実在性もあやふやではあるが、一定のプロセスを踏むことでこの世界への侵入を可能とする。そもそもこのドリームランドそのものが、知性体の観念によって成り立っているような記述が散見されることから、本来の意味での異世界、パラレルワールドとはまた別なものなのだろう。ともあれこちらの世界に来る際に、眠った状態で突入する方法と覚醒世界から直接突入する方法とがあるのだが、そのうち後者である場合、もともとあった物質世界のその恰好や装備が、ドリームランド基準の文明レベルにおちた状態の物体に置換されうるのだ。ゆえに服装が異なっていることに対し

て真尋はそう考えたのだが、しかしそもそも意識のない状態で、かつ夢の中と断言された以上、実態はおそらく異なるだろう。少なくとも、すぐさま答えが出る問題ではない。

なお真尋はその情報を思い返し、どこか違和感を抱いてはいるが、少なからず基本として知っている情報は彼のリアルクトウルフ神話知識に準じる。

真尋は上半身を起こし、周囲を見渡すと、その場には夥しい数の得体のしれない物体が転がっていた。それは元はおそらく流動性のあるタールめいた液体のような半固形の有形生物であつたろうことが想像できる有様をしていたが、しかし実態として転がっている死体めいたそれらの残骸は、やはり一目で生物という在り方に対してひどく冒瀆的な姿かたちをなしていた。たとえば有形の物体と化しているうちの一体は大型の皮膜の内側に筋繊維を編んで作り上げられたような骨格を模した何かがあり、それが口を開いて牙を持ちうめき声でもあげているかのような形状にその穴を歪めており、また別な個体に関してはチープな映画のモンスターののような顎を持つ、頭の上半分がなくひたひたと液体が垂れているそれで胴体に関しては人体を裏返しにしたかのように内臓などがてらてらと光っており、しかし実際のところその内臓さえも末端のパーツに行くにしたがって部分部分が筋繊維のようなものが寄り集まって編まれたものであることが明らかであり、それらの正体が一律に同一の生命体であつたろうことを容易に想像させた。

真尋はそのデイトイルについて詳細を想像するよりも先に視線を逸らし、思考を停止した。夢の中ではついぞ不可思議なほどにまでできなかった現実逃避であつたが、もはや生命の危機を直感するほどの猛烈な勢いで視線をそらした真尋である。そしてクー子はその視線を追って「全部死んでる」とぼそりとつぶやいた。

「……………こいつら、夢の中にいた奴らか？」

「たぶん。ヴァルキリーとかはイメージの塊だけど、これとかは別」

「そうかい。……………しかし、ドリームランドを一気に抜けることは出来なかつたか」

「？」

とりあえず逃げるぞ、と立ち上がる真尋はクー子の手を引く。不思議そうに彼の背中を見つめるクー子。真尋はそのまま、彼女が転ばない程度の速度で走り出した。幸か不幸か、視界は安定しはじめている。左腕が使えないことを除けば、意外と真尋の肉体(?)はダメージを負っていないらしかった。

広がる世界は経済成長期のアメリカとバロック建築とをいびつなように合成したような光景だ。地平の果て、空の限界は地下の天井がドーム状にこの場所を覆っていることを認識させる空洞である。そして都市自体は真尋の知る見る限り、やはり人間よりも大きなサイズの生物種に合わせられた構造をしているように見えた。明らかに真尋にとって初見であるべき光景である。実際、彼に見覚えはなかった。

だが——なぜか真尋は、どこに向かえばよいのかという認識があった。

「どうした？」

真尋が直感に従って急ぎ足で移動していると、クー子がどこか納得のいつていない表情であることに気づく。彼の問いに、クー子は「さっきの」とだけ返した。

「なんでアンタに俺を殺させたかって? ……いや、むしろ俺が謎なんだが。あれで予定ならドリームランドそのものから脱出できるはずだったんだが……」

「なんで脱出できる。というか、そもそもなんで死ななかった？」

「あれは、たまたまだろ。七割くらいの確率だろうって思ってた賭けで、まあ、一応勝ったってだけの話だ。前提条件はいくつかあるが、代表的なのは二つだ。敵の行動目的と、夢で出来ることの限界だ」

「限界とは、どういう？」

「とりあえず順番通り説明するが、相手の行動を振り返ったときのことだ。そもそも俺を発狂させるために行動を起こしているのはわかかったんだが、だったらもつと簡単に一度、夢の中で俺を殺してしまえばいいんだ。普通、自分が死んだとか、死ぬほどの痛みとか、それ

だけでも十分に精神的にすり減らされる。肉体が死なない以上、これは最高の拷問と言えるかもしれない。だというのに相手がそれを手段として使ってこなかったってこと。これが最初の違和感だ」

敵の目的が真尋の精神をすり減らし、彼らの意のままに扱えるように弱らせるなり発狂させるなりであろうという推測が、ノーデンスと話した時点の真尋には思い浮かんだ。そこから逆算した結果、しかしだからこそ相手が真尋を殺しにかからないことに違和感が出たともいえる。

「まあ、確信を抱いたのはついさっき？ ショゴスに取り込まれかかってた左腕に、フォーク振り下ろした時だ。あの時、俺の手に対して全くダメージが与えられなかったというか、ぶっちゃけ『手を貫通してるのに切断も何も発生していない』っていうか、ゲームのCGの当たり判定がないやつみたいになって言ってるのわかるか？」

「まあ、とにかく通常ありえない状態だったんだよ。で、そうまでして俺にダメージが入らないとすると、そこから考えられる結論は二つ。一つは、俺は俺自身を傷つけることはできない。もう一つは、相手は俺を傷つけることが出来るがあえて傷つけてない、もしくはデメリツトがある。で、そもそもよくよく考えてみれば——ドリームランドで一度死んだ人間は、二度とこちらに来られなくなる代わりに、現世で意識を覚醒するはずだってことを思い出した」

あくまで書籍準拠の知識なので真尋としても半信半疑ではあったが、しかしそれに該当する方法で現世に帰ることが出来るということだけは、真尋の想像力は確信していた。それ故に上記2条件をクリアした状態で死ぬ方法として、彼はクトウグアを使用することを決意した。

「とりあえずこつちには出てこれたが……。正直アレだな、二度と御免だね。思考が火でぶった切られるって、あんな感じなのかって思った」

「少年、その死にたくないって発想は、普通」

「だろうよ。……まあ、そこまで俺も発狂してなかったってこと

は喜んで良いのかもしれないが、どちらにしても夢の拷問らしきものからは脱出できたんだらうってのはわかる。なんであそこにシヨゴスが転がっていたのかは知らないが……」

おそらくそれに突っ込みを入れ始めると、考えることを止めて保った真尋の正気が一気に削れるだらう故に、真尋はそこで思考をストップした。実際はおぼろげながら予想を立てられなくはないが、既にここは夢の中「ではない」、もう一つの現実世界だ。SANチエツカーさえ持たぬ人の身であれば、その運用は慎重に慎重を重ねるに越したことはない。

ともあれ話している途中で、真尋は視界の端に触手めいたマゼンタ色に輝く何か映ったのを確認して、前方に出るのを中断しクー子と共に隙間から前方を覗いた。そこには角を持つ毛むくじやらの小柄な人間のような生命体、少なくとも文明や知性を持つことがわかる服らしきものを着用した何かが、手に形容しがたい銃のようなクロスボウのような槍のような道具を運搬しつつ、周囲に視線を巡らせていた。パトロールか何かだろうか、真尋はそれを見て一切の正気度喪失を負わずに、その視線がこちらからそれた瞬間を見計らい、側方の小道に走った。

「人間もどきっていうか、亜人種っていうか……。って、いや、明らかにさっきムーンビーストらしきものが見えたような気がするが……。って、いや、おかしくないか？」

咄嗟に逃げ出した真尋であったが、しかし情報を整理して違和感を覚える。先ほどの連中に見つかる何か危険であるということが真尋の中に確信としてあったものの、しかしそれに関連する種族は、つまり「ムーンビースト」ないし連中の奴隷であるところの「レンの人間もどき」ないし、それら共に這い寄る混沌に従属している生命体には違いない。であるならば本来ならば真尋に危害を加えることはできない、あるいは危害を加えうる可能性があるなら一目散に退散するはずであるが、ならばこの状況は何が違うのだろうか。

「這い寄る混沌の気が変わって俺を取り込むことにした……。ならばわざわざドリームランドまで出向いて色々やる必要はないだらうし。

とすると、ムーンビーストには俺の知らない何かがあるってことか？」

「——ッ、少年っ」

ぐ、とクー子が腕を引き真尋の足を止める。次の瞬間、眼前にどきりと「何かが」落下してきた。それは明らかに真尋が本来なら足を踏み出していたであろう場所におり、かつ振り上げた腕がまるで人間の首でも掴んでそのまま地面に背中から押し倒すような、そのような動きをしていたところまでは真尋にはわかった。この時点で、真尋はなぜこのタイミングで視界が暗転しないのかと心底思った。思ったところで実際視界が暗転すれば窮地そのものなので、まったくもって笑うことができないのだが。

それは立ち上がる。姿はおおよそ三、四メートルほど。逆関節の足を持った白い胴体、しかし全体をみれば不思議と人間を連想させる。もっともその手足の先端が三十センチ以上の長さを誇る触手めいたものであったり、全身に黒い刺青のような文様のようなものが彫り込まれていたりする。立ち上がった姿で見れば、頭部に該当する個所は女性人体のとある局所を思わせる裂け方かつ開口部からはドレッドヘアのごとくマゼンタ色に発光する紙のような舌のような触手のようなものが何本も垂れている。かつ総じて重量感を感じさせるその形態は、しかして本来のムーンビーストと形容するには違和感のある様相をしていた。

「っ!?!」

開口部が更に開き、その奥から咆哮するかの声が聞こえる。と同時に、周囲からざわざわと蠢く音やささやくような声が聞こえる。明らかにその動きは真尋たちの存在を周囲に知らせる声に違いあるまい。と、眼前の巨体は巨体に見合わぬ速度で腕を振り上げ、猛烈な勢いで真尋たちめがけて振り下ろす。咄嗟に飛びのく真尋と、彼をかばうように前に立つクー子。クー子はその触手めいた腕を受け止めると同時に、彼女の足元の古代コンクリートの地面にひびが入った。

「な、な、ななな、な——」

「エリート」

ろれつが回らない真尋に対し、クー子は特に何も感想がないのか、
淡々と言う。

「使徒。遣い。改造種。しいて言うなら月獣人^{げつじゆうじん}——はううつ」

「……そうかい」

少なくとも真尋の持ちうる知識の外にある存在であることは十分に理解できた。おそらく本来のムーンビーストの強化された存在であるということはわかったのだが、しかしてそれ故に全く対策の立てようがない。このままぎりぎりとしてクー子が力比べを続けていてもそのうち相手の奴隷に囲まれるだろうし、そうはいつでも真尋たちが直接この月獣人と戦って逃げられるかというのも疑問といえれば疑問である。既に両手を発火させて殴り合いを始めているが、相手は名状しがたい鎌のような何かを振り下ろして、クー子と互角の様子である。

クー子、いや、クトウグアを使うか——。ノーデンスの言葉を思い出す真尋。真尋の場合、二回が限界と言っていたか。ならばもはやこの場において、使うなら今しかあるまい。真尋が懐を探ると、案の定というべきかフォークらしきものがそこには存在した。それは二股の、ややさびた金属の、かなり古い型のものようである。ともあれそれを構え、だらりと垂れた左手の甲を見る。が、ちょうどそのタイミングで真尋の想像力は、とてつもなく嫌な予感を覚えた。ありていに言って、彼自身がクー子に焼却されるイメージだ。いや、確かに考えればこの場で使う以上それは必須で、かつクー子によって真尋が殺されるので現実世界に帰ることができるわけであるが、しかしそういう類の確信ではない、もつと根本的な死を予感させる直感である。そして真尋は気づいた。そもそもノーデンスは人間基準に合わせて物を考えることが不得手なのだ。だから人間の姿に化身して真尋の前に現れたのだらうとする。そこから考えれば「二回は限界」という言葉の意味を、より深く考える必要がある。それはつまり「二回以上は撃てない」という意味ではなく「二回撃ったら死ぬ」という類のニュアンスだったのではないかと。

「どうもそつちが正解っぽいな」

そしてその考えに一律確信を得て、彼は周囲を見回した。集まってくるそれらは、彼が今まで見てきたどの神性、どの神話生物の類と比べても彼の正気度を削るに値しない。あくまで人間のシルエツトではなく、人間ベースの要素に獣の要素を足し引きしているからか。しかして周囲一帯を覆う数はゆうに二十は超えそうで、これくらいの数の存在が手に槍のようなものを構えている様は、狂気とは別種の命の危険を真尋に感じさせた。

瞬間、真尋は考える。現状を打破する方法として一番最適なものは

「……ッ、飛べるかアンタ！」

月獣人と互いに異種格闘技戦のような有様となっているクー子に真尋は叫ぶ。と、クー子は首を「百八十度」回転させて後ろを向き「ぎりぎり」とだけ返し、また戻した。瞬間真尋はクー子の背後に無数の悪魔のような幻覚を見たような気がしたが、きつと気のせいである。しかし彼の叫びに何をしたいのかを察したのか、クー子は相手を蹴り飛ばして真尋の方に急いで駆けてきた。そのまま彼の身体を抱きしめ、耳元でささやく。

「今度は、吐かないで」

「……善処する」

次の瞬間、彼女の足が「爆発した」。いや、以前から真尋も本当は察していたのだ、例によって彼女の足はメルトダウンするかのようにならぬ光し輪郭があいまいに消失しながら、そのすべての肉であったろう個所を燃料として発動し空中へ飛んでいたことを。が、しかしそこまで真尋の想像力は楽観的ではない。改造種、とか言っていた時点でこの程度、何らかの得体のしれない方法で対応してくるだろうという予想があった。事実、下方から「巨大なコウモリのような羽根をはやし」、月獣人は飛び上がりこちらに向かってくる。距離にして二十メートルはあるかないか。速度的には向こうの方がやや早いといえるかもしれないが、この状態でクー子に戦闘をさせることが無謀であることくらい、真尋も十分理解している。となると必然、右腕しか使えない真尋がフォークを構えて戦うことになるだろうという前提で、彼は

そつと旧いフォークを取り出し――。

「――つ、つて、できるかつ!? ふぎけんな、高校生なめん
なっ」

クー子の風圧に負け、手元からフォークがあらぬ方向に飛び去ってしまった。それは月獣人の身体にぶつかると、そのまま適当な方向に落下していく。武装が完全になくなってしまった真尋であるが故に、対応する方法が全くない。さすがにこの状況は完全に詰みといえた。

――真尋の脳裏に頭痛が走り、一瞬、何かのイメージが映る。その実態をとらえるよりも先に、彼らの後方に「すすけた黄色い外套をまとった」何かが、月獣人を殴り飛ばした。

「――つ」

ちらり、とその頭まで被った外套から、赤い視線が真尋たちに向けられる。真尋の脳裏にはこの状況でこの場にいることの妥当性を無視して、既に脳裏には見たことも聞いたこともない戯曲が流れている。仮面をつけた王、黄衣の様相は間違いなく外宇宙が神格の一つであろうし、彼の正気度を削るものであり、そもそも真尋自身その戯曲を見たことも聞いたこともないのだが、どこからともなく彼の知識に入り込んでいる以上は死者の書に記載があるのだろう。ともあれ、そんな金縛りにあったような真尋の頭上で、クー子は頷いた。

「よろしく」

真つ黒な、五本あるトカゲのような指のうち親指を立て、背を向ける黄衣の何者か。それは下方から再び上昇してきた月獣人に向かい、飛び蹴りを決めそのまま街に落下していった。破壊された建物の破片が飛び散り、煙が上がる。

「少年、どつち?」

「……あ? あー、あ、ちよつと待ってる」

下方、未だ何者か覚醒世界にあってはならない異形の存在が対決を続ける中、真尋はこの地下空間らしき場所の全域を俯瞰して考える。ある程度の発展した文明がかつてこの地に存在したことを思い起こ

させる場所でありながら、しかし町全体の構造はかなり区画割りされており、似たような風景が続く。土地勘のないものが一目見て、何をどう街の構造を把握できるかという話ではある。そもそも真尋がここに来たのは初めてであるのだから、あくまでも直感に従ってどっち、と指さすくらいしかできようはずもない。

だが、真尋は頭を押さえながら、確信をもって指をさした。

「あの、緑色の棟のところに、後で」

「後で？」

「準備がいる。蜂蜜酒がいる」

真尋本人は気づいていなかったが、その時、彼の喉から出ていた声は「普段の彼の声とは完全に異なった」それであった。

神話的接近遭遇

真尋の指示に従い、まったくもって他の道同様の通りにしか見えな
い場所で降りるクー子たち。と、真尋はそのままあけつびろげに開
きっぱなしの扉の中に入っていく、奥の棚をあさり始めた。明らかに
普段の真尋らしからぬ行動であり、さしものクー子もついさっきまで
の様子と異なることから、いぶかし気な表情であった。しかし数秒も
経たず、金属製の樽のような何かを引きずり出した彼は、それを引き
ずりながらクー子の元に歩いていく。

「開封する必要がある。あと杯替わりが……」

頭に痛みを覚えているのか額を抑えふらつきながらも、しかし真尋
は黙々と目的と向かう場所を口にし、それぞれの場所でおそらく適切
だと思われる行動をとっていた。まるでそう、見知った、見慣れた、自
分の縄張りとはまではいわないがそれでも土地勘のある場所で動いて
いるかのような、そういった効率の良さがあった。「後で行く」と真尋
が指定した緑の塔の前に来る頃には、彼は背中に身長ほどある大きな
棒と、表面に名状しがたい文様の彫り込まれたこれまた身長ほどある
大きな瓶というべきか缶というべきか。内部にはありつたけの黄系
の液体が注ぎ込まれており、わずかに漂うアルコールの刺激臭が鼻を
つく。なおそんな彼の懐には数本、古い型のフォークのような何かが
発掘され装備されていた。

ちなみに基本的に移動については、クー子が真尋と酒と両方を別個
に抱えるという、なんともいじめめのような構図であったことを一応明
記しておく。

と、そんな真尋の手元を見て、クー子は不思議そうに尋ねた。

「少年、なんでそれ？」

「どうした？」

「なんで、その器選んだ？」

「でかいからだっただが……。何か、まずかったか？」

「だってそれ、中身入ってなかったけど、脳缶」

真尋は思わず嘔き出した。あまりの衝撃に手元のそれを倒し、その場で蹲って何度も咳き込む。さしものいささか正気を失っているような様子の彼であつても、クー子によって明かされたその事実はいかんとも受け入れがたかつたらしい。多少落ち着きを取り戻し、缶？が割れていないことを確認してから、クー子に問いかける。

そもそも脳缶とは、とある異星の種族が友好的な人間に対して、低コスト低リスクで宇宙空間を移動する際に用いる道具の一つでもある。端的に言えば脳みそを媒体の内部に保管することで、安全に宇宙空間を運ぶ装置である。内部の脳はといえば、外宇宙の映像なども無問題で知覚することが出来、また原文の記載こそないもののコミュニケーションをとる方法さえ用意されているとみるべきか。もつとも文献に記載されている情報元をたどれば、このクリアケースのようなパーツが存在すること自体色々と微細事実が異なっているものがあるのだが。

「で、これ、脳缶？」

「はい」

「いや、待ってくれ。普通、人間ベースで考えたらこの大きさは明らかにおかしいよな？ 人間の頭のサイズどころの大きさじゃないぞこれ」

「答えはシンプル。別に、人間用だとは言っていない」

「——ッ、止めよう」

瞬間、何かの真実に到達しかけた真尋は現実から目を逸らした。

眼前、見上げる緑の壁面は、四方歩けど隙間のようなものは存在しない。扉もなく、窓もなく、穴もない完全な壁面に見える。そんな壁を何度か叩き、真尋は何かを探しているようだ。

「少年？」

「少年」

「……………少年っ」

「熱っ！」

やはり先ほどから様子のおかしな真尋である。声は既にもとに戻っているが、クー子に蜜酒を手渡した後は、ひたすらにこの様子。時折頭を抱えながら動く様は何か毒電波でも受信したか、あるいはすでに気が狂ってしまったかといった様子である。クー子にしてみれば真尋の状態が自身の化身存続に関わる部分も大きいためか、軽く真尋の頬にぱんちした。

「な、なんだ、どうした？　というか本当に熱いぞアンタ。身体の中にフェニックスさんいるんじゃないか？」

「それはどうでもいい……………？　まって、最後の意味が分からない」

「すまん、妄言だから流してくれ。で、どうした？」

「壁、壊す？」

クー子の言葉に、真尋は頭を抱えた。

「いや、確かに壊してくれるとありがたいがたくはあるんだが、ただなあ……………」

「何か問題？」

「あー、そうだな。ここ、確か建物全体で『召喚のための魔法陣』になってるんだよ」

突然の真尋の発言に、クー子は頭を傾げる。

「だからちゃんとした入り口を探して破壊するのが一番安全なんだが

—————

「少年、色々飛ばしすぎ。説明して」

「説明？」

「とかさつきから、少年、おかしい。ここ初めてくる場所なら、もっと迷子になったりしてはるはず」

「……………、あー、こう言うど変かもしれないが」

クー子に前置きしながら、真尋は塔を見上げる。

「夢で、ここの中に入ったような、気がする」

「夢？」

「ああ、夢。最近、こういう景色の中をひたすら逃げる夢を見てるん

だ。……で、なんというか、実際ここまで夢の通りにいろいろと準備することに成功した以上、俺のみてた夢が単なる脳みそが作り出した潜在意識による記憶の整理だとか、そういうのを基盤とするものじゃないと考えてる」

それにクトウルフだと大体、夢つて毒電波受信する定番だし。苦笑いしながら断言する真尋だが、やはり妄言の類だと自覚があるのだろう。と、上を見上げてみるとふと、何かに気づく。クー子に頼みそのまま上空へ行き、塔の頂上に下ろしてもらう。と、そのままこれまた平面の、妙に摩擦の高い地面に顔を寄せて横から観察する。数秒とかからず「ビンゴ」と声を上げた。そのまま真尋は数歩歩き、先ほど回収したフォークをそこに引っかけ、弾き飛ばす。明らかに物理的にパワーが足りないところであるが、そこについてはもはや真尋も慣れ始めているので、今更動揺はしない。

果たしてそこにあったものは、今までの文明的な進歩を感じさせない程に古代的な魔法陣めいた文様のような、パズルのような何かだ。しいて言えばスライドパズルである。が、真尋はそれを数秒眺め「六回だな」と言い放ち、まさに有言実行で完成させた。やはり完成したそれは魔法陣めいたもので、さらに言えばそれが出来上がった瞬間、真尋とクー子の身体は「玉虫色の光に包まれ」、おそらくは塔の内部に転移させられた。そこは外見の人工物っぽさと一切無縁な、玉形の、緑色の筋肉がひしめき合う空間であり、さらに言えばその表面に黒々とした刺青のような魔法陣のようなものが走っている。奇跡的にも絶叫を上げるのみにとどまった真尋と、そんな彼が何をするのか興味津々といった様子のクー子。はたから見ると完全に小さい女の子な彼女であるが、やはりここにおいて真尋は頭を押さえ、普段の彼らしからぬ様子に逆戻りしていた。

何事か、それこそ日本語でない言葉を唱えながら、内部に走る文様の中心部に蜂蜜酒の入った脳缶を置き、何事か呪文を唱える。いや、それは呪文なのかは定かではない。おそらくそれを口に行っている真尋でさえ、その正体について察してはいないだろう。果たして、建

物の緑の肉の束の内から、その繊維の奥が「裂け」真つ黒な空間が壁のいずこかに発生する。さらにその向こうから、暴風を伴ってなにかの生命体が現れた。

それは全体としては、羽蟻が人間大のサイズに巨大化したようなシルエットをしていた。もつとも顔は骸骨化した、フィクションなどに出てくる龍を連想する。背中に生える羽根は昆虫類のそれではなくやはりドラゴンのようなものであり、ただし頭、胸、腹という構成がどこか蟻のようであった。よく見ればその手もまたトカゲなどの爬虫類種の進化系譜の延長上に存在するかのような鱗に覆われた特徴的な形状で、まず間違いなくこの世のものとも思えない有様である。気持ち悪さなどとは別なベクトルとして、その実在を一目で不思議と認めたくないような、そういった文明に根差した違和感と嫌悪感が存在する。

「少年？」
「……………」

そして真尋は、猛烈に口を開きたくなかった。言い知れぬ違和感と、吐き気こそ催していないが喉から意味のある言葉を発すること、彼の本能が拒否している。何度か真尋に声をかけ、反応されないのを見て少し悲しそうなクー子には申し訳ないが、それでもかたくなに真尋の意志は言語を発することを拒否していた。当然のように、これが一種の発狂状態であると察している真尋だが、残念ながらそれを伝えるすべはない。もつとも真尋が何をしないでも、既にこの場所のシステムは彼らが無かするまでもなく自動的に動作しているのだが。

降り立ったその怪物——バイアクヘーと呼ばれる神話生物は、眼前の脳缶を大きな口を開けて飲み込む。腹がそれで物理的に膨れたりと言ったこともなく、明らかに質量保存の法則を無視した光景であるが、まあ四次元ポケットか何かだろうと、卑近な例えを出すことで真尋は自らが正気を保護する。そしてバイアクヘーはその場で羽根を倒し、背を地面に添わせるよう伸ばし、まるで真尋とクー子に「乗れ」とでもいつているかのような体勢へと変化した。ばきばきと、背中からまるでハンドルか何かのように、鱗のような角のような何か

生える。

「……」

言葉はしゃべらずとも、バイアクヘーを指さしながらクー子に視線を送る真尋。意図は伝わったのか、やはり寂しそうなままクー子は前に乗る。真尋はその後ろから、彼女を後ろから抱きしめるような体勢で座った。単純にこの神話生物の「移動速度」が読めず、下手をするとかクー子が振り落とされるのではと危惧したからこそその配置である。

二人が乗ったことを確認すると、バイアクヘーは立ち上がり、飛び上がる。やはりその体勢が傾くとバランスをとるのが難しく、案の定クー子は振り落とされそうになっていた。抱きすくめるような体勢のまま踏ん張る真尋と、それに背を預けながら必死にハンドル(?)をつかむクー子。やがて二人は、もともとバイアクヘーが侵入してきた黒い孔に落ちる――。

そして真尋の体感では、次の瞬間に体に猛烈な痛みを覚え、そして全員、雨の降る森の中で倒れていた。

「――は？」

おそらく孔の中に入った瞬間、真尋たちの身体は光の速度を超えた移動に巻き込まれたのだろうという事実は認識していた。認識していたのだが、いや、そういう問題ではない。

眼前、異様に背の高い木々が生い茂る森の中。目の前には見事に「二等分」に分割され、ぴくぴくと蠢くバイアクヘーの姿。口から泡のかわりに白い粥のようなものを吹いているが、ひよっとしたら吐しゃ物だろうか。分割された身体からは黄緑色のどろりとした液体が噴射されており、未だそれが真尋の身体にもかかっている。

左腕が使えない関係もあり無理をして体を起こす真尋。みれば、やはり地面に横たわりながらも、顔をしかめつつ立ち上がろうとしているクー子の姿。と、右腕のバランスが崩れそのまま、どしゃり、と再び仰向けに倒れる。ちかちかと忘れていたかのように視界が明滅す

る中、彼の耳には、深い男性の声が聞こえた。

『残念だが、その脱出方法は一度体験済でな。対策はとられている、というわけだ』

真尋の視界の端に、わずかに巨大な獅子か虎かの、「真っ黒な」腕が映る。と、それが姿を消したかと思えば、かつかつとこちらに足を向ける男の姿が一つに「入れ替わる」。睨むように見上げる真尋。すらりとした長身はやせていながらも筋肉質。浅黒い肌にもまとうは白い外套。かなり古いどこかの民族の装束であろう、要所要所、例えば首などに金細工が施されている。頭はほぼ刈りあげられており、後ろに流す茶髪は縛られている。目元には目を強調するような、壁画めいた隈取は、これまた古い印象を与えさせた。

その様相は真尋に嫌でも古代エジプトの雰囲気を感じ起こさせる。そして彼の想像力は、彼の望むのと望まざるとに関わらず結論を導き出した。

「しかしそなたもまた、十全に育った育った。結構結構、改めて我が糧となるが良い」

「——アンタは、っ、」

男は尊大に、しかしどこか誇らしげに叫んだ。

「——我は古き王よ！ 最も古き、『ただ一つの』闇を照らせし者！ ネフレンⅡカの名、知らぬとは言わせぬぞ」

結局、這い寄る混沌じやないかと叫びかけ、しかし真尋は、眼前の男に対してどこか違和感を抱いた。

虚飾 VS 偽史

這い寄る混沌、ニヤルラトホテプの化身にいくつか種類があるが、そのうちの一つに暗黒のファラオと呼ばれるものがある。とはいえど何故ファラオなのかということについては、そもそもまず這い寄る混沌とエジプトのつながりについての基礎情報が必要となるだろう。かつて古代エジプト文明において、とある王が邪教に入れ込んだとされる。それは無貌の神と呼ばれる、色々と表現を省略すれば顔のないスフィンクスのような得体のしれない怪物であったのだが、その存在を神と崇め奉っていたらしい。それまでの既存のエジプトにおける宗教的なそれを無視し、かの王はすべての神をそれに帰依させようとした。ここで問題になってくるのは、そもそもその神がいかにも恐ろしい存在であるかということだが、その崇拜のための儀式や様式が、ことごとく忌まわしくかつ邪悪であったことだ。もつとも有名な話としては、末期における百人ほどの生贄を用いた冒瀆的儀式と、それにより召喚した這い寄る混沌より授かった未来予知により、自身が生き埋めにされた壁面一帯に冒瀆的なまでに夥しいほどの未来絵図――それこそ人類が辿るであろう未来の歴史から崩壊の歴史まで――を書き記したそれであろう。大前提として、そもそもかの這い寄る混沌を崇拜している時点で正気とは言い難く、しかし結果として、のちの世にそのファラオ、ネフレンカカの姿を用いて現れる程度には、這い寄る混沌に気に入られているとみるべきか。これについては説がいくつか分かれており、這い寄る混沌がファラオとして君臨していたのか、あるいはまた別のものなのかというところについて、未だ定かではない。

そしてその肝心のネフレンカカこと暗黒のファラオであるが。

「つて、いやアンタ完全に創作だろ。史実にはいないだろつてのっ」

真尋のこの指摘がすべてを物語っている。創作にいわく、このファ

ラオは第三王朝末から第四王朝頭にかけて存在したとされるが、現在に至るまで関連する文献は発見されていない上に年代が一致しようもなく、また政治面で見ても存在しうる可能性がない。まあ、そもそも出典が出典であるからして実在非実在についてはまた別なものなのだろうということではあるが（実際、ンガイの森のように世界史など事実にしり合わせれば矛盾するものも多く存在する）、だからといって創作の人物そのものの名前を名乗られてもということではある。いや、相手がニヤルラトホテプであるのだからその辺りは問答無用でなんでもありの可能性も高いのだが、ことはそういう問題ではないだろう。現状、ドリームランドに落ちている自身の境遇と合わせて、現実感が薄れている。

ただ、薄れているかどうかはこの場合、問題ではないのだが。

起き上がると、クー子は右手を灼熱のごとく燃やし、あるいはプラズマ化しながら殴りかかる。一方かのファラオはその一撃を、自身の人体に「物理的に」孔をあけることで回避した。腹の部分に空いた大きな穴は、背後の空間そのものに通じているが、映像としてはフィルムからくりぬかれた下手な合成映像技術のような仕上がりである。これが映像フィルムなどであればチープの一言だが、現実そんな光景が起きればそれこそ逆に正気の世界ではない。腕が貫通するクー子と、とくに余裕のある表情を変えない暗黒のファラオ。そのまま一切合切容赦なく彼女の腹を蹴りつけて遠くに飛ばす。

「面倒な。我は基本的に、面倒は嫌うのだ。これではおちおち準備もできないではないか——」

言いながら腹をなげるファラオ。特に気にするまでもなく完全に埋まった孔に、真尋の表情は固まったまま。そのまま何を思ったか、ファラオは自分の口に入れて。何をするかと思えば、そのまま右手を自分の首から下のほうに引っ張り「そのまま人体を裂いた」。首、胴体から抉れめくれ、そこに現れたのは巨大な瞼のようなものだ。三つある。それらが蠢き、物理的に眼球が存在しようもないにも関わらず当然のように真っ赤な目が真尋たちを見る。そこから涙のような、黄色い粘液がひたひたと溢れ垂れ流れ、ファラオの足元に溜まる。左

手で腹を抑えながら、引きちぎった顎と肉と服とを元の位置に調整する男と、黄色い粘液のようなそれが徐々に何かしらの形を形成している。それは全身に黒い脈が浮かび上がった獅子かハイエナのような巨体であり、また頭部に鳥のような飾りのつけられた黄金のマスクが取り付けられており、なおかつ顔面の部分にはまるで「フィルムをマジックで塗りつぶしたような」異様な合成めいた真っ黒なフィルムターがかかっていた。この段階でいつかのように、真尋は既に自分の認知に対してさえ発狂したバイアスがかかっていると確信。全身レベルには及んでいないものの、あれはそれほどのひどい見た目をしているのかと、ただただ恐ろしく言葉もない。

その獣は飛び上がり、足があらぬ方向に曲がったクー子めがけて飛び掛かった—— 対するクー子は、頭から巨大な牛のような角を生やして頭突きを食らわせる。いや、生やしてなどと簡単な一言で済ましたが、その有様はあまりにもひどい見てくれである。瞬間彼女の頭部胸部が例によってプラズマ化したと思えば、そこから肋骨が数本、すり潰されるように粉々になりながら移動し別な形を形成する様はまるで刀鍛冶か何かを思い起こさせる。完成した角は骨が原材料と思えない程鋭利かつ眩く、そして再生したクー子の頭や顔面の皮膚は、突如生えたその角により無理に引っ張られているのか顔形がややいびつに歪んでいた。

「はううう……い！」

』

角は突き刺さらず、スフィンクスめいた異形の怪物の頭部飾りに激突。金属同士がぶつかり合うような、あるいは刃物と刃物をぶつけ合うような音が響き渡る。スフィンクスは腕を振り下ろす。対するクー子は、胸部からこれまた「肋骨を変化させて」、古代恐竜の牙か何かのようにスフィンクスの胴体に突き刺した。

だがそれで終わるスフィンクスのような怪物ではないだろう。次の瞬間、真尋の視界が暗転したため何が起きているかは分からないが、音的におそらく肋骨の刺さった上半身と下半身とが分裂でもしてまた襲い掛かったのだろう。分裂と表現するには、まるで無理やり肉

を引きちぎったような音やら、血液が噴き出すような音やらが聞こえた気もするが、真尋はそちらについてもはや積極的に考えることを放棄した。

真尋の耳は、徐々にこちらに近づいてくる足音を認識していた。咄嗟に転がり距離をとると、その上方から愉し気な笑い声が聞こえる。「その有様でよく足掻こうと考えるな。まあ嫌いではない。いつの世も『闇を照らせし者』は、かくあれしだ」

発言者の素性を考えれば完全に気まぐれか何かのように思いもするが、しかし直接、這い寄る混沌との邂逅経験がある真尋である。その声色に嘘偽りがなくとも理解している。かのニヤルラトホテプそのものが、人類を意外にも気に入っていることも知っている。だからといってその戯言に付き合うつもりはない。この男は言った。自身の糧となれと。

「——どの道、この場から逃げられないと意味がない」

つぶやく真尋であるが、しかし決してフオークを用いて自殺しようとすることはない。この場所で死ねば現実世界に帰れるはずではあるが、しかしそれを決心するにはことここに至って、彼の脳裏に嫌な推測が立ったからだ。つまるところ生死の境をさまよっている己の肉体であるからして、そんな場所に今のこの精神で戻った場合、果たして生き残ることが出来るか、ということである。ひよつとしたら既に死んでいるかもしれない。その場合ここでの死はつまるところ真尋そのものの死と同義となってしまう。現実がゲームのような救済措置のない、果てのない荒野なのだ。想い人の忠告を胸に、真尋は慎重に選択肢を選んでいた。

「ふむ。仕舞いだな」

だが、そんな声が真尋を思考の世界から現実に戻させる。どしやり、と音が聞こえると同時に、真尋の視界が回復。その場に転がっていたのは、四肢をまるで引きちぎられたようなクロー子の痛ましい姿だった。頭から生えた角も片方引き抜かれており、皮膚が歪み骨が見え、左半分の顔面と皮下組織との間に大きな剥離が起きていた。腕も足も中途半端な位置で壊されており、また喉もつぶされているのか声

もいびつな呼吸音のみが聞こえる。白いワンピースは鮮烈に赤く染まり、真尋の鼻に強烈な鉄の匂いを覚えさせた。

真尋は声を荒げ、ろくに力の入らない体を無理に這って立ち上がりその場から逃げようと走った。だがぐにやり、と何かまるで人間の腕か何かでも踏みつけたような感覚とともにその場に転がる。真尋は自分が何を踏んだかさ見え見ようともしない。見ることさえできない。そんな発想が湧かない。それこそB級ホラー映画の犠牲者でさえ鼻で笑うほどに、恥も外聞もなく、その精神は逃亡を選択していた。いくら内面、理性的な部分でそれを押さえつけようとしても、もはやそれの言うことを聞けるほどに真尋の精神力はなかった。

そんな真尋に、胴体だけにされたクー子が投げつけられる。熱と重量にうめく彼と「少年……、ごめん……」と、喉が再生したのかクー子の弱弱しい声が聞こえた。

「いささか刺激が強すぎたか。許せ。そなたを壊すことが目的ではあるが、怖がらせることが目的ではないのだ」

「あ、あ、あ、アンタ——、アンタ、何が、目的なんだっ」

「むろん、そなたを取り込むことだ。そのためにも我はいくばく、どれほどの時間を『ここで』待ったと思っている」

くつくつと笑いながら、暗黒のファラオは胸に両腕を「突き刺し」開く。そこにはいつか見た、輝く多面体とうごめく異様な数の虫のような何か。まるでそこだけ生物としての法則性が違うようなそれを前に、しかしいつかのように真尋はフォークを握ることが出来なかった。出来るわけもなかった。あの時と違い、真尋は覚悟を決めるだけの精神的な余裕がない。「心の有りようが遷移する」というのは、それを成せるだけの余裕が心にあるからこそだ。そうでない場合の遷移はつまり状況に流され散るに過ぎない。真尋は今に至るまで、ひたすらに心を折られ続けた。最後の最後のダメ押しが、ここまで常に彼に安全をもたらしてきたクー子の大破という現状である。また這い寄る混沌からの、覚悟はしていたが裏切りめいたこの行動もあいまって、真尋の理性が表に出ることはほとほと不可能といえた。

感覚のない左腕が、クー子に押しつぶされている左腕が震え続けて

いる。そんな彼らを押しさえつけるように、例のスフィックスめいた二力が前足で踏んだ。

「な、なんで……、実績があるって言ってたじゃないか」

「少年、ごめん……。ここ、私、苦手かも……。ひげの人もいった」「苦手？」

普段の彼ならありえないだろう責任転嫁に、しかしクー子は実直にも答えを返す。苦手とはいったいどういう意味か。確かに覚醒世界とちがいのこの幻夢境、物質的な破壊よりも観念的な能力の方が影響度がでかいとか、そう言われてしまえば説得力はあるかもしれないが、しかしそれをしてニヤルラトホテブに一度でも痛手を与えたという過去が実際に存在しているらしいのだから、たとえあの大爆発を遣えずとももつと善戦しても良いはずである。

彼の疑問は、意外なところから回答があつた。

「ん？　なんだそなた、知らぬのか」

「知るって、何をだ」

「なるほど、ということとは『それ』の完成度の高さは別な誰かが『作った』からこそか。いくら『死者の書』といえど、完成したそれを作るにはいささか経験が足りないと考えていたが、第三者がということならば納得である——」

止めて！　とクー子が叫ぶ。声音に涙が混じっているような、そんな必死さと悲しさがにじみ出たようなそれを前に、真尋はそれでもあたりが付かない。一体何が問題なのか。いや、そうではない。その事実に気づくことが、この場において明らかに不利な現象を引き起こすという事実を、本能的に認識しているのだろう。知るということは、すなわち『そちら側に出向く』ということとは誰が言った言葉だったか。普段の真尋であるならば、その想像力でもってして真相にたどり着くのは容易であるのだから、むしろ今の状況が不自然であり、そして「そうでなければならぬ」。

だが、眼前に立つ黒き男は、そんな彼らの事情を一切合切考慮しなかった。

「知らぬのなら教えてやろう。偉大なる『先達』として。そもそも——

」

——クトウグアなる独立した神格は、この宇宙には存在せぬのだ。

言葉を聞いたと同時に、真尋の目の前で、クー子の身体が一瞬で「炭化した死体」と化した。

「その火の神格というのは、そもそもがその構成論理に無理があり、また説得力が破綻しているとはいえないだろうか。例えばその理由について知っているか？」

クー子のいた場所にあるのは、もはやただの黒い消し炭のような死体のみ。もとが女性の死体であることはわかるが、人相などについては完全にぐずぐずに砕けており原型をとどめていない。腕回りがごちゃごちゃ色々ついているように見え、体系はうつすらグラマラス、わずかに首元にマフラーのようなものが残り、なぜか胸の中央がうつすら光っている。そんな有様となったクー子に対して、真尋は先ほどの暗黒のフアラオの一言で、至るべきでなかった結論にまで自分の想像力が及んでしまったことを確信した。決して相手に乗せられたわけではなく、しかしそれでも確認するかのように真尋はその言葉に答えた。

「……もともと、クトウグアって存在そのものが、つじつま合わせで定義された邪神だからか？」

真尋の知識からしてそれは、クトウグアそのものについての記述というよりも、そもそもそれはクトウルフ神話における四台元素分類と対立構造そのものについての基礎情報が必要になるかもしれない。

そもクトウルフ神話における世界観というものは、H・P・ラヴクラフト師がしたためた原著たる恐怖小説群を基盤に、複数作家によってその世界観を「なんなら先触れなく」複数作家間で共有し使用することで、一時代の読者たちがその背後関係に共通の神格を見出させることにあるといえた。共通するものは設定ではなく概念であるのだから、そこに設定の体系化は行われず、またぶれが存在することも当然ある。このかなり実験的な試みが成功したかどうかといえ、今日でのかの作家の扱いを鑑みれば想像だに難くない。それに真つ向から

抗うかのように、かの弟子が一人としてオーガスト・ダーレスはこの試みを表向きにした。その際に設定が固まっていなかった、逆に言えばその分未知の領域が大きかったその神々を、分類し体系化する。この折、とある作家の指摘により発生したものがクトウグアだ。

それに直結する分類は、いわゆる四大元素に対応させた分類である。善悪二元論的な分類については別として、火、水、大地、空気、四つに分類し、それぞれ対応する属性が敵対しているとする。その際、定義に存在しなかった火の神格として、新たに創造されたものがクトウグアであるとされている。

実際問題として、真尋の目の前にそのクトウグアが肉体をもつて、また神としての能力や姿もともなうて存在していることから、真尋自身はこの話とは別にクトウグアという存在がれつきとして存在していると考えていた。だが、現状のこれを見るに、事情はいくらか異なるのだろうか。ノーデンズの若い化身は言った。少女はクトウグア未満の化身だと――。

「そもそもかの火の神性そのものについては、その定義に関する情報さえほとんどない状態だ。ただその中においても這い寄る混沌との因縁について――つまるところかの神の住まう森を焼き払ったということについて広く知られている。だが大前提として『そんな事実はどこにもない』。いわゆるンガイの森そのものは存在している事実はない。だが這い寄る混沌は現在同様に警戒をしている。それは何故だ？」

「……事実として全く同一の事件があったわけではないが、それに近い事件が過去に起こっているということか」

「正解だ。嗚呼そうだ、そうであろう、それでこそだ」

心底嬉しそうな声を出すネフレンⅡカに、真尋は全身が怖気立つ。フアラオはそんな真尋に構わず言葉を続ける。

「だがそれもまた、完全に正解とは言い難いところがある。そなたのその思考の結論が『死者の書』に記載されている過去、現在、未来すべての暗黒神話にまつわるそれであったとしてもだ。それを引き出すそなたのバイアスがかかるからこそ、その事実は必ずしもすべての

正解を引き当てるとは限らない」

「何が言いたい」

「例えばそう——クトウグアにまつわる事象が起こったのは、それよりもはるか未来、20世紀に入ってからだ。事細かに語りはしないが、その際に這い寄る混沌と相対したかの『闇を照らせしもの』は、すべての前提をひっくり返す方法を用いたのだ」

この時点の情報で、真尋の想像力は正しくその解答を導き出していた。その情報こそ、クトウグアがクトウグア未満と呼ばれていたその原因。すなわち、クトウグアという存在の「あいまいさ」に直結する。「火の神にまつわる信仰そのものは全くなかったわけではなかったが、いずれも這い寄る混沌を退けるほどの能力を、威力を、存在としての強度を誇るものではなかった。だからこそ、それら全てを束ね、創作にいわくの『クトウグアという存在を再現しうる』術式をくみ上げた

「——！」
おそらくその時点で、その探索者だろう誰かは正気を失ってしまったことだろう。それほどに、なされたことが異常であることを真尋は、真尋の繋がっている魔導書は理解していた。

「——つまり、クトウグアとは『魔術』であって、神ではない、か」
様々な火の神格——おそらくヤマンソなどを含むそれら——

——から、文字通り必要な部分の要素のみを切り出し、つなぎ合わせ、あたかも一つの神であるかのような振る舞いを確定させる。であるならば、詠唱の失敗はつなぎ合わせ、あるいは呼び出す他の神格のバランスを崩すことにつながるのだろう。だからこそクトウグア召喚の方法は非常にリスクが伴っていると言える。つまるところ、クトウグアは逆なのだ。神が先にあり伝承が後についたのではなく。伝承が先行し、それを後追いする形で人為的に形成された存在なのだ。

「虚飾、すなわち我から言わせれば虚飾に他ならない。だからこそ、ここにおいてアレは脆いのだ」

「要するに、観念的な世界だからこそ、もともとの存在の実在性があやふやな、そんな存在だからこそ這い寄る混沌みたいな、形成がしつかりとした神には弱いって、そう言いたいわけだな」

「手間が省けて助かるな」

「だったら、だとしても、だからこそおかしいじゃないか。だったらあのクー子っていうのは、一体何なんだ——いや、違うのか。あれもクトウグアじゃないのか」

眼前の暗黒のファラオは言った。クー子は第三者が作った存在であると。そしてまた真尋が作りうる存在であると。死体を見る真尋。その腕には、腕時計のような、しかしぐずぐずに炭化して燃え尽きているものが取り付けられている。

「独立した神としての存在でない、とするなら……。そもそもあの人格自体は、誰かが意図的に作成した設定みたいなものとか、そういうことか。つまりクトウグアとは全く別な術式で作られた、魔術——」

「あれは、クトウグアの召喚術式『そのもの』だ。有機体の体を成してはいるが、本質は魔法陣の方が近い。しかしこの程度の情報でそこまで答えるに至るのは、やはり素晴らしい。だからこそ——」

暗黒のファラオは真尋を見て、くつくつと笑いながら足を踏み出す。真尋は後ずさるに後ずされない状況だ。身体は既に無貌のスフィンクスによって取り押さえられており、クトウグアだったはずの死体——おそらく真尋が彼女を虚飾によって構成された何かだと認識したせいで変化したものなのだろうそれを見て、猛烈に頭が回転を始める。明らかに真尋にとってさらに不都合な真実を、彼の正気を消し飛ばすだろう想像の結果が導き出されるだろうそれを前にして。

しかし、真尋は——。

「——ふざけてんじゃ、ねえってっ」

先ほどまでの混乱と動揺がウソのように、腹の底にふつつつと、燃えるような怒りを感じた。果たしてそれは何に由来するものか——
——彼を守ったかの存在の敵対に対する事実か、はたまた直前まで自分を守った少女の姿をかたどった何者かを、こんな形で追い詰め消滅させたことに対する義憤か。真尋はそれを判別することさえ放棄して、思考をまわす。例えばこの場で正気を消し飛ばしても良い。何か眼

前の相手に対して、一手、一手を打てなければ――。

このとき、真尋の認識は時間を置き去りにした。彼にとつてのみ、世界がひどく緩やかに回っているように感じられるこれは、それ自体で一つの狂気の世界だ。だが彼はこれを好都合と、己を取り込もうとする相手に対して理性を総動員して考察した。

ネフレンⅡ力は言った。目的は真尋を取り込むことであり、狂わせ壊すことであると。だが恐怖させることは直接の目的としていないとも。また彼は言った。クトウグアの存在について語る際、その事実そのものは過去に存在しなかつたと。だとするならば、そもそも歴史上に存在しないだろうネフレンⅡ力という存在はどう説明をつけられるのか。また、ネフレンⅡ力は言った。己は最も古き「闇を照らせしもの」と。そしてこの存在は、同じ言葉を、一体どういう意味合いで使用したか――。

「――っ」

真尋は胸元からフォークを取り出し、投げつける。その金属には稲妻が走り、電気的な理屈を用いて人間の腕力で放てる速度を超えた加速を始める。ネフレンⅡ力は咄嗟に腕を重ねて胸の中央をかばうような動きを見せる。かつて真尋が対決し決着させた這い寄る混沌の化身をしても、その中核に輝く立体を持っていた。そうであるが故に、おそらくそれが化身の中心部といえるものなのだろうという推測を立てることは簡単だが、だからこそよほどの事情がなければ簡単に一撃を入れさせてくれることもない。

だが、真尋の狙いはそこにはない。相手がひるんだ一瞬で、真尋はクー子だった誰かの死体の「胸の中央に」、残りのフォーク一本を突き刺し、抉った。果たしてそこから現れたものは、ネフレンⅡ力の胸のそれと同様のものではあった。真尋はそれを見て、ひどくうれしそうな、悲しそうな、寂しそうな、こらえたような苦笑いを浮かべた。

「……まさかとは思ったさ。まさか、元がアンタだったとか予想できるわけないだろうっ」

真尋はそれに対してフォークを振り下ろした。刺さったフォークから入った亀裂が、内部の中央に至ると同時に結晶から光が失われ

る。それと同時に、周囲から光が徐々に失われていく。まるで多面体そのものが周囲から光でも吸収しているかのようだ。そしてその変化を前に、無貌のスフィックスも、ネフレンⅡカでさえ後方に飛び、退避する。明らかに真尋の、その手に持っているものに警戒を見せているその有様を前に、真尋は自身の推理が外れていないことを確信した。

やがて暗黒が真尋の背後を支配すると、そこから巨大なシルエツトが出現する。それは硝子か黒板をひつかくような音をならし、発泡スチロールの摩擦するような音の羽ばたきをまき散らす。鱗にまみれた馬のような頭、鳥のような蝙蝠のような翼と胴体にも鱗はびつしりと生えており、またその大きさだけで無貌のスフィックスと同等のサイズ感である。それはそのままスフィックスめがけて襲い掛かる。一方で、しかしネフレンⅡカはそれに加勢することはない。

真尋の背後の暗黒から、もう一つのシルエツトが現れる。頭まで覆う黒い外套はそれだけで魔術師めいているが、その下が明らかに外套と合っていない。黒い革ジャケットとスラックス、白いシャツをまとっていることが見て取れる男は、真尋の少しだけ前に立つと、フード部分を後ろに流した。長い髪を頭の後ろでまとめた、それは美しい男だった。日本人離れた顔立ち、整った印象のある雰囲気はどこか劉実や龍子を想起させる。大体二十代後半から三十代前半くらいか、涼し気な印象を与えるその様は、しかしどこかその超然とした様相に、真尋はひどいデジヤビュを覚える。間違いなく、まず間違いなく、真尋は男が何者かを理解していた。

「ニヤルラトフィス……！」

「——この姿のときは、暗黒の男と呼んでくれ。我が愛しき『最初の』探索者」

聞きなれない、異なる名で呼ぶネフレンⅡカに対して、暗黒の男は——ニヤルラトホテプは、やはり涼し気に、嘲笑うように超然とそこに存在していた。

偽史 VS 混沌

「しかしその名前で呼ばれるのも久しいね。実に百二、三十年ぶりかな？」

「き、き、何故貴様がここに——っ」

涼し気な男の姿をとりながら、見た目にそぐった涼し気な声で微笑む這い寄る混沌に、古のファラオは明らかに動揺している。しかし、それでもなお眼前の相手に怨念のこもった睨みを向けている。眼前の両者の有様を見て、真尋は自身の推測が大きく外れていないことを確信した。

既に真尋を取り込む態勢から通常の姿に戻った暗黒のファラオ。向かい合う暗黒の男。這い寄る混沌の化身が、二体。片方は独立した人格の振る舞いをしており、もう片方は這い寄る混沌本体に依存した振る舞いをしている。これが導き出す結論ならば——。

「まさか『私の制御を外れた』化身が、ここでめきめきと自我を育てているとはね。いや、むしろ『元に戻った』と言うべきかな？」

「ほざけ！ 貴様、我が、我が名を返せ——！」

叫ぶネフレンⅡカは、どこからともなく取り出したステッキを投げつける。それは瞬間巨大な大蛇へと変化した。巨大と言っても、あくまで現実に入りうるサイズ感だろうか、だがアナコンダのようなコブラのような、ひどく形質は形容しがたい。

それに対して這い寄る混沌は、外套の裏から何かを取り出し右手に握る。拳銃のようだ。口径などは何かの映画で見たことがある。ベレッタの8000だったか、真尋のその予想は正しい。慣れた手つきで安全装置を外し、両手で構え狙います。三度、狙撃。的確にそれらが頭部、片目、胴体を射抜く。とくに胴体への狙撃は、真つ赤な血液が猛烈な勢いで噴出したあたりからして心臓でも的確に撃ち抜いたのか。いや、というよりも暗黒の男、すなわち魔女の集会において

冒瀆的な儀式により出現するはずの存在なのだから、何故そんな文明の利器に頼るのかというのも色々謎である。が真尋にちらりとウィンクしてくるあたりからして、ひよつとしたら彼の正気度を減らさないようにと言う配慮なのかもしれない。既にそれ以外の個所ではがりがり削られているところなので今更と言えば今更なのだが、しよせんは邪神の類ゆえ、人間基準でものは考えていまい。

そのまま彼はネフレンⅡカの胸部、頭部も確実に狙撃する。貫通と同時にこちらは真つ黒な血液が噴出するが、しかし徐々に穴が塞がっていくあたりからしてやはり化身の類である。再生途中を狙いすまし、さらに彼はフアラオの喉元をぶち抜いた。

「お……、お……、」

「おのれ、と叫びたいんだろが、やつぱり喉をやられると声帯が再生に引つ張られるから面倒くさいんだよねえ」

「おのれ——！ 貴様が、貴様さえいなければ我が国は！」

怒りのまま叫ぶネフレンⅡカ。表情には先ほどまでの余裕はなく、ただただ激情に支配されている。これがニヤルラトホテプそのもの手による自作自演であるならば完全に嘲笑される対象だが、しかし真尋は事実がどうもそれではないだろうことを理解していた。少なくとも、あのフアラオが放つ怒気は本物である。二谷劉実が真尋に向けた好意が本物であったのと同様に、それは例え這い寄る混沌から発されたものであったとしても一切が嘘偽りないそれだ。対する這い寄る混沌は、どこまでも涼し気に笑っている。

「うん、うん。それでこそ、だ。そうでなければ『私の一部』ではない」「我は————我は断じて『貴様ではない』！ おのれネフ、エル、テイ、テイ！」

ネフレンⅡカの発言は、明らかに物語に対して違反する言葉であり、態度である。これではまるでただの探索者であるが、しかし実際、眼前にいるあの王にとっては事実なのだろう。

「彼女は知らなかったただけだ。そう叫んでは、君に仕えた彼女に対して失礼だろう」

史実に存在しないネフレンⅡカの問題をどう解決するか。そこが、

真尋がかのフアラオと這い寄る混沌が分離し、独立した存在となつて
いると確信した部分であつた。ごくごく短時間の接触であるが、その
振る舞いから導き出される結論として、少なくとも眼前の男は実際に
フアラオであつた存在なのだろうと説明がつけられる。とするなら
ば、わざわざ這い寄る混沌の気が変わったのなら、その化身の体を成
して真尋を取り込みにかかる必要は全くない。何故なら一度、真尋が
取り込まれかけた際はこの本体の影響を受けているとおぼしき涼し
気な声と態度のままだったのだから。ならば何故化身のまま取り込
もうとしているのか。

それは逆説的に、化身が真尋を取り込むことになんらためらいもな
い相手だから。這い寄る混沌の中に、真尋を守ろうという夢野霧子――
つまり二谷劉実が生まれる前の存在であつたから。いや、そう
でもなければ説明がつかないのだ。先ほどの這い寄る混沌の言葉か
らもその裏付けがとれる。すなわちこのネフレンⅡ力は、這い寄る混
沌の化身であるが、這い寄る混沌から独立した化身であるのだろう。
「おつと」
「っ」

這い寄る混沌はそんなネフレンⅡ力を軽く無視して、真尋の前に転
がる死体に目を向けた。

「なるほどね。確かにクトウグアの依り代として使えなくはないだろ
うけど、また無茶をするなあノーデンスも。真尋も中々、精神的にダ
メージを負つただろうに」

「……どつちもだ。クトウグアの化身も、『アンタの化身』にも」
「ん？ 嗚呼、その様子だと『元が誰か』ということについては、気づ
いていそうだね。まあ、とはいえどノーデンスも単に、あの時、眼前
にあつた死体を利用したというだけだろうからね。そこに区別がつ
くほど本体は人間というものを理解してはいないだろう」

SANチエツカーだけでも回収しておこうか、と這い寄る混沌はそ
の死体の腕から、腕時計のような装置を一つ取り出し、息を吹きかけ
た。たちまちそれはうねうねと表面に名状しがたい肉の繊維が編ま
れるような変態を繰り返し、真尋がいつか見たことのある、十面ダイ

スが二つ取り付けられたような装置と化した。

真尋にそれを手渡す這い寄る混沌。腕につけると、からからとダイヤが数回回転する。77、という数字が真尋の脳裏に浮かぶと同時に、ちらちら明滅していた視界が安定した真尋である。ただ左腕の感覚だけは未だに違和感が残った。

「だが、私から言うことは何もないよ。君は大丈夫だろうからね」
「何言ってるんだアンタ」

真尋の疑問に答えるより先に、這い寄る混沌は無貌のスフィンクスに押し倒される。

「——ニャルラトフィスっ！」

「……やれやれ、こっちは相変わらず駄目なようだね。気持ちも分からないではないが、真尋くらい物分かりが良いと個人的にはうれしいが」

這い寄る混沌の化身めがけて、何度も爪と拳を振り下ろすスフィンクス。上半身がぐずぐずに崩れ、真尋の眼前に右腕だけが飛んでくる。既にこの程度では動揺すまいと思う真尋であったが、S A N チェッカーは当然のごとく回転を始める。そのスフィンクスの背後から、全身血まみれの奇怪な生物——這い寄る混沌と同時に現れた、おそらくシヤンタク鳥だろうそれを前に、はじき出された数字は64。やはりというべきか、これの減少速度は一切合切容赦がなかった。

と、その折れ吹き飛ばされた右腕が動き出し、指をぱちんと弾いた。その上方に暗黒のファラオが出したのと同様、巨大な三つの脛が開く。ただこちらの方が明らかにサイズが大きい。人間二人か三人くらいなら容易に飲み込めるくらいの大きさだ。そしてそこから、やはり黄色い粘液めいた涙のようなそれがぼとぼとと零れ落ち、形を成していく。

零れ落ちたそれは、やがて徐々に形を成していく。色が真っ黒に変色したかと思えば、西洋甲冑がベースとなりながらも全体的には日本人武士が装着していそうな鎧。兜の下から真っ黒な長い髪が後ろに流れているそれは女性的でありながら、しかし頬当てで隠れる顔は女性

か男性かは定かではない。燃えるような赤い瞳に長身の姿、腰には刀と背中には火縄銃。黒いマントにはいわゆる歪んだ五芒星、エルダーサインが描かれていた。

明らかに異様な武士——闇將軍とでも呼ぶべきか。それは「火縄銃の原理を無視し」何発も銃弾を連射する。一発一発が大砲のような音であり、それにともなつてか威力も上々。スフィックスの肉をえぐり、またその威力で這い寄る混沌から弾き飛ばす。そしてほぼ次の瞬間には這い寄る混沌も何事もなかったかのように復活して立ち上がり始めているあたりからして、既に現実の光景ではない。真尋の横にあつた腕が未だに残っているあたりからして、もはや正気の世界ではあるまい。なお真尋の脳裏に浮かんだ数値は56。意外にも減少は少なかつたようだ。

「では、後は頼むよ」

『——是非も無し』

やはり声はやや高いが、低く調整された少年のようなそれである。腰から刀も引き抜き、そのままシャンタク鳥と共にスフィックスへ闇將軍は襲い掛かった。

一方の這い寄る混沌は、ネフレンⅡカへ足を踏み出す。背中から翼を生やし、その翼の羽根の礫をもつて攻撃するネフレンⅡカへと、涼し気にそれをかわして狙撃を繰り返す。その狙撃をまた片方の翼で庇い、というのをお互いに繰り返しながら距離を詰める両者。そして真尋に向かう流れ弾に関しては、真尋自身がフォークを適当に振るつて、穂先から「雷を放ち」、飛来するそれらを粉々に蹴散らしていった。「君という存在は。君がやろうとしていたことは、本当にその程度で揺らぐことだったのかな?」

ひたすらに煽り続ける這い寄る混沌と、激昂する暗黒のファアラオ。何が恐ろしいかといえれば這い寄る混沌から放たれるその言葉が、声音が、何故か今まで聞いたことのないほどやさし気なそれであるからだ。やっていること成していることをみれば煽つてるとしか言いようがないのに、これではまるで論してるかのようにさえある。

「違うだろうか? 歴史というのは、過去の誰かの意志を想い次ぐこと

だ。君のその願いは確かに掛け替えがないものだった。その正義は確かにそこに在った。だからこそ、それが正しく残っていないくとも、必ずその願いは次のどこかに伝わり、そして叶えられる」

「——貴様が、貴様がそれを言うか！ 我が名を奪い、名誉を奪い、最愛のかの人までも奪い、嘲笑い貶めた貴様が！」

「地位や名誉は永遠ではない。それは、いつか必ず止まる。栄えたものがいつかは滅ぶように。そしてそれは一人だけが手にできるものだ。だが想いは、願いは、巡り巡って、時には形を変えて多くの、それこそ君が知らなかった何億何京、那由他の彼方まで広く伝わる、かもしれない。伝えようという意志がそこに残る限り、それは一つの宇宙が終わったとしても、いつか、いつの日にか誰かが知り、そしてそれが叶うかもしれない。身近な友達を助けたいという想いでさえも、誰かの死に意味を持たせたいという願いも、君の、正義がなかった世界を作り替えたかったという信念も——」

まるで幻想だ、物語だと真尋は思った。だがしかし、真尋はそれに異を唱える資格はない。他ならない真尋自身が、かつて二谷劉実が彼に抱いたであろう願いを果たし、未だ生き恥をさらしているのだから。気が付けば、真尋の眼前にあったはずの死体は、クー子の姿に戻っていた。五体満足、血に濡れた個所もなく、ただただ穏やかに、すー、すーと寝息を立てている。

「そんなことに、意味が、あるか！」

ネフレンⅡカの叫びに、這い寄る混沌は瞬間外套を手に取り、猛烈な勢いで懐に潜り込み、両足を「薙いだ」。真つ黒な、巨大な何かに変貌したそれがネフレンⅡカの両足を通過すると、もはやそこにあつたかのファラオの下半身は、どろどろのタール状の何かに拘束されていた。

「シヨゴスだど？ 馬鹿な、何故こんな——」

「アレの子供というのが正しいかな。かのアル・アジフに曰く、シヨゴスというのは自然の種族として存在しているわけではないからね」

「何故、何故だ！ 例え貴様がニヤルラトフェイスそのものであつたとしても、貴様は、貴様の肉体は化身でしかない！ 貴様の存在の強度

と、熱意と、その程度に我が怒りが、負けるはずはない！ 貴様と我と、何が違うというのだ—— ああつ！」

両肩から腕を引きちぎった暗黒の男は、そのままネフレンⅡカの額に手を当て。

「それは、いわゆる一つのアレだ—— 企業秘密、というヤツですよ
♪」

まるで劉実のようなことを言いながら、そのまま文字通り「顔面を剥がした」。

真つ黒な孔だけが残ったネフレンⅡカは、黄色い粘液へと変化しその場にどろりと崩れ落ちた。それが徐々に徐々に、這い寄る混沌の足元の影に吸収され、やがて何も残らなかつた。

あなたにできるあらゆること

「やあクー子じゃないか！ 相変わらず、君はこう小さくて仕方ないなあ。まあそういうところが素敵なんだが、食べるもの食べてるかい？ せめて高校生くらいまで大きくなっただけでおかしくない時間が経つてると思うのだが♪」

「……………それ、気にしてるし……………は、はう、はうううう……………」
寝ぼけ眼をこするのように、クー子が起き上がる。一瞬飛びのいた真尋であつたが、何をいうべきか、どうするべきかという思考が回らない。SANチエツカーこそ減っていないものの、気が動転しているのは間違いないのだろう。

そんな彼らに向かい、這い寄る混沌は歩いてくる。と、クー子と目が合うと、彼は彼女のわきの下に手を入れ、高い高いと持ち上げ、くるくる回った。不機嫌そうなクー子だったが、だんだんと目をまわし「はうう」と例によってうめき始める。そんな彼女を下ろす這い寄る混沌。くらくら足がおぼつかないクー子に微笑み、彼は真尋に少しだけ頭を下げた。

「いやしかし、今回もすまないね。事情はなんとなく理解したが、よくぎりぎり私を呼び出す方法を理解したといえる。そういう抜け目のなさは、きちんと成長しているのかもしれないね」

「いや、何、部活動の大会の総評みたいな風に述べてるんだアンタ」
そもそもアンタの不手際が原因じゃないのか、といぶかし気な真尋に、這い寄る混沌は涼し気に微笑み返した。

「まあ、積もる話もあるだろうが、とりあえず帰りながらにしよう。あまり長くいると、勘違いで私たちまで呪われてしまうかもしれないからな」

「呪われ……………？ つて、何だ何だ？」

「少しじっとしていてくれ。何、すぐ終わるさ—— 『躪われたま

え、顕われたまえ。聞き届けよ、この身はその戒めを捨て印を結ぶ者なり』

フードを頭にかけて、這い寄る混沌は真尋の前に立ち、彼の胸元を軽く撫ぜた——— 這い寄る混沌の手が離れた時点で、真尋の胸元には「孔があいていた」。ただ、それは貫通してるといふ類のそれではない。明確に空洞が空いているというよりは、何かこう、ワープホールのようなものが展開されていると表現するべきか。そしてその向こうで、無数の白い文字が暗黒の中をさまよっているのが真尋にはわかった。そのうちの一つを指先でつまみ、真尋たちの眼前に引き抜く。這い寄る混沌。

『汝が印を結ぶ場所へと、彼我を超えて入りたまえ、顕われたまえ、顕われたまえ———』

何かしらの呪文らしきものを詠唱しながら——— 明らかに日本語ではないのだが、不思議と真尋はそれがどういった意味合いを持つのかをなんとなく理解していた——— その呪文を、まるで折り紙でも折るように物理的に変形させていく。やがて鍵のような形になったそれを、しやがみ足元に突き刺し、扉を開くかのように半回転させる。と、鍵が瞬間消失し、真尋と這い寄る混沌の間に、おおむね1メートル半径ほどの、玉虫色の、ぶくぶくと膨れた肉のような風船のような何かがあふれ出した。何を言うでもなく、それが「ありとあらゆる場所をつなぐ」異邦の神であるところのヨグソトスの肉片であることを理解する真尋。SANチェッカーの回転がはじまるが、いつかのように止まる気配はない。

ついてきなさい、と当たり前のように這い寄る混沌はその肉片を踏み潰すように足を踏み込む。と、ずぶずぶと音を立ててその中に吸い込まれる様は、流れる腐敗臭のような独特の匂いも含めてたいそう気持ちが悪いくらい。が、現状他にどうする手立てもなく、クー子の手を引き、ためらいがちにその後が続いた。ずぷり、と、泥の中に足を踏み込むような感覚と共に、真尋の上下左右の感覚が90度ずれる。そのまま次の足を踏み込むより先に、まるで泥沼の中に吸い込まれるよう真尋の身体は深みにはまっていく。思わず目をつむり息を止める真尋。

耳の中にまで泥水が入るような不快感を覚えるが、数秒もせずに空気のある場所に出て、その不快感は影も形もなくなった。

目を開けると、そこは広大な洞窟のような場所だった。道が舗装されているわけではなく、しかし重力という感覚は希薄だ。足を進めようとすると、みよように粘着質な地面であることに気づく。なお足をとられそうになるのは真尋だけで、クー子はぶかぶかと真尋の横に浮いていた。薄暗がり、奥に行けば行くほど何も見えなくなる中、クー子の髪がわずかに光っていることがよくわかる。

「こちらだ」

ランタンを片手に掲げ、真尋の前方先から這い寄る混沌が声をかけた。「少年、ごー」とクー子に背を押され、足をとられながらバランスをぎりぎり保ちつつ真尋は前進していく。這い寄る混沌に並ぶと、ようやくその背が明らかに抜けて高いことが分かる。スタイルが日本的ではないというか、頭身が高いというべきか。足を進めながら、真尋はそんな眼前の相手に問いただした。

「……あれ、アメンホテプ四世だったりしないか？」

「おや？ 何のことかな」

「とぼけるなよ。ネフレンⅡカのことだ」

アメンホテプ四世、ないしイクナートン。エジプト第18代のファラオにして、エジプト王朝において異端とされるファラオでもある。当時、エジプトにおける神官の腐敗を排するため宗教改革を行い、多神教を一神教とし、都を遷移しようとした。もともとその試みや行いは事実上とん挫、失敗し、死後その名は歴史から削り取られた。

「もともとネフレンⅡカとアメンホテプ四世って、類似点が多かったりもするし、モデルなんだろうとか、それくらいは思ってた。どっちも写実的な美術を為しているところも共通してるしな。だからこそ、あえてそれを逆手にとつて作り出した疑似的な化身なのかと思っただが……。あいつ、ネフェルティティとか言ってたな？ アンタに」

「ああ、そうだね」

「ネフェルティティはアメンホテプ四世の正妻だと考えると、そつくりそのまま解釈すれば————ネフェルティティはアンタの化身

だったと考えられる。そうすると、一つ嫌な可能性が浮上するんだが……」

言つてごらん、とやはり涼し気な這い寄る混沌に、真尋はひどく嫌そうな顔をした。

「——アンタさては、アメンホテプ四世をハメた上で『取り込んだ』な？ だから、アンタから独立した時点で自我を取り戻して、アイツはアンタを倒そうとした。だから、俺を必要とした。違うか？」

名を返せと叫んでいたネフレンⅡカ。あえてアメンホテプ四世と名乗らず、ネフレンⅡカを名乗っていたことをふまえ、おぼろげながら真尋の想像力はその結論を導き出した。名とは、すなわちアイデンティティと言い換えられる。這い寄る混沌に取り込まれた時点で、かのフアラオは自身の自身たりうる絶対的な自我を喪失した。だからこそ後の世で、自身をモデルとしたその名前を名乗ることしか出来なかったのではなからうか。そして翻弄された彼の歴史の背後に、這い寄る混沌の魔の手が存在していたのだとすれば——。

「わたしが、かの国の古の文明と近しかったことは、まあよく語られている話だが、そこは知っているね」

這い寄る混沌は真尋の質問に直接は答えずこう続けた。

「当時はまだ、人類の文明も出来てしばらく、赤ん坊のよちよち歩きだった。私にいわせれば今でさえまだ赤ん坊だが、それでもなおのこどね。そして、人類という存在について、私もまた観察期間、学習期間だったということだ。だからまあ、色々テストさせてもらった。大災害にあつたときにどう人間は動くのか。欲を満たしたとき、人間はどうなるのか。まあ、おおむね予想通りの流れであつたが——」

その中で、彼は違った」

くつくつと楽しそうにほほ笑む這い寄る混沌に、真尋はやはりおぞけを感じる。何も言わずとも、隣のクー子が彼の掌を握った。やはり体温が高いのか熱いそれに一瞬驚いた声を上げる真尋。いまいちその理由を理解していない様子のクー子と、「続けていいかな？」と真尋の様子をうかがう這い寄る混沌だった。

「そう。彼は——彼は抗うことを選んだんだ。外宇宙より飛来し

たこの私が何を目的としているのか。何をかの国で成していたのか。一体何が正体で、果たして私が何なのかを調べ、考え、探索し、ときに戦い。自ら私に向かって、『闇を照らせしもの』と名乗ったくらいだからね。よほど自負があったのだろう」

それはまるで旧来の友人について話すかの如く、這い寄る混沌はひどく楽しそうである。それがますます真尋に不快感を覚えさせる。ひよつとしたら、自分も一歩間違ったら同じ末路を辿ったかもしれないという事実が、ただただひたすらに冒瀆的で、そしていまだS A N チェツカーの回転が止まらないでいた。

「だがまあ、事を性急に進めたのは彼の自己決定だよ。だがそうして、私に明確に抗った『最初の』探索者は、間違いなく彼といえる。嗚呼勿体ないと、彼のような存在が今後出てくるかわからない、貴重な事例だと。要するに気に入ったから保存した訳だね」

知っていたが最低だなコイツ、と真尋は唐突にクトウグアをけしかけたくなったが、下手をするとこの場からまともに出られなくなる可能性があるため、それは自重した。

いけど行けど、洞窟は果てることはない。出口らしきものも全く見えず、しかし這い寄る混沌は涼し気に足を進めている。

「じゃあ、もつと聞くとだ。……アンタの化身っていうのは、どれくらいアンタから独立したものなんだ？」

「劉実から聞いていなかったかい？」

「それを全部そのまま信じるほど、俺は人間が出来ちやいないさ。大体、あれの言ってることって、初動からおかしいんだよ。そもそも化身をアンタが演じているっていうのなら、化身をデザインしただけで、当初の目的が変わるようなことはないだろ。変わるからには、何かしらの理由が——」

「——とはいえど、私が手を振れば、残らず全て一瞬でなくなる」
所詮はその程度の話だ、と這い寄る混沌は涼し気に話をさえぎった。真尋の脳裏に、何かがちらつく。この話を這い寄る混沌が中断したということ。これ突き詰めることが、何か、相手にとって良くない事実突き当たるのではないかということ。

『ねー！』

唐突に、場違いな鳴き声が聞こえる。振り向けばその先には、一匹の細長い肢体の猫が一匹。発見し、クー子が楽し気な声を上げた。何故こんな場所に猫が。全く意味が分からないと驚いた表情の真尋の背を、這い寄る混沌は軽く押した。

「さ、後は彼の後ろをついていきたまえ。私はこれから、怖い怖あい猟犬の相手をしなければならぬからね」

「は？　なんでそんな、場所は移動してるだろうけど、時間は移動してないだろこれ——」

「いや、移動はしている。そうだね……理由に気づいても、ここを出るまでは口には出さないことをすすめるよ。それじゃね」

ランタンを地面に置き、きらきら星の鼻歌を歌いながら、拳銃片手に這い寄る混沌は来た道を引き返す。数秒と経たずにその背中が見えなくなると、再び猫の鳴き声。早くしろとせかされているように感じ、真尋はその後に続いた。

*

『——』

まぶしさに目をこすり、真尋は目を開けた。時間はわからないが昼間か、空が明るい。と、左腕にやや違和感を覚えて持ち上げると、手の甲にうっすら赤い痣のようなものが、熱を帯びて残っている。その正体に心当たりこそあるものの、真尋はそれについては一旦、考えを保留した。場所はどこかの病室か。体に固定具が巻かれている感覚がある。腕や足の骨は折れていないようだが、皮膚が変に引っ張られる感覚があるからして、もしかしたら皮膚移植とかで針を縫ったりしたのかもしれない。

気が付けばベッドの上。特に何か扉のようなものを開けた記憶も、かといって何か壁にぶつかったり、出口らしき光などを見つけた覚えもなく、気が付いたらはっと、この場で寝ている状態の真尋である。

もはやそのあたりについては突っ込みをいちいち入れはしない。唯一気がかりなのは、最後の最後まで夢の中のS A Nチエツカーが回りっぱなしのまま、数字が確定していなかったことだが……。

ふと視線を横に動かすと、見覚えのある女性がいた。

「母さん？」

「————おはよう真尋？ ずいぶん長いお寝坊だったじゃない」

楽し気に微笑む真尋の母。どんなに頑張ってももう少しでアラフォーに片足突っ込む年齢とは全く思えない程に若々しいキャリアウーマン然とした雰囲気。特に何も無いような振る舞いではあるが、目の下に隈を浮かべ、少しだけ疲れたような微笑みを浮かべていた。

「旅行、もういいのによ」

「何言ってるのアンタ、それどころじゃないでしょーが。実の息子放り出して仕事してる親なんているわけないでしょ？ お父さんと一緒に飛んで帰ってきたわよ」

ちなみに17回目結婚記念の旅行ではあるが、実質、彼女の趣味と仕事の中間くらいである。大学にて民俗学の研究職、ちゃっかり教鞭もとっていたりする彼の母親である。普段フィールドワーク、実地調査などに時間を割けないこともあり、こうして理由をつけて休みをとっているときは夫婦でいちやいちゃするのと同様に、仕事上の実益としての調査やらなにやらも敢行していたりした。だからこそその真尋の確認であったが、当然のように親としての立場を主張する彼女である。どれくらい寝ていたか確認する彼に、母親は二日よ、と笑った。「身体よりも脳の方にダメージがいつていたらしくてね。一週間で意識が戻らなかつたら、かなりやばかったかもしれないわい」

「マジか……。なんか、ごめん。世話駆けた」

「別にいいわよ、そんなの、お母さんだし。そして私なんかより、真っ先にお礼を言わなきゃならない娘がいるんじゃない？」

「ぬ？」

言われて、にやにやと笑う母親の視線を追い、反対側の方を見る。そこにはベッドに腕枕をし、横を向いてすやすやと寝息を立てる龍子

の姿があつた。制服姿であることからして、学校帰りか何かか。母親が何を邪推してるかを正確に見抜いた真尋はため息一つ。

「珠緒ちゃんと龍子ちゃんだっけ。二人して毎日お見舞いに来てね。珠緒ちゃん今日はお熱で来れないらしいけれど、本当、必死な顔してたわよお」

「……違うからな？ 変な邪推はやめろっ」

「あら、そうなの？ でもこの娘もだけど、きつとあんたに気があるわよ？ どっちでもいいから、いつそ彼女にしちゃえば？」

「……………ないな」

脳裏に劉実の姿がよぎり、眼前の龍子の姿と比較し、真尋は断言した。劉実であるならタイプではあるが、龍子は別に真尋の好みという訳ではなかった。面影があるからと言ってその背を追うように考えては失礼であるというのもあるし、何よりそもそも彼女に関してはそこまで親しくないからだ。一方の暮井珠緒についても、そういうことを考えるような親しさではないという真尋の認識だった。

二人とも苦勞しそうね、と母親は苦笑いを浮かべる。背伸びをしてから口を押え、大きなあくびを一つ。

「意識戻ったってナースコールしようかと思うけど、まあ、ゆっくりしてていいわよ。せっかくだから起こしちやいなさい。積もる話もあるでしょうしね」

やはりというか、こういうニヤニヤと世話焼きのような態度のあたりは、見た目の若さはともかくとして、どこかおばちゃん臭さが漂う真尋の母であつた。有言実行とばかりにスキップめいたステツプで室内を出る彼女に半眼を送る真尋。扉が締められたため息一つ。

「……………」

残された自分と、目の前で眠る彼女と——。真尋は言葉なく頭をかく。今更どうしろと言うのか。そもそも真尋は、劉実の面影を見るのがいやで彼女と接触を図ってこなかった身である。だが結局彼女を助けたのは、その面影があつたからだろう。例え元が何であつたとしても、彼女たちは別人同士であるにもかかわらず。とらわれた先でも結局、真尋は彼女たちを混同して考えていた。それだけでもう合

わせる顔がないとは言わないが、それでも彼からすれば顔を合わせずらい。

だが、もしそれでも――。

「……………」

「ひぎや！　ちよ、もつと優しく起こせないんですか真尋さんっ」

思い切りデコピンをかました真尋に非難の声を上げて起き上がる龍子。額を抑えてやや涙目の彼女に、真尋は半眼を送る。

「よく言うよ。アンタ、母さんが扉開ける前にはもう起きていただろ」

「ぎくつ。な、なんでわかつたんですか…………？」

「口でぎくつ、とか言うな、ぎくつ、とか。ちよつとだけ首が動いて目が開いたのは気づくぞ。こんな近いんだから」

「それは、私のミスでしたかね…………」

にへへ、と困ったように笑う龍子を前に、真尋は言葉を選ぶ。何を話しても劉実と重ねてしまいそうになるからこそ、しかしそれでも、今だからこそ、改めて彼女と向かい合わなければならぬ。這い寄る混沌のセリフに感化されたわけではない。決して、ネフレンⅡカのあるの慟哭に影響された訳ではない。そう強がりながら、真尋は言葉を選ぶ。

決して過去の選択肢がすべて正解であったことはあるまいが――
――それでも今だけは最善を。

そう願いながら、真尋は苦笑いを浮かべ口を開いた。

孤独の中の邪神の祝福

——眠りの果て、気がつけば、真尋は巨大な螺旋階段を下っている。大理石で作られたそれは下方果てがないように見える。いや、厳密に言えば暗黒に包まれており先が見えないが正解か。だが百段までは下っていないだろうが、ある程度の時点でひんやりとした鉄の扉にぶつかった。完全に不意打ちで激突したため、そのまま正面から直撃。倒れ鼻を抑えて眼前のそれを見やる。丈は3メートルから5メートルほどだろうか、輪郭がぼやけているので真尋に全容は把握できない。ただ取っ手については1メートルの個所にもついており、真尋はそれを手に取り、引いてみた。扉は意外と軽く、彼の侵入を拒むことはなかった。先は薄明りの洞窟、足元がきらきらと寶石のように輝いて見えるが、どこかに光源があるのだろうか。天井から垂れるつららのような鍾乳洞。ロマンチズムをあまり介さない彼なので特に感想はないだろうが、なかなか幻想的な光景だ。と、足の異様にひんやりとした感触から、真尋は自身が全裸であることに気づいた。しかしどこを見ても服に該当するものも布もなく、諦めて前進する。

先を歩くほど光源は濃くなり、やがて真尋の目にも見えるようになる。それは点々と数か所に設置された火の柱だ。中心に芯となる何かが存在しているのだろう、暖色と寒色とがいたりきたりする、不可思議な光の明滅である。思考がぼやけたまま、真尋はそれをじっと見て、さらに足をすすめた。柱を5つほど経由したところだろうか、やや開けた洞窟の場所の先。異様に背の高いシルエツトが真尋を見下ろしていた。ゆうに3メートルは確実に超えるだろう巨体である。その背後には、明らかに洞窟の中のそれとは異なる舗装された道があった。

『
』
老人の片方が言葉を話すが、明らかにそれは日本語ではない。かと

いって英語のそれでもなく、真尋は意味を介さない。しかし、ぼんやりとした頭のまま、真尋もまたそれと同様の言葉を口から紡いだ。

』
』
』

どこかで、ふと猫の鳴き声が聞こえると、老人たちは道を開ける。真尋は何かに導かれるように、そのまま足をすすめた。先に足を進めていくと、やはり開けた場所に名状しがたい色をしたテーブルが一つ。小袋と銀のナイフ、ポシェットとベルト。さらにはレンジャーといったらいいか、テングロンハットめいた何かと、中世ヨーロッパの商人でもまとつていそうなジャケット、シャツ、パンツ。それぞれ妙に収納スペースが多い。見慣れない服であるにも関わらず、ぼんやりとした頭のまま、真尋は慣れた手つきでそれを着用していった。

道はやはりどこかで螺旋階段へと変化した。石造りの階段は、長い。底が暗闇で見えず、しかし歩いている途中で段々とその作りが木製の建造物のような感触になっていく。だがこれも、真尋は特に疑問も覚えず慣れた風に最下層まで下った。装飾が彫り込まれたアーチの先はまばゆく見えない。装飾に目を凝らせば、そこには雷を降らせる男性の神、三又のトライデントを手に荒れ狂う神、首が複数ある獣を退治し尾から刃を取り出した神、龍にしか見えない神……様々な装飾が彫られていることに気づく。それが何か、デジャビュというか、以前と変わったような印象を真尋は抱いた。ここに初めて訪れる彼であるからして、明らかに矛盾する感想であるが、それさえ彼は無視して足を進める。

光の量が一気に変わったため、一瞬目をやられる真尋。やがて眼がこなれてくると、そこが森の中であることに気づく。背後を振り返れば木の幹なので、明らかに物理法則を逸脱した構成になっているが、そんなことは今更であると肩をすくめた。

「なるほど、ここに繋がってるのか」

次第に真尋は、ここは最近よくみていた夢の中で見た光景であると認識する。背の高い木々はそのまま枝と葉が天蓋となり、それだけで

自然のトンネルである。無数にそんな場所が続く様は一見してかなり幻想的であり、さしもの真尋でも今度ばかりは思わず感嘆した。あの夢の中の彼はそんなことに気を配る程の余裕さえないのが原因ではあるが、ちよつとした癒しスポットだな、とか、かなり卑近かつ場違いな感想を抱く。なお足を進めると、天蓋のせいで光が薄い箇所も多く、そういった箇所そこにそこかしこにいる菌糸類がわずかに燐光を放っている様子がまた不気味で、真尋は直前の感想に辟易した。

真尋が一步一步踏みしめるごとに、木々の間、木の上など様々な場所から何かが動く音が聞こえる。それは真尋の様子をうかがっているというよりも、まるで天敵にでも遭遇したかのように逃げている形だ。と、そんな森を抜けている途中、真尋は見覚えのある猫の姿を見た。

『

ついてこい、と言われていたような錯覚をする。真尋はそれに従い、猫の後ろを追う。直進すれば町がある、という直感に逆らうかの如く、猫は入り組んだように道なき道を進む。と、だんだんと真尋の視界が霧に覆われ始める。突然ふって湧いたようなその霧に違和感を覚えつつ、黒く映る猫のシルエットを見失わないよう足早に続いた。その先には広い湖と、そこに浮かぶ湿地帯の島があった。

猫はその手前にある小船に乗り、再びなく。続いて真尋が乗り込むと、いかなる力が働いたのか、ゆったり、ゆらりゆらりと船が勝手にその島に向かって進む。

船の漂着した個所には緑色の魔法陣——真尋は持ってきた小袋を開けると、その中から琥珀のような宝石を一つ取り出した。その上に置くと、不意に周囲から大量の猫の鳴き声。と同時に、巨大な影が真尋たちの横に倒れる音が聞こえた。

やがてどこからともなく、巨大な蟻のような竜のような名状しがたしいシルエットが現れる。細部は見えないがおそらくビヤーカーだろうその背に乗り、真尋は身を任せた。ほぼ数秒で、気が付くと真尋は見覚えのある名状しがたい緑の塔の中にいることに気が付く。足を踏み出し壁にふれると、めきめきと嫌な音を立てて外への穴が開い

た。

街は以前来た時よりも暗がりに包まれていた。具体的に言えば生命を感じない。道中、見るも無残に引き裂かれ崩れ落ちていた人のような死体の数々と、マゼンタ色の巨大な触手とを見て、真尋は猛烈な不安感にかられ、そして脳裏で劉実に抱き着いていた。そのまま慈愛の表情で真尋の頭を撫ぜる彼女のふくよかな胸に頭をうずめ、ただただ泣きはらすイメージである。そして数秒後に何を考えているんだと妄念を振り払い、転々とする死体の山のその先へと向かった。

「——あつ」

やがてその先に彼女はいた。赤い豪華なドレス。肩と背中のおおきく空いた煽情的なそれ。胸元を強調させる印象のそれに、頭には黒いベール。風に揺れる額にはチャクラが一つあり、真尋は劉実にもそれがあつたような、そんな記憶が脳裏をよぎる。彼女は目を閉じ、椅子に座り転寝をしているようである。ひどく静かに、どこか幸せそうに眼を閉じるさまは見る者の呼吸を止めるほど、ぞつと残酷なまでに美しい。

「良かったって言うべきか。まだ他の層に行つてなくて」

真尋の声を耳に、彼女はうつすら目を開ける。赤く深い色のそれが、一目見た時点で、真尋は言葉がなかった。夢の中でみたその彼女は、今また真尋の認識における現在現実において、もとより形容することが出来ない程に、すべてを取り込んでいた。見る者すべての視線を離さず、それこそ時が止まるような錯覚。劉実をはじめてみたときの鮮烈さとはまた違った、そう、その在り方はむしろ暴力的とさえいえた。

そして彼女は——赤の女王は真尋に微笑んだ。

「はじめまして、でよろしいでしょうか？」

「……ああ、それで合ってるはずだ」

こんな呪われた場所に何の御用で、と彼女は続けた。

礼を言いに来ただけだ、と真尋はつづけた。

「はて、何のことやらわたくしにはさっぱり」

「誤魔化し方が本体と全く同じだなアンタ。……こつちにとらわれた時、何度か助けてもらったからな。そのお礼をと思つて。『なんとなく』来れる気ではいたが、本当になんとなくで来れたのがいろいろと恐ろしいところだが」

「なんとなく、ですか。……貴方、正気は大丈夫でして?」
「今更だ」

真尋の苦笑いに、彼女は少し寂しそうな笑みを向ける。

「少なくとも、アンタは最低でも2回は俺を助けるために手を貸してくれたと思つてる。だったら、頭くらい下げるのが筋だろう」

「ですから、何のことかさっぱり——」

「少なくともあんなに俺の夢にアンタと、ここが出てきたことが、無関係だったとは思っていない」

真尋の夢の中のそれは、こことさらにより『下層』であつたという謎の確信が彼の中にある。だがそれはともかくとして、何度も何度もここを徘徊し逃走する映像が、真尋が逃げるのになんら役に立たなかつたはずはない。少なくともこここの構造の把握に一助していたことはまず間違いないだろう。

「まあ、そうはいつでも引っかけりはあるが、それは後に回そう。次はノーデンスだ」

「はて?」

「一人の尊厳ある人間として、あらん限りに常識とその豊かな想像力を武器に戦え」——これはニヤルラトホテプの言い回しだ。ノーデンスのじゃない」

「……」

クー子に対してサジェスチョンをしただろうノーデンスの言動で、真尋が違和感を感じたのがそれだ。その言い回しだけ、必要な情報以外のものとして明らかにノーデンスの発言として浮いている。だが逆に言えば、ノーデンスがそんな言い回しを使ったというのが既に、ノーデンスと這い寄る混沌との接触をうかがわせているともいえた。真尋に直接言及しなかつたのは何かの意趣返しというか、嫌がらせの目的もあつたのかもしれないが、そこまではさすがに彼も察しきれば

しない。

またしいて言えば、ノーデンスが呼び出していたクトウグアの化身——その大本に、おそらくはその召喚の生贄か何かの素材として「夢野霧子」を、すなわち二谷劉実を使っていたことも、そう考えると怪しい。まるであつらえたかのように、あのタイミングで這い寄る混沌を真尋が直感的に呼び出せるとわかっていたかのような配置であり、実際にその配置でなければ真尋はあの場でネフレンⅡカに取り込まれていたことだろう。自ら輝くトラペゾヘドロンを破壊し、通常のトラペゾヘドロン同様の状態にしたうえで這い寄る混沌を呼び出す条件を満たすという、その一連の流れが例え存在したとしても、そもそも彼女の死体があそこになればそれは決して成立しえない事柄だからだ。

ただ、それをもってしても彼女が真尋を助ける理由に心当たりが薄いが、化身同士の対抗意識だの何だの説明がつけられなくはない。

「あともう一個くらい言い逃れ出来ないのがあるぞ？　ここの惨状だ」

「……………」

「俺たちが逃げるのを助けるように、ムーンビーストやらなにやらと戦ったアレ。初見の時はハスターの化身か何かかと思っただが、考えてみればいわゆる『黄衣の王』とハスターを結びつけるのも創作が前提だったと思うし——ドリームランドを徘徊する這い寄る混沌の化身に、そんなのがいたような、いなかったような」

「……………」

「そうすると、アンタの正体は何かってことだが……。たぶん、当然、這い寄る混沌の化身ではあつたはずだ。だが明らかに本体のあつちと連携している気配がない。とするなら——アンタもまた、ネフレンⅡカ同様に本体から独立した化身だつて考える方が自然だ。ここが『サルナスの遺跡』であるならなおのことな」

「——っ、そ、それをわかっていて貴方はここまで来たとおっしゃいますの!？」

赤の女王は真尋の言葉に、明らかに慌てる。まあそれも当然か。か

つてここにあつたサルナスと呼ばれる国は、とある経緯からボルグルと呼ばれるトカゲの神の怒りを買った。結果を見ればわかることだが、現在この場所は滅亡しているも同然である。人が住む気配はなく、本来ならばこの赤の女王以外は誰も居なかつたのだろう。ノーデンスは言った。真尋が拷問を受けていた場所は、這い寄る混沌本体でさえ手を出すのを面倒がる場所だと。とするならばこの呪われた地において、這い寄る混沌が真尋を自分から進んで助けることはするまい。であるなら、ここまでお膳立てされた流れがあつたのだとすれば、それは誰かが、真尋に手を貸していたとみるべきだ。

おそらく真尋がここに足を踏み入れても何も問題がないのは、そもそもその呪いの意図していた存在ではないからであろう。とはいえ細かい条件が分からないので危険であることに変わりはないのだが。それにもかかわらずわざわざ礼を言うためだけにここに来たと言つていた真尋のその言葉が、彼女には甚だ理解できない様子である。「なんで……、せつかくわたくしが助けたといえますのに、そんな自分を大切にならさないのですの？」

「その発言が既に色々とキャラ崩壊も甚だしくないかと思うのだが……。アンタって傾国の美女的な性格付けをされてなかつたか？悪女だろ立派な」

「別に今、それをする必要はありませんし。それよりも、本当に貴方は正気ですの？」

十分正気だと断言する真尋は、改めて頭を下げ顔を上げた。目の前には驚きながらも、それでも頬をほんのり赤くして、まるで初心な少女が照れているような反応を見せる赤の女王がいた。いつそう、真尋は彼女から目を離せない。真尋は自分の中に、確かに彼女に対する妙な依存心が生まれることを認識していた。嗚呼これが彼女の問題点かとも納得していた。どんなに優れた為政者の理性をも溶かす、絶対的な生物としての魅了、おそらくそういった類のものが、現在真尋にも働いているのだろう。この場でずっと彼女に甘やかされ、溶かされてしまいたいという願望すら脳裏をよぎる。だが真尋は、劉実の笑顔を思い浮かべ、それを振り払った。振り払えてしまえるほどに、彼の

中で彼女の面影はいまだ大きな影を残しているらしかった。

「……どういたしまして。ですが、もうお帰りください。今の貴方にとって、わたくしという化身はただの毒にしかありませんわ」

「そうかもな。……じゃあ、また」

「とはいえ帰りは大丈夫ですよ?」

『蜂蜜酒の琥珀』はまだ残ってるから、上にかかるだけなら問題は無い。……行き来はなんか、猫が色々やってくれた感じがする」

「ああ、『アウリス』ですわね」

「名前あるのか。……っていうか、アンタの飼う猫か?」

「さあ? まあ、半分はと言っておきますわ」

くすくすと笑う彼女に、真尋は背を向け足を進める。相変わらず違和感の残る左腕をさすりつつ、ふと空の天蓋を見上げ、そして背後を振り返った。

「変なことを聞くが」

「はて?」

「——俺、かなり昔にアンタと会ったことがあるか? それこそ、俺が生まれるより前に」

——君が生まれるはるか昔から、そう、前世よりもずっとはるか先から定まっていた運命だ——

真尋を取り込もうとしたときの、這い寄る混沌の言葉である。そしてそれは、もし仮に彼の前世が——むろん前世なるものが存在すればの話だが——夢の中の、真尋の視点だった誰かのものなのだとすれば。あの説明のつかない夢の内容に対する解答になりえ、そして真尋と無関係であるはずの彼女が、彼を積極的に助ける理由にもなりえるが——。

「……さて? ただの気まぐれですわ」

真尋のその問いに、赤の女王はただ楽し気に、いたずらっぽく微笑むばかり。そんな彼女に背を向ける真尋を、彼女はいつまでも見送り続け。

真尋の姿が塔の中に消えた途端、両手で顔を覆い、ただただ肩を震わせて、小さく、嗚咽を漏らした。

【真・這いよれ！ニヤル子さん 嘲章】

【ドウエラー・イン・アフエクシヨン】

【END】

次章予告2

(ノイズ交じりの視界)

(電気的な砂嵐が晴れると、無数の壊れた機械が散らばっている場所)

(歯車や巨大な針が地面に刺さっている)

(かさかさとそのうちのどこかしらがうごめき、くすくすという声が聞こえる)

(ぼつり、とその中でランプが灯るマシンが一つ)

(ノイズまじりの音を鳴らすそれは、一つのカセットテープレコーダー)

(外装はほぼはげ、基盤も一部露出している)

(上から降ってきただろう大型の時計が刺さっており、半壊している)

(カラカラとから回る音が鳴っている)

(内部にはテープが入っていないらしい)

(一瞬、暗転し視界が回復する)

(二三度、空回りする音を鳴らしたあと、レコーダーはがたがたと震えて静かになる)

(内部に真っ黒なテープが、いつの間にか挿入されている)

(テープが巻かれる音がなり、時計の針が、かちり、と進む)

(レコーダーの再生音)

女性 (CVイメージ：三石琴乃)

「だから、それでいいんですよ先輩。私は、そんな先輩だから……」

男性 (CVイメージ：佐々木望)

「もっと冷静になれ、君は、あいつの背中を追っかけてるだけだろ」

女性

「でも、それでいいじゃないですか。結局どう納得するかは個人個人

の裁量なんですし。それとも、先輩は私じゃ嫌ですか？」

男性

「決してそうは言ってはいな——」

(再び一瞬ノイズが走り音声の具合が変わる)

ニヤル子 (CVイメージ：浅野真澄)

「ニヤル子とクー子の、予言のごとき未来リポートのようなものッ！」

クー子 (CVイメージ：堀江由衣)

『どんどんぱふぱふ、ぬめぬめぬるぽ』

ニヤル子

「ガッ！」

さてさてしかし、続いちゃいましたね。一体どうなっちゃってる
んでしよう真尋さんと私を覆う影。

巨大ですネ、神話的ですネ。

まだまだ当分、真尋さんも皆さんも目を逸らせなくぎ付けです！

そんな訳で、そちらの状況はどうでしょうか！ 現場のクー子レ

ポーター！」

クー子

『

時空の果てから来たりしは かつて偉大と呼ばれていたものたち

探索者の目が映すは 激突する稲妻と閃光

試されることのない そのパズルを開く鍵は

時間の果てにか 空間の果てにか

初恋の影はもう二度と出会うはずはなかった

そして——少年は引き金を引く。

』

ニヤル子

「さて、回転、大回転、大大回転！ 大大大回転、大大大回転！

次回の見どころは、だああああい回転っ！ 一般探索者・二谷龍

子の地味いな気遣いです。

さしもの真尋さんも危険度マックス！

喰らえ必殺！ ハイパーボルケニツクなんか！」

クー子

『次回、真・這いよれ！ニヤル子さん嘲章。「ザ・シャドウアウト・オ
ブ・メロディアス」』

ニヤル子

「次回もまた深淵に？」

ニヤル子&クー子

『『ドロップドロップ♪』』

ニヤル子

「次回もまだまだドッキドキ！ え、水着はあるかって？ そりや聞
かぬが花というやつですよお」

クー子

「くっ……、ニヤル子、追手がそっちに向かった」

ニヤル子

「にや、にやんだって？ く、こんなところで私は、まだ負けるわけに

は——っ」

??太（CVイメージ：草尾毅）

「サイクロン……」

ニヤル子

「って、貴方はまだ登場は先のはずじやなかったんですかあ!!? って、
いえいえそんな、何を一人で敵全員を相手するような感じで、背中で
語って——」

（ぶつり、と音声記録はここで途切れている）

おまけ：COC用サプリメントもどき（※ネタバレ注意）

※本編読了後推奨

【種族：特異点／ポータル】

基本概要：

・ヨグIIソトースの眷属。後天的にヨグIIソトースと関係を持つことで生物が変化する

・基本的には這い寄る混沌の手によって変化するが、人為的に変化するためにはヨグIIソトースの肉片が必要。これは液体窒素で凍らせた、などのフリーザーをもたらしていても問題はない

・変化したキャラクターは、特定の時空間と接続されていることになる。接続される対象は概念とかでも可能。たとえば魔導書の内容、ゲームのストーリーといったような概念でも可能

・肉体的な時空間攻撃の影響は受けない。例えば世界の時間が止まったとしても、ポータルは影響を受けない

・逆に精神的な時間攻撃については影響を受ける。精神交換により過去に飛ばされた場合、ポータルの特性は肉体に引き継がれるなど

ゲーム上の運用；

・神話生物であつても兼用可能。深き者どものポータルとかもできる

・プレイヤーが変化する場合、キーパーと事前に相談すること

・ヨグIIソトースに一時的に精神を乗っ取られることもあるので利用可能

・基本概要にのつった運用推奨

・SAN値が10を切ると、肉体はヨグIIソトースの肉片となり消失する

技能・接続（〜）：

・ポータルの特異技能。（〜）に接続された対象が入る。例えば接続（ネクロノミコン）。クトゥルフ神話が40を超えている場合自動取得だが、使用解禁についてはキーパーと相談

・接続されている対象にアクセスすることが可能。アクセスした結果はキーパーに委ねる。例えば武器庫と接続しているから武器を取り出せるや、魔術書と接続しているため魔術を行使できるなど。ただしヨグIIソトースの化身や這い寄る混沌は無条件で接続可能。またアクセスするごとに、1?10のSANを喪失

【道具：SANチェッカー】

基本概要：

・星の智慧派が開発した近代神話兵装
・輝くトラペゾヘドロンを材料として作成される腕時計状の装置。作成には輝くトラペゾヘドロンの他、腕時計、10面ダイス、ミッドゴの死体が必要

・使用者の神話的正気度の肩代わり装置。人間が装着する場合は常に1つで、2つ装着して判定を行った場合は即死（脳が破裂する）。

ゲーム上の運用：

・SANチェッカーを装着中の探索者は、正気度判定の際に常に失敗する。たとえば0/1D6とかの場合、必ず1D6。1/1D10の場合は1D10というように、より強く喪失する側に偏る

・初期値は99スタートで、減算して使用する。0以下になった場合に破損し、残りの値をプレイヤーのSAN値に適応する。その際、クトゥルフ神話とSAN消費は減算した残りの値を基準に計算する

・SANチェッカーで一度判定をしたプレイヤーは、そのセッション中は精神分析で回復しない。追加のSANチェッカーを装着して回復する。

・SANチェッカー1度の破損ごとに、HPを1D6喪失する。ただし神話生物は1度の破損につき1/4。

・電子工学、クトゥルフ神話、オカルト、幸運の判定成功で作成可

能（それらしい知識などの理由付けはキーパーに任せる）。材料は輝くトラペゾヘドロン、腕時計、10面ダイス、ミルゴの死体（神経系）。時間は2D10（0〜99）*30分で計算する。ファンブル時は道具破損など対応。クリティカルはキーパーに任せる

旋律の前の閑章

マシユルフマイハート その1

八坂真尋の脳裏を打つのは、トントントン、とりズミカルな包丁とまな板の音。音の感覚からして野菜、大根か何かを切断しているのだろうという目星はつけられる。そういえば入院前に大根の糠漬けを作っていたな、と思い出し、そしてそんな真尋の寝覚めは最悪と言えた。

「暑っ」

四月末から五月の連休もとうに過ぎ、既に初夏。なんだかんだと熱気がこもる室内で、軽く脱水症状を引き起こしているのか頭がぼうつとする。唾液を飲み込めば喉が痛く、まるでひび割れるような感覚だ。おそらく水分が足りず、かびかびに乾ききっているのだろう。時期は早いがそろそろエアコンを動かそうか、掃除をしようか、色々考えながら上体を起こし伸びをした。

寝ぼけたままの真尋であるが、本能的にか習慣的にか、体は学校へ向かうモーションをとっている。カバンの中身を一度確認し、財布やら筆記用具やらをチェックした後、ぼんやりしたまま洗面所へと向かっていた。

「今、何時だ……。顔……」

「——あら、おはようヒーロ君……。うぷっ」

途中、真尋に、酷い顔色で声をかけるのは彼の母親だ。正面から行き違いという状態なので、おそらく洗面所かトイレからやってきたのだろう。あきらかに青いその顔色と、頭を押さえている様子から、それとなく後者だろうと真尋は察した。ほんのリアルコールの刺激臭と、消化液の刺激臭との混じった、なんともいえない匂いが漂ってくる。しかし朝、こうしてだらけている様子の母親と遭遇するのは珍し

い。そもそも仕事が忙しく、朝はほとんど家にいない母親であるし、父親に至ってはめったに家に帰ってこられない八坂家である。理由を思い出そうと活動が鈍い脳みそのギアをあげようと考えこむ真尋だったが、しかしやはり異臭が鼻につき、集中できなかつた。

「……………ヒロ君は止めろつての。あと母さん、ちゃんと口濯いでこいって。すごい臭うぞ」

「あらやだ、そう？ 駄目ね、清定さんにイヤミ言われちゃう——」

「あ、でも俺が顔洗つてからにしてくれ。さすがにゲロ臭い蛇口から出た水を、顔に浴びる趣味はない」

「あら酷い。こんな妙齡のレデイに向かつて、ゲロ臭いまましばらく待ってろつて言うのー?」

「自爆してる母さんにまで付き合うつもりもないぞ。大体、逆に言えば、それって俺に今日午前中しばらくゲロくさいまま過ごさせて言ってるじゃないか。そんな無茶苦茶なことを言う母親なんて世に居ないと、俺は信じたいけどな」

「う、容赦ないわねっ。どうしてこんな口悪く育っちゃったのかしら……………」

ちなみにアンタ、そんなだと学校に友達とか、あんまり居ないんじゃない——」

「うるさいつての。いちいち親に心配されることじゃないっ」

実際、片手で数えられるくらいの交友関係だった。真尋の慌てたような挙動に「わかりやすいわねっ」とニヤニヤ笑いながら抱き着く八坂頼子（年齢不詳）である。

「はなれろつての、というかマジで酒臭いっ」

「ふふくん？ 離れると言われて離れるお母さんはいないのじゃっ。ああ、ムスコニウムが補給されるんじゃく、いいわいいわあ、若返る……………」

「アンタさしては二日酔いどころか、まだ酔ってるな!？」

意味不明すぎる母親の言動に、真尋は想像力を働かせるまでもなく結論を導き出した。おおよそ迎え酒とかやって、その状態で酔いが

回ってる有様なのだろう。よく見れば目の下にくつきり隈が出来てる。この様子からしてほぼ夜通しで、かつ仮眠くらいしかとっているまい。一目でわかる、不健康ここに極まりだった。

組みつきに対してなんとか腕力（と舌戦）で事なきを得て顔を洗いいりビングに向かう真尋。と、キツチンには背の高い男性のシルエツトが見える。少しだけ嫌そうに眼を細め、しかし頭を振り自分の席を引いて座った。

「珍しいな。おはよう——親父」

「おはよう、真尋」

こちらに振り返る父親は、どこかで見たことのあるような涼し気な微笑みを浮かべていた。顔形は全く違うし、振る舞いやらその正体やらを考えても絶対に違うのだが、どうしても真尋の脳裏に、真つ黒なローブをきた、存在自体がかなり危険な男の涼し気な微笑みが浮かぶ。表情にもその何とも言えない嫌悪感が出てしまっているのだが、父親は特に気にせず、目を閉じて受け流した。おそらく真尋よりも、普通に人間が出来ているのだろう。それを察して、真尋はまた何とも言えない気分になった。

「昨日の夜に帰国してね。真尋は再検査の後、ぐっすりしてたから気づいてなかったか。まあそう言いつつ、今日の午後には雲の上に戻るんだけどね」

「相変わらず忙しいな」

「まあね。実のあるフォールドワークとかなら喜ぶべきところだが、ありていに言えば楽しいものではないかな」

父親と母親、双方ともに大学で教鞭をとる立場である。母親が近隣の大学で民俗学、父親が都内で考古学をそれぞれ担当している。母親はそこまで忙しくはないのだが、父親はどうやら何か大きなプロジェクトに関わっているらしく、研究目的でも、また発表やらイベントやらでも引つ張りだこらしく、ここ数年は特に忙しい時期が続いていた。反抗期を迎えて久しい真尋からすれば、ケンカすることもなく、なんとなく清々するのもあって有難い話ではあるが、同時に悶々とするいら立ちのようなものの当たり所がないということでもあって、

中々難しい問題でもあった。

「後、おはようとは言ったけど、今は十一時だね。気を抜くとお昼を回るよ」

「マジか——って、あれ？ 今日、休み？」

「土曜日だね。しばらく入院していたから、体内時計が狂つてるとみえる」

微笑みながら現在洗っているらしい硝子のコップをちらりと魅せる父親。もう朝食は終了してるということらしい。

「何か食べるかい？」

「あー……………、いい」

「そうか。お湯はポットで沸かしてあるから、ご自由に」

とりあえずということ、常備してある粉末コーンスープを溶いて食べる真尋だった。と、食べ終わるころに洗面所から、もうすでに今朝がたの酔っ払いここに極まれりな有様から完全に脱した、それは美しい母親が帰っていた。まあ父親を見るなり「清定さあん♡」などと言いながら、千鳥足で抱き着きに行くあたりは、酔いがさめるという訳でもないらしいが。

「二度寝でもするか」

ダンナ酸なる謎の栄養素を夫から吸収しようとする母親の言動から目を背け、真尋はそのまま自室に戻り、ベッドにダイブした。

休日の二度寝は基本しない真尋であるが、父親がいるときはどうにも治まりが悪いのか、不貞寝のような感覚で顔を合わせづらい。別に喧嘩をしているということも、親子仲が悪いということもないのだが、どうにも真尋は父親が苦手だった。いなければ寂しいし、長い間会ってなければ顔を合わせたいとも思う。何か事故があったとなれば心配にもなるし、そういう意味では普通に親子らしい感情はあるのだが。どうにもこればかりは、思春期特有の、親がうざりたいという感情のアレだろうと、真尋は納得していた。いや、明確な原因はわかってはいるのだが、それを直視することこそを真尋は避けているのかもしれない。別にそのことを受け入れなくとも人生困ることはないし、自分は自分で十分やれている自負もある。ただ、そういうのとは

別に感情の問題として、八坂真尋は無理やりに納得をしている。そして、そのことを考えるのを止め、意識を無意識の虚空に手放した。

入退院してからしばらく、真尋はもう思わせぶりの夢を見なくなっていた。一度だけ、もうどうやったのかさえ定かではないが意図的にその思わせぶりの夢を操作したことはあったが、それは、やろうと思ってみている夢、つまり覚醒夢というやつだ。なのでそういうのは無縁として、特に何か「念じたりしなければ」、真尋の夢は真尋だけのものである。すなわち、夢を見ることもあれば意識を簡単に手放すこともあり――。

『――真尋ー、お客さんよー』

頭からすっぽりかぶった布団に、玄関からかけられているだろう声が聞こえて起こされることもある。

「……、誰？」

『あの、髪の毛の長い可愛い子ちゃん』

言い方が微妙にオヤジ臭い。

瞬間、脳裏に二人の顔が描かれ、ヘアスタイルから相手が絞られる。そして真尋はさも当然のように。

「チェンジで」

やはり寝ぼけているのだろうか、微妙に意味不明な返答であった。気のせいではなければ、誰かの堪忍袋が「ぶち」とキレる音が聞こえたような、気がする。失礼します、と聞き覚えのある声が八坂家の侵略を開始したあたりで、真尋は特に気にせず意識を無意識の虚空へと再ダイブさせよう――。

「ま、ひ、ろ、さんっ！ チェンジとは何ですかチェンジとは！」

「いっ!？」

どしん、とベッドの上からのしかかられ、顔のあたりのタオルケットをはぎ取られた。見上げればこう、やはり想像通りの人物というか、つまり二谷龍子がそこに居る。ピンクのシャツに黒のワンピース、黒タイツと、なんとなくおしとやかな服装で似合っはいたが、何

やら真尋の直感は、本来これはクー子あたりが着てそうな服のイメージであると思いついた。全くなんて無駄な想像であろうか。ともあれ駄々っ子のごとく、ばし、ばしと真尋の身体を軽くはたき続ける龍子に、彼は諦めたように問うた。

「全く、休日だっていうのに……。何しに来たんだ？」

「何しに、じゃないですよ。この間、約束したじゃないですか、真尋さんの快気祝いにどこか遊びに行くって！ どうして忘れてるんですかっ」

「そんなこと、やりたきや一人でやってくれ。今日は眠いん——」

「真尋さんっ」

「!? こ、こら、何ベッドに入ってこようとしてんだっ」

強硬手段とばかりに、タオルケットに潜り込み真尋本体を連れ出そうとする龍子と、さすがに女の子相手だから蹴ったりできずじりじり追い詰められる真尋の戦闘が、小一時間繰り広げられた。不毛である。お互い疲れによる一時休戦を挟んで、あきらめように真尋は立ち上がった。

「とりあえず下の階、降りてろ。あとスカートの裾は直しておけ」

「え？ きゃっ」

きよとんとして言葉通りスカートを確認、ストッキング越しとはいえかなり大胆なくらいに露出されていた太ももとエトセトラに、あわてて照れたようにぼつと直して、股間のあたりを隠した。今時あざといくらいのしぐさである。狙ってるのか素なのかは、さすがに真尋も判定できないくらい、龍子との付き合いは短い。

「むむう……。こうなったら等価交換です。最近はやりの」

「最近じゃないけどな。で、何がだ。早く出て行って欲しいんだが」

じい、と、真尋を見つめる龍子。

「まさかとは思うが、俺の着替えというか下着見て、等価交換だとか言いたいのか。止めとけ止めとけ」

「な、なんでですか？」

「どう考えても、今、扉の手前で聞き耳立ててる母親が、変なこと言いながら乱入してくるから。変な既成事実でも作られたら、たまったも

んじゃない」

「うっ、わ、わかりましたよ……」

見られ損じゃないですか、などと言いながら部屋を出て戸を閉める彼女。ちらりと開けた扉の手前で、母親が「あ、ばれた？」「みたいにてへっ、ぺろっ、というしぐさをしていたのがやや面倒臭かったが、ともあれ扉が閉まり、階段を下る足音が二つ。真尋はさきほどのうっとうしい視線を無視してパジャマ上着のボタンをはずし。

「今時、かぼちやパンツであんな恥ずかしがるなよ……」

膝近くまであつた暖かそうなドロワーズを思い浮かべながら、ため息をついた。

とある民俗学者の走り書き、あるいはネクロノミコン計画プロローグ

嗚呼なんとかくも恐ろしい——！——これが誰かに読まれるころ、私のはたしてどうなっているかは定かではないが、それでも私はここにこれを書かねばならない。書かなければ、あのあまりに思い浮かべるだけでもこの世の地獄と形容するのすら軽いほどに名状したいビジョンを、過ぎ去った時間とともに忘れてしまう——決してそうあつてはいけない。それは私の、ひいては人類に対する裏切りに他ならない。

私がこの筆致を正しく読み合せられる形で記述できているかすらすでに定かではないが、それでも私はこの眼前にたゆたうあまりにも悍ましく、感情あるすべての生き物に対して冒瀆的とさえいえるこの惨状を残さなければならぬ、そういった使命感から筆を執る。

だが、嗚呼——目が覚めた時点で私の体は私の体ではなかった。これは何かの夢なのか、疑い続ける私であるが、しかし夢にしては妙にこの肌寒さと背筋をはい回る得体のしれない感覚が、違う何かを告げてくる。■■■■■■■■■■（※筆跡が塗りつぶされており読めない）とそこからおびただしい数がい出ているこの惨状が私の眼前の光景である。空は赤く日の照りは黒々とし目玉が浮かんでいるように見えある。それも一つではないが、それが常に私を見下ろしているかのように感じられてしまうのが、既に私の正気を保証■■■■ない。見るがよい、あの天を覆い隠さんとばかりにビル群にまとわりつく巨大な吸盤を持つ触手の数々を！左右にゆらりゆらりとそれはそれは恐ろしくも数々の膨大なその質量をゆらめかせ、時に地上を蹂躪する。この地と肉にまみれた臓物のような大地を歩くだけの気力を奪うには十分すぎる光景であるが、これを前にしても私は足を踏み

出さないという選択肢はない。私はただの吹けば飛ぶ一つの節くれにすぎなかつたとしても、この場においてただ一人正気の己を知覚し自覚し存在している古我なのである——この連続性を担保することをせずして、そのための記録を残さずして何が、何が学者の端くれであるか。

記そうぞ、嗚呼だからこそ記そうぞ。しかしやはり眼前の光景は何度見直しても変わらない。足を踏み込めば肉と化した大地が沈み血が噴き出す見るも目をそむけたくなる景色が広がる。砂という概念を喪失したこの世界で、しかし今現在においては地上を踏み歩く者はこの私をおいてほかにない。故にしかし、私はこれが夢であることを願い足を踏み出し続けたのだ。一歩一歩、踏み込めば踏み込むほど足は血の海に沈み靴とその内側に赤黒く浸食してくるが、それにより一つ分かったことは、これは地面の上に膨大な血肉が張られた状態であるというだけであり、本質的にはこの下にコンクリートの地面がいまだ残っているだろうということだ。肌は妙に寒く、ここが北国かさもなくば太陽そのものの機能が停止しているか、あるいは地上が氷河期でも迎えたかというところであろう。どちらにせよその何れかであるかを調べるすべはもはや私にはない。通信機器の電波系統は死滅しており、映像には砂嵐のごときノイズと、時折画面にちらちらと映る首を吊った人間のような不気味なシルエツトが点滅する。それを直視し続けることがとても私にはできず、故にその映っている映像の詳細についてはここにおいて割愛させてもらおう。

足の不快感に顔をしかめながら道らしき道を歩いていくが、しかしそこかしこ視界に映る映像を見る限りにおいて、もはや私の脳では処理しきれないほどの凄惨な状況になっていくらしいことはありありと理解できた。道行く道に■■や■■や■■や■■や、あるいは四肢の破片やらが無造作に転がっており、あるいは地面に突き刺されたりしている。まるで悪魔のガードレールか、地獄の電柱である。骨で構成されたオブリジェを一目見た時点で、この世界を設計した存在のなんと悪趣味なことか、それを嫌でも理解させられた。そう、だからこそ私の手は震えている。一体何があった、私たちが暮らしていたかの世界がこ

れほど冒流的な有様になってしまふのか。これほど暴力的な赤に染まってしまうというのか。人影一つなく、辺りには

歩けば歩くほど息が詰まる。むせかえるような鉄の匂いと、焦げた肉の匂い。以前、一度、フィールドワークで中東の遺跡を訪れた際にテロが発生したときのことを思い出す。あれに巻き込まれた時も似たような匂いがした。人間が焼ける匂い、人間が解体される匂い。戦場でしか感じることはない、この国においてはほほほほあり得ない、距離的にも心理的にも離れたこの匂いが、この世界の、私の視界に映るすべてを侵略し尽くしている。端的に言えば、この時点で私は吐瀉物を抑えきれず足元にまき散らした。膝をつき両手と、はねた血で胴体も含め多くの箇所を赤く染めながら、喉や口を焼く酸をこらえきれず吐き出した。むせかえるようなドロドロとした爽快感の欠片もない、ただただ不快感を醸し出すこの空気を吸い、吐く。吐くものがない、となると今度は過呼吸に近くなり、しかしそれもやがて力尽きたように倒れた。気が付いたのはしばらく時間がたってからだろう、空はやはり赤々としていたが上っているものが月になったのはわかった。月は太陽と異なりらんらんと輝き、しかしその本来なら以前と変わらないはずの美しい惑星は、それを見ただけで私に言い知れぬ焦燥感を与えた。このままではいけない。このまま月の光に照らされていては、何もかもを失ってしまう——そう連想した時点で、その連想もまた私の精神を犯している何かしらの狂気の類だろうと判断できた。

あるけど、走れど、交通手段を自転車に変えもした。バイクを運用しもした。だがいずれにせよ、ここは出口の見えないマラソンだった。行けば行くほど体力も消耗するものの、しかし食事は意外と困らなかった。コンビニエンスストアの電源がまだ生きている。すでに崩壊してボロボロとなったこの状況においては、誰一人として人間はいなかったのだが、しかしそれでも冷凍食品を加熱したり、あるいは冷蔵ドリンクを利用したりといった手段をとれたことは、奇跡的だったといえるだろう。もはやそれがなければ私も命をつなげまい。

少なくともこの少年のような肉体であつては。なぜか持つていたフオークを使い熱された肉を頬張るあの感覚は、金銭すら払う必要もなくすべてが死滅したようなこの終末世界とでも呼ぶべき場所においては、私の社会性など塵芥に等しかった。ただただ生き延びることを念頭において、そして私は足を進めていた。

海だ——そして私は陸地の果てを見た。予想通りというべきか、堤防に近いその場所は肉のフィルムが剥がれているわけでもなく、腐り落ちたのかコンクリートの地面が露出していた。赤い空に照らされる海は色のコントラストの関係か妙に黒く、黒く、深く、色を反射しないそれであつた。まるで深海そのものが眼前においてこの姿になつていような、そんな形容の難しいような直観を抱く。見るだけで意識が溶かされるような錯覚と、膝から崩れ落ちる脱力感。まるでその奥の、深淵に何かこちらの魂でも引きずり込むような得体的しれない怪物でも潜んでいるような。そんな詩的な表現が湧き出さるくらいには私も参つていたのである。嗚呼——そして奴らは現れたのだ！ 私がその場に現れたのを聞きつけて！ 音が、匂いか！

もはやその時点の私には欠片も理解できない状況にあつたそれは、海の底から浅瀬にかけて、徐々に、しかし実際には猛烈な速度で駆け上がってきた。気が付けば海水の黒いうねりには、それこそ数数えきれないほどの不気味な巨体がうごめいていた。おおよそ3メートルには満たないだろうが、しかしこの少年の体や、あるいは私本来の体と比べても明らかに大きいその背丈。体格もがっしりとしており、そして黒い海水のしめりけを帯びた全身は、てらてらと黒い太陽の光を反射していた。

彼らは走つていた。水というそれは、彼らの動きを阻害する要因たりえない。彼らにとつてホームである海中は、すなわち我々にとつての空気と差はなく、そして空気もまた彼らにとつて動きを阻害されるものではないのだ。次々に水面から湧き出た彼らは、それはもう猛烈な速度で飛び上がりこちらに向かって走ってきた！ 私は、もはや武器と呼べるものもなくなつただだ道中で見つけた猟銃を狙撃する。それも一発が一匹の頭部を打ち抜きはしたものの、それすら踏みつぶ

し、わたわたと海面を覆いつくす彼らは、私を見て、私めがけて足を運んでいた。嗚呼、なんと、なんと悍ましい——！ あの鋭利な歯は一体何のためにあるのか、あの剛腕は、筋肉は、猛烈な速度で動けるだけの敏捷さは、体の強度は、そしてそうであってもその身体構造が我々とさして大きくは違いがないというその事實は、いったい何のために存在するか——！ 彼らは正しく侵略者だった。我々から見れば、彼らは侵略者だった。彼らから見た場合のことなど私には知るよしもない。おおむねかの小説群に記載されている内容のとおりであるのなら、むしろ我々こそが彼らにとつては歯牙にかけられる程度のものでしかなく、我々はすなわち彼らに搾取される形態をとらざるを得ないのだろうか。嗚呼、なんと悍ましい事実！ なんと恐ろしい光景！ 身の毛も弥立つ、辺り一面を覆いつくす魚臭さ！ 彼らのげに恐ろしきところは、私の知りえる科学的見解においても、いわゆる民俗学的情報においても、考古学的考察においても、欠片も存在を確認しえなかつた点にある。ゆえにこそ、それが現実を汚染しているこの有様に■■■■が言っていたことをどうしても想起せざるを得ない。すべての物語に書かれていることは、すべての時代において必ず何かしらの形での実現を見る——そしてそれらは、我々が認知できいていない世界において、あるいは時間軸において、まったく順不同にばらばらに、いついかなる形であっても必ず履行され、そして滅亡につながるのだと。

私には理解できない世界であるし、かの■■■■はそう言って涼し気に笑う程度の返答しか返さなかつたが、嗚呼、あの日々は間違いない私を今の狂気に落とし込むだけの下地ではあつたのだと。時間が狂い始めている私にとつて、すでに眼前のこの魚たちも、さらにその奥から盛り上がる巨大な影も、認知することも認識すらしたくはない。だがそんな私の前に、ようやくというべきか人影が現れた。それは黒く長いロングコートを身にまとつた、白髪の長い老人だった。片手に鉾を持ち、そして老人の出現と同時に、海中からクジラのパケモノのようなものが現れ、のたうち回つた——。海中から現れ出た巨大な半魚人や悍ましい数の彼らを吹き飛ばし、そしてそれに倣うよ

うに、イルカノのようなバケモノも、あるいは悪魔のようなシルエツトを持つバケモノも天空から現れ出て、彼らに襲い掛かる。老人は身動きすらとれなくなつた私を見て、鼻を鳴らし、襟首をつかんだ。

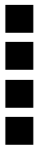
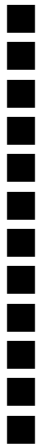
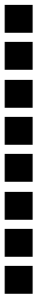
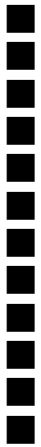
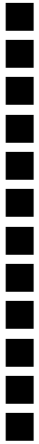
中身が違うのか、くだらない——何やらそんなことを呟いていたような記憶がある。震える手も、凍える足も、視点の定まらない視界も、聞き取りがたいこの耳も、肉体とのこの乖離すべてを一蹴し、老人は私そのまま引きずつて連れて行つた。

私が目覚めたのはその時点においてであり、そして当時の私は、そのあまりの体験に精神が崩壊まではいかないものの、大きな軋みをあげた。それまでの私にあつた、神と、人間との関係に。人間の神に対するあり方に、その分析に、そして資料に、私が学習し、これから学ぼうとしていたそれらすべてを崩壊せしめた——！

ならば私は人類のために進まなければならない。神だ。あれらの神々に、私はコンタクトを試みる必要がある。私に限らない。私以降の人類でもいい。誰かしらが彼らと正しく接触を凶らなければならない。さもなければ世界はああなるのだ。私が視てしまったあの物語のような、世にも悍ましい光景こそがすべてを塗りつぶしてしまう——
——それではあまりにも救いがない。

そのためならば私もまた、時に狂気に走ろう。古に封されし書物を紐解き、論文を解析し、そしてありとあらゆる規格をもつてして、私が私でなくなつたとしても、私は解き明かそう。

それでもしなければ



あいあ、あいあ。
たすけて。

(以降はボールペンで書きなぐったような、名状しがたい絵が続くため割愛)

マシユルフマイハート その2

”Where there is Cosmos, Chaos lurk and fear reigns” ♪ ”But by the insanity story have been told ferret, mankind was given hope of fake” ♪

「何だアンタ、そのSAN値が下がりそうな歌は」

「おおー！ なかなかシャレオツな店内ですねー。つと、真尋さん！ これですよ、これ！ このクレープ！」

「は？ ちよつと待て、なんだこれ持ち帰りとかじゃなくて普通に店内で飲食できるような専門店じゃないか。ガレットとか、さも当たり前のように置いてあるし」

「およ、ガレットをご存知とは、真尋さん博識ですねえ。でもそれがどうされました？」

「一品ごとの値段帯の問題だ！ 500円以上の値段とか、普通に食事1回分の値段だぞ。高校生の俺たちが寄るような店舗じゃないだろ」

「おつと、そつちに突っ込みがきましたか、相変わらず所帯じみてますねえ……。でもまあ、いいじゃないですかあ、たまには。デートみたいなものなんですし」

「何がデートだ、何が。大体、デートだろうが何だろうが、金銭感覚を失うのは只の考えなしだっ」

「真尋さん女の子の子と食事に行く時、普通にサ○ゼとか入っちゃいそうですねそのノリだと……」

「何だ、何か文句あるのか？ おい、なんでそんな打っ手なし、みたいに肩をすくめるんだアンタ。学生の金銭感覚が大前提だろ」

「いえ、私は別にいいんですけどね。いうほどサ○ゼのメニューを知

り尽くしてる、食べつくしているってこともないですし」

「それに大体、下手な時間の間食とか、普通に太るだろ」

「大丈夫！ おやつは全部、別腹ですよ」

「全部って何だ全部って。一体何品制覇するつもりなんだアンタ……？」

市電を使い駅前から数分。赤レンガのちよつとおしゃれなお店で、店の外観相応なお値段のクレープを購入する真尋と龍子である。ちなみに真尋はキャラメルソースで、ニヤル子こと龍子はチョコバナナキャラメル。どちらもまあ無難といえれば無難に聞こえなくもないが、これで金額的には、近所の古本他総合リサイクル販売店でセブンの息子の変身アイテムが買ってしまう値段である。軽く戦慄しながらナイフとフォークを持つ真尋は目が笑っていない。対して龍子は平然とバナナとクレープ生地を切断し、楽しそうにもちやもちやと食べていた。

店内は内装、テーブル、座席、小物、皿やらグラスなど含めて一通り店の外観にそった、かなり洗練された店である。座席で向かいあいながら、真尋は肩身が狭い。明らかにこういう店に不慣れな男子高校生の凶である。実際、当然というべきか女性層やらマダム層が多く、その中に点々とカップルが混じっていたりするのも、彼の肩身の狭さを助長していた。半眼で龍子を見つめるも、特に気にした様子もなく、嬉しそうに、大変美味しそうに、音もなく食べて飲み込んでいた。「あれ、どうしました？」

「なんでもないよ。……で、アンタ、最近どうなんだ？」

「どうだ？ って、何がです？」

「学校でだよ。思いつきり目の前で炸裂してたら、あれ。何かその後、俺の知らないところであつたりしたか？」

「あー、あ、それですか……」

周囲がわいわいがやがやとは言わないまでも、それなりに人が多いこともあって、小さめの声の会話程度だったら誰も気にしないだろうという具合である。とはいえず、聞けば一歩間違うと宇宙的真理に到達しかねない情報の断片にかかわる事柄であることは十分承知して

いる真尋であるからして、その口から出てくる言葉は、色々と調整されたものになっていった。要は「命狙われてたが、俺が入院していた時とかそのあとに何もなかったのか」というところである。

当然のごとく龍子もそれを察したが、彼女は困ったように笑っていた。

「正直、私もそこまでどうなったかは把握してないですよ。把握する必要がないというか、外部に任せたとはいいか」

「外部に任せたと？」

「姉の同僚さんというか、本当なら一緒に真尋さんのところに来る予定だった人がいらっしやるんですけどね？ 直前で季節外れのインフルエンザにかかってしまったらしく、何もできなかったそうなんです。その人との連絡パイプは残っているので、ご協力願いました」といいうかなんでインフルエンザ……」

「私も、さすがにそこまでは。調べる必要もあまり感じませんし。

ともかくそっちに投げたことで、色々と抑えが効いている状態らしいです。実際のところ、私の方にとばっちりが来たのは、姉のことが原因だったようで」

「姉？」

「ほら、クジラが流れ着いたじゃないですか。全身炭化したもの。あれの時点で既に、『姉の体』を含めて色々漂着していたらしく。そのとばっちりらしいです」

「そういえば、なんか聞いた覚えがあるな。アンタの姉から……」

———こう言うに変かもしれませんが、表ざたに神話生物とか魔術師とかが活動しようとする、周囲の別組織とかからつぶされるんですよ。

———まあ端的に言ってしまうえば『自分たちの情報漏洩』にもつながりかねないからですかね。

———『俺たちの邪魔になるから止めろや』ってところあたりならんでしよう———

「なんでそっちは報道されないんだ？ 明らかにどっちも大事件だろ」

「いえ、組織も手をまわしたららしいですけど、それ以前に、第一発見者の方が、その、直視した瞬間にヤっちゃったといえますか、アレしちゃったらしいといえますか」
「……………」

間接的に見知らぬ第三者の正気を消し飛ばしてしまった、その片棒を担いだ気分になった真尋。ひどく居心地の悪そうな顔である。切断したクレープとアイスクリームを口に入れても、いまいち味がしないのは仕方ないだろう。そんな彼の気を紛らわせるためか、龍子は「えいつ」と自分のクレープを真尋の半開きだった口に押し込んだ。
「……………ん。止めろっての。だからデートじゃないって言ってるだろ」
「そう言いながら、しっかり食べてますね。器用に歯とかで、フオークに唇とか接触しないように徹底する必要は、あまり感じませんが……………」

ここで「大体アンタは、そういうことやって何の得がある」とか「こういうことやるのに抵抗がないのか」とか、そういうことは言わない真尋であった。藪をつついて蛇を出しそうだと直感的に判断してるのだろう。よって彼がとった行動は、何も言わずに自分のクレープを切って一口食べるだけであった。

「そもそも大前提として、俺の快気祝いだろ。何で自己都合を優先してるんだよ」

「一回食べてみたかったんですよ♪ さすがに一人じゃ入りづらいですし」

「どうしてだ？ ここ、一人で来てる客も多そうなんだが」

「まあいいじゃないですか。真尋さんも眼福なんじゃありませんか？」

「そ、ん、……………」

もつともこれに言葉が続かないあたり、真尋もまだまだ修行中と言えるかもしれない。

してやったり、みたいに微笑む龍子は、確かに彼の初恋の女性の面影が強く残っていた。

「あ、高いで思い出しました。そういえば真尋さん、四月ごろにテレビ

に出てませんでした?」

「は?」

「いえ、土曜日のスペシャル番組的な企画で一度、見かけた気がしたの
で。カレーとか作ってませんか?」

「あー……、まあ、出てはいたか。参加賞目当てで」

「参加賞?」

「商品券。前、深夜の通販で包丁セットのやつをやっていたやつが欲
しくってな。当日、そのまま電話する気は起きなかったんだが、後日
店頭でお試してみたら妙に使い易くって。ただ自腹を切つてまで
買うのは癪だったんだが、ちょうど暮井から誘われて、ホイホイつい
ていった」

「真尋さん、変なところで意地を張りますよね……」

ちなみにその包丁類は、自宅で現在も丁重に使われていた。

「いえね? 姉から、ちようどそれが放送中に『将来クラスメイトにな
るから、顔を覚えておくといいでしょう!』とか言われていたのを思
い出しまして。あのときの真尋さんの作つてたカレー、ものすごく高
そうだったなーと」

「意外と安上がりだぞ? 材料代については。電気ガスと人件費は除
くが」

とうかさらりと予言めいたこと言いやがるな、と、真尋は左頬を
引きつらせた。事前にいずれ会うことを前提としたその会話は、まあ
彼女の本性というか、正体から察すれば当たり前な言動であるかもし
れないが、しかし、おや? と真尋の想像力は違和感を覚えた。なぜ
そんなことをわざわざ、この眼前の少女に語る必要があるのか。二人
はその起源を同じくし、存在としてはほぼ同格とってよいはずだと
真尋は考えていたのだが。

その話をオブラートに包みながら聞くと、龍子は「あ、それでした
ら」と一度咳払い。

「せっかくなので、真尋さんにはお伝えしておきたいことが。少し正
気度が下がるかもしれませんが、それについてはご勘弁を」

「帰るぞ」

席を立つ真尋。

ひしつ、と彼の腕に縋りつく龍子。

「待ってくださいってば！ 真尋さんだって、姉のこと、もっと知りたいでしょ？」

「ええい、鬱陶しいつ。そんな危険のあるような情報を、世間話みたいなノリで話すなつ。俺の正気度は誰も保障しちやくれないんだよ！」

当人たちは割と真面目な話であったのだが、声が聞こえないだろう周囲からするといちやついてるようには見えぬのか、生温かな視線が贈られる。実態を知っていれば鳥肌ものどころの騒ぎではないのだが、無知とはかくも恐ろしい。だがそれらの視線に気づいてしまったせい、あるいは泣き出す一歩手前みたいな顔をされてしまったせい、正体が正体であつても半ば彼は罪悪感めいた感情に襲われる。やむなく、あきらめたように真尋は席に戻った。

せめてもの抵抗とばかりに、バナナを一つ奪う。

「あつ」

「それで、何がどうなんだつて？」

「バナチョコ……、いえ、なんでもありません。」

えつと、ですね？ まず化身としての成り立ちの話なんです。私は姉の子機ではありませんが、大本、本体の子機ではないんです。なので実質、私はごく普通の女子高校生というわけですね。あ、普通にしたら美少女ですが」

子機？ といぶかし気な真尋に、両手でろくろを回すようなジェスチャーを交えながら、龍子は言葉を選ぶ。

「分離していった流れ、と言いますか……。まあそれはいいか。化身っていうのは、誕生する際に目的というか、ミッションがあるんですよ。その上で、私は姉とは違うミッションを帯びています。いうなれば、真尋さんをサポートするために居る存在ってことです。よつて私は、真尋さんを守る存在としての化身の姉とはまた違った存在なんです」

「いまいち要領を得ないんだが……」

「姉は真尋さんを守るために作られた存在なので、つまり最悪、大本が

『大本として』ふるまう必要がある化身なんです。ですが私は、大本が大本としてふるまう必要がないような、そんな化身。

姉が自分から公言していなければ、おそらく命の危険にさらされたりするまで気づかなかったんじゃないですかね」

「自分がそういうのだと気づいていないってことか………。なんか、深き者どもっばいな」

「まあもつと自由度が高い存在ではあるんですけど、とはいえ女子高生というか、あくまで人間としての機能を優先してる化身なので、変身したりとか、大本が出張ってきたりはできないらしいです」「知識とかが中途半端なものもそれが原因か？」

首肯する彼女をじつと見る真尋。要するに、ニャルラトホテプの本体と思われる、あの「暗黒の男」の人格が出てこない、さらに言えば特殊能力を持たない化身ということらしい。そもそも這い寄る混沌が相手であるのならこれくらいは平然と嘘をついてきそうなものだが、聞く限り真尋は彼女の言葉に嘘がないと直感できる。これは「彼女が認識していかないだけで」ということではなく「そのことについて心配する必要がない」というたぐいの直感だった。

ため息を一つ付いてから、彼は再度問いかけた。

「それって、化身する意味があるのか？　完全に別な生命体になつてないか？」

「あ、いえ、とはいえど大本にフィードバックはされるらしいですし、基本ベースが大本から派生してることに違いはないので。」

とはいえ別にそんな、予知めいたこともできませんし、腕もびろびろーって伸びませんし、SANチェッカーも複数つけたら頭が粉碎しまするので、そこはご安心ください」

「最後の一言には、全く安心できる要素がなかったんだが……。」

半眼で睨むように見られても、龍子は困ったようにはと笑うだけだ。可愛いらしい。さすがに真尋から不快感を抱かれないようデザインされた、ひるがえって、真尋に好まれるよう設計されたと言うだけのことはある。あるのだが、それを正面から受け入れてしまうは真尋のアイデンティティ、人間性の否定だ。意地でも認めるわけにい

かないのか、真尋は黙ってコーヒーを口に含んだ。

と、ここで龍子がふと不思議そうに、真尋に問うた。

「真尋さんて、どうしてそんな気難しくなっちゃったんですか？」

「別に、好きでなったわけじゃないぞ」

「じゃあ、どうしてそんなに不機嫌そうなんですか？ いえ、元気がないって言ったらしいですかね。いつもより落ち込んでる感じがするっていうか」

「そうか？」

「言動はともかく、ふとした振る舞いが」

「なんでアンタがそんなの分かるんだよ……」

「それは、これでも私、真尋さんのことはちゃんと見ていますので」

その一言と同時に、えへん、と胸を張る龍子。ちよつとした殺し文句である。また彼女の姉を彷彿とさせる振る舞いだった。

真尋はなんとも言えない名状しがたい表情のまま、しばらく黙り。

「入院明けだから、まだ家に戻って、慣れてないんだろ。単純に」

「ごまかすように、そう言っ顔をそむけた。」

劉実ちゃん残留 I F、あるいはネクロノミコン計画 成功ルート

「——正直に言えば、アレの掌の上で転がされるのは癪に障る。が、お前を放置しておくのは後々のためにならん」

「オレがなんだっていうんだよ、アンタ」

『奇妙な歲月』って小説があるんだが、知ってるか？ 人類がアレの策謀の前に完全敗北する物語だ。お前が生きてる状況っていうのは、ちよつと誰かが手を加えれば、すぐソレと同じになるって話だ」

真尋の想像力は、それだけの情報でなにがしかの答えを導き出している。そして、その結論に対する違和感に真尋はついに自分自身のこの認識の異常さに気づいた。想像力があるというには、明らかに彼の予想は現実のそれを射抜きすぎている。霧子（仮）との会話におけるリアルクトウルフ神話小説群の知識から導き出されたり予想とはわけが違う。いや、あれももしかしたら実際のところは違ったのかもしれないが、それはともかく。少なくともノーデンスの言葉がただしければ。おそらく、自身は「這い寄る混沌により改造されたヨグⅡソトスの落し子」なのだろう、という予想だ。そしてノーデンスの顔を見るまでもなく、彼に確認をとるまでもなく、それが事実であろう確信があった。その確信がやけに絶対的なものであるという認識が、まるで刷り込まれたかのように真尋の中に沸き立っている。そしてほぼ間違いなく、自分をとらえたダゴン秘密教団のような組織の連中は、己の使い方を間違ったのだろうということも。

あれ、この被害妄想のような誇張の入った刷り込みめいた強迫観念のようなそれは、これって不定の狂気にでも入ってるんじゃないのだろうか、と疑いはすれど、彼の認識自体が大きく錯乱状態にないことから何かが違うという理解もある。ただし現状、どうあがいても真尋

自身の正気を真尋が証明することは不可能である。すでにS A N
チエツカーは存在しない。この狂気の世界に、真尋一人で立ち向かう
しかないのだ。

「わかるか？ お前が生きていとまずいってことが。じゃあ、わ
かったら死ね」

そしてそれだけ言って、今度こそノーデンス老は銛を構えて投擲し
た。投げ槍の要領で放たれたそれは、明らかに速度を増していく。真
尋の身体が動くよりも何よりも、既に彼の目の前、刺さる直前の位置
だ。このタイミングに至り、真尋の中の時間が静止する。徐々に徐々
に近づいてくる銛の先端をかわそうとすれど、彼自身の身体はびくと
も動かない。状況に違和感を覚えると同時に、嗚呼、これはいわゆる
死に際に世界がスローモーションになるというアレだと納得した。
脳裏に数々の映像がよぎる。冒流的な映像だったり、母親や父親、学
校の友人たちの顔やスピーカーフォンのような声も脳裏をよぎる。
そして不思議と、最後に脳裏をよぎったのは、やはりというべきなの
か、霧子（仮）の姿だった。記憶の中の霧子（仮）は、ひどくおかし
そうに、それでいてつくしむような眼をして真尋を見ていた。

「――」

こんなところで死んでたまるかと。だが、すでに真尋にはどうしよ
うもない。そして刃そのものは、もはや真尋には決して止めることが
できない。

そして――すべては決した。

八坂真尋は、八坂真尋という意味を失った。

思いも、決意も、何一つこの場に残ることはなかった。

※

真尋の頭蓋を跳ね飛ばした銚は、そのまま巨大な貝殻の内側にぶつかり跳ね返る。

どしやり、と倒れた真尋の体みて、ノーデンスの化身はそれに近づいた。足元、いまだ脳漿とも血液ともつかないそれらを吐き出す肉塊となったそれを見下ろし、嘆息。

「念のため、こっちもやっつくか」

片手右手を振り上げると、先ほど投擲された銚が再びノーデンスの手に収まる。それを持ち、ノーデンスはさつきまで真尋だったものの胸の中央に振り下ろす。あたり一面に転がる肉片と体液のようなもの。それらの色は最初は赤いそれであったが、徐々に緑色に変色し、玉虫色を帯びていった。

変色する死体の液体に顔をしかめることもなく、ノーデンスは当然のように銚を引き抜く――。

そして、違和感に気付いた。

「なんだ――？」

真尋の失われた頭部の箇所、同じ肌色をした何かがめきめきと盛り上がる。当然それに銚を振り下ろすノーデンスだったが真尋だったものの胴体が猛烈な勢いで飛び跳ね、彼の腕を払う。そのままごろごろと転がり、ノーデンスから距離をとった。

一方のノーデンスは右手を抑える。病的に白い肌、真つ黒な爪先の右手が、がたがたと震えていた。

「何をやった、てめえ」

「――あ、う、ううあ――」

びくびくとしながら、まるでマリオネットか何かの様に、糸につられるように立ち上がる真尋の胴体。そのまま真尋だったものの体は、両腕をだらりとし、猫背になり、そして首を地面に対して直角に上空に向けた。びちびちと、かろうじて肉によって形成された頭部が、残った下あごのそれに対応して穴が開き、口のような形状をなす。そのままうめき声のようなものをあげながら、「それ」は現れ始めた。真

尋だったもの体の内側から、口を出口として、一本の、黒い、太い触手が這い出てきていた。うねうねと蠢き、そのたびに真尋の口から黒い吐しゃ物があふれ出る。ぎよろりと、触手に三か所亀裂が入り、そこから目玉のような器官が出現する。目玉からは黄色い粘液があふれ出し、しかしそれらは重力に従うことなく触手の先端へと向かっていく。やがて自重に耐え切れなくなったのか、真尋だったものはその場に膝をつき四つん這いの状態に、しかし首だけは相変わらず状態を変えずじょうくうをむいているさまが、すでに彼の体が死んでいることを表していた。

黄色い粘液のそれは、先端に集まり球体のようになっていく。わずかに赤黒い色の渦が表現にうごめいており、独特の刺激臭を伴い周囲に放つ。ノーデンスもそのせいが一瞬顔をしかめたが、ぼしやり、と飛び散る、膿のようなそれの中から這い出て、現れ出た存在に鼻で笑った。

「ニャルラトホテプ——這い寄る混沌か。相変わらずだなあ」

立ち上がったのは、「黒い外套を着用した」「肌まで真っ黒な」男の姿だった。フードを後ろに払えば、額に赤いチャクラのある、黒い肌の、剃髪の男。決してそれは人種が黒人だという問題ではなく、正しく男の肌の色はこれ以上なく真っ黒に染まっていた。容姿の美醜は不鮮明。しいて言えば眉毛の形状にわずかに特徴があるくらいか。だが、そもそも輪郭をとらえることに意味などないことを、ノーデンスの化身は正しく理解している。閉じていた目を見開くその「神父」。わずかに黄土色なその黒い瞳をノーデンスの化身に向け、彼は薄く微笑んだ。

「思ったよりすんなりと、計画通り進んだね」

何？ とノーデンスが返すのとほぼ同時に、神父は指をはじく。

「わかっていないなノーデンス。そういうところが、君がよく地球人から響感を買っている箇所だというのに」

「なんだと？」

「愚かだねえ。『この少年』はもう死んだ。君が、殺したんだ。つまり——君の加護はもう『適用されない』ということだ。私がいくら手を加えても、もう問題はない」

「はあ?——」

次の瞬間、神父の左手には、さきほどノーデンスが銛で吹き飛ばした頭部の破片や眼球が結集していた。

マリオネットのように不気味に折れ曲がった胴体へと指をはじくと、それが名状しがたい音を立て、液体を吹き出しながら、その形を大きく変えていく。肉と、骨とが、圧縮され丸まり変形する途中とで、明らかに粉碎され、吹き出し、その場に飛び散っていく。その様を前にしても、ノーデンスは動かない。いや左手を差し向けて何やら念を送っているようではあるが、何か違和感を感じているのだろう、顔をしかめている。

やがて這い寄る混沌の手に現れたのは、形状の欠けた本のようなであった。そこに、残りの頭部のパーツを、無理やり接合する。まるで侵食されるかのように、徐々に徐々に形が変貌していくそれ。

「……………悪趣味だぞ、てめえ。最初からそいつが生まれるように、自分でデザインしておきながら、最後は『そう』するのか」

「ああ。もともとはだね。君の血筋に紐づけた結果、うまいこと『死者の書』^{アル・アジフ}の魔導書へと接続を調整できたというのが正解なのだよ。ただし、特異点^{ポータル}——ヨグ・ソトスの眷属としてのこの少年をいじるのに際しては、君の加護が邪魔ではあった。だが、君自身の手でそれを放棄したのなら、君自身が自分の庇護対象でないと、彼を殺したのなら、それはもう適用されない。

——よし、完成だ」

その手元にあったのは、一冊の、赤黒い本だ。表面には人間の顔の半分が張り付いたような異形のデザイン。ただおぞましい見た目に反して表面の触り心地は悪くないらしく、さらさら、つるつると神父は撫で続ける。

「かの青年が狂い死してから、幾星霜……、13回は星を読んだかな」「はん、知ったこつちやねえなあ。こつちにも切り札は居る——」

「——まだ分かっていないようだね。この少年が『こうなつてしまった』時点で、この『流れ』において君はチェックメイトだ」
「何?」

次の瞬間、ノーデンスの横に火柱が上がったとたん、その場には焼死体が一つ転がったのみ。啞然とした表情の老人に、神父は腹を抱えて嘲った。ようやく、ようやく、ここまで含めてすべてが這い寄る混沌の手中にあったと気付いたノーデンスであったが、時はすでに遅かった。指をはじく神父。と、その背後から、名状しがたい、顔面のない、頭部に黄金の装飾のある黒いライオンが——。

『フェイスレスピースト
顔のないフアラオ』、老体相手には丁度よいんじゃないかな?」
「ほぎけ——」

ノーデンスの化身の右腕には、銀の鎧が装着されていた。銛はより大型の、先端が三又に分かれた槍へと変貌し、襲い掛かってくる獣相手に応戦する。だが、それを横目に「神父」は、真尋だった書物を開く。そのうち、血と骨と肉とで創成された項のとある箇所を開き、唱えた。

「それは永遠の死にあらず、死すら超える未知なる永劫なり——
——」

「っ? てめえ、まさか『アレ』をそのまま実行しようっていうんじゃないやねえだろうなあ」

「そのつもりだよ。もともと、『私』が動いている以上、予想は付きそうなものだったがね」

神父の読み合せた一節から、ノーデンスは『奇妙な歳月』アーカム計画にありし一節を想起する。すなわち、今はまだ眠りしクトウルフを指すその言葉を。

薄く、嘲るように微笑みながら、神父はノーデンスの化身を見やる。
「古き時代、探索者——『闇を照らせし者』との契約は、ここに果たされる。彼らが守りし仮初の希望は、『われら相手に生き延びることができる』物語は、ここで、我々に、回収される」

「……………少なくとも、テメエがやることじゃねえだろ」

獣の首を刎ねると、ノーデンスは神父へ駆ける。一方の神父は、

ローブの下に本を閉じてしまいこんだ。そして銚が、かの神父の力の胸元に突き刺さる——首から下げるロザリオは十字架でなくいびつな五芒星、エルダーサインであるところが嫌に皮肉が効いている。ただ、貫通と同時に上半身すべてを消し飛ばしはしたものの。

「知っているだろうか？ 私の化身は君たちと『意味が違う』から、撃滅は無理だと」

その背後に、さも当たり前のように立つ神父の姿がある。

構わず右腕を振りかぶり、その頬から頭部を右腕のメイルで抉る。

だがこれも、さも当たり前のように、目の前に倒れる死体とは別に、その奥に全くおんなじたたずまいをした神父が一人。

「いたちごっこだな。テメエの本体をどうにかしないと意味がないってことか」

「そもそも、もはや無駄ではあるのだけどね。——見たまえ」

神父の指さす先——貝殻を通して見える外の景色。

振り返ったノーデンスの化身が見たものは。

嗚呼、なんとということか！ かの巨大な石造りの都市は！ 湾曲されパースの狂った、見ているだけで距離感を喪失しそうなその荘厳さと、奥に潜む、息づく何かの胎動は！

『時計男』^{チクタクマン}がわざわざ手を出すまでもない。人類は、自分たちが作った科学の火を過信しすぎている。打ち込んで、あとは、お寝坊おねぼうさんに目覚めてもらうだけさ」

「……………もとはといえは、それもまわりまわってテメエの仕業だろ」
「そうだな。ともかく数分も経たずに、彼らは自分たちが抱いた、地獄のような有様の恐ろしいインスピレーションに耐えられず、ここに『核』を打ち込む」

ノーデンスの化身は、深いため息について腰を下ろした。神父は薄く微笑みながら、再び本を取り出す。

「お前、楽しかったか？」

「さて、それを判断するのは、私でなく私の『上司』だ。

かくして——」

その言葉が続くよりも前に、ノーダンスや神父たちは、光と熱に包まれその姿を溶かし。

時は止まり、死も死に絶えた。

※

「かくして、すべての物語に書かれていることは、すべての時代において必ず何かしらの形での実現を見る——そしてそれらは、我々が認知できていない世界において、あるいは時間軸において、まったく順不同にばらばらに、いついかなる形であつても必ず履行され、そして滅亡につながる。」

霧子（仮）は、その一節を読み上げたのち、本を閉じた。赤黒い肉片と、いびつな顔のような模様で構成された、一見して触るのもおぞましいその書物。その、目を閉じたような顔にも見えるその拍子を、どこか愛おしげにさえゆつくりとなぜる。

その表情は、微笑んでいて、でも、何かを堪えるような、悲しさやさみしさを含んだものだった。

「あーあ。私、真尋さんに告白どころか、本名すら名乗れませんでした」

地面に座り、バイクに腰掛け、彼女は堪えるように、微笑むばかり。目は下を向き、何かをあきらめたような、そんな色。

「私は——二谷劉実は、あなたとずっと一緒にいて、お話ししたかつ

ただけなんですけどね。なんでこんなことになっちゃったんでしょね。

「……………って、私ができることではないですか。私も『這い寄る混沌』である以上は」

その本を抱きしめ、彼女は微笑んだまま、泣きもせず、ただただそうしていた。震える肩を叩くものはない、風はどこか湿り気を帯びて潮の香りがする。目を閉じ、空を見上げる霧子、いや、劉実。暗雲には巨大な巨人のようなシルエツトが複数見え隠れしている。その目がほんのわずかにこちらを見下ろしているような、あるいはどこか遠くを見ているような、いないような。

劉実は立ち上がり、本を片手に、叫ぶ。

「誰かいませんか——！」

見渡す限りの、何も無い、コンクリートの平原。

彼女の声が響き、そして数秒を置いて静まり返る。

「……………誰もいませんよね。せつかく、アキバに来たのに」

真尋さん来たがってたのに、と。本人が聞いたら色々と突っ込みを入れそうなことを言いつつ、彼女は視線を右手の本にふる。当然のように、そこにはただただ人体を変じて生み出された書物が一つあるばかり。

劉実はそれを自分の顔の前に持っていき、額をつける。ぬちゃ、という音とともにわずかに彼女の顔に血がつくが、気にした様子もなく、閉じられた表紙の目を見る。

「どこに行きましようか、真尋さん」

返事はなかった。

返事は、当然なかった。

「……………どこか行きますか。誰かしらまだ、生きてる人がいるかもしれないしね」

彼女が背中を預けていたバイク——バイクにしては異様に生々しいシルエツトを持つそれにまたがり、彼女は本を再び抱きしめ

る。と、胸元から肉が裂けるような音が響き、ぐちゃぐちゃと何かを埋め込むような酷く嫌悪感をもたらす音が続く。しばらくして何事もなかったかのように、素肌についた血痕をぬぐい、ライダースーツのチャックを閉めた。

エンジンをかけ——エンジンは明らかに生命体の唸り声のよ
うな音をとどろかせているが、ともかく彼女は走る。

「真尋さん——」

自分の胸元を撫でる劉実。すぐに視線を前に戻し、ハンドルを切る。

さきほどまで平原のようだったこのコンクリートのそれは、実際は何かの壁面であったようだ。彼女はつまり、先ほどまで壁面に「直角に立っていた」ということだろう。

そのまま彼女は走らせる。と、いつの間にか壁面だったそれは、海原にかかる一本の鉄の線路と化していた。海の底にはうようよとおびたらしい数の目と巨体がうごめいていることがわかるが、彼女は気にせず走る。

「——大好きですよ」

やがてその進路の先も不気味なほどの闇につながり、バイクのランプの光もまた遠のき、見えなくなっていくた。

後には——ただ無限の暗黒だけがそこにあった。

マシユルフマイハート その3

「いやあ、面白かったですね。まさに邪神降臨！ って感じで」「アンタ絶対狙っただろ……」

「でも、いつもよりジャイオンが頼りない感じでしたね？ 大長編の割に」

「そっちよりもコンセプトを優先したんだろ、たぶん。………アレだな、狂気山脈をハッピーエンドに仕立てるとあんな感じなんじゃないか？」

「言いては妙ですが、そんなうがった感想するのやめましょうよ」

駅前の映画館から出てきた真尋と龍子。さつと真尋の腕に絡みつこうと手を差し向ける彼女のそれを、ひらりと躲して面倒そうな表情である。ちなみに鑑賞した映画については、龍子いわく「銅鑼から始まって衛門で終わるアレですよアレ、ファミリー向けですし、良いんじゃないかと思いませんか？ まあそろそろ上映終了みたいなんでアレですが」というコメントにホイホイ従った真尋である。結果、劇中にあつた「南極の地下遺跡」だの「名状しがたき姿かたちを変貌させる奉仕種族」だの「巨大な軟体生物」だのを目撃した結果か、見終わってから脳裏に様々なフラッシュバックが過って、少し疲れた様子だ。何かしら彼のアイデアに引かかかったところがあるのだろうか、それにしても通常の映画であるにもかかわらず、彼個人の事情でSANチェックめいた判定が行われていたのだろうか。発狂してないのでそこまでの点数減少ではあるまいが、いかんせんである、何かしら手を打たねばと真尋は気持ちを新たにした。

「いやー、でも私こっちに来てから映画とか初めてでしたね。結構楽しめました。フロンティアでしたっけ？ 駅に近いほうの映画館」

「ああ。というか、こっちに来てから初めて……、まあ年度頭に転校だからそんなものか。で、何をするんだ？」

「何をとおっしゃられますと？」

「さつき映画館入る前に、何か買い物するって言ってただろ」

「意外と覚えてますね、真尋さん」

どちらかと言えば、直前に見た映画の内容から想起した冒瀆的真實を即座に忘れ去りたいが故の、卑近な話題への逃走なのだが。それを知ってか知らずか、龍子は「ふふふ」と含み笑い。真尋は何とも言えず頭を振った。やはりどうあがいても、劉実の面影を切って捨てることはできないようだ。そしてまた、いつどのタイミングであの涼しげな男の声が聞こえてくるのかというトラウマのようなものもある。本人の弁が正しければ、「本体」が龍子を介して真尋に接触してくることはないのだろうが、それはそれ、これはこれである。

彼女の話を経合すれば——決して別人格ではなく、二谷劉実という存在はニヤルラトホテプの演じた人格に過ぎないということだ。

対して二谷龍子は、ニヤルラトホテプであつたものの、その存在の乖離具合は大きすぎるだろう。本体にフィードバックがあるとはいへ、もはや別人格と考えてもそんな色ない。

「どうされました？ 真尋さん」

そんな彼女が不思議そうに問うてくる。このしぐさ一つをとつても劉実を思い起こすのだから、これはもはや異常と言えるかもしれない。否、ひよつとしたら彼女はそういう化身なのかもしれない。「赤の女王」と直に相対し、接触した真尋だからこそ理解できる。かの化身が時の権力者の陰に存在する傾国の美女を参考に、卓上遊戯用に想定された化身であろうことは真尋も理解してる。そんな彼女さえ化身として過去に実在していたということも、問題ではない。問題は、かの存在が文字通り人間にとつて毒のような魅力を持ち合わせていたことだ。一目見るだけで頭から離れず、己が理性を溶かされるような錯覚すら覚えるほどの存在。それを前に、理性を保てるだけの存在として真尋は劉実を認識していた。この事実からしても、劉実は真尋にとつて特別で、そして何かが異常だろう。ただそのことについて、真尋は徹底して正体を突き止めることが出来ていない。真尋の想像力から連なる非人間的な第六感、あるいは万物万象をあざ笑う知性をもつてしてもだ。

となれば、一つの可能性として——真尋にとって、劉実、および龍子のキャラクターは。それこそ人格、容姿などすべて含めた存在が、真尋が徹底して好み愛するように想定され、デザインされているという可能性。

「……………なんでもない」

馬鹿な話だ、と切って捨てることが出来ない。彼女自身の認識としては、自身は真尋から不快感を抱かれないように作られていると言っていた。だが思い返すと真尋は、その言葉が本当に正しいことなのかということについて常に疑念を抱いている。愛し、愛された相手がかの這い寄る混沌そのものだから、当然と言えば当然である。気が付けば地上が崩壊し時間がその指向性を失い、空間の連続性が断たれ物理法則が仕事を放棄してアンドロメダの彼方へ旅行し、その玉座の中央で冒流的な肉の塊の触手がうねうねとうねり月へ吠えている可能性も、当然存在するのだ。何より一番最初に当人から言われたことである。この果てのない荒野のような名状しがたき現実には、探索者に優しいキーパー、神秘の守り手たるGMは存在しないと。

ならば、だとするならば。本当はこの龍子とて、彼女の言葉をすべて鵜呑みに出来るか、出来ないか。そして本当は、また何か別な目的が存在する化身なのではないか——。

真尋の返答に、龍子は「むむむ」と不可思議そうな顔をしてのぞき込んでくる。真尋はそれこそ、なんでもない風を装いながら、つまり面倒そうに胡乱な視線を向けた。

「なんでもないよ、言ってる割に真尋さん眉間の皺すごいことになってますけど……………」

「なんでもないと言ってるだろ。あ、それはそうとして。買い物に行くのなら、俺も母さんに何かお土産買っていくから」

「え？ あー、えっと、母の日ですか？ 早すぎませんか？」

「渡すのは後日。母さんも忙しいから、俺の部屋とか掃除しないし放置してもバレない。アンタも一応女子なんだし、俺一人で選ぶよりはセンス良いのがあるだろ」

「一応ってなんですか、一応って」

「言葉通りの意味だが」

「うー、にやーっ!」

ぽかぽかと幼児のように殴りかかってくる龍子を適当にあしらう真尋である。まあ彼の内心からすれば「そもそも這い寄る混沌なんだし」という大前提があつた上での発言であつたが、あくまで一女子としての二谷龍子は怒つた。真尋のこの塩対応はある意味、いつものことと言えbaumのこことであるが。とはいえど龍子も本気でぶん殴りには来ていないので、じゃれあい的一种ではあるようだ。

しばらくすると殴り疲れたのか、せいぜいと肩で息をする彼女。

「つたく、少しは静かにできないのか? 目立ってるじゃないか」

「誰のせいだと思ってるんですかつ、大体! 真尋さん、それだったら別に今日でなくても良いじゃないですか。どうしてせつかくのデートで、なんでもかんでも一緒に用事を済ませようとするんですかつ「デートじゃない」

「デートですつ。あと、お母さんへのプレゼントくらい、また一緒に買いに行きますよ」

「いや、アンタとそんなに歩いていたら噂されそうで嫌だ」

「真尋さんの中でどーいう扱いなんですかつ、私!!?」

ともあれ、龍子に腕を引かれてぬいぐるみのシヨップへ。なお「引かれて」とは言つたが、腕を組んでとかではなく左腕をがっちり掴み、ずいずいと前進する龍子に、転びかけながらの真尋という絵面であつた。

「あ! これなんてどうです?」

「ナチュラルに薄紫のイカ型のぬいぐるみを薦めるな……つて、なんでこんな的確なんだよこれ、足が胴体の中から生えてるじゃないかっ」

「あつ、これは?」

「……ぱ、パツと見、人魚っぽいんだが、毛糸とかあえて解れさせてるっぽいのがアレでパス」

「こっちは?」

「うり坊みみたいなシカだなこれ……つて、なんでさつきからあつちを

連想させるのばつか選んでくるんだアンタ」

それぞれ順番に、クトーニアン、ゾイ・サイラ、ジヒユメあたりを連想する真尋である。

一方龍子は「被害妄想ですよ」と反論した。

「だって、こんなに可愛いじゃないですかあ」

「可愛いって単語を辞書で調べてから出直して来いと言ってやりたいが……」

そういえば、と。そもそも劉実自体、そのあたりの感性がずれている疑惑もくはないので、龍子とてそれに等しいか。そもそも自己紹介で「ニヤル子とお呼びください」とか言ってる時点で、色々ツツコミの入れどころは多かった。ちなみになぜニヤル子なのかと言えば「二谷龍子（にたにりゆうこ）」↓「にやりゆうこ」↓「ニヤル子」という変換らしい。まあそもそも女子高生の言う可愛いほど男性にとって理解が難しいものもないので、彼は諦めたように頭を振った。「可愛い、可愛いくないっていうのはともかくとして。ぬいぐるみ送っても喜ぶとは思えないんだが」

「例えば、どういふのを送るつもりだったんです？」

「どういふの……、手帳とかか？ 親父ほどじゃないにしても、母さんも忙しい人だし」

大学教授をしてるといふ話を、ぼろりとかぼす真尋。なお龍子は、へー、とかそういう反応ではなく「なるほどだから……」みたいな、意味深なりアクションである。

「なんだその反応……」

「聞きたいですか？」

「まあそりゃ——いや、やっぱりいい」

賢明な判断どうかはともかく、一瞬なんとも言えない悪寒が走った真尋である。一体彼女のリアクションに何が隠されているのか、明らかに神話的事実への接触を察知したような感覚で、彼は拒否した。

店を出ながら、龍子は真尋に説く。

「実用的かどうかは、たいした問題じゃないんですよー、女の子は。どんなものでも、心を込めてプレゼントされたら嬉しいんですから」

「とは言ってもなあ……」

「まあ、相手に好意がある範疇に限りませうけどねー。ラブ的な意味だけじゃなくて、ライク的な意味でも」

「最後の最後にオチをつけないと、しゃべれないのかアンタは」

「——少年、あれ食べたい」

「つて、アンタもアンタでいつ出てきたっ」

す、と真尋の左手を握りながらいつの間にか現れたクー子。そしてなぜか「ひえっ」と情けない声をあげて、反対側、真尋の右肩に隠れるような龍子。どうしたアンタと真尋が向けば、龍子はなぜか涙目であった。

「だ、だ、だ、だって、神格ですよ、神格！ 一般探索者が前にして良いようなものじゃありませんよ、私だって命惜しいですよ」

「特に何もしないだろ、コイツ……。というかアンタ、今ナチュラルに俺を盾にしてるな？」

「だ、だって龍子ちゃんはお弱い乙女ですし……。それに火は苦手なんですよ、トラウマがあるんです、トラウマが！ 主に前世的な意味で！ 具体的に言うと、森を焼きましよう的な意味でっ」

「一応、そこは本体の経歴に忠実なんだな」

しかしニヤル子が力弱いかどうかは置いておいて。おっかなびっくりといった様子の龍子と、いつも通り無表情っぽいクー子（服はなぜか赤っぽいワンピースだった）。ともあれ状況として目立つには目立つので、クー子ご所望の水ようかんを買う真尋であった。

平らげ終わると「うー、満足っ」と一言残し、いつの間にもやら姿が見えなくなるクー子である。彼女の行動を全くコントロールできないという意味において、真尋は改めて自分の置かれてる状況の不安定さを自覚し、脂汗を流した。

その後も数店回るが、結論は出ない。

「じゃーん！ これなんてどうです？」

「買えるか高校生に、なんだよ三十万のコートとかっ」

意外と似合っている龍子に、素直にそうとは言わず呆れたように引きずって店を出る真尋やら。

「流しそうめんセット!」

「実は家にある」

「えっ!?!」

意外な事実には衝撃を受ける龍子やら。

「じゃあじゃあ……って、もうどこに行くんですか真尋さん!」

下着売り場に入ろうとする龍子を見捨てて書店を探し始める真尋やら。

「もう、真尋さんってば、ちゃんと買うつもりあるんですか?」

「よくよく話してみたら、アンタの好みだと買えないものが大量だっただけだ」

「もうっ」

憤慨する龍子であるが、真尋とて真実である。プレゼント探しに付き合ってもらってる側でこそあるのだが、いかんせん龍子が龍子なために話が前進していなかった。

「まあアレだ。プレゼント探しは今度、勝手にやるよ」

「うう、なんか納得いかないですっ」

「あともう夕方だし、そろそろ帰らないと夕食の支度が遅れる」

「本当、所帯じみてますね……、って、あー、でしたら真尋さん、あそこに寄ってくださいよ」

「あそこ?」

北十二条、大通りに並行して歩いてた途中。龍子が指さした先は、入り口に「銀屋」と看板のなかった、古い建物だ。何かのギャラリイのようにも見えるし、和服が入り口にかかっているあたり服飾屋のような雰囲気も漂わせている。

「ぎんや……?」

「しろがねや、じゃないですかね。ささ! 行きましょう、行きましょう!」

「おいアンタ、引つ張るなって、ちよつと……っ」

店内は、異様に安い値段のものが陳列されたなんでも屋の様相を呈していた。どちらかと言えばリサイクルショップなのか、しかしそれにしては嫌に店が古い。天井を見れば蜘蛛の巣状に張り巡らされた

ワイヤーにハンガーがひっかけられていたり。特に何ということはないが、それでも真尋の第六感は何か警鐘を鳴らしていた。何かこう、本来ならもつと後にくるべき場所にシヨートカットしてしまったような、そんな嫌な違和感を感じる真尋。店の奥からは「いらつしやいませ」と、やる気のなさそうな声が聞こえる。ちらりと見れば黒魔術師でも着用していそうなフード姿の誰か。女性らしいことはわかるが、はつきり言って真尋は既にここに深入りする気は失せた。

「で、何を買うと？」

「あー……、いえ、その、たまたま目についたので入っただけなんですけど」

「帰るぞ」

「待っててくださいってばっ」

踵を返す真尋の手を握って、軽く涙目な龍子。ため息をく真尋は、諦めたように足を止めた。とはいえど龍子もそこまでやる気があつて入ったわけでもないのか、会話少なく店内を物色して回る二人。にぎやかな店という訳でもないので、冷やかしか状態だ。

さすがに何も買わないで出るのはまずいという話であるが——
「真尋の目が留まる。占いパワーストーンと手書きで書かれたそれは、一回千円、おみくじボックスのようなものの中に手を入れて、石を取り出すものらしい。会計の手前に置いてあるそれを、真尋は注視する。」

「占い……、何だこれ」

「——相性占いです。二人でそれぞれ手を入れて、取り出した石を見て占います」

「一回、千円っていうのは？」

「おひとり様、千円です」

返答に何とも言えない笑みを浮かべる。ともあれ金額が高い。

と、何やら不穏な気配を感じて振り返れば、背後の龍子が何やら期待したような目で真尋を見ている。

「やりましょうよ〜」

「い、いや……」

「やりましようよ」

「……………」

「ね？」

しばらくお互い無言の圧力をかけあつたが、最終的には真尋が折れた。

料金を支払い、それぞれ手を突っ込み取り出す。真尋は紫色のそれ、龍子は

「アメジストと、ユナカイト……。なるほどなるほど。アメジストは魔除け、ユナカイトは癒しですね。お二人は……、お二人の間に、何か大きなトラウマのようなものがありますでしょうか」
「……………」

無言の真尋と、何ともいえない笑みの龍子。二人の様子を見て、店長と思われるフードの女性は微笑んだ。微笑んだ、といつても慈愛に満ちたくすりという笑みというより、少し意地の悪そうな笑みである。

「おそらく現状のままでは、抱えてる事柄について何か進歩するといふことはないでしょう。ですが、案ずることはありません。お互い、必要な時間がいずれ訪れて、距離は近くなつていくことでしょう」

「近くなるねえ……」

「なんですか、真尋さん」

「いや、何でも」

相性占いということなので、そういう話になるのだろうか……。あながち、彼女の言葉が嘘にも思えない真尋がいる。ただその必要な時間というのが、一般的な日常生活に由来するものかどうかという点について甚だ疑問であるという一点は、何をして置いても真尋において許容できる話ではなかった。

だが—— たとえそうであつたとしても。それでも自身は、いつかこの彼女と、彼女の姉を抜きに正面から向き合える日が来るのだろうか。

ともあれ。店を出た真尋は、いの一番に自分が引いたアメジストを龍子に手渡した。

「アンタにやるよ」

「へ？」

しばらく手元のそれと真尋の顔を見比べた後、彼女は半眼になり、引きつった笑みを浮かべる。頬がびくびくしてるあたり、怒りの感情でもあるのだろう。

「真尋さあん？ これってつまり、私ともう仲良くなんてなりたくないっていう意見表明ってことですかあ？」

「え？ いや違う。普通にアンタが持っていた方がいいだろ。魔除けなんだし」

「どうして私が魔除けを持つてる必要があるんですかっ」

「だって結局俺が一番被害を受けたけど、そもそも前回はアンタの爆殺が目的だったわけだし。どう考えてもアンタが持っていた方が無難だろ」

「い、いえ、そっくりそのまま真尋さんにお返ししたい言葉なんですけどそれ……？」

一応真尋の意図が伝わったせいとか、表情が軟化する龍子。だが実際問題被害を受けている割合は真尋の方が大きいので、龍子としては真尋が持っているのが正解ではあるという返答だ。真尋はそれに、首を左右に振って。

「それに——まあ、アレだ。アンタの姉の分ってことで」

「あつ——」

拗ねたように視線を逸らす真尋。曰く、その言葉に含まれた名状しがたい感情を理解したのか、龍子は目を閉じ、感じ入ったように微笑んだ。

「……ありがとうございます。きっと、姉も生きていたら喜びますね」

果たしてその、いつくしむような表情の裏にはいかなる複雑な思いが秘められていることか。ただ龍子の言葉に、真尋は不可思議そうな顔になった。

「………まるで、アンタの姉も『這い寄る混沌』の本体と無関係の個体みたいな言い回しだな」

そんな真尋に、龍子は慣れた風にウインクを返した。その仕草は、

やはりどう足掻いても真尋に彼女を思い出させるものであり――

「それは――さあ、て？ 企業秘密です」

その真意について、真尋は龍子の表情から読み取ることはできなかった。

03. 超旋律の影

さながらそれは初恋の味のように／＼R分岐

「——ふふ、ずいぶん余裕がありませんのね」

生暖かい空気に煽られる八坂真尋。八坂真尋は暗所にて、何かを急いでいた。意識していなければ自分の精神をつないでいられないよ
うな、そんな断絶が周期的に訪れる状況下において、とにかく何かし
ていなければならぬと行動をしている。ただ、それが一体何である
のか、何を作っているのか、何を操作しているのかというところには
意識が回らない。ただ紙に書いてある何かに従事しているという認
識しかなく、それがどういった事柄を意味するのかを理解するだけの
「自我がない」。

ただ、眼前に現れた圧倒的な存在に、真尋は目を離すことが出来な
かった。赤と黒の豪華なドレス。胸元と背中が開き、煽情的なスタ
イルの良さを強調している。頭には黒いベールと、両目と共に光る額の
チャクラ。三眼であるかのように錯覚させるその美貌の主は、真尋は
心当たりがあった。

だが、名前が出てこない。

真尋のそんな様子を、薄く微笑みながら観察する彼女。と、何かに
得心が言ったように目を細めて、くすくすと愉し気に笑った。

「……あら？　そういうことですよ。ふふ、また変なことに巻き込ま
れていらつしやいますね」

「——」
「あら、そこまで発狂していらつしやいますか。でしたら私の力だけ
ではどうこうできませんね」

そんな真尋を穏やかな様子で見つめ、その頭を抱き込み、撫でる誰
か——。まるで自分の理性を溶かされ、そのすべての丈を彼女へ

とぶつけてしまいたい。そんな衝動が彼の本能を焼く。だが、彼はそれに抗いながら、やはり作成するのを止めない。

「ふふ、ええ、それでこそですわ！ それでこそ私と『アウリス』が焦がれた旦那様ですもの」

真尋の脳は彼女の言葉を正しく理解できない。いや、言葉だけは脳に入ってくるが、それを正しく意味を持った文章として羅列し、整理し、解読できないといったほうが正解か。真尋の脳は著しく断絶が走る。あたかも、彼の思考を形成するための部位が物理的な欠損をしているかのように、彼の行動を彼自身は正しく把握できていない。ただやはり、頭のどこかにある理性だけはその自身の有様を冷静に見つめていた。

場所は不鮮明である。ゴシック建築のような様相でもあるし、しかし同時に近代的な都市のようなそれにも思える。実態としては判然としない広さの土地で、人の気配がしない——そんな場所の何処か、どこかの工房のような場所に真尋は引きこもっていた。その工房にたどり着いた時点で、真尋はいつの間にか握っていた紙片一枚を頼りに、何かの道具を作成しようとしていた。薄暗がり、陽光が望めないだろうこの地底の都市で、真尋は黙々と、機械のように作業を進めている。

そんなさ中に現れたのが、見覚えがあるはずの彼女であった。

「どうせ、わたくしの名前も思い出せないでしょうし……、クイーンとお呼びください」

返事がないだろうことを彼女は、クイーンは理解していたが、それでも真尋にあえてそう名乗った。何か欲しいものはありませんか、と言う彼女に、震える指先で絵の箇所を指し示す真尋。ほとほと嬉しそうに、彼女はそれを嬉々として探しに行き、とって戻ってきた。

「しかし、意外と本格的ですね。さすがに『こつちで』アレを再現しようとする、かなり無茶をする必要があるということなのでしょうが………。ふふ、でもまともに考える頭もないながら、必死に足掻く旦那様はそれはそれは『おいしそう』ですわね」

じゅるり、と舌なめずりをする音を前にしても、真尋は何も反応を

示さず黙々と何かを作る。

「万物に愛を、とは言いませんが、何か変化があるというのはいはうれい
ですわね」

「ふふ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「…………… 会話が出来ないというのも退屈ですわね」

ため息をついて、彼女は真尋の背中にしなだれかかる。感じるやわらかな押しつぶされる感触も、ほんのり香る匂いも、頬にかかる髪も、同時にくっついた相手の頬の冷たさや柔らかさも、すべてが彼をかき乱す。一瞬手が止まり、彼女へと向き直る真尋。これを幸いにと彼女は真尋の膝の上ののり、胸を彼の体に押し付けるよう腕を首に回す。視界のほとんどを彼女の、「女」を凝縮したような美貌に埋め尽くされた真尋。いつそ蠱惑的な表情を浮かべて彼の頬に手を伸ばし、顔を近づける。しかし真尋は、それ以上の行動をとらなかつた。

「……………」

「……………」

「あ、やっぱり何をしたらいいかもわからないのですわね」

残念、と彼の膝の上から降りようとする彼女だったが、ぐらりとバランスを崩し椅子事倒れる真尋達。そのさ中、一瞬だけ真尋が彼女の腕を引きその下敷きになる。そのまま倒れ、真尋を下敷きに押し倒し

たようになるクイーン。一瞬、自分たちの状況を見て、そしてぽかんとしたように目を見開いて呆然とし、そして頬を朱に染めて、彼の体を撫でる。

「いけませんわ……、これではルール違反じゃありませんの、わたくし」

そう言いながら、しばらく真尋の体を愛撫するクイーン。やがて満足したのか立ち上がり、真尋を抱き起し、椅子に座らせた。真尋は震える体のまま、無理やりにそれを動かし、再び作業に取り掛かる。ぶるぶると、最初から最後までずっと震える身体での精密作業はほとんど困難を極めているが、それでもかまうまいと彼は動いていた。段々と組みあがっていくそれは、一つの羅針盤かルーレットのような何かであった。いや、それにしても妙に小さい。懐中時計を二回りほど大きくしたような、手では収まらないサイズである。中央に回転円盤と、針のようなものが五つ。目のような刻印を彫り込む真尋に、クイーンはひどく楽しそうな笑みを浮かべていた。

時折、指先が狂って盤のパーツをどこかにやっつけてしまいそうになる真尋。クイーンはそんな彼を支えて、何処かへいつてしまったパーツを回収していた。仕方ありませんわね、と言いつつもその表情は酷く慈しみに満ちていた。男を惑わせる魔性のような美貌の持ち主であるクイーンはその振る舞いは、どこかいびつであり、しかし、しつくりもきていた。

真尋の手が止まる。完成したのか、ルーレットのような、羅針盤のようなそれを手に取り、図面と確認する真尋。と、図面がべきべきと音を立てて圧縮されるように消失する。「あらあら」とクイーンは驚いたものの、興味深げな様子で真尋の手元のそれを見た。中央のくぼみ——それ以外は図面の通りに出来上がっているように見える。しかし、そのくぼみを真尋が調達できるわけもないことを、クイーンは知っていた。

「んん、これ以上は本格的にルール違反になってしまいそうですわね。でも……」

真尋一瞥し、考え込む様子のクイーン。だが表情はわずかに微笑み、頬は紅潮している。明らかに結論は出ているようであり、実際、思案するポーズもそう長くは続かなかった。

「よろしいですわ。でもわたくし、これをしたらしばらく『何もできない』と思いますので。後は旦那様の独力に期待させていただきますわ」

ぱちん、と右手でフィンガースナップ。指を鳴らしたと同時に、彼女の背後の空間に「亀裂が走る」。三つの亀裂はそのまま展開し、巨大な三つの瞼の向こうには見るもおぞましいほどに大きな赤い目玉が存在した。ただ、そのサイズは彼女の身長半分ほどか。そこにクイーンは自らの右手を入れた。ぐちよぐちよと音を立て、黄色い粘液やら赤い血しぶきやらが飛ぶ。それに不快感を示すこともなく「どこにありましたっけ」と言わんばかりに、軽い様子で探る彼女。と、やがて何かを引き当てたのか、「やりましたわ!」と愉し気に引き抜いた。手元には、ぼんやりと光る黒い多面体。いつそ球形に近いそれを、彼女は真尋に差し出した。彼はそれをじつと見ている。と、飛び散った粘液やら何やらが蒸発し既に姿もなく、背後の目玉も消えていた。

震える手でつかみ取ろうとする真尋。と、一瞬それを取り落としそうになり、クイーンが彼を支えるように手を握る。

「本当に仕方ありませんわね、旦那様は……」

言葉に反して酷く嬉しそうに、そしてどこか寂しそうにクイーンは微笑む。真尋の脳裏には、やはり何も浮かばない。ただ、完成させなくて。自らに流れる情欲を切り離れた、ただ一つの狂った目的意識だけが存在した。

完成した盤面は、それと同時にうすく、鈍く、紫色の光を放ち、薬品のような鉄のような、しかしそれをしても異様に腐ったような刺激臭を漂わせ始める。それにわずかに顔をしかめる真尋であったが、彼は迷わずその盤の上に手をのせた。

中央のそれを起点に、五つの針が高速で回転する。あたかも時計のそのような動きを見せる五本のそれら。一本が半回転する周期ご

とにおおよそ別な一本が動作を開始する程度の速度であるが、順繰り、時間を多少かけて、やがて十二時の位置で針同士が一致する。

「つ、はっ、」

その瞬間、真尋はようやく我に返った。己の格好が普段着用しているような制服やら洋服の類でないことを認識し、見覚えがあるような見覚えのないような、まるで夢の中にいるような自分の足元と現在の場を正しく認識し、そして体の震えすら治まり、猛烈な吐き気が彼の体を焼いた。慌てて口を押える真尋だったが、そんな彼を後ろから抱きしめる女性の感触が一つ。頭を抱きかかえるように撫でるその彼女を、その己の欲求全てを崩壊させかねないような「化身」に心当たりが真尋にはあり――。

そして、気が付けば真尋は、どこへとも知らない虚空へと投げ飛ばされていた。ただ無限の暗黒だけがそこにあった。暗黒の中にあつて、真尋の視界は正しく現在の空間を見ていたのだが、見ていたからと言って光を観測できなければその空間の詳細もディテールが判然とするわけもなく。ただ漂う靄のような霞のような、己の思考がただただ広がっていくのを感じる。手や足の感触はあるが特に力が入る訳でもなく、動けるわけでもない。電気信号の移動先が断絶されているような、そんな不快感がある。俗にいう幻肢痛とかいうやつか、と真尋の想像力は状況に対して考察を導き出したが、そこで真尋ははたと気付く。自分の体そのものの違和感にだ。まず呼吸を感じない。生理的な動作としての拍動もなく、そして気が付けば自由がない。自らの生命活動に対する認識が、正しく自らを生命ではないと導き出せるほどに、現在の真尋の体感はただの夢見における思考のみであった。例えるなら、テレビ画面を見ている自分の視界だけが存在しているような、そんな感覚だろうか。真尋自身、形容ができないような、恐ろしい状況である。

まるで頭脳だけで生かされていたりするのでは、と彼の直近において一番有り得そうで、かつ一瞬物騒な思考が脳裏をよぎる。しかし彼

の想像力は、それとは何か違いを感じていた。真尋のそれではない拍動が聞こえる。息遣いが聞こえる。それと同時に、この闇をさまよう「何か」がいる。何かの悪夢でも受信したか、直前の状況自体がそれかと思いい瞬目を閉じてから開きなすすも、疑いようもなく現在の場所では自分の部屋ではない。頬をつねろうにも腕はなく、そして唯々絶句した。

手だ——自分を掴む何か、こう、女性の手のような感触がある。それがずぶずぶと、まるで傷口でも切り開いて内部の臓器でも取り出すような音を立てながら、血を吹き出しながら己を引きずり出そうとしていた。そしてその手の感触は、円形のものをつまもうというそれではない。まるで「本」か何か、辞書でもつかんで取り出すような、そんな感覚であった。

引つ張り出された真尋は、愕然とした。血肉と、白い肌と、胸の感触と、それらから解放され、ぱらぱらと表紙を適当に叩かれた後。

「——いやー、やっぱり新婚旅行といったら熱海ですかね！ 最近は古いかもしれないませんが、温泉、温泉！ ……まあ、このありさまを前に温泉も何もあったものではないんでしょうけど。別に私たちが結婚した訳でもありませんが」

視線は、強制的に固定されている。自身を掴んだ何者かの手によって、己の目の向いている方向が固定されているのだ。

真尋は目撃した。まるで未開の地のような有様で、白亜紀かジュラ紀の地球のイメージ映像とかでありそうな、そびえたつ崖の方々から滝のように温泉が流れ落ちるさまを。遠くで何かの声が聞こえ、空は赤く暗雲たちこめ、それを貫通する光を放つ「目玉のような月」。それを前にして聞こえた声は、くぐもって聞こえたような「彼女」の声は言った。熱海？ ここが熱海だと？ 何だこの未開の地以前に人間が暮らせるかどうかさえ定かではない世界は。確かにハネムーンのメツカとして彼の両親もこちらに来たことはあったとか聞くが、こんな有様であるはずがない。これではまるで「世界でも崩壊した」よう

じゃないか。

そして彼を持つ「彼女は」、胸に抱きかかえて言葉が続ける。

「アキバもあの状況でしたし、新宿には隕石が降ってきてましたし、東京駅なんてスパイラル！ な感じでしたし。横浜はなんか建物が自己増殖してましたし、小田原は………、まあ思い出すのもアレですか。せつかく関東まで遊びに来てみたんですが、中々儘なりませんね」

真尋は、口が動かなかった。いや、動かせはするらしいし、声も出るようではあるのだが、それでも彼は二の句が継げなかつた。やがて彼女は真尋の顔を自分に向けて、どこか寂しそうに微笑んだ。

「……、まったく我ながら感傷ですね。おセンチってやつですか」

「……………あん、た」

発音こそできたが、言葉はたどたどしい。まるで何かに引っ張られているか、はりつけにされているか、筋肉をうまく動かすことが出来ない。そんな真尋を前に、彼女は表情が一瞬死に、目を見開いた。

「えっ——、真尋さん？」

真尋を抱きかかえていた彼女は——死んだはずの、夢野霧子ごと二谷劉実^{るみ}は。彼女の顔は真尋に対して、まるで死人でも生き返ったかのような、驚愕に染まった。

作為のある取り違え／本線

部活動がなく友人関係が少ない生徒は、たいてい暇である。語弊がある言い方だが、目的意識を持っていない人間がその状況に陥っていれば当然そうである。積極的に勉強をするでもなく、何か趣味に打ち込むでもなし。八坂真尋も大概そのクチであり、放課後の彼は暇を持って余していた。八坂真尋は決して協調性がないわけでもない。その場その場で適当にわいのわいの、浅い友人関係で騒ぐのが嫌いと言うこともない。しかしここ最近の彼は根本的な部分で大きくストレスを抱える日々が続いており、その手の積極性は一段階落ちたものになっている。

クラスメイトの余市は本日本体調不良につき休み、同じくクラスメイトの田中は絡まれると面倒なのでスルーしている。ならば女子生徒の暮井珠緒あたりはどうかというところ、そちらもそちらで本来接点が多いわけでもなく、また自分から話しかけに行くのも何か違うとためらわれた。照れ臭いのだろうかと自問すれど、いや普通に男子高校生が特に理由もなく女子高中生に話しかける必要もないだろうと言い訳めいた返事、自答が返ってくる。

なのでまあ宿題も出ていたしと、しばらく図書室で自習しているのも悪くはないかと考え――。

「まーひーろーさんっ」

背後から聞こえてきた女の子の不機嫌そうな声を前に、今日は厄日だと切り替えて自宅へと足を向けた。

だが敵もさるもの引つ掻くもの、ひしつ、と背後からハグによる拘束を仕掛けてくる。真尋としては羞恥と鬱陶しさとが同居したそれであるし、どちらかといえば迷惑という感覚だが、誰かに見られたらそれこそまた変な揶揄をされるだろうことは想像だに難くない。「ええい、離れろっ」と無理に引つpegすと、その場でぺたん、としりも

ちをつく彼女。

「……………真尋さん、明らかにこれメインヒロインに対する扱いじゃないと思うんですけど、そのあたりどうお考えです?」

「おはよう」

「あ、はい、おはヨ……、つて、違いますよ! ひどいです、冷たいですつ、私が、このニヤル子が一体、何をしたっていうんですか!」

「自分で自分のことをメインヒロインだとか言うクラスの女子生徒にどういう扱いをすればいいのか、生憎、見たことも聞いたこともないんでな」

邪険に扱ってる真尋である。彼女はそれこそ頬を膨らませ立ち上がり、腰に手を当てて真尋を覗き込むよう、上目遣いに見る。それこそメインヒロインを自称するだけあつてのロールプレイなのかもしれないが、生憎と真尋とは時代が合わないくらいのテンプレートな振る舞いだつた。

いや、真尋が彼女に塩対応するのはまた違った理由からなのだが、それはさておき、ニヤル子である。二谷龍子、真尋のクラスメイト。耳通りの良いふわふわした声、艶めく長い髪に大きな瞳。かわいらしいと綺麗と形容できる中間くらい、未だ成長途上であるというのが理解できる容貌。スタイルは一見スレンダーだが案外着やせするのを、何度かこうして(嫌々)体感し続けている真尋である。

彼女もまたこの学校においては、特に肩書のない帰宅部である。だが真尋とは異なり一般的な女子らしく、クラスメイトたちと遊んだり何だりというのを繰り返している様子である。たまたま今日は空きが出来たのか真尋に絡んでいるのだらうと、彼本人はそう勝手に納得している。実際のところは女子同士で遊びに行く回数よりも真尋に絡んでいる回数の方が多いのは彼も薄々自覚はしていたが、そのことを表立って認めるつもりはなかった。以前から何度か巻き込まれている事件……、事件? 事件のような名状しがたたい珍事とも超常現象ともつかぬ何かをきっかけに、真尋と龍子とは知り合い、とりあえずは友人関係となつてはいる。その時々に応じて彼女には世話になつたり世話をかけたりを繰り返しており、それで友人関係が継続し

ているという点を鑑みれば、彼個人として彼女本人を、人間的に嫌っているわけではない。

そう、嫌いな娘ではないのだ。だが問題として、彼女のパーソナルスペースは真尋のそれをはるかに逸脱して接近してくるし、所かまわずというところがある。彼女本人がどう思っただけで真尋にそうふるまっているかを確認する気は彼にはなく、彼女もそれを良いことに彼のペースを崩している節があった。

「せっかく真尋さんと一緒にどこか遊びにいかうかと思っただのにっ」

「暮井あたりと行ってくればいいんじゃないか？　生憎、俺もそんなに遊ぶ金はないぞ」

「いえ、珠緒さん今日は部活動だそうで……、って、そういうことじゃなくて！」

「別に、どこかに一緒に出掛ける約束をしていた訳でもないし」

「約束してなかったら、真尋さんと遊びに行っただけじゃないんですか？」

「だから、準備が必要だろ。いや別に事前に通告していたからと言って、必ずしも一緒に行くとは限らないが」

「ひどいです！　こころないです！　だいたい真尋さん、いつも一人でいるときは小難しいこと考えながら、眉間のあたりがぎゅううって寄って固まってるんですよ、もっと学生生活を楽しまないって」

龍子を一瞥して、真尋は頭を左右に振った。

「楽しむって、どうやって」

「可愛い子と遊びにいったり、映画見たり、お買い物したり、色々あるじゃないですか」

「そのあたり一通りやったけどな」

「一回だけじゃなくて、もっと……って、あれ？」

「どうした」

「いえ、何か今、すごくうれしいこと言われたような気が……、あれ？」

「……気のせいだ、忘れてろ。あー……、じゃあ、家にでも来るか？」

「!? え、えつと、そういうのはまだ早いんじゃない?」

「一回自宅に強襲かけといて何いってんだアンタ」

それだけ返して踵を返す真尋に、待つてくさいよと言いながら走る龍子であった。

「……………」

「……………」

そして八坂家、リビングにて。

ソファに座りながら毎月購読している特撮雑誌を見る真尋と、ゲーム機片手にぴこぴこやってる龍子。お互いにお互いが自由に過ごしており、特に何もなく静かで平和である。テレビでは「ゴールデンウィーク開けすぐの頃のニュースで「クジラの変死体」の話が未だに長く議論が続けられており、真尋としてもほとほと、その事件からは目をそらしているところであった。

と、龍子が立ち上がり、またしても腰に手を当てて真尋を覗き込む。

「……………真尋さん、おかしくありませんか?」

「何がだ?」

「どうして、年頃の男女が一つ屋根の下! ご両親のいない男の子のお家にご招待なんてドキドキイベントだっていうのに、そんな黙々と雑誌なんて読んでるんですか! 大体、よくもそんなガチガチのガチで特撮情報集めてるくせに興味普通だとか言いますよね!」

「こら、返せつ、先月出た敵の新フォームのプロップのコメントが見れないだろ」

「明らかに専門用語じゃないですか! せっかく一緒にいるんですから、もつとこら、その…………」

「とか言ったってアンタもそういうテの期待はもつて来てないだろ」

それはまあそうです、としゅんとなることもなく居直る龍子。こういう切り替えの早さのような振る舞いに、どことなく彼女の姉を想起させるところがある。とはいえそんな彼女に、案外と気を許していると言われても仕方のない真尋である。いや、彼自身も負い目のよう

なものも多少あるのが影響しているのかもしれないが、それはともかく。

「あ、じゃあTRPGやりましょうかTRPG！ CooC！」

「いや、今からやったら夜中当然のようにすぎるぞ」

「途中で中断していただいても構いませんよ、そこは。あまり遅くなるとお母さんも帰っていらっしやるでしょうし。さすがにそこまでお邪魔するのも気が引けるといっうか」

龍子、意外とそういうところの節度は弁えているらしかった。

だったら初めからやらなければいいじゃないか、とは真尋の内心であつたが。

なお、一週間くらい母親も忙しく、家に帰ってこないという情報は藪蛇につき真尋も口にしなかった。

「というか今夜冷え込むって、今ニュースでやってるだろ。下手すると雪降るから、早いところ帰れ」

「ええ……」

「途中までは送るから、ほら」

真尋の家に来て2時間もかからず、特に何もなく進展？ もなく、文字通りただただ適当にぼーっと遊んだだけで終了する一日である。何やら不満そうな龍子相手でも、真尋は特に気にした素振りはない。いや、気にし始めたら色々とむしろ問題であるし、特に「意識してる訳でない」相手に対しての振る舞いとしては可笑しくはないだろう。「そんなにアレなら、今度コーチャにでも行くか？ 大型書店。色々置いてあるぞ、公式読本だったり特写本だったりキャラクターブックだったり超全集だったり」

「何一つ私が楽しめる要素が思い浮かばないんですが……。というか真尋さん、本格的にそれって特オ——」

「いやだから、普通だって」

「まあ、私もコメントは差し控えさせていただきますね。……そういうえば、コーチャ何年前か前に東京の方にも出来たそうですね」

ともあれ雑談しながら家を出て、龍子と通りを歩く真尋。とりあえず駅前方面に家がある、以上の話を聞いていない彼であるが、特に彼

女の家に上がり込むつもりも毛頭ないので、特にそれ以上の情報を聞くことはない。

と、駅前を通り抜けるさ中——かしやり、という音と、光と、鈍痛を感じ、真尋は意識を失った。

※ ※ ※

「——へ？」

突如として倒れた真尋を抱き起す龍子。と、真尋の目の焦点が合っていない。頬を軽く叩いてみても反応はなく、しかし瞼を開いて光を当てても、瞳孔の開き具合は変化する。一応、生物的な故障を起こしてはいないようだが、突然のこの気絶とも言い難い変化は、あまりにも不自然である。不意に、ニヤル子の脳裏に姉の姿が過る。突発的にアーティファクトを見せられて発狂するのを防止する訓練と称し、何度も何度も発狂寸前の行動をさせられていた記憶。その「正体」が正体であっても身は人間にやつしていた以上、挙動としては同じものであるが、つまるところ一種の発狂である。突然廃人同然の状態に陥るくらい日常茶飯事だった姉の人生を思い起こし、それが真尋に現在起こったこととオーバーラップした。

突如発狂に陥った、としか考えられない状況を前に、龍子は彼を背負い走り出した。基本的に、彼女は普通の女子高生である。生憎と自分よりがっしりしてそうな男子高校生一人をお姫様抱っことかで抱えられるほど体力はない。幸か不幸か公園手前で倒れたこともあり、いったんそちらに運び込む。幸いにもベンチ2つのうち、一つはちょうど女子生徒が立ち上がり空いたところだ。

と、ベンチに真尋を寝かせた直後、ニヤル子と真尋の前に珠緒が現れる。カメラと拳銃を足して二で割ったような道具を片手に、ニヤル子たちに向けて構えたまま。

「珠緒さん？」

「——えっと、違うのですヨ。『文明保護機構』のイスⅡカというのですヨ。二谷劉実サン、少々お話を——」

「は、はい？ えっと、私、ニヤル子ですけど、二谷龍子ですけど」
「……………あ、あれ？」

突然の名乗りに困惑する龍子。と、次の瞬間、彼女たちの間に火柱が出現する。文字通りの火柱であり、スタングレネードのごとくその光は龍子とイスⅡカを名乗った珠緒の二人の目を焼いた。しばらくその場で転げたり、「目がっ！ 目がっ！」とうめき声をあげるが、段々と回復してくる。気が付けば彼女たちの前に、未だ春だというに肌寒い北海道の気候に真っ向からケンカを売る、ワンピース姿の、小さな少女がいた。赤いツーサイドアップな髪型は、燃えるように光っている。また手足の輪郭も熱した鉄のごとく輪郭があやふやで、現実世界にいたら一目で人外であることが判るくらいには異常な外見をしている。

クー子である。邪神クトウグアの化身——炎の魔人である。

これを前に、龍子は猛烈な頭痛を感じてその場に倒れる。意識はあるが、とてもまっすぐ立って歩けるようではない。一方の珠緒に至っては「ギャヨー！」と非常に名状しがたい絶叫を上げて気絶していた。白目を向いて微動だにしない。完全に互い、非現実的な光景と背後に存在する邪神の意識体を連想し感づいたことで引き起こされた、一時的狂気の類である。もっとも引き起こした張本人は「？」と不思議そうに頭をかしげて、倒れた龍子の顔を覗き込んだ。

「ニヤル子」

「う、うう…………、クー子ですか？ も、もうちよつと安全な登場の仕方をしてほしかったと言いますか…………。姉ならいざ知らず、私はただのパンピーなので。おまけに前世というか、一族的なトラウマが…………」
「緊急事態だった。仕方がない。少年、何かあった？ 変な喚ばれ方してる」

「あー、そうですねえ…………」

クー子とはある事件以降、真尋がある「神」より譲り受けた化身で

ある。おおよそ週に数度、彼女が望む食べ物を与えることで彼を庇護している関係であった。それ故、彼女の告げた非常事態という言葉がかなり重みをもつ。

頭を抱えながら説明しようとする龍子に「まっつて」と言いながら、真尋のポケットからハンカチをとり水飲み場まで走るクー子。両手の熱を落として人肌程度にして湿らせ絞り、龍子の額に乗せる。

「あー、助かります。ありがとうございます」

「無問題」

「えつと……、そうですね。事情はあつちに倒れている、珠緒さんが知ってそうなんですけど、とりあえず意識がないみたいなので……、真尋さんの家に運ぶと問題ありそうですけど、どうしましよう」

「無問題。少年、両親は一週間はいい」

「あ、そうなんです。ということとは真尋さん、あえて黙ってましたね……」

頭を抱えながら上半身を起こす龍子。持続時間はそんなに長くなかったのか、段々と頭痛は引いている。一方の珠緒は相変わらず変な顔をして伸びたまま。真尋は廃人同然で、クー子は無垢な様子できよとんとしていた。

「……えつと、運ぶの手伝ってもらえますか？」

「わかった」

と言いながら、クー子は龍子を肩車した。

「………つて、私じゃないんですよ！ 真尋さんでも珠緒さんでもいいですから、お願いしますよ！」

「了解」

ともあれ発生した事象に対して、驚くほど緊張感のないくらいぐだぐだとしながら移動し始めるニヤル子達であった。

これが君のセッションである証明／本線

『『文明保護機構』って知ってます?』

「ニヤル子、知らない?」

「そこまで多くは情報を持っていないとしか。姉ならいざ知らず、この私はパンピーなんですって……。本体ほんたいともつながってませんし」

「把握。SANチエツカーある?」

「ないですが、まあそこまで大きく減点されないことを祈りますかねえ」

真尋の鍵をクー子に使ってもらい、八坂家に入る四人。リビングの、さきほどまで居たソファに真尋と気絶した珠緒を背もたれに寝かせる。真尋は相変わらず廃人同然であり、珠緒の意識が返ってくるのもしばらくかかるだろう。その間に、と彼女の手足に「準備」をしていると、クー子が龍子の手を引っ張る。

「何ですか?」

「ん、対価」

「あー……、そういえばそういう話でしたっけ。真尋さんが今何もできないので、私が代わりにやれと」

「ん」

「いいでしょう。で……、何がいいですか?」

「アイス。メロンバー。冷凍庫」

言われるままに冷凍庫を開ければ、名前の通りの品が箱で鎮座していた。残りは三本、下部が緑色で他は橙色のそれをはがして手渡す。クー子は目を閉じてかぶり、とかじりつき「んー!」と額を抑えながらテンションを上げた。

「網目模様!」

「いえ、アイスバーと化したそれに網目はなさそうですが……。んん、珠緒さんも下手に起こすとまた変な形で発狂しそうな気がしますし、

しばらく寝かせておきますか」

真尋の突然の症状に対して嫌に冷静な龍子である。アイスをしゃこしゃこ機械的に食べながら、クー子は不思議そうに見つめる。龍子はその視線に気づいているのか気付いていないのか、真尋の額を撫でて、光を当てて目を見る。瞳孔の動きから生理現象として反射があるか、意識自体が断絶しているのかの確認である。結論から言えば、彼女は突き飛ばされた。背中と頭を打ち、ひるむ龍子。痛たた、と声を上げながらも、しかし一切動揺することなく安堵の表情だった。生来の愛らしさに根付いた可愛らしいものではあるが、真尋本人の意識があつたのならば辟易した表情を浮かべられるだろう。それだけ彼女と彼との関係はややこしいものがあり、手放して正面から向き合えるものとは言えなかった。そして彼女は、そのまま彼の頭を撫でる。あたかもそのいつくしむ視線は母が愛子に向けるそれであるかのように、あるいは愛する誰かが生きていることを承認する行為であるかのよう。いつそ神聖とは無縁なものであるが、日常でもここまでの優しい顔とて滅多に見ることはあるまい。

それはさておき、手慣れているともいえる、龍子の一連の動きである。ここでクー子の視線に気づいたらしい彼女は、率直に質問を返した。

「どうされましたか」

「ニヤル子、慣れてる?」

「姉も昔はしょっちゅう気絶したり発狂したりしていたので、慣れていると言えば慣れていますか。それとこれとは別にして、思うところがないわけでもないです」

「思うところ?」

「ええ。そこはまあ、企業秘密ということ……。私もその、乙女ですから」

真尋が正気なら鼻で笑われそうな一言であった。

そして、そうこうしているうちに少女のうめき声。声の側、真尋の隣を見ると、目をこする珠緒の姿である。

「これは、いったいどういうことなんですヨ……? って、えーっ!」

そして自分の両手足が、ものの見事にロープで縛りあげられていることに気づいた。びくん、と飛び跳ねて、そのままソファから転げ落ちる。現在の状況を完全に理解していない風である倒れた彼女に、龍子は視線を合わせる。

「あ、はい。どうも珠緒さん。いえ、イスⅡカさんでしたか？ とりあえず知っていることをジャンジャン吐いちゃってください。でないと――」

「で、でないよ、どうなるんですヨ？」

素足の彼女の足へ向き直り、龍子はブレザーのポケットから何ら脈絡なく、名状しがたい猫じやらしのような先端がふわふわした物体を取り出す。龍子は自分の体を使い、珠緒の足とその道具とが見えないように壁になり、つん、つん、と土踏まずをつつく。人体において視界に入っている箇所の刺激と、入っていない箇所の刺激とでは後者の方が脳の処理が追い付かない分ダメージが大きく、結果としてそれは効果てきめんに現れた。

「ヨヨヨ」

「継続してくすぐると10分くらいで慣れてしまうようですが、こうして刺激を調整すればまあ大丈夫ですかね。さあ、キビキビはいてください、でないよと数時間はこの状態を継続しますよ？」

ある種の拷問である。良い子も悪い子も真似をしてはいけない拷問である。それにしても明らかに手慣れた拷問方法であった。つんと頻度をランダムに調整することで、珠緒、いや、イスⅡカに継続的にダメージを与えていた。こころなし、龍子の両眼が「きらり」と光っているような漫符が見えるような、見えないような。

この間、クー子は興味がなさそうな目でそのやり取りを見ていた。「さあキビキビ吐きなさい！ にやるこつんつんつ、あんつ、どう、とろあつ」

「ひ、ひう、うううう、によ!! や、やめてくださいですよ、このままだと失禁しますヨ」

「あ、そつちにくすぐったさが行くんですね。大丈夫ですよ、さすがに真尋さんのお宅をクラスメイトの『あれ』で汚すのは忍びないので、す

でにビニールシートを敷いてあります」

「確かに私が今寝かされているところはビニールシートですよ！　つて、されなくても吐きますヨ、敵対の意志はないのですヨ、白旗！　白旗ですよっ」

悲鳴と嬌声、涙目といろいろと惨憺たる状態の珠緒であった。拷問をかける龍子に容赦の文字はないらしい。ギブアップ宣言された後も、反骨心を折るためか数分はくすぐりを繰り返し、やっこのことで彼女を開放した。様子を見る限り、ギリギリ失禁は免れたらしい。ただ解放された両腕と両足をまるめ、体育座りの状態でいじけていた。涙で顔のメイクが軽く崩れた彼女に、ティッシュを差し出すニヤル子の絵面はあまりにマッチポンプ感があふれているが、それはさておき。

「ご、拷問は犯罪なんですヨ……、うう……」

「嫌ですねえイスIIカさん。される謂れがない相手には、そんなことしませんよ？　私。それこそ姉じゃあるまいし」

「お姉さま……、二谷、劉実とおっしゃっておられましたですよ？」
「ええ。クローとか夢野霧子とか色々別名はあるみたいですが、一応、戸籍上はそうなってます。私の実の姉にあたり、先月亡くなりました」

龍子の言葉がほとんど予想外だったのか、目を見開いて動きを止めるイスIIカである。そんな彼女にお構いなしとばかりに、龍子は質問を突き付けた。ちなみに手には携帯端末、ボイスレコーダーをONにしているあたり抜け目がない。

「それで、貴女は一体何なんですか？　なぜ、真尋さんを『そんな』にしてみましたのでしょうか。貴女の目的は一体何なんですか？」

「や、矢継ぎ早なのですヨ。ちゃんと、順を追って説明をしますヨ。それはそうとしてですヨ……？　さ、さすがにもう一回あのスタングレネードごっこは、されないですよ？」

どうどう、としながらも、彼女の視線はアイスバーを食べているクー子へと注がれる。拷問めいた所業もそうだが、明らかに先ほどの閃光が彼女の警戒心に尾を引いていた。スタングレネード以上の閃

光で、音もなく一撃で意識を刈り取られるその衝撃が、イスルカの精神にトラウマを植え付けているようだ。

なお龍子はそれを見て、人の悪い笑顔を浮かべる。見た目の愛らしさに反して、彼女もまたそれなりに恐ろしい性格をしているらしかった。

「さあてそれは……、ちゃんと私を納得させてくださいね？」

「ヨ、えっと、龍子サン、出会ってますヨ？ 貴女は只の人間なのに、どうして先ほどの現象を受け入れられているんですヨ？ 目の前に太陽が現れたんですヨ？」

イスルカの一言に、龍子は彼女がどういう理解を示しているかをおおよそ把握した。二谷劉実の正体——— 這い寄る混沌、邪神ニヤルラトホテプの化身であるというところまで、把握できていないらしいということに。もっともそれを知ったところで、龍子はすべてを正直には語らない。詳細を知れば知るほど眉唾になる以上、必要最小限の情報を提供するのが妥当な場合もあるのだ。

「姉が、某組織の『原理主義派』の所属だつてことはご存知のようですかね。その、私は姉と二人暮らしでしたので、姉の稼ぎが私たちの生活費で、現在の私の生活を補填している保険なんです……、特に守秘義務とか、あまり隠すような性格ではなかったんです。多少、多少は正気が削れていますし、その手の知識も持っているんですよ。暗黒神話群、つまり宇宙より飛来した神々や、それにまつわる真実を」

「ヨ……、なかなかお辛い家庭環境なんですヨ。ご両親は……」

「父親はいますが、母親はいませんか。肝心の父親も失踪状態なんです」

「ヨヨヨ……。でも、そういうことでしたら、八坂真尋サンも起こして——— つて、あれ？」

ここでイスルカは、ようやくと真尋の方を振り返り、彼の様子が異常であることに気づいた。真尋のその廃人めいた様子を前に、彼女は目を見開き、不安げに眉を寄せ、困惑に口を歪める。おや、と龍子が違和感を抱くのとほぼ同時に、イスルカは彼女の肩をもって詰め寄った。

「わ、私のっ！ 私の銃はどこにあるですよ!？」

「それ、でしたら、キッチンテーブルの、上に、あの、揺らすの、止めてくだ——」

龍子が言い終わるよりも先に立ち上がり、ビデオカメラのような、その尾部に拳銃のトリガーのようなものがついた、端的に言えば奇妙な形状をした銃のようなそれを手にとり、猛烈な速度で分解を始めた。何をしてるんでsか、と龍子が詰め寄る。イスIIカは龍子の言葉に答えず、その場で膝をついた。愕然とした表情を前に、龍子は彼女が手に持つている、デジタルでないアナログなビデオカメラというテープのような個所に該当するだろうそれを見る。

「いったい何があったんですか？」

「……………すり替えられてました。これは、まずいことになったんですヨ。組織に裏切り者がいるんですヨ」

「それだけだと意味がわかりません。ちゃんと話してくださいっ」

有無を言わずニヤル子は立ち上がらせ、イスIIカをソファに座らせる。明らかにイスIIカは動揺しており、平静の状態ではない。冗談ではない、一体何がどうしたというのか。真尋の安否を優先しているニヤル子からすれば、今のイスIIカの状態は明らかに宜しくない。

「まずは順を追わなくてもいいから、質問に一つずつ答えてください。真尋さんに、何をしましたか？」

「……………本来は光信号によって、軽い催眠をかけただけのはずだったんですヨ。でも」

「でも、何ですっ」

「——内部のカートリッジを丸ごと入れ替えられました。私が『ここに』派遣されたタイミングでは確かに催眠カートリッジだったのに、あれは、精神交換カートリッジだったんですよ」

「精神、交換？」

居住まいを正し、咳払いをして。改めてイスIIカはニヤル子たちに名乗った。

「私はイスIIカ。先ほども言いましたが、文明保護機構のエージェントです。この時代の言葉に置き換えれば、タイムパトロールみたいな

ものです」

「タイムパトロール……、ま、まあ話を聞きましょう」

「我々の種族は、様々な時空、時代の知的生命体、我々とある程度の相性が良い精神性を持つ知生体と精神交換を行い、その文明を学習し、また文明が滅亡の歴史を歩む場合、それとなく保護してきたんですヨ。その仕事をしているのが、文明保護機構。具体的に言うと――」

「あー、その具体例は良いです。S A N^正値が消し飛びそうなので、概略だけで」

姉相手の対応で慣れているのだろうか、実際妥当な判断であった。もし仮に詳細を聞いていれば、確定で6面ダイスロールの正気を失い、何かしら直後に会話ができないだけのダメージを精神に負っているはずである。基本的に自分が人間の体と精神性であることを、龍子は当然のこととして熟知していた。

「ヨ？ それなら省略するですヨ。じゃあ必要そうなところだけ。我々に観測できる時間の流れというのは、結構おおざっぱでおおよそ。だからこそ、ある程度は我々の介入によって状況を変更可能なんですヨ。そして、微々歴史もまた変化し、こちらも観測を続けるのですヨ。だからこそ我々が派遣されて動くのですが、今回それなり大きな異常が観測されたため、この時代で『最も解決可能性が高い』相手に協力を依頼する予定だったのですヨ」

「それで姉にお鉢が回ってきたわけですか……」

確かに、姉の弁であれば今年の春先に一度「機械仕掛けの神」から世界を救っているとのことである。TRPG的に言えば、直近のセッションで好成績を残したプレイヤーキャラという訳だ。事象をおおよそ遠目から観察する分には、好成績を収めた相手に似たような仕事を割り振るといえるのは発想として理解できる。

もつとも理解できるが、詳細を知らないということが中々に致命的であったことを龍子は察してもいた。

「今朝がた、この少女の体を借りてこの時代に転送されたのですヨ。……この珠緒サンを含め、協力を仰ぐにしても、極力現地人には干渉

しない鉄則があるのですヨ。だから昏倒ないし気絶させるために銃をつかったものの……」

「道具が、本来予定したものとすり替えられていたと。……、あの、事前に気づかなかったんですか？ それくらい」

「そ、それくらいと言われても困るのですヨ！ 基本的に我々が持ち込めるものは『非物質装置』のみなので、該当する時代で道具を別途新たに作る必要があるんですヨ！ だからほかのエージェントが作った道具を、指定の場所に取りに行くというのが通例の流れで、ミスは絶対にありえないのですヨ！ つまり偽装されていたのですヨっ」

「本部とか、もっと偉いところとかと通信は出来たりしないんですか？ そういうのって。内部に裏切り者がいるって話を」

「それが……、この時代の通信所、米国にあるものしかないのですヨ」

「あー、日本からじゃすぐいけない訳ですね。納得です」

「今にして思えば、ニヤル子サンを劉実サンと誤認していたのも、事前に与えられていた情報に誤りがあった可能性が高いと覚えてきたのですヨ。そして今から米国に向かっても、すでに手を打たれてる可能性が高いのですヨ。」

「時間転移は『一往復で固定される』ので、ここからさらに過去に遡ったりは出来ないですよ」

「つまり、イスカさんの立場だと、やり直しが効かないってことですね……。未来に精神が紐づいてはいると。フューチャーアンドパストか何かですかね」

「ヨ？」

「いえ、映画のたえです……。……」

「あ、ところで真尋さんに撃たれた精神交換って……」

「本来は、特定の座標にある本人の精神と現在の精神とを入れ替える装置なのですヨ。我々の精神交換が失敗した時に、発狂したり精神崩壊してしまった相手を元に戻すのに使われるのですヨ。座標、時間を設定して、それに対応した本人の精神を呼び出すイメージ」

「でしたらその、この真尋さんは一体……」

「流石にこればかりは、私もわからないのですヨ。カートリッジの肝心の部分が黒塗りにされていて………。本部と連絡がとれれば、何とかなるかもしれないですが」

色々と彼女の側も事情が混乱しているらしい。ひとつわかることは、故意犯でなかったことと、現状の彼女ではどうにもできないことの2つ。

そして、クー子はいい加減メロンバーを食べ終え、二人の話にうつらうつらしていた。

「こうなっては仕方ないのですヨ……。妹サン、私に協力してほしいのですヨ！ 裏切り者をあぶりだし、地球滅亡を食い止めて、一緒に真尋サンの精神を取り戻すのですヨっ」

「いえ、最後のについては当然の話なんですけど……。地球滅亡とは大きく出ましたね。まさか後三日で月がそらから降ってくるのか言いませんよね」

「流石に三日ではないのですヨ——1週間」

イスⅡカを名乗る彼女は、珠緒の体で、ひどく真剣な顔をして断言しきった。

「1週間後、ある条件を満たさない限り、この惑星は『惑星保護機構』の先兵——『星の戦団』によって、宇宙の藻屑とされてしまうのですヨ」

時間と空間が死んだ世界／R分岐

八坂真尋の眼前に広がる光景は、非常に非現実的な悪夢そのものであったが、しかし彼はそれを見ても決して発狂することにはなかった。それは現在の彼の身体の状態に基づいた物理的な理由からであるが、あいにくと精神まで健全なままかというところもいかなない。ただその上でも、彼が自己を律することができる理由があるとしたら、彼の隣にいる彼女の存在だろう。

それについては後に回すとして、まず光景についてみるべきか——空一面が赤に染まり、月は目玉のようなそれ。巨大なそれが、あたかも下方にあるすべてのものを見まわしているように、時折ぎよろぎよろと蠢いている。彼自身、もし字面のみでそれを見たら陳腐と表現できるだろうが、黄ばんだ、血走った目がこちらを視線で射殺さんとはかりに追跡してくる光景というのは、あまりにも精神に悪い。どこにいても何をしても見られているような——雲間から見える月の目は文字通り巨大な怪物の目そのもののようにも思え——とても落ち着けるはずもなく。

その空の下に広がる光景もまた常軌を逸していた。いや、広がると言っても非常に形容が難しい。まず一つ言えることは「地面が連続していない」。あたかもパズル細工であるかのごとく、あるいはどこを使用しても角となる消しゴムを組み合わせたかの如く、地面の構成が「ばらけている」個所がある。かと思えば一面暗黒に閉ざされた場所もあり、地面がそもそも「直角」になり本来の地面は永遠と続く虚空の果てに消えているような、そんな場所もある。それらの場所の入れ替わりを認識することも出来ず、状態が「突然変わる」というのが真実のところだ。それを指して、空間が不安定と形容するべきか、いまだ当然のように退官したことのない真尋の語彙には存在しない。

そして現在真尋がいる場所は——ここだけ切り取ったように

状態の変わっていない、温泉であった。

「ふう、良いお湯ですね。真尋さん、湯加減はどうですか？」

「……………」

「あ、口が沈んでますね。出しますからちよつと待っていてください——
——つて、あ！ 見てください、今、海原でちよつとクトウルヒと
イタクアがちら見えしましたよ！ なかなかレアですねえ」

「————」

ぶくぶくと、口から出た空気が泡になる真尋を引き上げ「桶の中で」
上向きにする彼女。現在の真尋の状態を考えれば前かがみの体勢に
なる彼女だが、その体勢は本来なら非常にまずい。真尋とて健全な男
子高校生であるし、おまけに相手は「彼女」と来てる。うなじから肩
にかけてのすつきりしたライン、見た目の年相応以上にはグラマラス
な体、かと思えばそれは必要最低限であり他はむしろ華奢なくらい。
ここ最近、真尋がよく知るところの龍子を大きくした相手の、そんな
姿を前にして真尋は言葉が出なかった。

ただ、それに極端に劣情を抱けるような状況に真尋の体はなかった
のだが——。

「ふう。なかなか良い感じだと思いませんか？」

「……………さっぱり、わからん」

言葉さえまともに発音できない。というか、そもそも「息を吸うこ
とさえしていない」上に「顔をほぼ動かせない」ので、発生する声は
どこか引きつった、気味の悪いものに聞こえる。

そんな「ずいぶんと小さくなった」真尋をいとおし気に「彼女」は
撫でていた。

彼女——すなわち、二谷劉実。真尋には夢野霧子と名乗ってい
た、龍子の姉。

彼のために死んだはずの彼女は、なぜか現在、真尋と温泉につかっ
ていた。

「しかし絶景ですね、真尋さん。日本広しといえど、ここまでの絶景

は中々お目にかかれはしないでしょう」

「普通は、そも、そも、こんな、光景が、有り得ないだ、ろ」

「その意見には賛同ですが、少しは盛り上げましょうようよく。せつかく二人で温泉に入ってるんですから。二人つきりで。二人つきりでっ」
「そこ、強調する、必要が、あるのかっ」

露天風呂ではなく、どこかのホテルの客室付のもののようなのである。どちらかと言えば、夫婦やカップルが水入らず、いちやつくイメージがあるという形容できるかもしれない。ただし窓の外に見える一体この惨状に陥った世界でどうして温泉を部屋に引き入れられるのか、電気とかどうなっているのか等様々な問題が横たわっているが、それを追求する余裕さえない真尋であった。

空や月は「異常である」ことも変わりないが、それ以上に眼前眼下、本来なら街並みが広がるだろう場所すべてが「砂」であった。状態としてさらに異常なのが、その砂の中、人の営みが有るような光の動きは観測できるが、それが実態を伴っていない。かと思えば数秒もすると、白黒合成映像のごとき人間のシルエツトが過つたり、過らなかつたり。そういった一連のそれを除けば天球を拜むことができる程度には物が存在せず、見ようによっては絶景と言えるかもしれない——
——太陽の上らない赤い空と、異形の月にさえ目を瞑れば。

と、劉実は真尋を両手で「持ち上げ」、桶から自分の胸元に持つて行って抱きしめる。

そして共に月を見上げ、どこか嬉しそうにほほ笑んだ。

「そりゃ、ありますよ。私の体感でも、真尋さんとうこうして言葉を交わすのは十数年ぶりなんですから——その姿になつてからの真尋さんと」

ありていに言えば、今の真尋は「人間の形をしていなかった」。

その姿の詳細を真尋は彼女から聞いていない——聞けていない。直接聞くのを憚られるほどに、真尋は自分の体が人間からかけ離れた姿かたちをしている自覚があった。「人の両手で抱えられるサイズ」で「開かれめくられる」。彼個人がネクロノミコンの力を引き出

すことの出来たヨグソトスの落とし子の一種であったことを踏まえ
ても、おおよそ予測は建てられる。

ネクロノミコン——アル・アジフと言い換えても良いが、その
冒瀆的な事実が列挙された魔術書ないし戯曲の形態は、言い伝えられ
る話により様々な形をとる。通常の書物である場合や、謎の生物の毛
皮で編まれている場合。あるいは本自体が「人間の体をもって作られ
て」いる場合や、「自らの意志を持つ書物となっている場合」。真尋の
場合は、そのうちのいくつかに該当する状態であろう。現在の真尋
は、まさしくネクロノミコン「そのもの」と言つて良かった。

劉実は心の底からの歓喜をともなつた声を真尋にかける。そして
同時に、その声音には幾分かの寂しさも含まれていた。

「まあ、中身は私の知る真尋さんと、少し別な方のようにですけどね。い
ずれはあちらにお帰りいただかないと、色々と問題が出そうです。

それでも、私にも少しだけ希望が出たと言いましょうか」

「希望つて、何だ。大体、これは、どういう、ことだ」

龍子を送る道途中。瞬間的に気を失い、何やら忘れてしまった、思
い出してはいけない類であろう夢の後に目覚めたらこの姿である。
おまけに熱海に来て一人、空元気にテンションを上げていた劉実の手
元でだ。ひとえに真尋が発狂しなかったのは、ゴールデンウィーク直
近のドリームランドでの出来事があったからだろう。あそこまでの
衝撃的事件は、さすがにそうそうお目にかかることはあるまい。少な
くとも真尋が体感した数か月分の現実的な拷問は、この
暗黒神話的な拷問において、彼に一定のセーフティを発生させてい
た。……もつともこれは、真尋の常の正気度が下がった、クトウルフ
神話知識を手に入れてしまったと言い換えても良いのだろうか。

その後、あれよあれよという間に真尋は劉実につれられ、こうして
どこから手配したのやら個室の温泉宿の中に入っている。本当にこ
こが温泉宿なのかどうかは、道中の建物がどう見ても教会だったり、
かと思えば駅のホームのような構造になっている箇所があったりと
いうのを經由しているので定かではないのだが。

劉実は、真尋を持ち上げて、自分の額とくつつけた。

「んん？ んー……、嗚呼、大体わかりました」

「それは、大体、わかって、ない、やつの、セリフだ」

「いえ、わかりましたよ？ 私の正体というか、本体、というかを知ってるでしょうに、真尋さんたら」

つんつん、と表紙をつついてくる劉実。表情が動けば顔を顰めているところだろうが、生憎現状の肉体がそれを許さない。四肢の感覚もあるが存在せず、というよりもより正確には「固定されて動かない」ような感覚が残っており、それはそれはひどく気色が悪いものである。まるで怪奇映画に出てくるミイラにでもなったような気分の真尋であつたが、まあ実際も大差はないのだろうと考えていた。

大体わかつたと言つただけあり、実際、彼女の言葉からして本当に大体把握したらしい。

「簡単に言うなら、真尋さんは精神交換されたんです」

「精神、交換つて、」

「イース……という名称は実際正しくありませんが、イースとここではしておきましょうか。イースの彼らの技術力で開発された精神交換銃を用いて、真尋さんの精神は『こつちの真尋さん』入れ替えられてしまったということですよ」

「こつちの、って、何だ、後、大いなる種族、つてことは、文明、保護機構、だつたか」

「あらら、その名前よくご存じで。」

んん、そうですね。ちよつと整理しましょうか。①文明保護機構について、②こつちの真尋さんとは何かについて、③この世界は一体何なのか。まあ②を説明すると、大体③を説明したことにはなるんですが、それはそれとして。文明保護機構は、ご推察の通りイースたちの組織で——」

クー子の口から少し聞いただけである真尋だが、劉実はそれをある程度補足する。

イースの大いなる種族。現存する地球文明よりもはるかに高度な文明を「過去に」築いた知的生命体たちであり、その本体はすでに精神生命体と化している存在である。むろん、それは精神が肉体をはい

出て他の生命体に寄生するというプロセスを踏むわけではなく、彼ら自身の科学力により精神を既存の生物と交換し、自らの文明を長生きさせてきている種族だと言われている。その高度に発展した文明から、彼らにとつて時間もまた空間の流れと同様のそれであり、様々な時間軸における文明社会を学習し、吸収し、自分たちの文明を発展させる、あるいは乗っ取るということを繰り返す異星生命だ。本来ならば時空間をさまようことにより、とある「猟犬」に目を付けられるところであるが、彼らはその独自の技術力によるものか、完璧ににもかかわらず精神の時間移動を現実のものにしていた――。

「――端的に言ってしまうと、イースの時空警察です」

「時空警察とか、一般的な、用語と、思うなっ」

「いえいえ、まさしく時空警察です。彼らは時間軸に干渉し、時に文明を滅ぼし、時に文明を長生きさせます。それは惑星規模、宇宙規模でどうこうというのを考えて行動する組織なので、ある意味、時空という概念に対する『這い寄る混沌』のスタンスと大きく異なりますね。彼らはバランスを自称するだけの経験値を、すでに『未来で』獲得し、文明的にある一定基準を超過するほどの成熟をみました」

「成熟……」

「どれくらい成熟したのかといえば、一般人が遭遇したところで、むやみにSAN値を削ることがないくらいにはですかね。相手の文明レベルに、自分たちの存在を合わせられるわけですから」

尋常でないレベルでの文明成熟具合だった。

「では、こっちの真尋さんが何かという話についてですが、言葉通りの意味です。『この世界の』真尋さん、ということですね」

「この、世界？ をのれ、デイケイド」

「えっ」

「いや、なんでも、ない。続けて、くれ」

「んー、実際のところの概念の説明が難しいので説明してしまいますと、私は真尋さんのいる世界とは別世界の二谷劉実です。歴史が一部書き換わった結果、別な時空が発生した――パラレルワールド的なご理解でよろしいかと。そしてどうにも、そちらの方が『本線』で

あるようですね」

「本線？」

「油絵具を想像していただけますか？ あれって、基本的に顔料を上塗りしていくじゃないですか。それと同じような理屈で、時間、歴史の書き換わりというのも上塗りで変わっていくんです。下塗りになった歴史が消滅するわけではないので、その場合において『一番上に塗り固められた』それを、便宜上、本線と呼んでいます。真尋さんは、その本線の真尋さんということですよ」

「いや、おかしい、だろ、時間、干渉じゃ、ないのか、イース……」

単純な時間干渉の域を超えている、という真尋の指摘である。

「まあ……、あんまり考えたくはありませんが、本線の『這い寄る混沌』か何かの手を加えたと考えるのが妥当じゃないでしょうか？ ほら、下手に真尋さんの体を奪われると、大変なことになるかもしれません」

「だからって、何で、こんな、……」

「その、私は役得ですから、そこは喜んで下さい」

「結局、アンタの、都合じゃないかっ」

そもそも真尋に降りかかる暗黒神話的事象の九分九厘がニヤルラトホテプの手によるものであるので、今更といえど今更でもあった。

ともあれ彼女の言葉が正しければ、真尋がいるのはパラレルワールドであるらしい。……明らかに真尋の知る世界のそれではない現状であるので、自分の元居た普通の世界がちゃんと存在しているというのは一つの救いであったが、この世界が存在しているというのもそれはそれで一種の恐怖であった。

劉実は真尋を再び抱きかかえ、その頭を撫でた（現在の真尋の触覚でいう、頭に該当するあたりという意味になる）。

「なので、真尋さんが意識を取り戻せたというのは、ちよつとした奇跡であり福音なんです。アレルヤ！ って感じですかね」

「どこが、福音、なんだ？」

「だって、『今の』真尋さんがちゃんとしやべることができてるってことは——こつちの真尋さんにも、意識はあつたってことですか

ら。たとえ貴方が元の体に戻っても、私には希望が残ります」

「……………」

「この先、何千年、何万年かかるかわかりませんが、ちよつとした何かの拍子に、私の真尋さんも、いつか、いつか自我を取り戻すかもしれない——そういう希望があれば、私はまだまだやっていけます」

「……ファンタジーだよ、それは、は」

「ですけど、願い、信じる者がいれば、ファンタジーは時に現実に近づきます。って、その資格は本来、私にはないのですけどね」

「そう、かい」

真尋はそのことについて、多くは聞かなかつた。彼女がそれほど自身を想っていたことと——たとえ妙な形で再会できたのだとしても、彼の初恋の彼女は、彼の世界の彼女はもう居ないのだという事実は変わらないと。それを改めて認識したからだ。

だが、だからといって彼がそれを憎んだり恨んだりという感情はない。ただただ、真尋は彼女の幸福を願った。現状の有様であつてもなお、自分と一緒にいることを求める彼女に。

それ故に、彼は彼女最後の一言を——その資格が本来はないという一言を聞き逃したのだが。

「じゃあ、三つ目は」

「この世界が何か、ということですね。んー……、簡単に言うと、ワールドゲームってやつです」

劉実は事実を真尋に、それこそ何でもなしのように語った。

「クトゥルフを皮切りに、ほぼすべての邪神たちが復活し、領域をとり支配し従属させ蹂躪し自在に闊歩するようになった時代——終りのないラグナロクってところですかね」

「—————」

何だその地獄絵図は、と。

あまりの衝撃に、そんな言葉すら真尋は吐き出すことができなかつた。

風惑う不確実世界／本線

ともかくにも真尋をそのまま捨て置く訳にもいかず、龍子たちは救急車を呼び真尋の搬送に付き添った。再びの緊急入院につきではあったが、同伴する保護者たる母親と再び顔を合わせるここととなり、龍子はたびたびの恐縮であった。ここ直近、自身の周囲で真尋が神話的事件に巻き込まれる頻度の高さもあいまって合わせる顔がないというところではあるが、しかし一方で八坂頼子、真尋の母親である彼女は龍子と珠緒を責めはしなかった。

ただし、彼女にとつては不可思議な質問をされはしたが。

「まあ二人を責めたところで仕方がないでしょ。別にあなた達が何かしたって訳ではないでしょ？」

このあたりで珠緒、というよりもイスカカのリアクションが若干怪しいところはあったのだが、気づいているのか気づいていないのか、母親はそれを見なかったことにする。不安そうにする二人を抱きしめ、優しい気に諭す。

「大方、何かヤバイものを見てショックを受けたんでしょ？ 大丈夫、こういうのは時間が経てばなんとかなるわよ。私も経験あるし」「いえ、それでもここまでおかしくなっていると……」

「そうは言ってもこういうのは、究極的にはウチの問題だから。お嫁さんに来てくれるとか、そういう話だったらまた別だけど、違うでしょ？ 二人とも」

「え、ええっ」「ヨヨっ」

龍子は羞恥により、イスカカは珠緒がどう見られているかという事実に、それぞれ取り乱す。そんな二人に「大丈夫よ」と笑う彼女は、たとえ接触が少ないにしても息子に対する信頼の強い、力強い母親の姿だった。

「そのところ、別にどうなっても私から何か言うことはないから、好

きにやりなさい？ できれば裏切ったりはして欲しくないかなーって、親心には思うけど。見たところ二人とも悪い子じゃないみたいだしね」

「その評価は、見方によってはかなりの的外すとところになると言いますか……」

「でも、ウチの子とこんな時間までずっと一緒に遊んだりしてるって、中々ないわよ？ あの子、お父さんにコンプレックスがあるのか、周囲にあんまり心開かないし」

「コンプレックスですよ？」

「ええ。私も細かくとらえきれていないから、指摘するのが難しいんだけどね……。えっと、そういうええんだけど、二谷龍子さんだったかしら」

「へ？ あ、はい」

「二谷……、貴女、知り合いに二谷辰隆よしたかって人がいない？」

「えっと、一応父親なのですが……、お知り合いですか？」

「結構浅からぬ縁なんだけど、今どこにいるか知ってたりする？」

「その、生憎と失踪してしまして……。今は、姉が入っていた会社カ、カとかの関係者さんたちに、お世話になっていきます」

「そう……。貴女も苦労してるのね」

「わぷっ」

頭を撫でられながら、龍子は終始恐縮し続けていた。

ともあれ、いったん真尋の安全を確保し、二人は翌日に行動を起すことにした。

翌日に始業よりも一時間早く登校した二人は、新聞部の部室へ集まった。当面の作戦会議がてらである。ちなみにだが部室に入った時点で、部屋のパイプ椅子に何故か当然のようにクー子ク、クが正座で座っているあたりが中々にカオスである。そして無言で食べ物ク、クを催促する彼女に、なぜか龍子は手に持っていた煮干しのお菓子の小袋を手渡した。

「はう、網目模様……」

「すみません、さすがに学校では準備ができていませんので、しばらく

それで我慢を……。明日には自宅に届きますので、そつちでお願いします」

「ん、わかった。私は寛大」

「いえいえ、なにとぞよろしくお願いします……」

ははあ、とひれ伏すニヤル子に、ちびつ子なクー子がえへんと威張る風。本性たる存在として見ればなかなか業の深い光景であるが、彼女の側からしてみれば「ただの人間」の体に対して「邪神の変化してだけの存在そのもの」であるクー子は文字通り危険物でしかないので、妥当な対応だった。ちなみにイスⅡカ自体は現実逃避して虚空を見ながら「あ、ちようちよ」とありもしない光景をつぶやいている有様である。よっぽどあの照明弾めいた所業がトラウマになっているのか、はたまたそれにより彼女自身のS A N値が削り取られているか。

咳ばらいをし、イスⅡカはともあれ説明を始めた。部室備え付けのP Cの電源を入れると、イスⅡカは慣れた手つきでブラインドタッチしながら、何かのサイトにアクセスする。

「時間にして昨晩から一週間後、ここの学校に惑星保護機構の調査員が来るんですヨ」

「よくわかりますね、そんなこと」

「我々もそういった情報は大枠でしか確認はできないものの、媒体が映像なのでそこはわかるんですヨ。具体的に言うとな統一コスチュームがあるんですヨ」

「戦隊ものとか、エックスメンみたいなものですかね」

「とりあえず動画が我々の共有サイトに上がっているんで、見てみるんですヨ『U t t a t h i b チャンネル』」

彼女が提示したサイトはウェブサイトであるという一点以外、明らかに地球産のものではなく、一目見た時点で龍子の顔から血の気が引いた。というかサイト名がまず人間に発音不能な音を含んだものだったし、画面に表示されている文字自体も彼女たちとは大いに文化圏のことなる象形文字めいたそれだった。また背景は原色パステルカラーな紫、マウスは黒く色々どギツイ。まだしも画面の大部分

が、イスルカの選んだ動画で占領されているのが救いか。猛烈な立ち
眩みを覚える龍子の手を、クー子がそつと握る。

「——っ、熱！　って、クー子ですか。どうしました？」

「ニヤル子、大丈夫？」

「二応大丈夫ですよ。……年下っぽい子に精神分析されるのもどうか
と思うんですけどね、私も」

一応その手の技能はキャラシートにあったはずですが、と大分メタ
フィクショナルなことを言う。当然クー子もイスルカも疑問符をう
かべるが、なんでもありませんと流し動画に集中した。

数人の学生服同士の話し合い。中央にはボロボロの黒いフード姿
の何者かがおり、全員で何事か話し合っている。その黒い外套の男の
シルエット——ひどく頭部が「長い」シルエットからなるべく目
をそらす龍子はさておき。全体の話し合いらしきものが進むも、「足
りない？　何が足りないんだっ」という叫びが聞こえる。少年その
言葉に何も言わず、外套の男は背を向け、窓の外で指揮棒を振るよう
に腕を動かす。と、上空の彼方から無数の光の雨が、滝のように降り
注ぎ、画面そのものが光に包まれてホワイトアウト。

龍子は動画の保存されているwebページについて確認すること
を完全に放棄したうえで、動画について確認した。

「足りないといっていましたけど、これは……」

「こちらでも読唇での解読班を用いて、何かをしなかったからこう
なった、というあたりまでは特定したのですヨ」

「何かとは？」

「その、相手方がそれを話しているようなので、ちよつと確認がとれな
いのですヨ」

「ほぼノーヒントな訳ですね……」

その後、龍子のイスルカへのインタビューにより、以下の情報に集
約。彼女はホワイトボードにマジックで書いた。

- ・ 約一週間後、水曜日に惑星保護機構の調査員が地球を訪れる
- ・ 現地職員と複数の人間たちとで会議
- ・ 「星の戦団」と呼ばれる軍団をすでに伴っており、このときの会議

は何か重大なものであることが推察

・何か重要な行動をしなかったことにより、その不手際で地球が危険惑星となった。ここは要調査

・その結果、「星の戦団」による光線の集中砲火で地表は蒸発、焦土で効かないレベルの有様になる

・その更に数日後、惑星の状況変化により邪神たちが目覚め地球を離れ、その余波で惑星はチリとなる

「なんですかこの詰み状況は……」

「それ故に我々も頭が痛いのですヨ……。ほかの時系列の我々とバツティングしない転送タイミングが一週間前だったもので、そこを起点に今の私は動き始めているという訳なのですヨ」

互いに頭を抱えるイスⅡカと龍子。現状、打開策が見えてこない状況であったが、クー子はその画面を見て、ぼそりと「しゅーたくんだ。マヌケメガネ」と呟く。もつともそれは二人の耳には届いておらず、状況は変化しない。

「そろそろ朝読書の時間が始まりそうですのでアレですが、放課後もう一度集まりますヨ？ 少なくとも情報収集が足りていないのは確定ですよ」

「いえ、あの、そもそも何の情報を集めるべきなのか、集める周辺の前提条件がすべてふわふわしているかと思うんですが……」

「ヨヨ……」

「クー子、何かアイデアはありませんか？」

龍子の言葉に、クー子は断言する。

「シュータくんに聞けばいい。ここに居るし」
「へっ」

画面を指さすクー子。そこには、暗がり顔立ちなどはよくわからないものの、眼鏡をかけた、明るい髪色の制服姿の男子生徒の姿が見える。

「現地の調査員、たぶんこのシュータくん。ダメガネ、マヌケメガネ、メガネ本体」

「いえ、あの、どなたですよ？ お知り合いですヨ？」

イスⅡカの言葉に、龍子は思い出すように上を向いて、人差し指を口元に当てながらゆっくりと口を開く。

「秀太……、長谷部さんのことですかね？　長谷部秀太。二年生、陸上部の幽霊部員で、中学時代はスプリンターとして将来を有望視されていました。暴力事件を起こし停学、休部。学校には来ていますし、その能力を買われて部の所属になっていきますが、公の大会にはその事件以降出ていないみたいです。二年生になってから、逃げるようにこちらの学校に転入してますし、高校一年生の時もひよつとしたら何かあったのかもしれませんが。現在はどちらかというところ、ゲーム同好会の方に入り浸っていますね」

「ヨ、えつと、ニヤル子サンもお知り合いですか？」

「いえ、さすがに」

「なのにその詳細プロフィールは一体……」

「まあ女子同士の会話ですので、それは、企業秘密です。それはひとまづ置いておいて……。どういうことですか？　クー子」

「シュータくんは、ヒゲの人よりも前にしばらく行動を一緒にしてた。抜けてるところもあるけど、使えると思う」

「ヒゲの人ですヨ？」

「クー子の召喚者ですかね……。んん、とするとまずそっちの接触をして、何か情報を持っているかどうかを聞くのが優先ですか」

「大丈夫。説得は私がやる」

龍子とイスⅡカは顔を見合わせる。見た目、小学生くらいの子にしか見えない彼女がこう断言するあたりに違和感を感じている二人である。いや、なまじ彼女が邪神の化身、魔人とか形容のできる異常な能力を持っていることはすでに確定的に明らかではあるのだが、それはそうとして見た目がこれであるというのは違和感に拍車をかけていた。もつともクー子もそれを察したのか、ふくれて腰に手を当てて抗議する。

「はうう……。一応言っておく。私、シュータくんと同い年」

「ええっ!?　というところ、えつと、17?　私たちより年上じゃないですかっ」

「いえ、私よりは年下ですよ。この珠緒サンとは同い年みたいですが……、つて、十七歳？」

再度、龍子とイスⅡカはクー子を見る。まじまじと見る。

それが不満であったためか、クー子は半眼で、右手の平の上に小さな火球を生成した――。

「つて、やめてください死んでしまいますよ！　なんでこんな冗談みたいな流れで命の危険にさらされるんですか、私いないと真尋さんの代わりに食事をあげられる人がいませんっつてっ」

「大丈夫。これは威力が弱い。死にはしない。つまり子供用、小児用……、私、幼児じゃないけど」

「わかりました、わかりましたからっ」

龍子がなだめ、イスⅡカは焦点直前状態で何かに祈り始める始末。クー子はしばらくそんな二人を見つめた後、手元の火を消した。それでもまだ不満の残っている様子の彼女に何度も説得をかけ、対価の食糧の献上をもっと上げることと決着がついた。

「とりあえず今は解散して、お昼休み再結集といきましょうか」

「そうですネ」

「ん、たぶん無意味だと思う。私に任せて」

その一言と共に、まるで火が燃え尽きるようなエフェクトを発しながら、煙を上げてクー子はその姿を消した。こころなし彼女の座っていたパイプ椅子が焦げているようにみえなくもないが、龍子もイスⅡカもこれは無視した。触らぬ神に祟りなしである。もうちよつと冗談を軽く言い合えるようになるためには、彼女ともつと仲良くなる必要があるらしかった。

※ ※ ※

「――ところが残念だったな。さつきへ幸運〽️ロールを失敗してるから、確定でID100のSANチェックのダイスロールだ」

「ぬあ!?　なんだと……、さてどう出るか、あつ察し」

「……おいマジかよ。残念、発狂おめでとうだ。元シナリオに従えば精神病棟送りだが、そういう感じでもいいか？」

「あー、まあここまで来たらどうしようもないよな………」

「じゃ、そっちのボディビルダーのPCはこれで終了。めでたくトゥルーエンド直行だな、うん」

「「これは酷い」」

ゲーム同好会の部室にて、長谷部秀太はクトゥルフ神話TRPGのキーパーリングをしていた。そしてプレイヤー3人と至ったエンディングに対し、率直な感想を述べていた。シナリオの決着、最後まで生き残っていたプレイヤー二名のうち、一人は地下鉄の奥からヨグソトスがあふれ出たその余波でがれきの下敷き、もう一人はなんとか逃走こそしたものの判定に失敗しヨグソトスの体内に首から上を突っ込まれ、発狂、生存はしたが精神病棟送りという流れである。

「後でリプレイにまとめるけど、とりあえず講評とこうか？ シナリオ的にPC1は色々気づいていたみたいだけど出目が悪かったな。完全にダイスの女神様に鼻で笑われてたわな」

「なんで最後、がれきの下敷きになってんだよ……」

「PC2はロールプレイっていうか、キャラの性格にそって行動しすぎだ。ちよつと警戒心が足りないから、唯一生存できても数週間後に取り込まれるオチなんてのになる」

「まあ色々おいしい感じでいいんじゃないやねえ？」

「いやせっかく別なシナリオで生き残ったんだから、ちゃんと生かしておけて」

「でも今回生き延びてもSANが15しかないし、既にオワコンというか」

「禿同」

「PC3は、まあ一番探索者してたな。………ボディビルダーだったけど。今更だけど何だよ、この、芸術(肉体美)の技能99って。なんで極振りなんだよっ」

「いや、ネタでとったつもりだったんだけど、意外と有用に運用してたのはサンキューってことで」

わいのわいのと各々、思うことを言い終わって、とりあえずとパソコンに簡単にまとめる。リプレイ——プレイ時の状況やロールプレイ、マスターリングのまとめは後日ということ、本日は解散した。

「しっかし意外と馴染むもんだなあ。こんなところに転入させて油売らせてアホかと思っただけど。霧彦のヤツ、一体何考えてるのか」

己のふわふわとした金髪を適当になでつける秀太。髪がこの色に「変色」してからすでに数年は経っているが、いまだになじんでいる感じはしない。下渕メガネの位置を調整し、彼は靴を履き、自転車を取りに向かった。

——そして、その道中で、見覚えのある少女を見かけた。

ともすれば小学生にも間違えられそうな身長。ワンピース姿の、赤毛の、愛らしいと形容できる顔。

それら一連の情報を見た瞬間、秀太は絶叫をこらえて自転車を全力で漕ぎ、裏門から脱出した——脱出したが。

「——って、先回り!？」

角を曲がった瞬間、その前方に再び彼女はいた。逆光、そして少しうっむいている関係で表情はあまり見えないが、口元が笑っていることは理解できる。完全にホラー映画の演出のごとき状態である。当然のごとくドリフトし、秀太はベクトルを切り替えた。

彼女に対して直角に逃げるよう全速力で自転車を漕ぐもの——。

「——どうして逃げる?」

「——ひい!？」

悲鳴を上げるのも当然、面食らったのも無理はない。

自転車の背後、後輪の上部。荷台に当然のように座り、秀太の肩を持ってささやきかけてきたものだ。思わず転倒しそうになりながらもなんとか停車し、彼は肩で息をした。秀太はまるでモンスターにも出くわしたかのような大慌てぶりで声を荒げた。

自転車をとめ、慌てて降りる秀太。同時に飛び降りた少女に、彼は冷や汗をかきながら確認する。

「な、なんでお前がここにいるんだよ、子論ころんっ」

子論と呼ばれた彼女は、ふるふると頭を左右に振った。

「違う、今はクー子」

「あん？ あー、そうか。子論とお前とじゃ、厳密には『別人』か。中身はたいして変わってなさそうだが」

「はうう。そんなこと、私に言っつて大丈夫じゃない」

「断言すんなよ、殺しにかかれても困るぞ。俺だつてこんなところで『全力で反撃』したくないしな……。つていうか、どうした？」

「協力要請。たぶんキリヒコ様の仕込み」

「あー、他を当たつてくれつて言いたいのが逃げられそうにねーな……」

「そもそもお昼休み、学内にいればこういう手段はとらなくて済んだ」

「そりゃぐ生憎様だな。窓の外から屋上に行つただけだよ」

そして数分後彼は龍子、イスⅡカ、クー子の臨時特別素人探索者チームに編入される運びとなつた。

ベテランの有無に関係ない難易度／本線

翌、昼休みに結集したニヤル子たちは、サンドウィッチ片手に長谷部秀太の捜索に走った。もつともそれは残念ながら功を奏さず、学内で彼の姿を全く見かけないという事態に陥る。授業開始直前になって観念した龍子は「クー子、お願いします」と飲み物を献上し、放課後の拘束に至った。

「で、なんで俺はこんな拘束されてんだ？」

「自分の胸に聞くべき」

そして現在、新聞部の部室に確保された長谷部秀太である。両手足を、おそらく学校の備品だろう布の巻き尺で拘束され、クー子に引き連れられてきたのだった。

金髪、ふわふわした髪を適当に逆立て、下渚の青白い眼鏡をかけた少年。小さい頃はさぞ愛らしかったろうその容貌はいくらか小生意気な風であり、しかし外見は年相応に青年のそれである。龍子や珠緒、真尋たちより一つ年上ということもあって身長や体格も多少大きい印象だが、しかし陸上部というステータスを感じさせない印象があった。どちらかと言えばインテリ風であろうか。否、何をしても悪ガキ風ではあるのだが。

クー子は「よよよ」と泣くしぐさをする。

ちなみに龍子とイスⅡカは特に何もしていなかったこともあり、若干目が点になっている。その有様がますます秀太の居心地を悪くしていた。

「縄抜けの技能とか取ってないぞ!?　なんでこんな人権無視されてる状態なんですかねえ、ええ!!」

「はわわわ、シュータくん、悪い癖。昔からTRPGと現実との区別がついてない」

「何慌てたみたいな感じで言ってるんだよ。っていうか実際TRPGみたいなものだろ人生。ジョーダン抜きに」

「いえ、確かに悪い癖かもしれませんが……、惑星保護機構勤めということを考えて、あながち冗談でも何でもないかもしれないですね」

主に自分がプレイヤーキャラクターとして探索者の振る舞いを強要され、結果デッドオアアライブオアルナティックであるのなら、人生観も変な形に凝り固まるのも仕方ないかという、龍子の同情めいた一言であった。

一方、秀太は秀太で惑星保護機構の名前を彼女が出した時点で「何だ？」と胡乱な視線を向けていた。

彼は彼で、龍子の顔を見て何かというのを特定していた。

「誰かと思えばお前、『素晴らしき星の英知の会』のこのヤベエの妹じゃねえか。何やってんだこんなところで」

「素晴らしき星の英知……？」

「姉が所属していた機関の名前の一つですね。主に『暗黒の男』とか『ニャルラトフィス』を信仰している団体です。私は幸運にも無関係ですが……。というか、私をご存知なんですネ」

「顔だけはな。後、無関係って言ったって、八坂真尋の周りにいるんだから関係者なんじゃねえのか？ いや、俺たちから見れば嬢ちゃんには、ギリギリっていうか、グレー一歩手前みたいな感じなんだが」

「嬢ちゃんとは聞きなれない呼び方ですねえ……」

振る舞いは完全に年上の先輩的なそれだった。そして彼の言葉の端々から、やはり龍子や劉実の「本当の」出自は漏れていないと安心する龍子である。なおイスⅡカは龍子の姉が「ヤベエの」と称された方に興味津々らしい。

「ぐ、具体的に何がヤベエのか教えてくださいですよ！」

「あん？ そりやお前、数人のメンバー連れてとはいえクアチ——」

「あー、その話は私がないところでお願いします。SAN値を下げさせないでください」

「あ？ あー、まあいいか。嬢ちゃんは一応、一般人か。で、なんで俺はこうして拘束されなきゃならぬ——」

ぴりりりり、と。ひどく古い固定電話のような音が鳴る。秀太は

「俺だ」と自分のポケットを示す。とれないとジエスチャーで示すと、クー子はそそくさと彼のズボンの右ポケットに指を差し入れた。どうやら拘束を解くつもりはないようである。

「メールだなこりゃ。……いい加減、拘束解いちゃくれないか？ お前」

「ん。シュータくんに事情を知ってから逃げられると面倒。ちゃんと取り決めて契約書を作ってから解放する。作らないにしても確信するまではダメ」

「まず事情とか全然わかんねえんだが……。いや、下手に言質なんて取らせねえぞ、その話をされない限りは。あー、その嬢ちゃん二人は、とりあえず俺が何なのかは知ってるってことでいいのか？」

「惑星保護機構の所属、という程度の情報なのですヨ」

イスⅡカ言葉に二度首肯する龍子。事情はやはり適当にしか知らないらしい二人を見てから、秀太はクー子を一瞥する。クー子はクー子で何も反応を返さず、秀太はため息をついた。

厳密に言うとは微妙にズレてはいるんだがな、と半太は反笑いになり自己紹介。

「惑星保護機構がこっちでやってる、孤児院の所属なんだよ。勢力的には、一応地球圏内のつてことになってる。だから別に惑星保護機構に俺が組してる訳でもないから、こんなに警戒する必要はねえんだよっ」

「そうなんですか？ バックにいるってことは、結局同じでは」

「やってる、て言っても力を貸してるってくらいだ。別に惑星保護機構が肩入れしているところが、一つとは言ってない。それこそアホみたいに沢山あんど」

「はあ……。まあ、確かにこうして拘束したまま話すのもなんだかわいそうですし、解いてあげた方が——」

「——シュータくんは、ハスターの『神話的改造人間』。話し終わるまで両手を自由にするのはダメ」

「……神話的、」「改造人間ですヨ？」

クー子の言葉にいまいち思い当たりはないものの、しかし何かしら

攻撃手段を持つ相手であろうという認識は持ったのか、二人そろって秀太から一步後ずさる。一方の秀太は、視線をさらに胡乱げなものにしてクー子に文句を垂れた。

「……おいおい、俺にそこまで反抗されるのを前提にしてるって、どんなヤベエ話なんだ？　クー子」

「週刊、地球の危機」

「そいつは大層物騒な話だな。はっ」

話しながらも、クー子は秀太の携帯端末を操作している。「いい加減人の私物を物色すんの止める」と言われ、そのまま端末を龍子に手渡した。

「って、オイ、何でそっちに渡したんだよっ」

「あー、一応、メールの内容がこっちに関係ありそうだったからですかね。指令、だそうです」

「あ？　だつたらなおさらなんでそっちに渡すんだ？」

いい加減、話が一向に前進しないので、龍子たちは秀太に情報共有した。その上で、秀太はものすごく嫌そうな顔を浮かべた。真尋とはまた違う印象であるが、おそらくはAPPかフリーバーテキストの違いか。ともあれ、事情を聴いて秀太はイスⅡカに文句をつけた。

「情報の精度が悪すぎるだろ超文明人。それだとさすがに、俺に相談したところでどうこうなるかわからねーぞ？」

「ヨッ!？」

「えっと、つまりそれはどういう……？」

「考えてみるよ嬢ちゃん。現状だと後、その問題の期日まで五日足らずか？　それだけの期間で処理しなきゃならない問題が山積みだらうが。それに大体、導き出せる推論も二つと来てる」

と、クー子は彼の拘束を慣れない手つきで外し始めた。どうやら本腰を入れたのを確認して、拘束する必要がないと判断したらしい。手首に残った跡を見て、秀太は辟易した表情を浮かべる。

「二つは、指示に対する俺たち側の不手際だ。これについては、そのメール本文を見ないと何とも言えないが、問題はもう片方だと思ってる」

「もう片方ですよ?」

「——メールで指示された内容以外に、何か向こうの機嫌を損ねることがあった場合だ。要は、事前に提示されていない条件が存在する場合ってことだ」

正直その場合はかなり厄介だぞ。

秀太の言葉に、龍子たちは黙らざるを得なかった。正直に言えば、そこまでパターンについて考察を巡らせていなかったという話でもある。ただ秀太は秀太で、TRPGや恐らくその他の事件で培っただろう経験値が生きていた。彼の思考は、意外と冴えていた。

「その超文明人の話からして、相手の潜伏先はこの学校、生徒の誰かだっというのは凡そわかるんだが。問題はこの場合、何をやられるかってことだろうな。……………まあいい。いい加減、メール内容見せてくれるか?」

手渡された携帯端末の画面を操作し、内容にこれまた顔を顰める秀太。相手は「十文字 霧彦」となっている。

「あー、一応俺も共有しておくぞ。確かに五日後、来週の中くらいに惑星保護機構の本隊の連中と会合する予定になってるらしい。で、それまでにそろえる必要があるものが三つ。

一つは魔導書の類なんだが、それはこっちのほうで持つから俺は気にしないでもいいらしい。

二つ目は、名簿」

「名簿ですか? 一体何の…………」

「あー、何人か名前を書いていあるな。そいつらのプロフィール情報を集めろって言われてる。これはまあ、職員室とかに何かまとまっているのあるだろうから、今日か明日か侵入してコピーだな」

「さらっと侵入とか言っているのですヨ!?!」

「場慣れしてますね…………」

「TRPGならこんなもんだろ」

確かにこれは悪い癖だな、と龍子は少しだけ苦笑い。本人はいたって真面目なのだろうが、聞いている側は一瞬真面目不真面目を混乱するし、相手の正気度を疑ってしまう。否、ひよつとしたらそういう狂気

状態に陥っている可能性も否定はできないが、さすがにそれを検証する気は龍子にはなかった。

「三つ目は……………、これは」

「どうしましたか?」

「ポリプの召喚術式、魔法陣がここ学校のどこかに設置されているらしい。…………いや、設置これからされるのか? それを回収するというか、破壊しろと」

「ポリプ…………?」

「ヨヨヨヨヨヨヨ!!!」

いまいち口にされた[!]神話生物の正体がわかっていない龍子と、それに対して絶叫を上げるイスカ。奇声でしかない悲鳴に一瞬びくつとする龍子である。クー子は何も言わず、秀太はため息をつきながら説明する。

「まあ、そっちの超文明人にとっての『天敵』みたいなやつだ。具体例は挙げないでおいてやるが、人間からすれば絶滅させられなかった天然痘クラスでヤバイってイメージすればいい」

「ええ…………」

流星にその情報相手には、龍子でさえ引いた。

「と、ともかく、まず四人だから、チームを二つに分けた方が効率的だと思うのですヨ。それぞれ②と③を探すチームに」

「分けると一口におっしゃられても、中々難しいところがありそうですね…………」

「いや、その分けだつたら分ける必要ないだろ。プロフィールくらいだつたら俺の方で一日もあれば集められる。問題はポリプの術式だな。個人のロッカーの中とかに仕込まれても特定は無理筋だぞ。そんなもん、都合よく探すレーダーなんてないんだ」

「そうなんですか。うーん、とすると……………、イスカさんは、何かそういうレーダーとかあるんですか?」

「一応、同郷人を探す装置はあるのですヨ。でも現在電池切れで……………充電が回復する見込みが当分ないのですヨ」

「何というか、色々積んでますね。まあ、学内の女子ネットワークを使

えば、ある程度の証言とか情報は来週頭くらいまでで集められるとは思いますが、何をもって特定するかって部分になりますからねえ……」

頭を悩ませる三人に、クー子は人差し指を立てて、断言した。

「——論理を組んで、推理するしかない」

「……無茶ぶりなのですヨ」

「いや、実際他にはねえけどな」

「あはは……。ではとりあえずですが、情報収集は月曜日までにはある程度集めておきます。でもこれにも問題が一つ」

「問題ですヨ?」

「ええ。証言内容の精査が追い付かないかもしれないことと、相手側が今週末までに対応しているか怪しいことです。あくまでも私の手が回る範囲は、学内、女子生徒の範囲だと思ってください。例えば男子生徒がどうこうしている、というエリアまでは、やろうと思えばやろうと思えばできなくはないですが、精度は落ちると見ていただければ。……：……珠緒さんが居れば、そのあたりはちゃんとなんとか出来たかもしれません」

「ヨヨ……もしかして、この体に入ったのは失敗だったですヨ……?」

歩くスピーカー女とか喧伝されることもある彼女であるが、実際新聞部として真面目に動いていることもあり、そのあたりの人望は龍子よりも確かなのである。そこを体は同じとはいえ、イスII力がどうこうできる道理はないだろうという判断だった。

クー子は「考える人」のようなポーズをとりながら、机の上に座っている。こっちはこっちで色々と思いを巡らせているらしいが、外見が外見のこともありどの程度役に立つかは未知数といえた。ただし、秀太はある程度彼女のそれには信用を置いているため、両手をたたいて一度話をまとめにかかると。

「まあ、PCの人格が違ったら取得している技能も違うだろうし、実質キャラシートは数値共有のある別人って感じだろ。ただ現時点で……、ちよつと考えた範囲のことなんだが。敵は、こっちの動きを妨害してくる、というのが予想だよな」

「ん」「はい」「ですヨ」

「チーム分けっていうのは、さつきと別区分けだったら俺も賛成だ。つまり———防御と攻撃。メールのミッション遂行のチームと、情報収集をして敵を特定、対応するチーム。そう考えて、俺と子ろ、じゃなかった、クロー子は別々に置いた方がいいだろう。で、これもまた状況から言って、求められる能力の系統が違う。防御についてはクトウルフ神話的な知識の比重が強く、攻撃は和マンチ的な対応力がある」「和マンチですヨ?」

「これもTRPG的な話ですね……。ルールブックの穴をつくような人って話です。セッション自体が崩壊する可能性もあるので一概には良し悪しは言えませんが」

「今回の場合、セッションでトラブル起こすのは相手な訳だし、それを崩すりアルスキルは必要だろ」

「ヨヨ、お二人が何を言ってるかさっぱり……。あと龍子サン、意外と知っているのですヨね……」

「私もたしなむ程度にはやりますから。おそらく、長谷部さんほどではありませんが」

「俺だってせいぜい歴は十年も超えないぞ。まだまだアマチュアレベルだ。ベテランになつてくると二十年三十年なんて平然と超えてくるからな」

「業界の闇が深いのですヨ………っ」

「まあそこでとりあえず聞きたいんだが———」

龍子とイスⅡカに向けて、秀太はひどく真面目な顔をした。

「お前らのうち、クトウルフ神話技能の高い方はどっちだ? 技能点で表してくれ」

「二わかるわけないです」

出題／本線・ホワイトグラウンド／R分岐

「……で、月曜日になったんだが、どうするんだ？　嬢ちゃん。期日まであと二日もないぞ」

「あはは……、とりあえず今日のインタビュー含めて、怪しい生徒は四人に絞り込めたんですけどね」

おおよそ龍子の宣言通りの期間が過ぎ、つまり翌週の月曜日、放課後の新聞部である。

例の魔導書についてはつつがなく火曜日の夜には秀太のもとにとどく算段であり、特定生徒のプロフィールについても奪取。あとは龍子とクー子の蒐集した聞き込みやら情報をもとに、神話生物召喚の準備を仕掛けている相手をどうこうするという話なのだが……。

龍子よりも先に、まず秀太が口火を切った。

「とりあえず俺の方でも別途、何か怪しいものがないか調べられる範囲だが、学内で数か所調べて、それらしいのは見つけたから壊したんだが……、正直、その手の知識はないから過度な期待はしてくれんよ」

「三か所ですか、ふむふむ……」

「ちなみに場所は、どれも準備室だ。……いや、というか、俺が陣の作成途中で発見して、結果的に壊されたっていう感じだな。完成度が最初に見つけたやつが五十パーセント、二回目が二十パーセント、三回目が十パーセントくらいだったし。というか、結構陣が大きすぎて、ロッカーには入らなさそうだったわ」

「作っていた相手は見つからなかったんですヨ……」

「影も形もなかったな。まあ、俺たちにその手の感知能力がなかったというのが実情だろうが」

魔術とかで姿を消されていたらたまったもんじゃない、と秀太。どうやら彼には、劉実やら何やらが時折使っていた「結界」に相当する

能力の持ち合わせがないらしい。メガネの位置を調整し、頭をがりがりとかきながら彼は思い出す。

「状況と、指紋や毛髪とかが検出されなかったことから言っておそらく魔法陣を作ってるのも、外部から魔法をかけてのことだと思うな」「指紋とかどうやって調べるんですか……」

「そりゃ、順当に道具を使ってだな。その手の技能は一応『とってる』」
「だからそんなTRPGじゃないんですから……」

「いや、現実世界で取得するってのも、とるって表現するだろ？ 別におかしくはないだろ。まあ、点数化すれば80に、道具の補正が加わるくらいか」

「点数化してる時点で現実の技能ではないじゃないですか……」

「道具補正ですよ？ 確かに何かレーザーポインターみたいなのをつかっていたですよ」

「結構本格的に準備して調査したからな。ガスも使ったし、穴はほぼなくなるだろ。点数でいえば100点加かってところだ」

「シュータくん、学ばない」

例えはともかく、どちらにせよ基準がTRPGな秀太。やはり何かしら狂気にとらわれているのか、それとも冗句の類なのかは定かではない。

「で、さすがにそこからたどるのは難しいのと、一度設置されたところには現時点で再設置はされていないって点から、とりあえず小休止は出来てるんじゃないかと思ってるんだが……、一応、今の放課後遅くも搜索はするが、正直こつちだと特定できないんだが、どうなってるんだ？」

「あ、では私たちの方に移りますか。まず前提条件からおさらいしますね」

龍子の言葉に、イスカが続く。

「前提として、学校に来ていない生徒は省いても良いのですヨ」

「学校内に仕掛けるという前提でいえば、そうですね。この時期、季節外れのインフルエンザが何人かいますが、その人たちは除いても良いでしょう。私たちのクラスでいえば、余市さんとか。あと当然、真尋

さんも。

さつきも言いましたが、その前提で聞き込みをして、怪しい生徒は四人に絞り込めました」

「……あー、根拠は？」

「企業秘密……、と言いたいところですが、お昼休みとかの所在不明時間と、登校時間、下校時間などをグラフにして集計して割り出しました。クー子にも張り込んでもらいましたので、まず情報漏れはないかなど……、私のお財布はだいぶ寂しいことになりましたが」

「網目模様、美味しかった」

「そつちもそつちで高校生レベルじゃねえな、集計とかで割り出すのって……」

技能構成で言ったら私立探偵とかか？ とその方面に明るくない人間には意味不明の発言の秀太。当たらずも遠からず、とは龍子の弁。当然のようにイス川カは意味不明といったようにぼかーんとした有様で、クー子はメロンの味を思い出してから、恍惚とした表情で「はううう……」とくるくる回っていた。

「それで、本日昼休みの時点でその四人の生徒にそれぞれインタビューしてきました。で、これがまた妙なことになっていました……。四人とも、外見上のつながりはなかったんですが、SNS上でのつながりがありました」

「SNS？」

「学校裏サイトから入れる小グループですね。まあそこで、その、いわゆる降霊術系のを試してみないか、みたいな話があったみたいで」

「それで学校で準備するって話なのか？ また面倒な……。って、それだと俺の調査結果と食い違うな」

「いえ、食い違いませんよ。本番は——水曜日だそうですから」

「……予行練習ってところか？ いや、それでも魔術的にやってたんなら食い違うが」

「おそらくですけど、『描く』予行練習ではあったのでしようと思いません。という訳で、問題は——『誰が』それを描くかに集約されるのではないかと」

降霊術、といつても本格的なそれではあるまい。いわゆる五円玉と門、YesとNoと五十音をもとに行う、一種のトランス状態を引き起こすような、簡易なものだろう。ただやり方が通常のそれと異なる上に、やや大掛かりな類のものであるらしい。

であるならば、それを執り行うメンバーのうち、魔法陣を制御する誰かが一番怪しいと睨むのは、龍子の推測として正しいと言えるかもしれない。

「そこで、まあ、私もグループに入って、ちよつとインタビューしてみたいですね。で、問題がそれなんですけど………」
「E?」

「真面目に推理力を要求される内容だった」

「論理パズルみたいなものですかね……、早い話が。えっと、より抽象化するために個人名は全部はぶいて、A、B、C、Dさんとそれぞれ呼称します——」

女子生徒A

『担当、ぶっちゃけわかんないっていうか、私、恋愛運というか、占つてほしいから入っただけだし。……本当よ、私、嘘つかないから。つく必要もないし。もういい？ 葬式明けで忙しいんだけど』

男子生徒B

『今回の降霊に関しては、いわゆるエンゼルさん系統のそれとはちよつと色を異にしてるんだよね。集まっているメンバーはクラスも学年もばらばら。いわゆる集団心理としてのトランス状態を働かせづらいうような形にしようという意図で……、って、何？ 誰が魔法陣とか準備してるかって？ いや、僕の係ではないかな。現象に興味はあるけど、プロセスはたいして興味ないからね。そういうのはC君が担当じゃないかな。彼がやってくれるんじゃないかと思うんだけど』

男性生徒C

『いあー、いあー！——ん？ 魔法陣？ 興味ないね、僕はちよつと一身上の宗教の都合に忙しい。そんなもの僕は担当じゃないのだし、だれか用意するだろう。ま、僕以外は皆嘘つきなんだけど』

ね——いあ！ いあ！』

女子生徒D

『Cくんがすみません、すみません……！ 前に銅鑼からはじまった衛門で終わる映画見たときから、何かはまっちゃったみたいで……。で、えつと、魔法陣でしたっけ？ どつちかというとAさんの方が詳しいかなと思います。誘ったのはAさんですし、その手の遊びのご経験も多かったみたいですし』

「——という塩梅でして」

「Cだろ」

「いえ、さすがにそこまで露骨すぎると怪しいですし、その映画は私と真尋さんも見ました」

「そうでなくてもそれは、すでに別な病気なのですヨ……」

「狂人の真似とて大路を走らば即ち狂人なり」

龍子さえフォローする、中二病が発病した疑惑のあるCについてはともかく。

「確かに、完全に論理クイズになってるな。整理するとこんなところか？」

ホワイトボードに秀太が以下を記載する。

- A. 誰が魔法陣を担当するのかを知らない。私は嘘をついていない。
- B. Cが用意するのではないか。
- C. 自分は担当ではない。自分以外は皆嘘つきである。
- D. Aが用意するのではないか。

「この状態から論理的整合性をもって回答を導き出せばいいわけだが

——」

* * *

熱海で温泉を楽しんだ(?)後、真尋は劉実に「持ち去られて」、南下していた。

目指す先は奈良であるらしいが、いまいちその主目的が真尋には判然としない。

ともあれ道中、やはりそれはそれは名状しがたい光景が続いていたものの、詳細に思い出すことは真尋本人の精神的にダメージが大きいこともあるため、劉実のセリフのみをカットしてダイジェストとする。

「るみるみぱんちー！ ひゃっはー、汚物は消毒です！ 海産物由来なんですから、良い出汁を出してください、魚人だけに！ 魚人だけにっ——」

「うぺえ、真尋さんこれ、早く逃げないと塵になっちゃいますよっ、この！ バイク頑張ってください、頑張ってくださいマシンシヤンタツカー——」

「——♪——♪ (ほら、真尋さんも。歌ってごまかさないと、あれ起きちゃいますから、起きたら私たちもれなく食べられちゃいますから！ 食料的な意味でっ) ——」

「ぎゃーっ、炎はダメですっ！ お願います信長公っ——」『是非もなしじゃ——まあ儂も得意という訳でもないんじゃがなっ』

いや、セリフダイジェストだけでも真尋は疲労感を覚えた。既に人間の形をしておらず、体力を消費すらしていないというに、精神にはダメージが蓄積するらしい。しかし不思議と正気度が消し飛び発狂しない現在の有様に、ふと違和感を感じる真尋である。

移動中、異様に前衛芸術めいた文字で描かれた「神戸」の二文字を背景に走る劉実へ、真尋は問いただした。ちなみに現在の真尋は、劉実の胸とライダースーツとに挟まれる形である。動揺するような神経を既に物理的に持ち合わせてはいない真尋であったが、劉実はいたずらっぽく笑いながらそうしたのは言うまでもない。

「な、あ、」

「どうされました？」

「なんで、俺は、狂ってないんだ？」

「真尋さんが別世界の人格だからでは——」

「いや、そうじゃ、なくて。今まで、見た、景色は、明らかに、危険なものだ、ろ」

「嗚呼、それですか。んー、真尋さん感づいているかと思いましたが、さすがに理解はされていませんでしたね——」クトウルフの呼び声 C o C の T R P G において、正気度チェックが発生しない存在は何になりますか？」

問いかける劉実の一言で、真尋はそこから先を語るまでもなく正解に行き着いた。そうだ、そもそもよくよく考えれば今の真尋の状態で、生存できていること自体がおかしい。否、本来は「生存してすらない」にも関わらず、意識を継続できているのが、ということだ。真尋が現在まで遭遇している暗黒神話に関係する存在は、一部例外こそあれど意外と物理的な事象に強く紐づいている。だからこそ、彼の知る彼女はもう「生き返らない」のであるし、その妹を「死なせるわけにもいかない」のだ。とするならば今の自分の状態とは。

「……………正気度の、判定を、省かれる、NPCは——神話生物、ないし、邪神」

「ええ。今の真尋さんは、這い寄る混沌に『取り込まれた』存在です。アル・アジフ型の化身、というのが妥当な表現かもしれませんね」

「全く、笑えない、が、……………」

やはりその事実を聞いても、正気が消し飛ぶことはない。いや、既に自分の身は狂気の渦の中に委ねられているのかもしれない。そして、その話を聞いた時点で、真尋は一つ重大な事実に気づいた。正確にはその可能性について。それを問おうとするよりも先に、劉実は先行して話続けた。

「真尋さんの世界はどうか知りませんが……………、この世界では、暗黒の男とノーデンスは相対し、クトウルフが復活。その衝撃で各地に眠っていた邪神とか、関連団体が活発に動き出し、一か月足らずでこの世

界です。生き残った一部人類は、コロニー施設に引きこもっていたり、あるいはポストアポカリプス的にさまよっていたりですね。大陸ごとにまた違った様相を呈していますが、日本は全国的にこんな感じですよ。もともとの風土的に様々な信仰やら何やらを受け入れてきた文化のせいかな、あるいはお陰か、ずいぶんと収拾のつかないカオスな状態ですよ」

「誇って、いうことじゃ、ないな、それ、……、ノーデンスと、暗黒の男か？」

「はい。真尋さんがインスマスククラブ……、えっと、まあ半魚人の相互扶助組織ですが、その手にかかって誘拐され、私はその場で一度屍をさらし。ノーデンスに救出された後、その場で『なくなり』ました。その後に暗黒の男の手で現在の形にされ、取り込まれていますね」

少なからず、真尋は自分の世界とこの世界との状態の分岐点を確認した。決まっている、春先の事件のことだ。わずか三日の彼女との触れ合いの、その時点から既に様相が異なっていたらしい。少なくとも真尋の知る歴史では、自分はノーデンスの手にかかって死ぬ前に助けられ、そして出現したのは暗黒の男ではなく『彼女自身』だったはずだ。

「……………、な、あ——」

「あ、つきましたね。ちよっとお待ちください」

話しかけようとした真尋を制止して、劉実はバイクを下りた。胸元から真尋を「抜き取り」、荷台の荷物に立てかける。

真尋の前方に見えるのは、いくつもの木々が生い茂った森のような何かだ。何かというのは、その木々自体が緑色で、まるでブロッコリーか何かを連想させるものであるためだ。しかしそれにしては嫌に枯れており、見た目でその真実に判断をつけるのは難しい。そしてそんな木々の中で、黒いシルエツトが蠢く。あれは、鹿だろうか——
——真尋には判然と見えない。ただ怪しく目の光る、鹿のような何か得体のしれないものが、この赤い夜の下でうごめき続いていた。

そんな木々のうちの一つをまさぐり、劉実は何かをもぎ取る。赤い、大きなニンニクのような果実はイチジクか何かか。

「ふむふむ、なるほど、大体わかりました」

それを食べながら、バイクの手前に戻ってくる劉実。噛り付く果肉からしたたる果汁が、ひと、ひとと首筋をたれて、開いたライダースーツの胸元に――。それに興奮することも出来ず、何がわかったんだと聞く真尋に、「あつちの状況ですね」と楽しそうに彼女は答えた。「大体、その果実、は何だ」

「果実は果実ですよ。情報のやりとりをするための。そしてあの森は――アトウの枝です。本体はもつと遠くにあるんですが、こつちにちよつとだけ出てるんですね」

「本当、こつち、の、正気、度を、削り取る、ことに、容赦、ないよな、アンタ、」

アトウというのもまた這い寄る混沌の化身の一つであるが、この場ではとりあえず巨大な木のような何かという程度の情報で理解が足りるだろう。その枝だと劉実は言ったので、とするならば地下か、あるいは物質的な空間がゆがんでいるかして、その枝の先端だけがここに出て、真尋の眼前に広がっているということか。だとするならば、このアトウの形とはどれほど巨大な物体として存在しているものなのか――既にスケールが真尋の理解を超えている。超えているが、やはり真尋は発狂しなかった。

そして何をしていったのかについて、劉実は一応説明してくれた。

「このアトウは、『本体』にとってかなり重要な位置を占める化身となっています。そしてこの化身は、本線と分岐であろうと繋がっていますので、そこからちよつと情報を参照させていただきました」

「つまり、俺の、いた、世界の、状況？」

「はい。ええつと――」

簡潔とは言えない時間をかけて説明する劉実。真尋は表情を変えられることができなかったが、たいそういぶかし気な目で劉実を見ていた。

「ガバガバだな、前提、とか、状況は、」

「いえ、意外と良い線いってると思えますよ？ まあ、探索できる程度に『本体』が手を加えている可能性も否めませんが。――真尋

さんは、真相はわかりました?」

「真相、というか、何をやろう、としていて、どう、すれば、防げ、るか、か、」

「ええ。『推理するための情報は一通り提示されています』。『話のヒントは今までの流れの中にあり』『原典を見ると推理が根底から破綻します』。まあやっぱり、鍵になってくるのは真尋さんなんですけどね」

「俺?」

「論理的にありえない可能性を全て取り除いた後に残ったものは、どれ程論理的にありえなさそうに見えても、それが真実です———そしてそれには、単純にして矛盾のない解答が用意されています。若干反則気味なところもありますが、それを導けずして、ハッピーエンドは迎えられませんよ?」

そしてくすりと微笑み、劉実は手元の真尋にウインクした。

論理的な正解へのいちやもん／本線・R分岐

「この状態から論理的整合性をもって回答を導き出せばいいわけだが、まあ論理クイズの方は簡単と言えば簡単だ」

「うん」

秀太の言葉に首肯するクー子。ほう、とつぶやく龍子と対照的に、イスカは「ヨヨ!」と驚いた様子である。

「な、何故わかったのですヨ?」

「そんなもの、それぞれの言動が偽だった場合を確認しておけば問題ないだろ」

「んー、シュータくん、私説明する? さっきのシュータくんのまとめ方だと、たぶん伝わらない」

「頼むわ」

「ん。」

「じゃあ、まず最初に結論。魔法陣を持つてくるのは女子生徒A」

「ヨ? あれ、私、てつきりBかと思っていたのですヨ」

「そっちの嬢ちゃんはどうだ?」

「情報収集者は聞き込み相手全員を平等に疑うものですよ?」

「まあ、それは確かにそうですね……」

「なるほど。ん、続ける」

クー子はホワイトボードに手を伸ばして、何か書き込もうとする。も、身長が足らず、女子生徒Aの欄まで届かない。しばらく単独でぴよんぴよんと跳ねて頑張ったが、あきらめたように手を下げ、秀太を見た。

「何だ?」

「はううう……」

「おい、俺に抱っこしろとか言わないよな。冗談キツイぞ?」

「違う。椅子かして」

「まあ、それくらいならな」

秀太から奪い取ると、彼女はイスの上に立ち上がり、きゅつきゅとホワイトボードに書き込んだ。ちなみにそのさまをイス⇨力は微笑ましそうに、龍子は苦笑いで見ていた。

A. 誰が魔法陣を担当するのかを知らない。私は嘘をついていない。

↓真の場合：Aは嘘をついていない、誰が魔法陣を担当するかを知らない

↓偽の場合：Aは嘘をついている、誰が魔法陣を担当するのかを知っている

「この時点では影響は低い。低いけど、誰が相手かを特定する情報ではありえない。次」

A. 誰が魔法陣を担当するのかを知らない。私は嘘をついていない。

↓真の場合：Aは嘘をついていない、誰が魔法陣を担当するかを知らない

↓偽の場合：Aは嘘をついている、誰が魔法陣を担当するのかを知っている

B. Cが用意するのではないか。

↓真の場合：魔法陣はCが用意する可能性が高い

↓偽の場合：魔法陣はC以外が用意する可能性が高い

C. 自分は担当ではない。自分以外は皆嘘つきである。

↓真の場合：Cは担当ではない、C以外は嘘つき

↓偽の場合：Cが担当、C以外は皆嘘つきではない

D. Aが用意するのではないか。

↓真の場合：用意するのはAである可能性が高い

↓偽の場合：用意するのはA以外である可能性が高い

「これらで場合分けをして、それぞれの状況を考える。

Dが偽証をしている場合、BとCの証言とコンフリクト、衝突を起す。

Cが偽証している場合、Bとコンフリクトする。狂人の戯言と切つて捨てるべきかはいったんおいておいて」

「一体何があたんですヨ、Cさんハ……」

「Bが偽証をしている場合、C同様にコンフリクトを起こす。

そして、Aが偽証していた場合、実はどこにもコンフリクトが起こらない」

「でも、そうするとCサンも用意するって話ですヨ?」

「微妙に違う。BもDも、どちらも可能性が高い、というレベルの話しかしていない。だからここで重要になってくるのは、反証を挙げられているかというのが一つ。そしてもう一つは——文言」

「文言ですヨ?」

イスⅡ力は疑問だったようだが、龍子はそれを聞いて「ああ」と納得していた。クー子は龍子に確認し、メモ帳を借りる。

「さつきニヤル子が言っていた、言葉を正確に使う。」

Aは『誰が担当するかわからない。自分は嘘をついていない』。

Bは『Cが担当するのではないか』。

Cは『自分は担当ではない、自分以外の誰かが用意するのではないか。自分以外は嘘つきだ』。

Dは『Aが用意するのではないか』

「ヨ……? あれ、使ってる言葉がちよつと違うのですヨ。つまり、担当って、調べたりするってことですヨ?」

「あー、そうかもですね。そうすると、担当と用意は別な言葉として分けられるわけですか」

クー子は、そのまま秀太の書いた文言を部分的に書き直す。

A. 誰が魔法陣を担当するのかを知らない。私は嘘をついていない。

↓真の場合：Aは嘘をついていない、誰が魔法陣を担当するかを

知らない

↓偽の場合：Aは嘘をついている、誰が魔法陣を担当するのかを知っている

B・Cが担当ではないか。

↓真の場合：魔法陣はCが担当である可能性が高い

↓偽の場合：魔法陣はC以外が担当である可能性が高い

C・自分は忙しい。担当ではない、自分以外が用意する。自分以外は皆嘘つきである。

↓真の場合：Cは用意する気がない、C以外が担当、用意する、C以外は嘘つき

↓偽の場合：Cが用意するつもり、Cが担当、用意する、C以外は皆嘘つきではない

D・Aが用意するのではないか。

↓真の場合：用意するのはAである可能性が高い

↓偽の場合：用意するのはA以外である可能性が高い

「こうすると、状況が一変する」

「……いえ、CとBとで、自分以外嘘をついているところが思いつきりコンフリクトしているのでは……？」

「少し違う。この場合、Cの発言は真でも偽でも『全員と衝突する』。だからCの発言は、一つの発言に真偽が入り乱れていると考えられる」

ええ、とイスIIカ。さすがにそこまで前提を覆されては、予測はお手上げと言いたいのだろう。

「そしたら結局、Cの証言が使えないから、特定できないじゃないですか」

「それも少し違う。Cの発言は、大きく2つに分けられる。

つまり『Cが魔法陣にかかわるすべてを受け持っているか』、『C以外全員が嘘をついているか』。このそれぞれを用いて、状況を考えてみる。まず『C以外が嘘をついている』という証言はコンフリクトを起こす。だけど前者の方は、コンフリクトを起こさない」

「えっ」

「つまり——BはCかといって、Cは自分じゃないといって、DはAといって、Aは知らないと言っている。この構図で一番疑いが濃厚なのは、A」

「結構お粗末なのですヨ……。大体、それを言ったらあえて証言を残してるBとDとも怪しい気もするのですヨ?」

「ここで、少し特殊なのはCとDとが面識があること。面識があるのなら、お互いがお互いを証言していないということが、逆にお互いが問題の相手ではないという論拠の補強になる。その上で見ると、AとBどちらが偽証とした場合にきれいにかたづくかといえば、やっぱりA」

「まあもつと言えば、Aが一番、嬢ちゃんの質問に適当に答えてるっていうのもあるか」

最後の方で割り込んだ秀太の言葉に、説得力があるような、ないような。しかし、どちらかといったらこう強引さのあるこの言い回しに、どこか龍子はTRPG的な和マンチのような気配を感じ取っていた。

「では、どうするんです? 女子生徒Aさんの方に張り込むんですか?」

「いや、そのあたりは俺と、そのクロー子でやる。あと念のためBの方もだ。分担はこっちで決めるから、お前らは特に何もなくていい」

「ヨ、ずいぶん適当な対応なのですヨ……。というか結局Bの方も張り込むのですネ……」

「いくら推理って言ったって、人間の考えることには限界があるからな。だから、最悪のパターンも想像する」

「あの、その話ですとCとDに人を割かない理由は一体……?」

龍子の言葉に、肩をすくめる秀太。

「——普通の人間がマジモンを見たら、それっぽい振る舞いはできない。むしろ、そういうのとの繋がりを徹底的に隠すもんだ」

「経験談ですか……」

実際、クー子に指摘されるまで秀太をその手の関係者として認識していなかった龍子たちである。存外、その説明は重さがあつた。

「じゃ、とりあえず先に行くわ。本名と住所とかつてわかるか？」

「あー、はい。とりあえず嘘をつかれていなければ、女子ネットワーク内である程度は……、はい」

龍子の手渡したメモの走り書きを手に取り、秀太はクー子の背をたいて促した。じい、と龍子を見るクー子は、やはり何か対価を要求していそうだったが、「ま、まあ後日」とその場はとりなす龍子だった。

※ ※ ※

「——とまあ、あつちの方はそんな風に考えてると思うんですけどね？」

がたがたと彼女の胸元でバイクの振動に揺れる真尋の言葉に、劉実
は周囲を警戒しながら軽く回答していた。

現在位置について真尋は正確には理解できていないものの、ともあれ現在は北上中である。アトウから何かしらの情報を受け取ったのち、劉実は「だったらせめて座標はダブらせないといけませんか」など訳の分からないことをのたまい、そのまま真尋を伴って現状である。そして道中で真尋は気づいてしまっていた。現在劉実が乗っているバイクも、明らかに普通のバイクではない。ヘッド部分は馬のようなもの、車体全体は鱗に覆われ、全体から吹き上がる排気音はまるで生命の鼓動か何かのよう。名状しがたいことに、彼女の乗っているこれはどうにも「シヤンタク鳥」、這い寄る混沌の扱う奉仕種族を改造か何かしたものだらうと。

そしてそのバイクは、尾部から巨大な蝙蝠のような翼をはやし空中を飛んでいた。物理現象としては決してありえないそれであるが、今更と言えば今更でもある。眼下に映る街は徘徊する食屍鬼グールの山。すえた犬と腐食したたんぱく質と鉄の匂いが、高所においても充満して

いる。ただ食屍鬼たちは、バイクのエンジン音(?)が聞こえると、首を下に向けうつむく。どうやら意識して上空を見ようとしていないらしい。ともすればそれにより、真尋の脳裏に食屍鬼が何かしら上空から襲い掛かる怪生物と殺しあっているイメージが浮かんだ。どうやら相当回数、上空から襲撃に合ったことで自分たちから仕掛けたりする発想はなくなっているらしい。

ふと、真尋は思い浮かんだ疑問を口にする。

「人間は、いない、のか、この世界で、」

「いますよ? まあ人口でいえば半分以下にはなっているでしょうが。真尋さんのお母様とか、細かいところまでは把握できませんが」「アンタでもか?」

「生憎、惑星の領域がここまで細分化されてしまいますと、『本体』も予測できる範囲とか、観測できる範囲が限定されてくるのではないかと愚考します。

それはそうと、真尋さん、あのクイズの正解わかりました?」

「わかるわけ、ないだろ、恣意的な、情報操作を咬ませないと、断言はできないだろ。そもそも、証言が、論理クイズとして、成立していい」

それに続いて、劉実が「本線」でおそらく推理されるだろう内容を真尋に披露した流れである。それに対し、真尋はため息をつきたかった。現状の体では呼吸すらしていないので、どうしようもないのだが。

「確かに、前提条件から、導けなくもないが、それだって、恣意的だ」「とおっしゃられますと?」

「実際問題、論理パズルじゃないって、話だろ、これは、現実の話なんだ、から、証言全部、嘘つかれてる、可能性だって、あるだろ、」

「あの、それを言ってしまうと色々おしまいなのは……」

「そもそも、クトゥルフ神話を相手取ってる、時点で、正気じゃ、ないからな、」

自らの出自すら覆されたことのある真尋のセリフである。さしもの劉実も反応が悪かった。なにせ真尋の言う通りであるし、そもそも

劉実自身が真尋に「この世に探索者に優しいキーパー、神秘の森手たるGMはいない」と言っているのだ。

ただ、真尋は話を聞いている時点で、もっと大きな可能性に行き着いている。そしておそらく、それが妥当であることも、彼の想像力は導き出していた。

「大体、歴史が変わるっていうのも、眉唾だぞ、俺は、アンタの言葉だって、全部は、信じられない、」

「いえ、流石にこの世界の有様を見てしまって、それをおっしやられるのはもはや狂気では……？」

「そもそも、それだけ大きな、歴史の変更があつて、結果が、違うなら、それぞれの、独立度は、高い、はずだ。だったら、その歴史を観測した結果は、既に、第三者の介入が、あつた結果、なんじゃないか？」

「とおっしやられますと」

「前提が違うんだろ、たぶん。そもそも、イースの、俺の精神をこつちに送った、相手は、歴史を変える、ためにじやなく、歴史をそのままにする、ために、送られた可能性だつてあるつてことだ」

「……………」

「その方が、余計な邪魔も、入りにくい、からな、」

つまるところ、真尋の言わんとしているのは。そもそも騙されて真尋たちのいる時間軸に送られたイスⅡカというのは、歴史を変えるために送られたのではなく、既に観測された歴史を補強するために送られたのではないかということ。規定事項として「イスⅡカが介入して失敗した歴史」があり、それを本来の歴史として扱いたいがために、イスⅡカ本人を騙し該当する時間軸に送ったのではないかということだ。

足りない？ 何が足りないんだつ——

秀太、真尋は名前を伏せられているのでまだ誰かはしらないのだが。見方を変えれば、彼のセリフとてつまるどころ何かしら対処をした上でのセリフともとれるのではないか。そして、その可能性が実はかなり高いのではと真尋は踏んでいる。

「つまり、真尋さん、それは——」

「大前提が、大きく違う、んじゃないか、それは、だったら、逆に、何が問題で、地球が滅ぼされるかを考えれば、真実にたどり着ける——
——論理ゲーム自体が、茶番で、目くらま、しなら、そして、俺が、鍵
だって、言うのなら、導ける結論はそう多くない」

おそらく本来なら面倒くさそうな顔をしているだろう、断言する真尋に対して。劉実はくすりと、それこそ慈しむような笑みを浮かべた。

イスIIカと人格が入れ替わっている珠緒と別れ、二谷龍子は帰路についていた。

といつても、札幌駅周辺をうろついているさ中である。自宅は真尋の家とは異なりむしろ駅前に近いこともあり、特に用事がなければあまり家に帰ることはない。真尋ほど趣味があるわけでもなく、また何かしら没頭するものがあるわけでもなく。それでいて、「本性」が本性であるために発揮される万能さにより勉強で苦戦することもほほばない彼女にしてみれば、一日というのはほとほと退屈なものである。彼女自身、だからこそ真尋でよく遊びにいつているというのも、自覚はしていた。単なる友達付き合いとも違い、あのなんだか鬱屈して自己評価はそこまで高くなさそうな、でも大事なときにはきっちり果たすべきことを為せるような、状況に振り回されても自分を見失わない男の子のことが、彼と一緒に遊んでいることが、殊の外楽しかったのだ。そしてそれは、彼女の姉とは別な目的で存在している自分自身としての、「役割」を果たしていることにもつながっている。つながっているが、そのことに彼女は自覚的ではなかった。彼女自身、その大本からはそれなりに乖離して生み出されている存在でもあり、そしてそれは「乖離している」が故にこそ必要とされる役割でもある。

なんにしても言えることは、真尋が絡んでいないときの彼女は存外、普通の少女ということだった。

「あ……、これですかね、真尋さんが読んでいた雑誌は」

ぱらりと手に取りめくる龍子。「ムテキ」と書かれた金色のキャラクターやら、左下には青く眼付きの悪い銀と赤黒の巨人。中を見れば緑と黒のラスボスらしきキャラクターの写真が散見される。

医療がテーマに組み込まれているらしい特撮ヒーロー作品らしいが、そのテーマに真つ向からけんかを売るようなキャラクターデザイン

ン具合に、龍子は読みながらも若干引いていた。合うとか合わないとかではなく、よくわからないものに対する拒否感、さながらキリスト教圏におけるラブクラフト御大が表現していた「冒瀆的」という概念に近い拒絶かもしれない。

「つて、私、別に見ているわけではないので特に興味がわく訳でもありませんが……」

ひとえに何をしているかと言えば、少なからず好意を抱いている男の子の趣味のものをちらりと見てみようということだ。そんな健気？　な女の子としての一面であるが、しかし実際問題としてその手のものをあまり彼女は有していなかった。

「まあそこまで真尋さんも、このテの話題が通じる相手を欲しているわけじゃないみたいですから、そのところは別に私が補う必要もないんでしょけどね。とは言えど、姉との関係を抜きにして私のことを見てくれるっていうのは、時間がかかりそうですけれど……」

それに私、そこまで『考える』役割ではない化身のほうですけど、本当に大丈夫ですよね……？　　なんというか、地球滅亡とか言っている割に、割かれてる人員が少ない気もするんですけど——　つて、あれ？」

伸びをして本屋を出て、寄り道をやめ自宅に向かう龍子。西四区浴いを抜け赤れんがなテラスの前を歩きながら、今日までの流れを思い返し、そこはかとな不安にかられていた。

そんなタイミングでふと気が付くと、龍子の視界がどこか赤っぽい状態に変化していた。

否、空を見上げれば、どこか赤らんだ色をしている。月もそれは同様に赤く、周囲の状況が何かおかしい。街明かりはあるものの人の気配は感じられず、まるで世界で自分一人だけ取り残されてしまったかのよう。

突然の状況の変化に、龍子は周囲を見回す。

「……なんというか、この妙な感じの仕掛け方は覚えがあるような」

そして言っているそばから、ちよūdごそのタイミングで電話がかかってくる。名前は「辰隆（父）」。龍子はらしくなく、眉間にしわを寄せながら電話に出た。

『やあ、私だ』

「……………何の用事で——」

『後ろを』「みたまえ」

そして言われるがままに後ろを振り返ると。そこには自転車のベルを鳴らし、自転車がやってきていた。黒いスーツ、緑のシャツ、黄色のネクタイ、黒いソフト帽とその上から白衣を纏った男が一人。長髪を後ろにまとめた男。二十代から三十代くらいの年齢で、整った顔立ちは龍子や劉実と共通する部分がある。男は手に電話をもっていないが、しかし「みたまえ」は間違いなく男の口から発されたもので、そして電話口と同じ人物の声だった。その姿はあまりにも素っ頓狂極まりないものだったが、しかしこの赤い空の下で態度一つ変えない超然さがあり、そして龍子は幾度となくこの男のことを見知り、そして理解していた。

彼女の立場からすれば、次のような呼称になる。

「何なんですか、その恰好は——辰隆^{よしたか}お父さん」

涼し気な笑みを浮かべ、男は——二谷辰隆、ひいては這い寄る混沌「本体」は薄く微笑んだ。

「何、たまには様子を見に来ようと思ってね。愛しい我が娘の交友関係とか」

「どの口でそれを言いますか。大体筒抜けじゃないですか私の側について」

龍子の言葉に、はははと笑みを絶やさぬ辰隆。「それはそれ、これはこれ」と取り付く島もない。もつとも、対する龍子とて彼には取り付く島もないのだが。

「ところで真尋には、まだ君と姉との『実際のところ』については、まだ話していないのかな」

「姉が話すつもりがないことを、私がわざわざ話すつもりもありません。大体何ですか、都合がいい時だけ現れて父親面するの。そういうの、私いっちゃん大嫌いですからっ」

「おお、昔はあんなに純真無垢だった龍子も今じゃこんなのだよなあ……。お母さんも泣いちやうぞ?」

「そもそも私に母はいませんし、私が生まれたのは『割と最近』ですつ。大体、様子を見に来たとか言ってますけど、今の私たちの状況だって全部把握しているんですよね?」

「まあね」

この一言で済ませるあたりが実に這い寄る混沌であり、そして事実這い寄る混沌であるので、事情はすべて把握しているらしかった。

「だったら、私のこの不安が何なのかわかってますよね」

「ああ、わかっているよ。だけれど、本当に君はそれを知りたいのかな?」

「何ですか、その微妙な言い回しは……」

「いや何、真尋にとっては今の状況の方が、むしろ幸せじゃないかと思ってるね。」

「幸せて——」

「今、真尋は劉実と会っている。過去ではなく、まあ、別な時系列といえる場所でのね」

「姉と?」

くすりと微笑みながら、自転車から降りて白衣を脱ぐ。そしてそれをそのまま龍子の肩にかけ、耳元でささやいた。

「つまり見ようによっては、真尋は今、幸せの絶頂期という訳だ——」

——人間的にどうかというのは置いておいて」

「なんでさらりと人間性をささげることがあるんですかつ」

「そこはほら、大体私の采配で私の手の内だからね。まともな方法での生存を期待する方が間違っている。」

ともあれ、龍子。君が今かかえている不安を解消する術はある——

——本当は今までの作戦すべてが失敗で、真尋にもう二度と会うことが出来ないかもしれないという、その不安を解消することはね」

だが、それが果たして真尋にとって幸せなことなのかな――

這い寄る混沌の、「本体」のつきつける選択肢に、龍子は腕を振り払った。エルボーの一発でも腹に当たれば少しは気が晴れるかと思ったが、当然のようにさらりとかわされた。

「おやおや。独立性が高い化身はこれだからいけない。大本に簡単に逆らいつぎだよ、君たち。そんなのだから私に『顔を剥がれる』んだ」
「……いえ、はぎませんよ貴方は。私に対しては」

「ほう。その自信はどこから来るのかな？」
「姉です」

「――なるほど。まあ確かに、私は君を再び私の中に溶かし込んで、化身としての大本を消す必要性は感じていない。むしろ、君はそのまま独立性の高いままを貫くべきであるとさえ思っている。

まあそうだ、とりあえず、そろそろ『良い頃合い』だろう」
「はい？」

「――真尋のいる病院へと今から行きなさい。真尋から、ある意味で本当の幸福を奪う覚悟が出来るというのならね」

素晴らしいながら自転車にのり、いずこかへと走り去る辰隆。そしてその姿は、周囲の景色が本来の有様を取り戻すよりも前に見えなくなっていた。

数秒、まるで嵐でも過ぎ去ったような呆然とした様子だった龍子だったが、しばらく父親の言葉を思い返し、やがて一つの違和感に思い至る。

「……何故、わざわざ真尋さんの見舞いの話を、今？」

気になることはそれだ。平日、行ったりいかなかったりといった真尋の見舞いとは別にして、確かに今日はいくつもりはなかったのだが。わざわざ出てきてそれを進言するということは、一体何か、理由があるのだろうか。

否。

「いえ、そうではありません。私が今、行くことで、真尋さんと姉とを引き離すことになる……？」
真尋さんは、別な時間軸、世界の真尋さ

んと人格交換されている？　そしてそれを引き離せる？」

理由は定かではないものの、しかしどうにも言葉から不穏さが漂う。否、猛烈な焦燥感を伴い、龍子は走り出した。面会時間はぎりぎり夕食が終わった後か、走り窓口で手続きをする時間さえもつたいない。しかし彼女はそれを待ち、（途中で白衣姿にいぶかしがられながらも）真尋の入院している五階へと向かう――。

そして、この階層に人気を感じないことに気づいた。窓の外の色こそ変わらないものの、まるで全員殺害でもされたかのような、環境音の聞こえない異様な静かさだった。思わず手近な病室の扉を開く。足元を見る龍子。その場では看護師が白目をむいて倒れていた。奥の病室もそう大差はあるまい。

「気絶させられてる……？　っ、まさか、真尋さんが狙い!？」

駆ける龍子。病室までは十数秒といったところか。そして真尋の部屋の扉から、あわく、緑色の光が漏れ出ていることに気づく。クー子は呼べない。そもそも龍子が契約しているわけではなく、作戦会議の結果として現在は長谷部秀太に預けてある。真尋本人が動けばまだしも、現状では彼女で対応できない。

できないが――しかし、同時に辰隆の言葉を思い出す。ああまで思わせぶりの言葉を語った以上は、少なからず自分でもうにか対応できる範囲の事柄であるはずだ。それでもなければ、わざわざここで「使いつぶす意味がない」。必然、龍子はためらいなく扉を――鍵がかかっていた。

「……………はあ、仕方ありませんね」

ため息をつく、懐から安全ピンを取り出し、何やら指先で改造する。穂先の変形したそれなりの強度を誇る鍵開けに変形させ、がちやがちやと鍵穴に突っ込む。秀太がいれば「鍵開け技能、点数は80か？」などと世迷言を言いそうな雰囲気であり、実際それだけの高い精度で彼女は病室の扉を開けた。

がらから、と引き戸をスライドさせ――。

※ ※ ※

「大前提の、問題だ。ポリプが召喚される、ことが、問題だというのなら。少なからず、対策された、時点でも、ポリプの召喚は、成功していたはず、だ。だったら、そもそも、相手は全く、別な手段で、召喚をして、くる」

劉実は胸元、真尋を撫でながら話の続きを促す。真尋は表情一つ変えられずに、己の考えを明かす。もつとも、劉実はそれに肯定も否定もしないのだが。

「外部で、召喚されると、考えた、時点で、俺の精神交換、されるのが、一番、意味がわからなく、なってくる、そもそも、巻き込む必要はないと、考えられるからな、」

「では、何故真尋さんの精神交換をする必要があったのでしょうか」「ネフレンⅡカと、同じだ、ろう、おそらく、俺の、ネクロノミコンとしての、力が、必要だった、はずだ、」

「何故、わざわざ真尋さんを必要とするんです？」
「基本的に、その時代にあるものでしか、イースの連中は、活動できない、んだろ、だから、精神交換の道具も、例の光線銃とかも、現地に
ある、材料で、作るはず、だ、ただ、同時に、文明度が俺たちと同じ基準に、合わさっているなら、避けて通れない概念が、ある、」
「それは？」

「正気度喪失、つまり、SANチェックだ、やつらも、冒流的恐怖つてのを感じて、正気を喪失する、だから、あまりに冒流的な情報群を、そのまま持っていることはないだろう、」

イスⅡカの言動から統合して——もつともこの真尋は劉実の口から間接的に聞いた情報を統合してというレベルだが、その上で真尋は、想像力を極限まで働かせて思考する。そもそも神話生物の類に近い今の自分が発狂しないというのが、一つの答えだろう。イスⅡカがクー子の出現を見て発狂したというのが、一つの問題点だ。劉実の言動からして「意外と」COCのTRPGに現実が即しているらしい

ことをふまえてみても、ならばなぜイースである彼女が発狂して気絶したのかという説明ができない。とするならば、その扱いは一般人のNPCないしPCに近い立ち位置——正気度を喪失し時に発狂する側であると考えられる。

そしてそれは、何もイースⅡカのみ適用されることはあるまい。イース全体がそうであるならば、その手の正気を失う類の情報の取り扱い、かなり嚴重になっているとみていい。間違っても、物質として持ち込めないだろうそれらを情報として持ち込む、つまり「記憶して」持ち込むなんてことは、そうそう出来るわけはあるまい。そう考えれば、本来ならばそういった暗黒神話的信息を（自分たちが暗黒神話的な存在であることに目を瞑って）現地で調達していると考えられる。

ならば、どこから調達するか——。

「それくらい可能だとは思いませんか？ 真尋さん」

「可能でも、確率は低いと、俺は、見る」

「その心は」

「現地の時間軸でバレないように干渉する、が基本的な鉄則だったな。たぶんだが、つまり大体的にやらかすと、そのやらかした相手が実際、如実に情報として残るんじゃないか？ だからこそ最後の最後まで隠蔽につとめ、自分たちの情報を観測されないようにする。そうするなら、片っ端からその手の情報を収集するなんて目立つようなことは、あまりやらないだろうという推測が立つ」

つまり、敵も味方も、どちらのイースも条件はほぼ同一とみれるということだ。これについては真尋の予想も多いが、しかし真尋はこの推測を疑っていない。他ならぬネクロノミコン——「過去・現在・未来における暗黒神話群に対する解決への方策」が記された自分であるからして、そこに端を発する想像力に左右されているのだ。才能という単純な言葉ではなく、論理としてそれは正当を導き得るものだろう。

劉実はそれに、正解とも不正解とも言わない。だがその寂しそうな目が、何よりも雄弁に真尋の推測を物語っていた。

龍子を前に、余市健彦——否、彼と精神交換しているだろう何者かは、真尋より這い出た文字のような何かを手に取り、手元の瓶の中に詰め仕込んだ。ふたを閉めると、茫然とする龍子へととびかかり、突き飛ばして逃走する。

いきなりで状況を理解できないまでも、龍子は深呼吸しながら眼前の状況を整理していった。

「余市さんの、嗅ぎつけられたかという発言。真尋さんから出ていた、魔法っぽい何か、そして病院のこの状況……、んん、何だかよくわかりませんが、普通におかしいってことだけは分かります。っていうか、どうしたら……?」

壁に激突し、痛めた背中をさすりながら立ち上がる龍子。と、ふと自分の手元に違和感を感じる。後ろにまくれた白衣のポケットに、何か物が入っていることを察した。もとは辰隆、己の父と言えなくもない相手が着用していた白衣であるからして、ここで何か物が入っているということとは、それが単なる忘れ物などである可能性は低い。

急いですぐさまそれを取り出した龍子は——。

※ ※ ※

「さて、場所も座標もこんなところでいいですかね」

伸びをした劉実は、真尋をともなつて足を進める。気が付けばいつものまに、二人はとある建物の屋上に着陸していた。それは一言でいえば何かしらのシエルトーのようでもあり、しかし同時に現代文明に感じられる機能性を排除した装飾過多の謎の建築物だった。かろうじ

てエジプトのアンクなのか十字架なのかわからない名状しがたい文様が所狭しとあしらわれていることはわかるが、一体なにのための呪いなのだろうか——否、真尋の想像力はその正解を引き当てていた。これらは間違いなく邪神の類から身を守るために、地上の古き神々の加護を得ようと人間がもがいた結果の有様である。そしてそれが功を奏したかどうかは、この無人施設の有様を見れば日の目を見るよりも明らかか。そこかしこ、部屋があり、その奥からこの世のものとも思えない、人間のうめき声のような、あるいは何かの囁く声のような、形容の難しい声が響く。それらの声から真尋は何かしらの人間性と、同時に悲しいという感情を感じ。また理性が溶ける嘆きと、暴力衝動に突き動かされるような、そんな感情の色を感じ取った。と、突然劉実の後方の扉に、ばん、と勢いよく何かがぶつかつたような音が響いた。しかし背後の扉がひしゃげた様子もなく、何かが這い出てくる様子もない。真尋はそれらの状況を「目に頼ることなく」、音と雰囲気からすべて正しく理解し情報収集していた。

己の現状がどんどん、さらに今の肉体に最適化されていつている——その事実が、真尋の正気を今更おかすことはなかったが、しかし恐ろしい事実であることに違いはなかった。

ただ、それはそれとして。劉実の一言に、真尋は違和感を感じ取っていた。

「何が、こんなところ、だ」

「まあその、乙女には色々準備が必要ということ。野暮ですよ、真尋さん」

何が乙女だと言ってやりたいところであるが、実際そんな相手に惚れ込んで現状まで至っている身分であり、真尋はうまく返答できないでいた。割と珍しい状況である。そしてそんな彼の心中を察しているのだろうか、くすくすと劉実は楽し気に笑った。

劉実は真尋を胸元から出して、手元に抱える。そして前方を見せながら、少し軽やかな足取りで前進していた。もっとも屋上から入った直後の場所は既にどこまでも長く続く真っ黒な廊下であったり、ともかくにも名状しがたいところである。さらにある程度進んだ時点

で、劉実は右方向の扉を一つ開けた。中には下り階段があり、そして劉実はそれに足を踏み入れる。と、数歩歩いているうちに、いつの間にか二人は階段を「上っていた」。既に上下感覚もおかしなことになり、実際には持ち運ばれているだけの真尋でさえ現在の視界や自分の体感が正気の世界であるかどうか、疑問を抱くことになっていく。劉実は当然といえば当然のように不思議にも思っていない様子のまま、真尋を撫でつけていた。

「大丈夫、大丈夫。少なくとも今の真尋さんが壊れることはありませんから」

「今の、つてことは、どういう、ことだ？」

「それはもちろん、あつちに戻ったらということですよ」

やがて上り階段の途中、窓枠を一つ開ける劉実。その向こう側からは「鉄の棒が」垂らされており、劉実は真尋を「投げ入れる」と、彼女自身も鉄の棒を掴んで「降りて行った」。一見すると真尋たちの側が下方であるようにみえていたのだが、実際は逆に窓の向こう側に行けば行くほど地面という扱いらしい。地面に背後（もし真尋が人間の姿であったならばという感覚的な意味で）から落下し、ぱらぱらと表紙がめくれる。劉実は音もなく、するすると棒を伝って降り、真尋を踏まないように着地。よいしょ、と彼を閉じて持ち上げ、軽く背表紙を叩いた。

「何を、つもりだ、アンタ、」

「真尋さんも想像がついているんじゃないですか？ 現状のまま進めば、『本線』において地球の滅亡は免れない。現状までが表面上、既定路線で進んでいる以上、手を打たなければすべて終わる。だとするなら、私がやることは一つです」

「——既定路線を変えるため、事象をある程度把握した俺を『送り返す』つてことか」

「ええ。真尋さんと私との邂逅も、そういう意味では本体の作戦通りということなんでしょうけどね」

つまるところ、這い寄る混沌としては「本線」の歴史を滅ぼすつもりはなく、だからこそ表面上はイースの反乱分子たちに気づかれな

よう、既定路線をそっているように見せかけていた、ということか。真尋がこちらに送られ、劉実と邂逅し、元の世界に戻る。そして、それが出来ることで解決できるというのならば、おのずと真尋は対策を察し始めていた。

「……クー子か」

「クトウグアの化身の子ですね。ええ、彼女を使えば、ポリプが最悪召喚されてもどうにかこうにかできるかと思えます。ただ、全く何も考えず放置していてどうこうなる問題ではないので、そこは真尋さんに探索していただく必要があるかと思えますけどね」

「SANチエツカーもなし、にか？」

「いえ、持っていると思いますよ？ おそらく、あつちで協力を求めている第三者あたりが。なのでクトウグアを使う際に、借りるなりするのがベストかと」

そして、真尋はやはり彼女の言動から。今までの行動を踏まえて、一つの結論を導き出していた。それはかつて劉実、霧子を名乗っていた彼女の言動を否定するものであり。そしてそれが否定されることで、真尋自身も大きく精神に損壊を負う可能性がある事象である。

「なあ、アンタ」

「真尋さん、そろそろ時間なので、あまり会話する時間はありませんので、手短にお願います」

「……………アンタ、本当は、独立してるんじゃないか、独立した、一人格、なんじゃないのか、」

えっ、と。予想外のことを言われたと言わんばかりの表情の劉実に、真尋は畳みかける。

「かつて俺に、アンタ、は言った。自分たち化身、はあくまで、這い寄る混沌、が演技した人格でしかない。その本性は、どこまで、いつでも這い寄る、混沌でしかない。だけど、そう、だとするとおかしな点が前、か、らいくつかあったんだ。ネフレンIIカー一つと、つても、化身同士で争、いあうなんてこ、と自体がおかしい。もし演技でしかない、というのなら、それ、は全部マッチポンプ、のはずだ、」

「……………だったら、マッチポンプなんじゃないですか？ どれもこれも、

「這い寄る混沌と」

「だったら、今の、アンタは何だ、……なんで俺の世、界の、アンタは
ずっと死ん、だまなんだ、」

劉実が真尋を守るために生み出された化身だと名乗っていた。そしてそれは、クトウルフ復活を阻止した時点で役目を終えた。であるならば、逆にクトウルフが復活したこの世界において、役割を果たし終えた化身がいつまでも残っているのがおかしいと言えはおかしい。もしこの世界で彼女が生み出された目的が違ったとしても、同種の疑問は残る。つまるところ彼女の役目はすでに終了していかるべきであり、いまだこの世界に残っているということが、必然性から排除された、美しい盤面に置かれた一つのしみ、美文の中の誤謬だ。這い寄る混沌は、そういうった面倒なこととはしない。

真尋と劉実が未だこうして旅をしていることに、何かしらの意味があると考えられることもできる。だが必然性がない。歴史が違う以上、この劉実やこの世界の這い寄る混沌は「本線」での事象を、本来は観測できないはずだ。だからこそ、わざわざ何かしら手続きを踏んで向この情報を搜索したのだということだろう。とすると、やはり劉実の化身としての役割が不可解となる。

そこで一つ、真尋が抱いた可能性こそが――。

「――あつちのア、ンタは、逆らったんじゃないの、か？　だから、化身、身としての存在を剥奪、された。そしてそれをすべ、てマツチップ、で操っているのなら、すべて、自分自身の演技でしかない、なら、わざわざアン、タの妹を俺のそばに置いて、おく、必要がない。そのまま、ア、ンタを置いて、ておいた方が、まだいく、らか俺への心証も、良いはず、だ、」

「……………」

「こう言い換え、ても良い。つまり、逆らうなり何なりして、罰を受けたから、アンタは、あ、つちの世界でその存在が消、されてしまった。ペナルティを、課されたからこそ、消えたのだと」

「……………」別な私ではありませんけど、私の言ったことを信じないんですか？」

「生憎、俺は何も信じないよ——大体考えてみるよ、二日三日し、か一緒にいなかっただ相手の言葉、だぞ？どれくらい、俺の人生に与えた影響が、大きかったとしても、その言、葉のすべてに信頼を置、けるわけなんてない。そんなことが出来るな、んて、俺は、俺自身を信じ、ちやいない、」

真尋の言葉は、それまでに積んできた経験に基づいた疑いの言葉であり、当然の帰結であり、そして諦観の結果でもあった。彼自身が自身の運命を選んで抗ってきたと、とてもそう言えるわけではないという心のダメージから来た結論であった。そしてそれが、そう大きくを外していないだろうという確信に満ちた発言でもあった。

劉実は少しの間目を閉じ、その場で座り込み。再び開けた目は——闇色に染まったそれだった。

「——いけないぞ？真尋。女の子の秘密というのは、もつとベールを剥がすようにしてやらなければ」

涼し気な男の声。声音に絶対的な立場から発される自信と、わずかに含まれた嘲笑。覚えのある、覚えしかないその声に、真尋は内心でうめき声を上げた。

這い寄る混沌が、彼女の体を介して真尋の前に現れ出たのだ。

しかし、それこそが真尋の指摘の妥当性を証明するものであると、彼は確信した。

「ここでアンタが、出てくるってことは、つまり、そのまま会話をさせるとまずいってことだよな」

「企業秘密、と言っておきたいが、まあ安心するといい。私は『本線の』私で、この世界の私じゃない。だからこそ幾分、君には甘い判定をする」

「判定とか言うな、判定とか。TRPGじゃないんだぞTRPGじゃ。と、いうか、なんでアン、タがわざわざここに出てき、たんだ。アンタ、そういうこと出、来ないんじゃないのか？」

「どちらかと言えば、私は『真尋に引っ張られて』ここに出てきた、が正解だ」

「意味が、わからん、」

「それは、当然さ。意味がわかるように話していない。だがいずれ、君自身の手で答えを見つけられる程度には、私も調整しているからね」
「というか、こっちの世界のアンタは、俺に対して、どういう扱い、なんだ……」

「君の今の惨状を見れば、察するところはあるんじゃないかな？」
「——つてことは、やっぱり、逆らったんだな」

這い寄る混沌は薄く微笑んだまま、肯定も否定もしなかった。それが如実に、真尋の胸を締め付ける。

彼女の嘘が、すべからず真尋の精神を守るためのものだということが理解させられてしまったからだ。もしその嘘がなければ——つまり真尋は。真尋を守るために自らの存在すら消した彼女を、その自らの手で葬らざるをえなかった。そうなるよう仕向けられ、殺してしまった。事実を直視させられれば、あの状況下において真尋の精神は文字通り消し飛んでいったことだろう。それだけ、愛した彼女を自らの手にかけるよう誘導されたという事実は、真尋にとって大きな疵になりかねない。

そして、同時に一つの疑念も浮かぶ。

「独立した人格であるなら、それがただ単純に、何も代償さえなくアンタに逆、らうことなんて出来るわけがない。代償を支払ったと、ころで、逆らうことができるか、さえわからない。つまり、たとえ自分の化身、分身であろうと、人格的に、独立した相手を、アンタは弄ぶはずだ、アンタに、とつて、だとするなら……、アンタ、何を取引したんだ」

真尋のその指摘に彼女は目を閉じ。次に開いた時点では、先ほども感じた「良くない」プレッシャーは、いずこかへと消えていた。浮かぶ感情は、どこか寂し気なそれだけ。

「企業秘密です♪」

「おい、」

「まあ、私は真尋さんの知る私当人ではないので、何があったかまではおぼろげにしか把握できていませんが、一体何を言ったかは、予想できませんかね」

「独立した人格だっというのは、否定、しないん、だな、」

「企業秘密……、ですが、まあ、真尋さんは確信していらっしやるみたいですし。今更といえば今更ですかね」

だったら、と。真尋はやはり、言葉が続ける。

「だったら、なんでアンタの妹は、俺のそばにいるんだ。それに、この世界でのアンタの妹は——」

真尋のその言葉に、劉実はウイंकをしながら——ある重大な事実を告げた。

その一言に、真尋はたとえ人間の体でないといえど、目を大きく見開き、驚愕のあまり言葉と思考を一瞬失った。

「まあ、これくらいのも興味返しは許されますかね。

では、もうお別れです」

「、」

「最後に握手を、とか出来たら良かったんですけど、そうも言える状況じゃありませんね。なので、気をしっかり持ってください？ ——

——いただきます」

そして何一つ考えも、思いもまとまらない、そんな真尋へ。劉実は彼の目を閉じさせ、その唇を奪った。

※ ※ ※

次の瞬間、真尋は自分の五体の自由を取り戻していた。だからこそ両目を開け、再びその思考が消し飛んだ。直前の状況からすれば有り得なくもない状況だろう。しかし彼にはそれを予想するだけの時間も、心の余裕さえもやはりはしなかったのだ。

早い話、二谷龍子が真尋の唇を奪っていたのだ。

SANチエツクする必要はないものの、彼が精神に受けたその衝撃は計り知れない。二谷劉実への想いだの、龍子本人への引け目だの、直前までの会話だの、現在の状況がどうこうであるのだとか、そういった一通り一辺倒考えられること、彼自身が考えるまでもなく連想できること、すべてが彼の思考を中心に回転し、目まぐるしく移り変わり、混乱と同時にその身と思考を縛った。硬直、身動き一つできず、龍子のキスを受けていた。最初のそれは劉実、もつと言えば這い寄る混沌に奪われていたそれであるが、しかし状況が状況であったこともあり、真尋としてノーカウントに置いていたところもある。だが、それに近い状況であっても、現状のこれをノーカウントだの何だのと置いておけるようなことはなかった。

そして、龍子の目がおそろおそろといった風にかかれる。

目と目が合う瞬間――。

「――ぎゃんっ、ちよ、真尋さん!？」

思わず、真尋は龍子を突き飛ばし。その身を起こし、頭を抱えた。

前提条件破棄によるタイムアタック／本線

我を取り戻して最初にまですしたことは、倒れた龍子を起こすことと、とりあえず病人服から私服に着替えることだった。幸いにも母親が一応はもつてきていたため、服そのものがないというようなことはなかったものの。しかし数日動かしていなかった体は、いかんせんきしみを上げていた。

着替え終わってから龍子を再び病室に迎えると、真尋は直近の光景を思い出し、わずかに眉間をもむ。龍子も龍子で「それ」を意識しているのか、視線を真尋と合わせず「あはは」と周囲をきよろきよろ見回していた。

「どうでもいいが、何で白衣なんて着てるんだ」

「えっと、その、成り行きと言いますか……」

「まあいい。………回りくどいことを話してると一向に進まないから、手身近に聞くぞ。何があった」

「いえ、手身近すぎませんか？ あ、時系列順でしたら説明はできますが」

そうしてこうして、真尋が精神交換されてから現在にいたるまでの、龍子視点での説明がされる。イスⅡ力なるイスの大いなる種族との邂逅、彼女ら組織内での問題、惑星保護機構の会合と、そこから参加者たる一人に協力を取り付けたことなど。また直近、真尋を見舞いに来たことと、余市が真尋から何か呪文を取り出していたこと。

そして最後に、這い寄る混沌からメモで啓示があったこと。

「啓示って何だ、啓示て」

「これです」

ポケットから取り出したそれに書かれていたのは、暗号でも何でもない単純な時刻表記と「K i s s h i m」の二文字。彼にキスをしろという命令形である。

「で、アンタはこれ何の疑いもなくやったと」

「えっと、まあ、私の本体からの指示だったみたいでしたので、逆らう必要はないですからね。さすがにこの終盤で、真尋さんに不利な行為を働くことはないかなと。結果的に真尋さんも、復活しましたし。ね？」

「アンタ、何とも思わないのか？」

「……真尋さんは、私に、何か思ってたほしいんですか？」

「———そうかい？」

お互いその話題には触れまいと言う、暗黙の了解が形成された。

実際のところ、龍子として口づけ程度は「覚悟の上で」日々生きてるので、そのこと自体は実は問題ではなかったりする。どちらかといえば、這い寄る混沌から提示された真尋の状況と、それを破壊するだろう自分の行動とに思うところはあったのだが、それについて言及はしない。わざわざ言うほどのことでもなく、その選択を彼女に敷いた結果で真尋がさらに思い悩むのではという予感があったからだ。本性は本性であつても、龍子は龍子で恋する乙女らしさを併せ持っていた。もつとも、その方向性が妥当なものなのかどうかは定かではないが。

ため息をつき、真尋はストレッチ運動をしながら話を続ける。

「俺を放置していたってことは、たぶん準備は完了したってことだな」
「準備ですか？」

「おそらくだが、余市もイースに精神交換されてるはずだ」

真尋の推理、というよりは確度の高い推測を聞かされる龍子。イースⅡ力が関わってくる歴史自体が固定されたもの、彼女たちが干渉した結果が惑星崩壊である可能性が高いと。その歴史を固定するために先方が動いていると考えれば、イースⅡ力を陽動させるための策を前提として用意している。であるならば、その予想の枠の外側に出た場合をかんがえれば、必然、真尋が鍵となる。

「で、なんで余市さんなんでしょうか……？」

「流石に向こうの人選まではわからないが、たぶん学校で俺と一番話すのが余市だからじゃないか？」

「いえ、私とも話してま……、あつ」

「おい、何を察した？」

男子の、ちゃんとした友達と呼べる友達が、余市くらいしかない真尋であった。もつとも真尋の半眼を前に、指摘するほど龍子も野暮ではない。世の中には言及しなければ不確定で通せるという風潮があるのだ。もつとも犯罪はバレなくとも犯罪であるが。

少なからず、と真尋は想像力を働かせる。少なからずそれなりに親しく、訪ねに来てもおおかしくはない人選として選ばれたのだろう。珠緒や余市、ニヤル子あたりが真尋と接触の多いクラスメイトであるが、そのうちで男性は余市一人のみである。イースといえど性別までは偽れないのだろうから、結果として彼が選ばれた訳だ。

「とは言え面会時間ギリギリだし……。これ放置して置いたら大変なことになるな」

「でも真尋さん、その間ずっとここにいますか？」

「いや、敵がわかっててもそのまま対策一つ打たないのはどう考えても下策だ、下策。すぐに行動しないといけないが……。社会性を犠牲にする必要があるなこれは」

「社会性？」

「考えてみる、直前まで入院患者だった相手が突然起きて消えて、しかもこの階は全員気絶してるんだぞ。間違いなく搜索願いも出されるし、見つかったらしばらくは検査とかで監禁必須だ」

一度検査入院で監禁に近い扱いを受けた真尋であるからして、おおよそ数日は拘束されることを正しく予想していた。もつとも「前回」とは多少状況も違うのだが、どちらにせよタイムリミットには間に合うまい。となればとれる作戦は——真尋は自分のベッドの横にある、切られたリングゴ、主にそこにささった小さな金属製の果物フォークを2つ手に取る。続けざまに窓を開けベランダの向こうを確認した。人の気配はない。ベランダの下方、下の階も現時点では出ている人間はいない。

「あの、真尋さん何をされてるんでしょうか……。？」

「あんまりやりたくないが、飛び降りるぞ」

「いやいや、真尋さんそれは流石に……。別に真尋さん、〈跳躍〉スキルとかとつてませんよね。身長とその倍の方向へのジャンプに、成功判定のアドバンテージとかありませんよね」

「何だその言い回し。TRPGじゃないんだぞ、TRPGじゃ」
「うっ」

長谷部秀太の言い回しが移っていたのか、思わず口走った龍子。真尋はそれを特に気にせず、フォークを構える。

「アンタはどうする？ そのまま先に下に降りて、下で合流してもいいが」

「下で合流しない場合、どうなるんですか？」

「……………」

「えっと、一緒に飛び降りるってことですね、うん……。真尋さん、安全なんですか？」

「賭けの要素も大きいが、ある程度は成功を見込んでる」

実際、彼が何故フォークを持ち出しているか、いまいち理由を把握していない龍子である。このあたりはそれこそ、TRPG風に言えば、真尋の「セッションのクリア特典」のようなもので、彼から説明されなければ理由は判然としないのだ。もともと真尋とてそこまで時間に余裕があるとは思っていない。その証拠に、廊下から人の足音が聞こえてくる。そして、この時点で選択肢はなくなった。

「あ……。文句は後で聞くから、ちよつと口閉じてろよ」

「ええ？ ——きやつ」

瞬間、真尋は龍子の手を引き、抱きしめ、そのまま彼女の背を手すりの側にして、押し倒すようにベランダから転落した。ぎゅう、と強めに抱きしめた際の、意外と感じる彼女の人肌としての温もりに一瞬目を半眼にする真尋。照れからくる感情か、這い寄る混沌の化身である彼女から感じる人間味じみたそれに鬱陶しさを感じたか、はたまたなにか別種のそれであるかまでは定かではないが、むしろこの場合、動揺は龍子の方が激しかった。何分、真尋と違い、相手に対する負い目の感情はなく、純粋な好意的なそれが大半を占めている。その状況でひしと、己の体を抱きしめ、離れまいと腰に手を回され、そしてあ

まつさえ倒れこむように落下しているこの状況。吊り橋効果もあいまって、彼女の心臓はバクバクと早鐘を打っていた。

落下する時間は五秒もかからずか。そして真尋は龍子の首側に回していた右手、そこに逆手で握らたフォークを向け、地面へ向けて「突き刺すような」モーシオンを振るった。と、その結果。瞬間的に稲光がほとばしり、電気がスパーク、そして衝撃波を伴って、真尋と龍子の下方から砂ぼこりが上がった。

着地、というほど素直に着地は出来なかったが、それでも落下死を避けられる程度には衝撃を殺す。

立ち上がる真尋に、龍子は二重、三重の意味で硬直した状態から、おろおろ口を開いた。

「怪我はないか、アンタ」

「あ、あの……………、何をっ」

「アンタ知らないのか？」

そもそもこの武器(?)の使い方を教えたのが彼女の姉であり、どちらにせよ這い寄る混沌である。なのでてつきりその程度の情報は龍子も持っているかと踏んでいた真尋だったが、ここに至り思い違いに気が付いた。丁寧とは言わないまでも、最低限の情報を共有する。

「…………俺がフォークとか音叉とか、又の分かれた道具をもって振るうと、邪神とか神話生物とかと戦える武器になるらしい」

「邪神特攻の武器ですか…………、って、どうしてそれが、こういう使い方ができるんですか!? 死ぬかと思いましたがよ色々な意味でっ」

「悪かったな。時間もなかったし、こっちも見誤ってた。…………なんでもって言われても、アレだろ、戦う以上は物理的な威力を伴うってことだろ」

「基本理詰めなのに説明がずいぶんと感覚的なんですな真尋さんっ」
「嫌味に言うな、嫌味に。俺だって好き好んで使ってるようなものじゃないんだよ」

正気度が減りそうだし、と真尋はぼそりと呟く。そもそもこれがノーデンスが、八坂家の先祖に与えた加護であるにしても、それとて旧き神々、偉大なる大いなる意志が複数介在した時代からの遺物であ

ろう。どう考えても、振るい続けてS A N値が直葬される恐れがないと、断言できるわけではない。クー子にしても「本来の」クトウグアとしての使われ方をすると真尋の正気度が飛ぶらしいので、彼としては妥当な判断だった。

そこまで細かく考察できるだけ、自分の身に宿った超常的なそれについて考えたくないという反抗である。

もつともそんな己の生命の心配が先行しているため、龍子がわずかに頬を赤らめていることに気づいていない真尋。……否、気づいているが、積極的にその話題を避けている真尋であった。

ただ、と前置きをして彼は続ける。

「これが、今回はかなり重要だ」

「そりゃ、そうですね。今回は物理的な戦闘を伴いそうですし」

「それもそうだが、それだけじゃない。……えっと、イスⅡ力だっけ？」

今、暮井と精神交換されてるヤツ。呼び出して出来るか？」

「へ？ あ、大丈夫だと思えますけど」

「頼む。場所は……、高校の前だと不審者扱いだな。前に俺を撃った、あの公園近くで」

とりあえず移動しながら電話を頼む、と真尋。首肯すると、龍子は彼に続いて走り出しながら、携帯端末を操作して名前を出す。と、そんな彼女の手首に、簡単に作られたパワーストーンのつけられたミサングを確認し、真尋は視線をそらした。

「——あ、もしもし？ イスⅡカさんですか？ えっと、今お時間は——へ、ドラマ？ 群馬？ いえあの、そこまで群馬は未開の地では……、はい、別に白亜紀とかジュラ紀みたいなことにはなつてませんから、そのっ」

「何やってんだ一体……」

明らかに緊張感のないイスⅡカの言動に、真尋は妙に気疲れを覚えた。

※ ※ ※

十分足らずで、三人とも公園に集合となった。

真尋と龍子が向かうと、肩で息をした珠緒がその場にいた。もつとも中身はイスⅡカであり、服装は左右の靴下が違うといったような古典的な漫画のような慌てぶり。一言でいえばやはり世界観や時代、文化風習が違うと言うべきか。真尋はそこはかとなない頭痛を覚える。彼女自身は真面目にやってこれなのだ、という事実が、ある意味で真尋がこれまで接触してきた中では母親などを思い起こさせ、頭痛の種類であった。

「で、アンタがイスⅡカか」

「ヨヨ、真尋サンですよ！　こ、こ、この度はそのまこと申し訳ありませんというかその是非とも上司には黙っていただきたき所存なのですヨ……っ」

そして出会い頭、いきなりの土下座である。何故かとなりの龍子が「女の子土下座させて何たくらんでいるんですか真尋さん」とでも言いたげな半眼で見ってくるが、真尋はそんな態度をとられる謂れがないので、堂々と一瞥し一蹴。別に企んでいないのはわかっているだろうという内心の抗議は、龍子に伝わっているかどうかはさておき。

「そういう話は後でだ。後で。上司とか色々気になるワードもあるが、主目的はそこじゃないだろ、アンタ」

「そ、そうなのですヨ！　私がここに来たから未来が固定されてしまっているという話なのですヨ！　アレですよ、観測者問題とかそういうヤツですよ？」

「……………あー、その、語尾っていうか、口調がなんとかならないか？

アンタ」

「FmG:」

ある意味で、一人だけ世界観が違う弊害であった。

会話すれば会話するほどに、真尋としては頭痛が加速する。

「観測者問題か？　似たようなものかもしれないが、こっちとしてはアンタがこっちに来て、色々あがいた結果がアンタらの観測した未来だと思ってる」

「ヨヨ……、そ、それは流石に想定してなかったのですヨ。でも、病院で真尋サンが何かされていたというのが、よくわからないのですヨ……。真尋サンも、何か体に神話生物でもかかわってるんですヨ？」
不思議そうな反応のイスⅡ力を前に、真尋は視線を龍子に振る。

Q. コイツ、俺とかアンタとかの正体について何も知らないのか？

A. たぶんそうですねえ。

意外と息の合った二人のアイコンタクトによるコミュニケーション。状況を察知し、真尋は言葉を選んだ。

「あー、まあその……、そういう魔術的な要素とかかわりがあるんだよ、俺は」

「はあ」

「時間があつたらあとで詳しく話してやるから、続けるぞ？　で、俺は這い寄る混沌の手を借りてこっちに戻ってきた。這い寄る混沌は、俺を経由して事態のあらましを把握したはずだ。

這い寄る混沌は、分岐、この歴史を「本線」と言っていたが、そことは別な時間軸から俺に干渉してきた。

だから、その小娘が俺の見舞いにいったのもイレギュラーで、急いで俺からポリプ召喚の呪文を奪ったってことは。状況は少しアンタの観測したものと、多少変動してきているはずだ」

「誰が小娘ですかっ」

真尋の言い様に軽く腹を立てた龍子であるが、当然のごとく無視される。

「つまり、真尋サンは何が言いたいのですヨ？」

「同族を見つける道具があるって聞いた。それが充電中だと言っていたから、おそらくは電気エネルギーを使っていると考えたんだが、間違ってるか？」

「あ、いえ、合っているのですヨ」

「それが一体——」

「現時点で、それがないと相手の場所を突き止めることができない。この全体の状況が『相手がそうなるよう仕向けて』もたらされたものであるなら、それを覆さない限り、俺たちに勝利はない。だから、ま

ずはその探査装置を復活させる」

「させるとおっしゃられましてモ……」

「で、道具はどれなんだ」

「これなのですヨ」

制服の上着のポケットから取り出したそれは、手でぐるぐると回すタイプの単二電池の充電器であった。ただし中に入っているものは、もはや電池と言って良いのかわからない、黒々とした長方形の塊である。街灯に照らされたそれは「てらてら」とまるで鱗か何かのように光を反射し、妙に生っぽい。うわ、と龍子が一步後ずさる。真尋もかなり表情を歪めたが、それでも確認することは確認する。

「さっきまでコンセントで充電しましたが、とりあえず持ち運び用ということですよ」

「これって、普通にプラスマイナスの概念は一緒ってことか」

「ですが、一体何をすると言うのですヨ……」

「何って、一気に充電する」

「素晴らしい、真尋は両手に果物フォークを握り、充電器の電池差し込み個所に「振り下ろした」。

とたん、両手がスパークし通電。名状しがたいエネルギーが衝撃波ではなくすべて電気エネルギーに変換され、異常なフォトンを放つ。電気エネルギーが強すぎるせいか、電流が逆流したせいか、充電器のモーターの個所が音を立てて稼働する。

「ウワヨヨヨッ!!?」

閃光に絶叫を上げて目を覆いその場に倒れるイスⅡカ。龍子は半ば予想していたからか、真尋の手元から視線をそらし、イスⅡカをベンチに寝かせた。

「ま、真尋サンは何をしているんですヨっ」

「まあ、見た通り充電しているのでは——」

「そういう話じゃないですよ！ あれ、なんか異能力ですよ！ 普通ああやったら壊れるですよー！」

「まあ断言できませんが、真尋さんがそういった初歩的なミスをするとは考え辛いので、たぶん計算づくだと思いますけど……、あ、終わっ

たみたいですね」

少なからず、彼の精神がアクセスしているだろうネクロノミコンに記載されているのかは不明だが、真尋はどうやら電撃や衝撃波の出力を調整できるらしい。であるならば、充電とか、そういう方向性のものであってもある程度は対応できるのだろうという龍子の予想だ。

実際、その判断は間違っていないかったらしい。龍子の言葉に視線を動かされるイスⅡカ。見れば確かに、充電池の色が真っ赤に染まっていた。充電が完了したその証の前に、イスⅡカは言葉を失った。

「ほ、本来なら、半年単位の充電が、一瞬で——」

「半年単位とかどう考えても欠陥品じゃないか、欠陥品じゃ」

「これが、和マンチ……!」

何だ? という真尋の視線に、イスⅡカは戦慄と畏怖を持って真尋の立ち姿を見ていた。

なお、龍子はそれをなんだか面白くなさそうに見ていたりするが、これは完全に余談である。

絶対的相対性決着済／本線

「ヨヨ！……こつちなのですヨ！」

イスⅡカが妙に膨れた腕時計型の装置を確認しながら、先行して走る。真尋が強引に充電したそれは、奇怪な音を立てながら三次元上にレーダーのようなホログラフィックを展開していた。なお、そこに描かれている波形はともではないが人間が理解できる類の絵図をしておらず、しかし当然のように「ヨヨヨ！」と読み解くイスⅡカは、妄言の類ではなく違う文明の知生体なのだろう。

やがて道中で、余市の後姿を発見する真尋たち。余市、否、余市と精神交換しているイスⅡカ人は、真尋の姿を確認すると懐から見覚えのあるビデオカメラを連想させる銃を取り出した。真尋にむけ、トリガーを引く……。とつさに危機感を覚え、フォークを振り回す真尋。先端から放たれる衝撃波と電撃が、相手の銃から放たれた「玉虫色の」光線をはじく。あらぬ方向にそらされた光線は、そのまま電柱に刺さるように照射され、黒ずんだ穴を発生させていた。

「ここまできると隠す気ないなアンタっ」

「この——、今、終わるわけには——！」

「ヨ？……もしかしてイスⅡルギ？……貴方のような優秀なエージェントまでそつちに回っているとは、中々世知辛いのですヨ……」

「くそっ、この体がどうなってもいいのか——！」

「あ、そういう人質作戦みたいなお約束はちゃんとしてくるんですね」「いや、余市殺したらアンタも死ぬだろ。さすがに精神交換中になら」

真尋の指摘に「ぬっ」と言い返せない様子の余市ことイスⅡルギである。流石に「0.1秒の間がある」とか言い出して精神交換を行えるほどには相手もチート、もとい万能めいている存在ではないだろうと言う真尋の予測であり、実際それは正鵠を射ている。なまじ文明の

粒度が真尋たち現代人に近い部分もあるためか、現実における暗黒神話群との遭遇であれど意外とコミュニケーションもとれるし、行動予測も立てられるといったところだ。

ただ、それがすべて最良の結果につながるかどうかは別問題である。

「おのれ、人質も意に介さぬとはなんたる外道っ！　こうなれば——
——っ」

イスルギは肩掛けカバンを開き、瓶を複数取り出したそれらの中には文字のような、光る何かがうずまいている。そのうちの一つを選び、彼は地面に叩きつけた。破壊された瓶の中から、のたうち回り這い出る文字、そして陣形。それらは地面に吸着すると一つの意味合いを為し——やがて現れ出でる巨軀は、一目で真尋にその正体を知らせるアイデア、インスピレーション、第六感的直感を落とした。

暴風を伴うそのシルエットは、ナイトゴーストよりもいくらか人間型をしていると言って良いが、だからと言って人間かといえればそれも違う。ゆがんだ全身、そのらんらんと輝く真つ赤な視線は眼下のものすべてをエサか何かのようにしか考えていない、否、そもそも知生体とかそういう同格の存在として扱う気配がない存在と言える。みえる手足には両生類にありそうな水かきめいた器官があるあたりから、元来都心部に出現する相手としては不釣り合いだろうことを真尋は理解できた。

理解できたと同時に、その名前に思い至る——イタクア、北米におけるウエンディゴと呼ばれる妖精とも習合される、暴風と共に神隠しを行う「邪神」のそれである。その素性は主にネイティブアメリカンの信仰の中にあるウエンディゴのそれを紐解けば大枠はつかめる。人心に働きかけ狂気に陥れるその神は、あるいは形を描写されなためにか形態がさまざまであると言えるが、真尋の眼前にいるそれがおそらくもつとも広く知られた形態の一つであろう。もつとも風に乗って歩むもの——星間を風のようにわたる存在であるからして、その形態自体には本来さして意味があるわけではないのかもしれない。それこそ這い寄る混沌の形が何であるかと問われて回答す

るのが難しいように、この存在も名状しがたきものなのだろう。さて。

そんな存在を眼前にした真尋たちが無事であるかと言えば、当然そうはあるまい。まず最初に真尋は、下半身が動かなくなりその場に倒れた。眼前の邪神を前に、さしもの真尋の正気度も恐怖からくるものか身動きがとれないらしい。否、夢の中で確認したときのそれとは状況が大いに異なるものの、確かに現実世界において「這い寄る混沌」がそれらしく振舞った際も同様レベル以上にダメージを負っていたので、これはどちらかといえば現状の方が正しいとみるべきか。また倒れた時点の勢いで腕にダメージがいったのか、左側にうまく力が入らず体を起こすことが出来なかった。正気同喪失による不定の狂気か、ともあれこれはかなり宜しくない。

龍子はどうかといえば、突然「あはははははっ」と笑いだしながら、携帯端末でかの邪神を撮影しまくっていた。撮影中は笑いが止まらないものの、目がまったり笑っていない。一体何に執着が走ったのか、ともあれ彼女として正気の沙汰ではないだろう。

唯一、イスルカだけがダメージもないように「なんでそんな簡単に邪神を召喚できるのですヨっ」などと騒いでいる。判定を逃れたのか、何かべつな要因があるのかはさておいて。

「——少年っ」

クー子がさらりと真尋の眼前に現れ、今にも振り下ろされようとしているイタクアの拳を受け止める。龍子いわく「四人の容疑者の中から一番犯人らしい相手」をもう一人の協力者と追っていたとのことだが、状況的に真尋の方が緊急性が高いと判断して現れたのだろう。すぐさま両手を炭化させるほど燃焼させながら、イタクアの指を折り、焼き、押し返す。

そうこうしている間にイスルギは走り、この場から退散する。彼もまた何かしらの正気度喪失を負っていないように見える。だがそちらを分析する暇もなく、クー子とイタクアとの大乱闘が大通り、車道の中心で続く。テレビ塔が背後に、公園が横手にあるこの状況、前後から走ってくる車が急停車したり、あるいはその怪獣大乱闘めいた

この世の終わりじみたプロレスを前に、燃やされたり踏みつぶされたり弾き飛ばされたりとあまりにさんざんな状況である。さすがに真尋一人のせいで北海道にここまで迷惑をかけている訳ではあるまいが、彼の正気の部分が妙にそこにひっかかりを覚え、申し訳ない気持ちがあわいてきていた。

クー子は攻めてこそいるものの、決定打にかけている。おそらく「本来の」クトウグアの使い方としての、最大火力、恒星めいた熱照射およびエネルギー消費を行っていないためであろうが、真尋とてその使い勝手は重々承知である。おそらく使えば正気度喪失ではなく「S AN値ゼロ」のあたりまでいきかねない。そして、真尋の本能的なところからの警告か、彼の想像力は本当の意味で彼が正気度を削るような戦い方をするべきではないと知っていた。何か、それこそとある域を切った時点で、真尋は真尋でない何かと「つながつてしまう」——その存在を捉えてしまうと、彼自身理解できないまでも、おぼろげながら識っていた。

「何が——つ、いや、そうか。俺から取り出した魔術が、別に一つとは限らないのか」

そしてあのイスルギ。いかなる手段を用いたかは定かではないが、正気を失っていた真尋から古代地球外来生物種の召喚術式をうばっていた彼である。逆に言えばそれをするだけの時間的余裕があるなら、当然真尋から他にもいくつか召喚術などを抜いていてもおかしくはないのだろう。彼の持っていた複数の瓶を思い出し、真尋は冷や汗をかく。少なくとも5つ以上は何かしらとられていると見てよいだろう。

と、そう考えていると真尋の前方の魔法陣の存在に気づいた。既に術は完成しており、「召喚」一方のみのそれで成立しているそれは、どこをどう捜査しても邪神を送り返す機能は存在しないことを想定させる。逆に言えば、召喚のみであるのならまだ使えるということ、真尋は痛感した。

問題はそれこそ——。

「俺が召喚を行って、正気でいられるかどうかって話だよな」

匍匐前進のように腕を使って這い、真尋は前進する。龍子はいまだ使い物にならず写真を撮り続けており、とてもではないが何かを任せられる状況にない。一方のイスルカとはいえば真尋たちを置いてイスルギの追跡に向かつており、状況としては正しいが真尋たちの生命についてはもはや眼中にはあるまい。

ちらりと頭痛を覚える真尋。脳裏には一瞬、赤の女王の蠱惑的な笑みが浮かぶ。何故それが見えたのか理由がわからない彼であるが、頭を振り、魔法陣の目の前にたどり着いた。

「あはははははははっ、真尋さん、真尋さん、屋根が！ 屋根が！」

「何のパロディだよ、何の。っていうか、アンタいい加減逃げとけ、遊びでこのままいったら命が——」

「いえいえ、いいんですよ！ 遊びだからいいんですよ！ 『私みたいな』『遊び半分の』存在が、この真尋さんを吊るされた男にするかけ事をひっくり返してやるんですよ！」

意味不明であり、しかし何かしら本来の意味合いが存在しそうな言葉の数々であるが、しかし実態を把握できない真尋からすれば唯の狂人の戯言である。思ったよりもひどい、下手すると真尋よりも正気度を喪失しているのかもしれない。やはり彼女に頼るわけにはいくまい——この現状においてあまりに慌てているせいか、真尋は「龍子」がその本性を考えれば「正気度喪失するのはおかしい」という事実気づいてはいない。ごく当たり前のように一人の同級生として扱っていた。だからこそ、彼は決断を自らに迫る必要があった。

目を閉じ、フォークを片手に構え、自らの内にある「実体のない」「捕えようのない」「今の自分よりも古い生」を探る。そこに行き着くことで初めて真尋は、現在の自分に掬う膨大な数の魔術、その一端に触れることができる。もっともふれたからといって使いこなせるかどうかは別問題であるため、そこが悩ましいところではあるのだが。それゆえ——この場でもう一度、自らの手で従うイタクアをもう一体召喚するという行動が打開につながるとわかっていても、それを実行した後の保証が、それこそクー子を使うよりは生存確率が高いとわかってるからこそ。

しかしそれでも、この後に追うことが出来るかというのとはまた異なる問題として、真尋が意識を保つていられるかどうかとはイコールでないと言う事実が、そのリスクが真尋を躊躇させていた。しかし。

それでも、眼前で初恋の女性の、その忘れ形見ともいえるだろう龍子をこのまま、自分同様かろうじて危険ではないという程度の状況に押し込めたままではいられないはずもなく。フォークを振り上げた真尋の両目は、緑色に輝き、そして――。

『――何だ、えらく困ってるみたいじゃねえか』

そして、上空から何者かが飛来した。飛来したそれは、真尋たちに振り下ろされようとしてる巨大な拳を受け止め、イタクア同様「暴風」をもってして打ち返した。明らかに常人ができるそれではなく、何かしらの魔術、あるいは暗黒神話群に連なる何かであろうことを真尋に想起させる。

フォークをいったんとめ、顔を上げる真尋。そこには、猿のような白銀の仮面をつけた誰かがいた。髪は金髪、妙にキューティクルの主張が激しいが、それはともかく。身長は真尋より大きいだろう、制服姿で、そして首には黄色いケープめいたものをまとっていた。

一見すればそう、それこそ「黄衣の王」の要素をデチューンしたような相手だった。

彼は邪神に飛び蹴りを極めるクー子を見て、「うへえ」と声を上げた。

『アイツ、あそこまで人外めいて動きやがってなあ。昔はもつと可愛げもあつたが……、いや、昔からそこから中爆発させてたから、あんま変わらないか？ でも燃料なしにセルフで出来るって時点で「取り込まれる」ってやっぱヤバいんだな』

『？ アンタ、誰だ――』

『――お互い、名前は名乗りあわない方が良いと思うぜ。なんに

しても敵ではないだろうけど。ホレ、使うだろ。何かやろうとしてるみたいだしな』

真尋の目の前に、腕時計状の名状しがたき装置が投げ捨てられる。それは十面ダイスを二つ上部にあしらったような、見覚えしかない正気度保護装置たる、通称「SANチェッカー」のそれであった。

「……恩に着る」

『おう、せいぜい着とけ。着とくついでに、突然目の前からアレが消えた鬱憤をはらしてもらいたいから、頼むぜ』

鬱憤の部分が何にかかるのか真尋としても意味が解らなかったが、彼はSANチェッカーを腕に巻く。脳裏に浮かんだ数値は「58」。どうやら前回、ドリームランド分の正気同喪失の補填もされたのだろうか、やけに頭がクリアになり、立ち上がりがこころなし楽になった真尋である。

「——いあつ」

そして、心おきなくフォークを振り下ろし、魔法陣を再起動。出現するイタクアは再び暴風をともない、しかし脳裏に浮かんだ数値は「33」。やはり邪神召喚クラスになるとかなり消し飛ばらしい。

召喚されたイタクアは、眼前の他のイタクアを目撃するや否や、殴りかかり、道路を陥没させる。そしてそのままマウントを奪い返しあいながら、殴り合いが始まる。今度こそ、同じ大きさの怪物同士の怪物プロレスだ！ 手持ち無沙汰になったクー子は、真尋の方に少し寂し気にぽつんと立った。

『なるほどな、イタクア同士は見つけ次第お互い殺しあうって話だったか。プレイングの参考になるな……』

「とりあえず場所を移すと言うか、イスIIカを追いたいんだが……」

『おう、いいぜ。なんなら送ってやるよ。俺としてもこの状況は不本意だからな』

この場にて龍子は完全に気絶。ぱたり、と真尋の肩に頭をのせる形で倒れてきていた。目を閉じてしおらしければ幾分絵になる二人であるが、生憎と白目向いてよだれを垂らしているあたりからして、全く救いはなかった。持ち上げ背負い、走る真尋。直感的に「廃人」に

は至っておらず、SANチェッカーで回復可能だと判断する真尋は、再び彼に頼む。が、黄衣の少年は首を左右に振った。

『やるんなら全部終わってからの方がいいぜ。そう何度も脳みそに負担かけるものじゃない、常人だったら500点も1時間以内に喪失したら、出血して死ぬからな?』

「なんだその、拷問道具みたいな使い方……」

『実際、拷問道具なんだよ。もとが這い寄る混沌由来の技術らしいから、狂気に陥らないっていつても諸刃の剣ってことだろ。うまい話はそう転がってないって点じゃ、救いかもしれないけどな』

「まあ、気絶していた方がいいかもしれないっていうのは納得したんだが——っ」

轟音。

何の音かと言われても判然とはしないが、まるで大型のオルガンの鍵盤でも同時に叩いたような不協和音めいた轟音のそれが、真尋と仮面をつけた秀太の耳を打つ。

そして二人は西の空に、見た。

地平線が真っ赤に染まり、煙のように巨大な、まるで艦隊めいたなにがしかのシルエツトを。

Which is the next stage
the past or the future
? / 本線 ↓ D 分岐

「あははははは！ 真尋さん、あれ！ あれ！ 空に、空につ」
「言われなくてもわかってるっての、言われなくても——っ」

西の空に輝くものは決して明けの明星などではあるまい、もっと恐ろしいものの数々である——その赤い火に照らされる輪郭を直視した瞬間、真尋の脳は電撃的に映像をキャッチした。彼のイメージのなせる業か、はたまた何かしらの電波的なものを受信したか。しかしそれはひどく測りがたく今生、今の時代における世界の映像なのかさえ定かではない群の数々だった。それらは一つにして複数であり、単一にして隊列を為す。奇数にして偶数であり、形態としては火の玉を連想する群れである。それら個々それぞれが自らの意識と正義感を持ち、それ以上に指令を受けてなにがしかの行動開始の指令を待っている。本来ならば十四もあれば惑星一つを滅ぼすに足るだけのそれが、ゆうに百の軍団を為している。それらはひとえに概念として有形であり、しかし実質として無形をとって惑星上部に展開し待機していた。真尋たちが視認できるようになったのは、彼らが接近し、また自らの姿を隠す必要がなくなったことに由来する。だが一つだけ言えることは、真尋もよく知る科学特撮ヒーロー番組よろしく彼の戦士たちの起源は遙か遠く、人間の形態を為した生物からの派生ではないことだった。

その軍隊のうちの一つの火球のごとき光弾に真尋の意識がフォーカスする——それは一つの星の記憶。無数の宇宙船飛び交う荒廃した惑星にて、大砲のような腕から火炎とも光線ともつかない何かを放射し異形の怪物を屠る巨人。遠目で見れば人のシルエットをし

ているようにみえるが実態は違う、下半身は乗り物のようにも見えるひどく名状しがたい形質を誇るし、上半身に至っては——真尋のイメージが上向きになった瞬間、彼の脳裏が熱源と光に焼かれ、ようやくと我に返った。

雑音のような、口笛のような音が聞こえる。

ひざをつき倒れる真尋に、秀太は声をかける。

『おい大丈夫か?』

「大丈夫じゃないが……、あれか? 星の戦団って」

『何か見えたのか? おいおい、お前も感受性強いやつか?』

「お前もって何だ、お前もって。ほかにもいるのか」

『いたつつか。邪神にとりこまれて、今じゃバンバン周囲を燃え散らしてるよ——って、オイ! 待って』

秀太の言葉をすべて聞かず、立ち上がり真尋は走る。現状見えた彼らは、今か今かと攻撃の瞬間を待ち望んでいる存在であることは確定だろう。星の戦士と呼ばれる彼らはオリオン座方面の星系から飛来し、圧倒的な戦闘力で敵対者たる旧支配者やそれに連なる存在と戦う存在。文献によっては天使ともされることがあるらしいが、なにぶん文献が少ないため真尋もリアルクトウルフ神話知識で把握している情報は少ない。ただ一つ言えることとしては、彼らは現在のところ「惑星保護機構」なる組織に連なっている存在であることだろう。イースともまた別軸の存在で、名前からして宇宙警備隊なりそれに類する存在だろうが、まず間違いなく真尋たち地球人類にとって好意的な存在ではあるまい。そもそも地球そのものに一体どれくらいの旧支配者、暗黒神話群の神々やそれに連なる眷属が眠っているかという話であり、彼らの目的からすれば優先事項は人類よりもそれらの殲滅に向けられるだろう。

ゆえにもし現在地球が残っているのだとすれば、それはかなり紙一重のレベルであるはずだ。

そして真尋の想像力は、ほぼ間違いなくゲームセットの状況を導き出していた。本来の「取引」とされる日程よりも早く彼らが動き出しているこれは、果たして這い寄る混沌が真尋に干渉した結果発生した

齟齬か否か。

イスⅡカたちは、見覚えのある公園にて銃撃戦を繰り広げていた――それは彼女らが持っていたビデオカメラを連想させるその銃型装置、カメラ部分から射出される光線を用いてのものだ。イスⅡカの背後には女子高生が一人。どうもイスⅡルギの攻撃から庇っているようだった。

真尋は龍子をおの場におろすと、フォークを振りかぶり「投擲する」。投擲されたフォークは電撃を帯びながら、イスⅡカとイスⅡルギの間に落下。瞬間、天空から稲妻が降り落ち、空間が一瞬「ひび割れる」。数秒経過と共にフォークが消滅しひびもいずこかへと消え去ったが、水を差される形だった二人は真尋を注視した。なお真尋の背後にはクー子が生かんでおり、状況はかなり物騒な流れへと移行しつつある。

雑音のような、口笛のような音が聞こえる。

なお龍子はそんなさ中でも、爆笑しながら撮影を続けていた。

「――どうした、現地人……、現地人？ うむ、貴様はアレだな、この呪文をとっていたヤツだな、うむ」

「イスⅡルギ、貴方相変わらず人の顔と名前を覚えるの苦手なのですヨ。真尋サンなのデス」

「黙れイスⅡカ、そういう話ではない！ 何用だ、現地人」

「あれは、何だ」

西の空を指さす真尋に、イスⅡルギは嘲笑を浮かべる。

「なんであんなものが、今、この場にある。そもそもアンタらの作戦決行は明日、明後日だったはずだ。作戦を速めて襲撃を加速させたとして、何故こう緊急に状況が変化する。それこそ1日2日で終わるような準備じゃないだろっ」

じりじりと、イスⅡカに近づきながらもフォークを構えたままの真尋。位置関係としては前方に近づくことになるので、発狂している龍子を背に庇っていることには変わりはない。

真尋の疑問としては、そもそも真尋から呪文を取り出す期間がかなり空いていたことである。一週間前にこの時代に入ってきたとして

も、例の儀式などその他もろもろに関してすぐさま終了するというのなら、やはり真尋を早々に昏倒させる必要はない。ゆえに真尋の結論としては、準備の期間は（真尋から術を取り出す時間を含めて）それなりにかかるということだ。そして龍子が接触したことで真尋が目覚めた時点で逃げ出した以上、その準備期間は最低でも2日と見込める。

にもかかわらず、状況が急変した時点ではいえいきなりここまで事態が変化することはあり得ない。変化しているからには、何かしら真尋たちが見落としていた何事かが存在するはずだ。そもそも真尋は提示された前提すべてを疑ってかかっているので、その結論は当然の帰結である。

雑音のような、口笛のような音が聞こえる。

対するイスルギは、オーバーなジェスチャーで肩をすくめた。答えるつもりはないらしい。

そんな彼に変わり、イスルカが真尋に彼が見ていない時間の話を教える。

「さつき急いで追いかけたのですヨ。でも見失って、それで見つけた時には、この『おかしくなってる』女子高生に銃を向けていたのですヨ」

「おかしくなってる?」

「そうなのデス」

珠緒と精神交換しているイスルカの隣に並ぶと、彼は地面に転がっている女子高生に視線を振る。よく見れば小刻みに震えたまま微動だにせず、見開いた眼は瞬きさえできないのか充血している。

クー子が暇だったのかこちらによって抱き起すと、ブレザーから生徒証が落ちる。「田宮英子」と書かれたそれは、一瞬視界に入れるも、真尋は再び視線を前に向ける。

「少年、えー」

「? いや、それより、金縛り……、緊張状態、とか、発狂してるのか? これ。アンタが俺に見せようとしていたカートリッジだったか? でやるとこうなるのか?」

「ならないですよ！　これ、明らかにヤバいのを見た感じなのですヨ……、普通に邪神とか目撃したか、精神交換されたかですよ」

「……………」

「待て待て、精神交換すると発狂するのか!?　精神交換すると」

「え？　あ、はい。話してませんでしたのですヨ?」

「初耳だっ」

「そうなのですヨ。意識があるまま精神交換されると、移動中に『アイホート』とか『ヨグソトス』とか『ティンダロス』とかと遭遇しかねないので、結構な確率で発狂するのですヨ。まあ襲われたりせず逃げ切れはするのですが、それはそれとして精神はアレなのですヨ。我々も相手方も発狂する条件は同様で、だから基本、我々の精神交換は睡眠薬で意識を失った上で、さらに相手の就寝中を狙うのですヨ」

ちなみに交換し終わった後は衝撃で目が覚めるお得仕様デス、と銃を構えながらも何故か得意げなイスカ。この期に及んで新情報を当然のように放り込んでくるあたり、彼女も情報提供者としてはあまり信用ならない類だと真尋はその証言のレベルを下げ警戒度を上げた。緊張感がなさすぎるわけではなく、おそらくは文明の違いでわからないところもあるのだろうが、それにしたってそれにしたってである。

雑音のような、口笛のような音が聞こえる。

「なんでわざわざ精神交換したんだ？　コイツ」

「精神交換したとは別に言っていないが——、言っていないが、む?」

イスカが言葉を続けようとする間もなく、上空をにらむ真尋。いつの間にか空一面が白く、まるで昼間であるかのように。違いは空を覆う雲のようなガスのような何かがひしめいていることと、そこに映し出されるヒトガタのシルエツト。そして。

『

人間に理解できない言語が放たれていることである。

「……計画が早まったから、アナウンス、あるいは最終通告をしている。意味はわからないが、まだ挽回のチャンスはあるってことか?」

「——つ、貴様、何故それを」

「いや、これくらいは初歩的な推理だろ」

実際のところは初歩的な推理でない飛躍も含まれているが、そのあたりは真尋の根本からして外れる要素はないので、彼はその確信を疑うことはなかった——ある意味でそれは彼自身が狂気の世界に身をゆだねつつあることを暗に示しているが、そこまで真尋は頭が回っていない。

ただ事実として、この状況に打開策を見出すためには、真尋は正気の世界に背を向ける必要があることは確かであった。

イスルギは慌てて再び瓶を取り出そうとする。現状、どう見ても完全に詰であったが、それでも何故かイスルギは慌てていた。それに真尋が疑問を覚えるより先に、状況は変わる。

「くっ、かくなる上は——」

『——そこまでだ、残念だったなっ』

イスルギのバッグが「切り飛ばされ」、突風がさらい、とある男の手に。白銀の猿を模したような仮面をつけた、金髪のそれは長谷部秀太である（真尋に名乗っていないので彼は知らないが）。奪われたそれを前に、彼は口をぱくぱくさせていた。

雑音のような、口笛のような音が聞こえる。

秀太は顎をなでて、何やら納得したようになづく。そして次の瞬間、腕を振るとイスルギが精神交換している余市の足を「斬り飛ばした」。

「——！おいアンタっ」

『悪いな。〈心理学〉は俺のスキルだ。まあ後に(物理)がつくけど』

「何意味のわからないこと言ってるんだアンタ、意味のわからないことを！ そいつ、俺のクラスメイトだ——」

駆け出そうとする真尋を、クー子が腰に抱き着き抑える。

『——勘違いするなよ一般探索者。今、俺たちが相手取ってるのは「世界の命運」だ。新しいキャラシート作ることが出来ない以上、今やれるだけのことをやんだよ』

そのまま両腕も同様に斬り飛ばす。流血、動脈特有の鮮血がほとば

しり、それが真尋の脳裏にあるついこの間のような「夢のような」出来事のトラウマをフラッシュバックさせる。数週間前、真尋が遭遇したそれは卑近な恐怖であり、身近な恐怖であり、そして自らに大きく罪を背負わせる類の恐怖だった。身近な人間を手につけ、書けざるを得ず、また冤罪で捕まり精神も肉体も疲弊し、殺されかけ……。瞬間、手元からフォークを取り落とし、腰の抜ける真尋。ここまで無理に張りつめてきていた分がいきなりぶり返したらしい。真尋が自稱するまでもなく、いくら暗黒神話的经验値が積み重なっても、メンタルは高校生のそれ。さすがに一杯一杯なのだった。そしてS A N チェッカーがからからと回転を始める。

イスⅡカは両手で目を抑えて「スプラッタなのは苦手なですよ！」としやがみ視線をそらしていた。嗚呼、別段彼女も状況を改善できるのなら、多少なりとも犠牲は問題ないとするか……。

だが、それに真尋が何かしらアクションをするまでもなく、事態は一刻を争っていた。

クラゲのような、イソギンチャクのような——どこから湧いたのか、気が付けば所せましと、周囲一帯にそういった怪物が浮かんでいる。生物たちは何かしら意思疎通をしているのか——先ほどこからずつと聞こえていた、雑音のような、口笛のような音が聞こえる。

「E!？」

「なっ」

この生物群は、まずイスⅡカとイスⅡルギめがけて襲撃をしかけた。ホラー映画でピラニアが人間に群がって食らいつくすような、まさにその有様である。秀太も思わず飛びのくがそれでも腕に数匹間違ってか噛みつかれ、無理に振りほどくと同時に鮮血が舞う。

ぐちゃぐちゃと音を立てるさ中、真尋はとてもそれを直視できなかった。ただただうめくような声をあげるばかりで、しかし、不意に手元に落ちているフォークと、左手の甲に浮かぶ魔法陣に目が行く。

「少年。おすすめはしない。焼き払え切れないし、できたとしても少年の心は消し飛ぶ」

真尋は気づいた。上空を覆っていたガスのように見えたそれら自体が、半透明なそのクラゲめいた怪生物の群れであったことを。それが「飛行するポリプ」と呼ばれる現生物であり、かつてイースを滅亡に追い込んだ、旧時代の地上の覇権を担った生物群であることを。未だ滅亡さえしておらず、何処かで息をひそめるかの生物群を。

真尋は震え、そして周囲を見渡す。龍子の姿がない。

眼前には、いまだ怪物の群がる「骨と肉片」をまき散らす軀が二つ。

「夢……？」

「少年。現実」

「……………」

拳を強く握る真尋。現状で真尋ができることはない。その選択肢は多く奪われている。詰んでいる状況がさらに悪化しただけでも言える。

『これは——、まずいな』

秀太は突風を発生させ何処かへ飛び去り、クー子は真尋の手前に立ちドーム状に炎を展開。周囲に殺到するポリプから真尋を守っていた。

真尋はついに力尽きたというべきか、その場に五体を投げ出す。ここ連続で起こっている状況全てにおいて、真尋はその時点の真尋において最善を尽くしていたが、どれ一つとして真尋の独力で解決に至れることもなく、今回もまたその類であった。もし解決することができるとすれば——真尋は絶対にとらない選択肢を頭から除外する。龍子を「殺害し」、「胸に秘められた『自ら輝く疑似球多面体』を抉り出し」「ニャルラトホテプを召喚する」というそれを。クー子の「依り代になった」彼女の肉体のそれは既に使用済である以上はもう現状でそれしか手を思いつかず、しかし同時にあの這い寄る混沌がやすやすと真尋たちに手を貸すとも思えない。そしてそれ以上に、彼はもう決して「彼女を殺すことはできなかつた」。去り際、かの分岐世界において、二谷劉実から投げられた意趣返しとやらも、その呪いに拍車をか

ける。何をしても、これもやはりロジックエラー。そもそも時間が足りないし、時間がない。敵の計画が早まった以上はそうそう地上が長く持ちはすまいし、それ以前にクー子のバリアもどれだけ持つか定かではない。終始頼まれるまでもなく「はううう！」と健気にも自らを庇う少女に、真尋は言葉が浮かばなかった。

と、そのドームをかき分けながら、現れる何者かが一つ。

『——カカ、ついこの間ぶりであるか？』

「っ」

黒く染め上げられたもとは銀だったろう鎧姿。煤や火炎の影響が黒ずんでいるシルエツトに、頬あてにより顔は不明だが、男性のそれではあろう、しかし妙に声音は高く感じ女性のようでもある。真尋はこの相手を知っている、知らないはずはない、ついこの間といって良いくらいに「真尋を助けた存在のうちの一人」であった。

俗にTRPG的に言えば、闇將軍——織田信長あたりが習合されている、這い寄る混沌の化身だ。

それがこの場にいることも不明であったが、しかし驚くべきはさらにその先。どろりと音を立てて融解したかと思えば、鎧の中からは「龍子が現れた」。袖で額の汗（と化身が変身したろう黄ばんだ粘液）をぬぐう龍子。

「ふう、瓶の中に召喚術がって助かりましたね……。なんでピンポイントに信長だったのかわかりませんが。アレですかね、ひよつとして未来では這い寄る混沌とは別な邪神の扱いなんですかね？ 信長って」

発言は意味不明であったが、真尋はその追及をするのを本能的にやめた。

「——っ、アンタ、今までどこに」

「ちよつと探し物を。って、真尋さん、どうしたんです？ そんな顔して」

どこか楽しげにさえ見えるように、何かを信じるよう微笑む龍子。

その様は見ただけで否が応にでも劉実を想起させ、真尋は視線をそらした。

「そのまま、ずっとそこで倒れたまま。這いつくばったままでいいんですか？」

「……………」

「真尋さんは、姉から生きてほしいと。生きて幸せになってほしいと、そういうメッセージを受け取ったんじゃないんですか？」

「……………」

「諦めるのは、まだ早いんじゃないんですか？ 真尋さんは、あなたに出来るあらゆることを、本当にし尽くしたんですか？」

「だったら、俺に何が出来るっていうんだよっ」

その真尋の一言は、それこそ真尋の底から吐き出された言葉だった。

初恋の彼女さえ守れずに、そののしれない悪意に終始振り回され、そして結局現在も、彼自身の力で選び自らの運命をつかみ取っている訳ではない。

TRPGに例えるなら、真尋はキーパーソンであつても決して探索者と呼べるものではない——自らの独力で、運命に抗うことさえできていない。

「もう遅いだろ！ アンタ絶対わかって言ってるだろ、じゃあ俺に何ができるっていうんだよ！」

「……………」それでも、出来ることはありません」

龍子は目を閉じ、論し続ける。そしてしやがみこみ。真尋の視線の先に座り、彼と目を合わせた。

「——人がもし神に勝てるのだとすれば、それはあきらめず思索し、継承するからです。その想いは、願いは、物語は、いつかやがて何処かの誰かの手に渡り、力になります。」

ほかならぬ真尋さんのつながっている『それ』が、その証じゃありませんか？」

真尋の胸元に手を当て、龍子はそれこそ、勇気づけるように繰り返した。

「未来はまだ決着してません。真尋さんには、まだ出来ることがあるはずですよ——その先の手段は、私がなんとかします」

「……………」

真尋は何も言わず、上体を起こした。視線を龍子には合わせようとしない。それは彼女に対して何かしら後ろめたい感情が働いているからという訳ではなく——。

「……………だったら、少し付き合ってもらおうぞ」

どうせ世界が滅ぶまでの間だけだ、と。ばつが悪そうに言う真尋に、龍子は慈愛に満ちた笑みを浮かべた。

絶対に疑ってはいけない前提条件／D分岐⇒本線

「ん、少年。ニヤル子。そう長くは持たないから、手身近に……………」
はうう……………」

早々にクー子からのアラートがあつた真尋は、周囲を確認。遠方に転がっている女子高生を見て、腕のSANチエツカーを外し立ち上がった。移動するぞ、と真尋の声掛けに、龍子とクー子はじわじわと足を動かす。

「真尋さん、何をされるんですか？」

「情報収集だ、情報収集。あの、イスルギだったか？ がわざわざ精神交換か何かした相手なんなら、少しくらいは情報を持っていてもおかしくはないだろ。だから手始めに、あそこで転がってるヤツの意識を取りもどす」

と、少女付近に寄つた瞬間にドームの一部、彼女が入れる程度の穴が開く。妙に芸の細かいクー子である。彼女をドーム内側に入れると、真尋はSANチエツカーを彼女の腕に取り付ける。ダイスの回転を見ることなく、真尋は彼女のほほを軽くたたいた。と、そんな彼女の顔を覗き込み、龍子はつぶやく。

「おや？ えーこさんですね」

「……………さつきクー子も言つてたんだが、何なんだそれ」

「だから、えーこさんですよえーこさん。四人のうちの一人の」

「……………アンタ、ひよつとしてA子ってことか？ アルファベットのAに子供の子で。つまり、女子生徒A」

「はい」

「いや、そんなのわかるかつ」

A子、とはつまり、前哨戦あるいはカモフラージュのように出されていた謎解きに出てくる犯人と思われる彼女か。

「そのあたり、クー子たちが見張っていたみたいだな話だったと思つた

が、そのあたりどうだったんだ？」

「A子をシュータくんにつけてたけど、特におかしな動きはしてなかった、ように思う……、緊急度的に少年の方に来た、はうっ」

炎のドームにポリプが数体体当たり。ぐらりと一瞬クー子の体が揺らぎ、真尋たちに動いたドームの熱気が襲い掛かる。つられて体勢を崩しその場に転がる龍子と、それを抱きとめる真尋であった。

「気をつけろよアンタも」

「あ、ありがとうございます。……それで、なるほど。A子さんをSANNチエツカーで復活させるとして、それで何がわかるんです？」

「わからないかもしれないが、情報自体が足りてない以上はとにかく集める必要がある……。何の情報が集まるかはともかく、今使える材料は全部使う」

体を起こし、膝立ちの龍子。と、真尋の背後で肝心の彼女がうなり声を上げる。後ろを振り返り、軽く彼女のほほを叩いた真尋。胡乱な視線で真尋を見上げる彼女だったが、しかし周囲を覆う炎のバリアと、その向こうに見える名状しがたい数々を前に体を抱えて震えた。からから、とSANNチエツカーが回転しているので発狂はあるまいが、それでも眼前の光景の異常さに色々と「やられて」いるらしい。「な、なんで!? 何こ!? 病院どこ!」

「病院? いや、まあ少し落ち着け。話ができない」

「っていうかアンタら誰! 私! めっちゃ熱いんだけど!」

面食らったのも無理はない。

しばらくまともに会話ができそうにない有様であったがそうもいわず、真尋は龍子を手招きした。

「真尋さん、私にどうしろと……?」

「いや、少なくとも男一人相手にこの状況で話しかけられるよりは、多少マシかと思っただが」

「どちらにせよ混乱してますし、意味はあまりないような気がしますけどね。で、ええっと、三年生の江洲英子えすえいこさんであってます?」

どんな名前だとツツコミを入れたくなった真尋だが、伊達に龍子も龍子なんて妙な名前をしている訳でもない。

ただ少なくとも同性の相手が話かけてきたこと、同じ学校の制服を着ていることなどで、多少落ち着きを取り戻したらしい。見ず知らずの男を相手にするよりは幾分、日常に近い状況だということだろう、そのあたりは真尋の推測通りではあった。ただ「誰、アンタ」とか「ここどこ？」など、直近説明が難しい話が続く。

「そのあたりの話をする前に、まずアンタ、何してたんだ？ 交霊術とか一体どうして手をだしたんだ」

「え？ えっと、何？ ーっ！ れい？ っっていうかアンタたちって何い年？ 先輩に対して態度でかいわねコイツ」

「まあ真尋さんそういうところありますので……」

「そういう話はおいておく、というか時間が真面目にない。質問に答えろ。アンタが何しようとしたか知らないが、その結果がたぶんコレだ。正直に話してくれないと、こつちとしてもやってられない」

「結果って……、私、ただ、お見舞いに行こうとしただけなのに」
「お見舞い？ と真尋と龍子。首肯するA子は「入院しているお父さんの」と続ける。

「いつ死んじやうかわからないから、出来る限り毎日いつてるの。……だから、そんなのやってる時間ないっていうか、」

「どうしましょう、真尋さんこれ手づまり感が……」

龍子と彼女の言葉を聞きながら、真尋の脳裏にいくつかの言葉がよぎる。それは龍子から話されたイスカの言葉であったり、あるいは自身が語った仮説の中で繰り返した言葉であったりだ。そしてそれが電撃的につながりを見せた時点で、敵方も敵方でもかなりのリスクを冒していた、という事実に行き着いた。

眉間を抑え、頭を振る真尋。龍子は不思議そうに、A子は訝し気に彼を見つめる。

「――上塗りされても影みたいに残る、っつてことか」
「へ？」

「いや、何でもなし。忘れろ。……謎というか、どういう手段で時間を省略したかがわかった。あと、アンタが何を準備していたのかもな」

真尋からの言葉に、龍子は驚いたように目を見開く。一方のA子は更に表情に猜疑心を深めたが、真尋は彼女に視線を向け問いただした。

「こつちに文句をつける前に確認だが、アンタ、今日は何日だ？」

「はあ？ いや、普通に10日じゃないの？ 5月10日」

ゴールデンウィークあけてちよつと、と。その彼女の語った日付で、龍子も少しだけ察しがついた。

「およそ一週間前——というよりも、真尋さんが昏倒させられた日ですね」

「より正確には、イスルカたちがこの時代に介入してきた日付だ。アンタもわかったか？」

「わかったような、わからないような……」

「頼りないな。まあいい。結論から先に言うぞ——江洲英子。アンタのその父親は、おそらく見舞いに行ってから数日もかからず、死んだ」

真尋の言葉に、A子は「は？」と疑問符。

「父親が死んだあと、アンタは学内のSNSで何事か、交霊術みたいな企画があることを知る。そしてそこで、父親と再会できるかもとわずかな希望というか、まあそういう不確定な感情を抱いて3人に協力することにした——そして、それが今さつきここにいた『アンタだ』」

「ちよつと、言ってる意味が……？」

「スマホ確認してみる。今日は15日——アンタが見舞いに向かった日から、一週間くらい経ってる」

言われるがまま自分の携帯端末を取り出して画面を見るA子。表示されている日数を見て、引きつった笑み。「何これ、どつきり？」という発言は平時ならばまともな思考だが、この異常な光景を前にしては、それこそ許されない。

「厳密に何があったかまでは定かじやないが、この時間のアンタはおそらく何かしら術式を覚えさせられたか、組み込まれたか、そこは知らないが、ともかく何らかの手段で術式を精神に保持させたまま、過

去に飛ばされた。たぶん謳い文句としては『死んだ父親に会える』とかそんなところか。後はこの発狂した本人の精神を復活させ、過去に戻せば万々歳つてところか」

「え？ え？ え？」

「つまり、真尋さん——」

「——論理パズルめいたアレの正解は、『全員共犯だった』ってことだ。術式を準備したのは結果的に一人だったかもしれないが、その他の事柄はすべて残りの3人がやったってことだろ。最悪、全員既にイースの連中と精神交換されていたか」

真尋のそれは、論理パズルの前提を覆した発想であつた。そして彼のアイデアは、今回の本来あつた構図を描き出す。

まず、この時代に来ていたイースは最低でも5人。イスルギを含め、例のB、C、Dと精神交換したものと、そして「真尋と交換されただろう誰か」。現地入りしたイースは、まず3人が父親を亡くしたA子に接触し、洗脳めいたことをしながら自分たちの協力者に仕立て上げる。ここまででおおよそ5日程度と見込める。イスルギは真尋と残りの一人とを精神交換し、術式を準備する。そして準備した術式をA子の精神に保持させ、精神交換。過去に送られたA子から情報を引き出した後、再びA子同士の精神を交換し、A子を再び洗脳する歴史を形成する。

これにより円環構造的なものを保ちながら、ポリプを大量に用意するという難所を潜り抜けられる。真尋たちはともかくとして、敵の準備期間はそれこそ一週間分は余計に存在したと言うことだ。仮にイスルギがその介入による時代の消滅を観測して介入してきても、大枠の流れをカモフラージュさえ出来ればポリプの用意に感づかれることはあるまい。そもそもイースたちの観測できる情報にも制限があるからこそその作戦であろう。

手違があつたとすれば、真尋の精神交換、そこが起点になる。本来あつた流れにおいて、真尋と交換された精神はイースの誰かしら

だったはずだが——そこに這い寄る混沌の手が入った。結果、真尋は別世界の自分自身と精神交換され、自力とは言わないまでも早々にこちらに帰ってきた。そして龍子に目撃され、敵対イースたちの目論見は看破されたわけではなかったが、しかしタイミングとしてはまぶかつた訳だ。なにしろ肝心の、A子の精神交換よりも前の段階で気づかれてしまったのだから。

「でも、それっておかしくありませんか？ 真尋さん、わざわざA子さんの精神を交換する必要は——」

「だから、そこだ。アンタ仲介して聞いた話だから記憶が怪しいが、精神交換された状態からさらに精神交換とかはできないんじゃないやなかつたか？」

——時間転移は「一往復で固定される」ので、ここからさらに過去に遡ったりは出来ないですヨ。

龍子の脳裏に、イスルカの言葉がよぎる。A子は混乱の極みと言った様子で、わけわかんないと言いながら頭を両手で抑えていた。錯乱のせいか、それとも自分で外したのか、SANチエッカーは既に地面に落ちている。それを拾いながら、真尋の話に龍子は耳を傾ける。

「向こうは初めから魔術の準備とかなかつたんだろ。だから現地調達という話になるが……、最初から介入できた時間は、あの一週間前の時点だったってことか？ そうとでも考えないと辻褄は合わないが、まあそこは重要じゃない」

「だったら、なんで今こんな状況に——」

「俺たちにバレそうになったから、A子本人にメッセージをわたすなり何なりして、計画を速めたってことだろ。もはや取引がどうのこうのって話じゃないと。あー、なんとなくだが、こうやって現地人を色々な時代に移動させるのは、向こうとしてもタブーのはずだ。そうすると——」

そもそも何故この時代を滅ぼさなければならぬのか、という問題が別途で出てくるが、その検討は後回しである。そこまでのことをして何故、という疑問をおき、真尋は龍子の顔を見る。

「つまり、そうなる——現状を回避するためには、誰かが、過去

に飛ぶ必要があると。アンタの用意した手段っていうのは、つまりイスIIカたちが使っていたアレだな」

「ええ」

す、と。腰の裏側から、ビデオカメラめいた例の銃を取り出す龍子。おそらくそれはイスIIルギがA子を撃つたときに使用されたもの、つまり彼女の精神交換をしたはずの道具であるはずだ。そして真尋の想像力は、その破損した外皮から除くラベルを見て直感した。すなわち座標情報の記述がないそのラベルは、時刻のみを指定して過去に精神を送るものであると。

つまり——使用すれば、真尋たちがイスIIカと遭遇した、あの時間軸の公園付近まで精神を飛ばすことになる。座標の誤差は不明だが、A子の精神を飛ばした以上、彼女もまた「あの日この公園にいた」ということに他ならない。

ガチャガチャと何やらそれをいじっている龍子に、真尋は確認した。

「俺が使ってたSANチェッカー、まだ壊れてないな？」

「ええ」

「つまり——過去に飛べるのは一人だけと」

「ええ」

「そうかい——」

次の瞬間、真尋は手元にもっていたフォークを龍子の足元めがけて投擲した。眼前に落ちる稲光、轟音。驚き慌てた龍子はその場で転び、手元から銃を取り落とす。それを拾い、彼は龍子を押し倒す形で馬乗りになり、ポケットに入っていたSANチェッカーを奪った。

対する龍子は乗りかかる真尋の体重も忘れてか、顔を赤らめやや慌てる。

「え？ あの、真尋さん、こういうのはもつと色っぽい感じでもらわないと、私も心の準備が——」

「何を色ほけてるんだ、何を」

言いながら真尋はそのSANチェッカーを「龍子の腕に付ける」。驚く彼女を前に、真尋は銃を構えた。

「あの、真尋さん——」

「——俺は、アンタが戻るべきだと思った。ただそれだけ」
「っ、ど、どうして」

「だって歴史が変わったら、今の俺たちと変わった後の俺たちは別人じゃないのか？——今現在の自分を引き継いだその相手以外は」

いわゆる本線、分岐の考え方だ。分岐から本線に移動し本線で新たな活躍をした場合、その本線と分岐はまた別な歴史の扱いになるはずだ。であるなら、分岐での経験、自己同一性を引き継げる相手は本線に向かった相手以外有り得まい。

「だったら、なおのこと真尋さんが——」

「それでも——、俺は、アンタに行つてほしい」

それはいかなる感情の発露か。現時点で龍子にその情報はない。だが真尋の顔が偉く悲観的である以上、少なからず彼女の姉が関わっているだろうことを龍子は察した。自嘲げな笑みを浮かべ、真尋は。

「悪いな——アンタには迷惑かけっぱなしだ」

龍子が言葉が続けるよりも先に、引き金を引いた。

「——そんなんだから、真尋さんは姉に出し抜かれたんですよ」
「え？」

引き金を真尋は引いた。だが、銃は起動しなかった。ふと考えてみれば、見た目の比重からして嫌に軽い。慌てて破損したカバーを開け内部を確認すると、そこには先ほど真尋が見たフィルムめいた何かは存在せず——。

がちやがちやと、前方から音。銃を下げて龍子を見れば、彼女は頭上で「もう一つの銃」——おそらくはイスⅡカのもだろうそれに、さきほどのフィルムを組み入れて真尋に向け。

「次はもつと、色っぽい展開でお願いしますね♪」

にこりと微笑み、引き金を引き——かしやり、という音と、光と、鈍痛を感じ、真尋は意識を失った。

※ ※ ※

突如発狂に陥った、としか考えられない状況を前に、龍子は彼を背負い走り出した。基本的に、彼女は普通の女子高生である。生憎と自分よりがっしりしてそうな男子高校生一人をお姫様抱つことか抱えられるほど体力はない。幸か不幸か公園手前で倒れたこともあり、いったんそちらに運び込む。幸いにもベンチ2つのうち、一つはちょうど女子生徒が立ち上がり空いたところだ。

と、ベンチに真尋を寝かせた直後、ニヤル子と真尋の前に珠緒が現れる。カメラと拳銃を足して二で割ったような道具を片手に、ニヤル子たちに向けて構えたまま。

「——そこまで俺は悪趣味じゃないぞ、アンタ相手につ」

「!? ま、真尋さん？」

珠緒が話を始めるよりも先に、真尋は意識を取り戻した。S A N チェツカーもなしに発狂することもなく——そこはかたなく蠱惑的な笑みが脳裏をよぎるがそれは放置して——真尋は周囲の状況を一瞥し確認した。龍子がベンチに自分を運び寝かせ、珠緒、おそらくイスⅡカが接触してきた。

聞いた限りの約一週間前の状況を前に、真尋はふらつく足のまま立ち上がる。

「——いあつ」

「えええええ!?!」「ヨヨ!?!」

そして、見つけた。真尋同様ふらつきながら歩く第三者。見覚えのうっすらある真尋たちと同様の制服姿。A子、この時間に送り付けられた彼女であるはずだ。

真尋は自身の思惑に反して己を送り付けた龍子に対する悪態を考えるよりも先に、制服にしまっていたフォークを投擲。稲光、衝撃波

が彼女の後方を襲い、転ばせる。

龍子の肩を借りながら、真尋は指をさし、彼女のもとへ。何かを察してか、それとも真尋が意味もなく行動する訳ないという信頼からか、龍子は何も言わずに首肯して従う。一方のイスカは意味も解らずしりもちをついていた。

真尋は立ち上がろうとするA子の前にしやがみ、その額を見る。と、真尋は直感に促されるまま、転がったフォークを手に「いあつ」と掛け声とともに、彼女の額を軽く小突いた。

——瞬間、その全身から「玉虫色に輝く文字のような何か」があふれ出し、霧散する。

「あつ……、あつ……、お、お父さん………っ」

「悪いが、これでチエックメイトだ。

アンタには悪いが、会うことは出来るかもしれないけど——」

死んだやつは生き返らない。

それだけ言って、真尋はその場で大の字に寝ころび。

いまだ状況を把握していないイスカは、目を白黒させていた。

※

「とりあえず地球の危機は去ったってことで、良いんだろうか……」

「ヒロ君どうしたの？ お味噌汁、冷めちゃうわよ」

「何でもない。……あと、ヒロ君はやめろってのっ」

決着の日から一週間後、つまり本来なら世界が既に滅んでいてもおかしくないその日。八坂家の食卓にて、真尋は帰ってきた母親を出迎え夕食を取っていた。テレビでは相も変わらず飽きもせず炭化した例のクジラについて特集が組まれ（ついにはオカルト番組の企画が組まれていたのか、それがちょうどゴールデンタイムに流れている）、辟

易すること請け合いである。一週間前に真尋が降らした雷などごくごく少数レベル、ニュースに取り上げられる規模の話ではないのか、はたまた誰かが手を回したのか。少なくともそのことでここ一週間、真尋が命を狙われるようなことはなかった。

真尋がA子を確保してから。事態の推移はかなり簡単に決着がついた。真尋より情報共有されて早々、イスⅡカはこの時間に転移してきた他の反乱分子のエージェントを、例の協力者（秀太）と協力して拘束し、取引もつつがなく終了したと連絡が昨晩はいる。終わってみればこともなく、まるで一度世界滅亡の危機に瀕したという事実が丸ごとなかったことにされているような、そんな不条理のような感情を真尋は感じた。結局、彼個人は多くの情報を知りえず、何がどうして世界崩壊に結び付くという流れだったのかさえ知らず、外皮をなぞるような対決しかしていないのだ、それも仕方ないところではある。

まあ、そもそも特撮番組しかり時間旅行の取り扱い複雑怪奇であるからして、真尋の立場でそれをすべて理解しようとするればそれこそリアルS A N値が消し飛ぶのだが。

「まあどつちがマシかって話なんだろうけどな……………。母さん、これ味噌汁の味変だけど、何入れた？」

「あ……………、わかつちやった？」

「そういうのいいから」

「その……………、田楽みそでも、味は一緒かなーと思って」

「出汗の存在をせめて忘れるなよ……………」

母親と平和な会話を交わしながらも、真尋の思考は別方向に飛んでいる。結局、問題点さえ取り除きさえすれば、事態は特につつがなく終了の運びとなつていらいしい。実際、この現在、仮に「三周目」と言うべきか。今のところこの三周目が崩れている気配はない。去り際のイスⅡカも「今この現在が本線なのでヨ」と断言していた。真尋はその際の会話を思い出す。

『とりあえず国際電話経由で、米国の支部とも連絡がついたので、来週中ごろには再び珠緒サン達は戻ってこれるのですヨ』

『例によって向こうにいた時の記憶は消去してか？』

『おおむねそんな感じですよ。まあ、偽造の記憶も組み込むから、そこまで問題はないはずなのですヨ』

『それはわかった。良かったんだが、それはそうとして……、疑問があるんだが』

『ヨ?』

『その、別分岐? 俺が直前までいたときの分岐なんだが、その分岐世界にもアンタらは精神を飛ばしてたんだよな。だったら、俺がそれを上書きしたとき、アンタらの精神はどういう扱いになるんだ? 未来に戻ったらおかしなことにならないか?』

『んー……、これくらいならS A N値はあまり減らないと思うので、情報公開なのですヨ』

ちなみにこの会話の場所は駅前の喫茶店であり、龍子は真尋の隣で謎のチョコレートらしき名状しがきソースがかかったパフェをモリモリ食べている。ともあれ声を潜め、イスⅡカは話を続けた。

『まあこうして色々分岐はするのですが、最終的には時間っていうのは収束するものなのですヨ』

『収束?』

『例えばこう、織田信長が本能寺で死んだか生き残ったか、とかそのあたりの問題を出すと、別にノブナガがホムンクルスとして現代に復活するとかしようとしまいと、過去において信長が死んだという事実はかわらないのですヨ。それがいくつかの説が並列で存在していても、最終結果はかわりないと』

『それはわかったが、アンタ一体何を見てるんだ何を……』

劇場大戦でコアな映画でも見てそうな発言はともかくとして。

『今回において、本線をこれ以上動かすことはできないということなのですヨ。それをするためには、新たに反乱分子が別途活動をする必要があるけど、それは、流石に我々も警備を厳重にするし「失敗したと言う事実」が残ることによって、そちらの側に収束しやすくなるのですヨ。そして、収束した結果に対して、存在はおのずと一意の存在となる、よって今の私が、たった一人のイスⅡカという訳なのですヨっ』

『だから、アンタらはどうしてこう、過程を省くんだ過程を……。なん
でそっちに収束しやすいんだ』

『介入者側からすると、成功の事実よりも失敗の事実の方が重かった
りするとうか……。んー、このあたりは真尋サンの正気が心配なの
で、今回は見送るのですヨ。』

今回とは。次回でもあるようなその発言にはほを引きつらせて、そ
して真尋の想像力は同時に一つの可能性に思い至る。

『じゃあ、つまり……。アンタらはどうあっても歴史の影響を受
けない場所から、この時代に介入していると。つまりそれは――
もしかして、もはや「邪神」とかその存在さえ、消え失せたような、そ
んなはるか先の時代からってことなのか?』

『――そのあたりは、黙秘するのですヨ』

良い線いってると思うのですヨ、と続けはしたが。彼女もそれ以上
の情報ははぐらかして伝えることもなかった。

ため息をつき、龍子の方を見る真尋。楽し気に、そして少しだけ不
思議そうに、疑問符を浮かべて真尋を見やるその顔。口元や目元を見
た瞬間、猛烈な恥ずかしさが脳裏をよぎり直視できず、真尋は視線を
逸らした。

「何? ヒロくん。恋煩い?」

「……………あ、り、え、な、い、絶対ありえないっ」

「あら、強く否定するところが色々想像力を掻き立てられるわねえ
……。さあ、泣かせた女の数を数えろっ」

「なんで母さんまでネタを被せてくるんだよ」

ため息をついて、真尋は両手を頭の後ろにやり、背もたれに寄り掛
かる。テレビの音を聞きながら目を閉じ、思い出を馳せる。

真尋が龍子を直視できなくなっているのは、なにも一度キスマが
のことをしてしまったからというだけではない。もちろんそれも理
由に全く入らない訳ではないが、それが全てであろうはずもない。

真尋を、便宜上「2周目」とでも呼ぶべき前の分岐に戻した時点の、
劉実の発言。意趣返しと言っていた彼女のその言葉が、彼の頭の中を
大きく混乱させる。

彼女たちが別個の人格を有した、ネフレンⅡカのようなそれであるならば、真尋は確実に己の手をもって、劉実という存在を殺してしまっただけという事実。

そして龍子と劉実が別人であるならば、何故彼女はいまだ真尋のそばにいるのか。

それに対する彼女の返答は、ただ一つ――。

『――私、本当は妹なんていないんですよ？』

嗚呼、だとするならば。

彼女の妹を名乗る二谷龍子とは、果たして一体何なのであろうか――

――。

いまだ回答の出ない問題を。その前提条件さえ覆しかねない言葉に、真尋の思考は泥沼に陥っていた。

【真・這いよれ！ニャル子さん 嘲章】

【ザ・シャドウアウト・オブ・メロディアス】

【END】

次章予告3 (嘘)

(ノイズ交じりの視界)

(電気的な砂嵐が晴れると、無数の壊れた機械が散らばっている場所)

(歯車や巨大な針が地面に刺さっている)

(かさかさとそのうちのどこかしらがうごめき、くすくすという声が聞こえる)

(ぼつり、とその中でランプが灯るマシンが一つ)

(ノイズまじりの音を鳴らすそれは、一つのカセットテープレコーダー)

(外装はほぼはげ、基盤も一部露出している)

(上から降ってきただろう大型の時計が刺さっており、半壊している)

(カラカラとから回る音が鳴っている)

(内部にはテープが入っていないらしい)

(一瞬、暗転し視界が回復する)

(二三度、空回りする音を鳴らしたあと、レコーダーはがたがたと震えて静かになる)

(内部に真っ黒なテープが、いつの間にか挿入されている)

(テープが巻かれる音がなり、時計の針が、かちり、と進む)

(レコーダーの再生音)

男性A (CVイメージ：井上和彦)

「――取引だ。君は私の申し出を断ることは出来ないはずだ。何より、君のそのプランニングの立て方には優雅さが足りないし、不確定を許容する度量がない。それは本来は正解であるのだろうが、君の目的としてみたらそぐわないものではないだろうか」

男性B (CVイメージ：山寺宏一)

「ならば、お前ならどうするというのだ」

男性A (CVイメージ：井上和彦)

「そうだね。まず手始めに『彼女』の申し出を——」

(再び一瞬ノイズが走り音声の具合が変わる)

ニヤル子 (CVイメージ：浅野真澄)

「ニヤル子とクー子の、予言のごとき未来リポートのようなものッ！」

クー子 (CVイメージ：堀江由衣)

『どんどんぱふぱふ、ぬめぬめぬるぽ』

ニヤル子

「ガッ！」

ともかくにも謎が謎呼ぶ爆弾発言、そして気になる私のパフェ！
果たしてテーブルの上に積みあがったあの巨大なソフトクリーム
のようなタワーを、私は食べることが出来たか否か！

ヒントは真尋さんの左手ということで、クイズの答えはこの後すぐ

！

そんな訳で、今回の状況はどうでしょうか！ 現場のクー子レポ―

ター！」

クー子

『

呼ばれるは貴方の名前

ゆらめく足元に集う雲は 力と共に真実を覆い隠す

失ったものと得たもの 天秤に乗る羽と心

追いつがる精神は しかし相対する両手と向き合う

拭い去れぬ刃は 屍のような絶望の沼から

そして 少年は仮面を砕く。

』

ニヤル子

「さてさてつまりは、ザ・ABC！ アクセル、バードにサイクロン！
ヒートだったリルナだったりオーシャンだったり属性過多な今日
この頃。」

次回の見どころは、消沈気味な真尋さんのため東奔西走するニヤル
子の宇宙CCC！ うなれ私のエクスカリバー！

なくんちやつてと、そこまで人外ではない私でした」

クー子

『次回、真・這いよれ！ニヤル子さん嘲笑。「トレイル・オブ・レガシー」』

ニヤル子

「次回もまた深淵に？」

ニヤル子&クー子

『『ドロップドロップ♪』』

ニヤル子

「へ？ 結局私は一体何なんだって？ それはホラ、企業秘密ですよ」

クー子

「ニヤル子、パフエごちそうさま」

ニヤル子

「という訳で、正解は二人で食べて事なきを得た、でした！」

???(CVイメージ：加藤ひとみ)

「どうでもいいけど、二人ともそんな食べて太らないの？」

ニヤル子

「あー、私はともかくクー子は大体全部が燃料に——」

(ぶつり、と音声記録はここで途切れている)

痕跡の前の番外編

番外編：八坂真尋、私用によりハイドアンドシークに挑戦する

俗に衝動買いというものは思い立った即その場で購入の意欲をこらえきれず金銭を使うものであり、それをさして八坂真尋は「浅はか」と断じる思考回路の持ち主である。それ相応、年の頃以上に所帯じみている真尋であるからして、そういった散財に関しては最低でも一日か二日は時間を置き、頭を冷静にしてから手に付けるべきだと考えており、常日頃からそれを実行していた。

しかして今日の真尋はどうかといえば、その言に変わらず相変わらずの様子である。近所の買い出しはするべくもなく、かといって特に何をすることもなく家に居続けるのもどうにも収まりが悪い。であるならばと特に誰にも見つかっていないだろう前提ではあるが駅前的大型スーパーまで足を延ばした。

思えばそれが、本日の失敗であったかもしれない。

「――、はっ」

気が付いたら、真尋は電気量販店の中で、とある物品を購入していた。それは俗に様々な異形、大概が巨体を伴う人知の及ばぬ生命であるところの巨大な怪獣に自らの生命をともしうる力を持つそれであり、また同時にそういった怪獣に対抗し得るべくおとめ座方面から飛来した未知なる光の粒子を物体に帰る技術を持ちうる超人の類であるそれに自らを転換しうる小道具の類。手のひらサイズであり、しかしてなんか初夏の稼働と発光をもとに音を鳴らし光を鳴らし、様々なシチュエーションを再現しうるそれは――。

端的に言って、変身アイテムの玩具である。

ギ○ガスパークとかエク○デバイザーとか書いてあっても不思議

じやない。

そもそも駅前スーパーを目指したはずが、地上4階建ての件の建物の中に来てるのも不可思議であるし、そもそも購入するまでの記憶が真尋にはなかった。

「なんでだ、なんで俺はこれを……っ」

大宇宙の法則でも働いたのか、あるいは道中に何かしら「見てはいけない」類のものを目撃して正気が一瞬消し飛んだか。……決して筆者が超七の父を持つ超人零の目に取り付ける類のアレの十周年記念再販とかを購入したことが原因ではないはずである。ないはずであるが、しかし機能面でいくらかの簡略化を受けてなおそれは、目に入った真尋に対して暴力的な求心力を發揮していた——— 大概において真尋が購入を倦厭する理由としては、商品傾向としてコレクションアイテム指向であるからだ。「子供っぽい」より「一年も購入し続けるのはきりががない」というそれであるため、そういったコレクション要素が廃された物品であるならば、思わず食指が伸びてしまったのだろう。

ちなみに彼の脳裏に「こんな年になってまで」という発想がない時点で、既に重症である。龍子から言われるまでもなくアレな手遅れであった。

しかし実際問題、真尋の脳裏を占める問題はまた別である。この類のアイテムの箱、大概は直方体の形状としてもそここの大きさを誇り、学校指定のバッグの中に放り込むことは難しい。当然のようにお店の人になされるがまま紙袋詰めになったのだが、その紙袋も大した大きさとはいえず上部からのぞき込むと何であるかパッケージで判別できるのである。それに冷や汗をかく真尋であるが、つまり彼は「見られたくない」のだ。

少なからず、自分がこの玩具を購入したというのを見られることを回避したい。

特に、件の二谷龍子あたりには。

別にそれを知ったからと言って広めるようなイイ性格をした相手という訳ではないが(冗談交じりには色々いじられるだろうが)、それ

よりも向けられるだろう生温かな視線や、その後には「プレゼントです」とか言つて同様の系統の玩具を持ってこられる映像が真尋の脳裏に描かれる。想像力を働かせるまでもなく自身の趣味特性を否定できなくなってしまうので、それはそれで真尋としても回避したい問題なのであった。

とりあえず三階のトイレ手前の休憩スペースへと入り、椅子の上に荷物を置く真尋。軽く眉間を抑えながらどう隠蔽したものかと思考を巡らせる。少なからず学校のバッグの中身と入れ替える、という作戦はとれない。目撃されればコトがコトだし、サイズの関係で紙袋には微妙に入りきらないのだ。決して真尋がテトリスの類、物品収納に関する技能が劣っているということではなく、そもそも無理な話である。

「とりあえず是正処置か……？」

とはいえ伊達に真尋も所帯じみていない。すぐさま学校のバッグに常備しているビニール袋を取り出し、紙袋の中の箱にかぶせる。これである程度は視認性が悪くなるだろうと考えた真尋だった。

もつともそも思惑が、彼の予定通りにいくかどうかは別であるが。

「……………、文字は見えないけど、写真は見えるな」

いわゆる玩具パッケージであるからして、側面であれ上面であれそれなりの大きさに写真が——キャラクター（赤と銀の巨人的なサムシング）の写真と玩具そのものの写真が見えるのを回避することは困難。袋自体が透けていなければまた別な話ではあるが、生憎と本日の手持ちの袋にそれはなかった。かといってわざわざ袋を購入するために別な物品を買う訳にもいかず（それこそ無駄遣いである）、仕方なしに袋をさらにもう一つかぶせることで決着した。なお、文字は流石に隠れたが、それでも写真はうつすらと見え、ぬぐいがたいカラフルな色も見えなくなるわけではないので、本当に雀の涙程度のそれである。

ともあれ、こうして真尋の帰宅ミッションがスタートしたわけだが。

「あれ、八坂君？ 奇遇だね」

「——っ」

店を出て早々に余市健彦と遭遇する。眼鏡をくいつと上げるしぐさはややわざとらしいものの、特に意識してのものではないだろう。以前にあつた神話的陰謀策謀からは明らかに縁遠く、特に何事もないように人の好きそうな顔をしていた。もつともあれは「事実ごと無かったこと」になつたので、現在の彼が無関係と言えば無関係であるが。

「何か買物？」

「ちよ、ちよつとな」

いきなりどもる真尋である。相手には不審げな顔をされる。明らかに内心の動揺が現れていた。

「どうしたんだい？　なんか大変そうな声だったけど……」

「まあ、なんでもない。物色だ。そつちこそどうして？」

「僕はコレ……、消毒用アルコール」

「なんでまた……」

時世に触発された訳ではあるまい、と真尋の視点からすれば超^ス上位^タ的な直感が一瞬働くが、そんなものを認識すれば第四の壁の通過に他ならないという直感でも働いたのか頭を振る。1、2の、ポカン、という勢いでその思考を振り払った。

健彦は健彦で苦笑い。

「いやほら、八坂君が何度も入院してるのを見ると、明日は我が身か
なつて思つて。事故とかは早々ないとは思うけど、健康は大事だから
ね。……熱中症対策にスポーツドリンクでも買おうかな」

「まだ7月にもなつてないし気が早くないか？」

「……それに何度も言つたつて、春ちよつとくらいだろ入院した
の」

「ん？　……あれ？　そうだね。おかしいなあ」

若干発言が不安定な健彦であるが、さもありませんという顔の真尋である。

おそらくは直近で巻き込まれた「神話的事件」の後遺症か何かだろう
うか。何かしらの記憶操作処理を施されているはずだが、不完全なの

かそれとももつと別な問題か。何かしらの危険な知識に接触しかねないと想像が働き、会話を切り上げて売り場を出た。

「さて……。余市は回避できたが、どうしたものか——っ」

言った次の瞬間、早々に向かいの百貨店に見知った後ろ姿が見えた。揺れる縛った後ろ髪は暮井珠緒のそれである。隣には他校の制服を着た女子と楽し気に会話している。と、ふとその視線が真尋の側に向きそうになり、慌てて横断歩道を渡りバスターミナルの方へ。ガーデンホールの側から裏手に回って逃げればまだマシだろうという判断だが、なんとなくこれで回避できた気がしない真尋。なんとなく周囲を見回しながら歩く男子高校生は若干不審であるが、そんな彼に注目する第三者は幸いにしていなかった。

大通りを通ればリスクが高いだろうという判断のもと、二本東にずれて歩く真尋。道中大型書店だったり、それこそ春先に劉実を伴って行った専門店の建物の裏を抜ける。

——と、ここで何かしら真尋は違和感を覚える。

このあたりの通りは何度か出歩いているはずだが、道中の風景に何か微妙な違和感があるのだ。例えばそう、テレビゲームなどで実在の場所をモデルにした地形の場所に、実在しない説が存在するような。例えばそう、ゲームオリジナルの施設が存在しているかのような——。

「…………この店、こんな場所にもあるのか？」

その違和感——真尋は正確に目星をつけた。

その店は屋号に「銀屋」とついており、何かしら古いギャラリーを兼ねたようなアンティークショップ、というよりもアングラ感の漂う店。一見して周囲の建物よりも外装が古く、まるでそこだけ時代を切り取ったような違和感。周囲に合わせて老朽化したようなそれではなく、まるで遺物のような違和感の店。

以前、真尋が快気祝いのような名状しがたいこの世ならざる奇怪なデー…………のようなものをした帰りに寄った場所である。もつとも真

尋たちが寄った店そのものは別な場所であり、支店か何かなの
かど推測する真尋。

もつとも興味自体はすぐに解消されたのか、視線を外して足を進め
ようとし――。

「――あれ、真尋さんが今いたような……」

「――っ」

瞬間、どこからともなく聞こえた自称メインヒロインな声に、彼の
想像力と直感が仕事をする。それはもう猛烈に働きます。周囲の人
の人数、音の反響具合、時刻、風向き、声の方向などなどエトセトラ
エトセトラ。いまだかつて神話生物の襲撃に遭った時でもこれほど
過度過剰過敏に感知し直感し類推し計算したこともないだろうとい
うほどである。あまりに焦りすぎだろうという反応であるが、それほ
どまでに龍子に購入した物品を知られたくないのだろうか――。
否、そこには別な理由も少なからず絡んではいるだろうが、果たし
て。

真尋は咄嗟に、しろがねや銀屋の扉を開け中に直行。少なからず龍子の声か
らして、真尋の姿をしかと確認したわけではなく、また真尋の姿を見
失っていたはず。姿が見え無くなればこちらに寄ってきてても、銀屋の
中に隠れているとは判断されまい。無駄遣いを嫌う真尋であるから
して、そのあたりを龍子は把握している。本日の行動があまりに普段
の真尋にあるまじきイレギュラーであるというだけであり、それ以外
の点についてはおおよその推測を当てはめるだろう。

故に扉を閉めてしやがみ込み、息をひそめる真尋。ゼーはーと息継
ぎをし目を見開いたまま。明らかに気疲れしすぎだし焦りすぎであ
る。とはいえ多少の余裕はあるのか、店内をちらりと見まわす真尋。
端的に言って人の気配がない。一等地とは言わないが駅周辺、商業施
設がそれなりに並ぶ場所での閑散さは大丈夫なのだろうかど、意味
もなく心配になる真尋であった。

1、2分程度だろうか。外から龍子の声が聞こえるような、聞こえ

ないような。「おかしいですねえ」とか「真尋さんが好きそうな玩具が再販されてみたいだから、一緒に見物に行こうと誘おうと思っていたのに」とか、あからさまにピンポイントなことを言っている。本当は最初からまるっとみられていたのではと恐怖にかられるも、龍子の性格なら彼女の言ったとおりに同行する方を選ぶかと判断した。

声が聞こえなくなってから立ち上がり、周囲を見渡す。薄ら明かり、オレンジ色に照らされる店内は以前よつた銀屋に比べて装飾品やが多いような気がする。例の蜘蛛の巣のごとく張り巡らされたワイヤーとそれにつるされるハンガーはいつも通りだが、何かの民族衣装のようなものやら小さいトーテムポールのようなものやら、やはりどこか日常の風景とは違っていた。

「あら、貴方は……」

と、そんな真尋に声が駆けられる。占い師のような、あるいは魔女がかぶっていきそうなフードのついたケープ姿は覚えがある。以前寄った店の店長らしき女性だ。雇われ店長なのか、こちらの店にも来ていたのだろうか。挨拶と同時に聞くと、彼女はやや含み笑い。

「まあ、わたくしの店ですので。絶賛、領域を拡大中です。……どうぞ、よしなに」

「領域……?」

支店を増設してるということだろうか、妙な表現をするなど訝しむ真尋。もっとも彼女はくつくつ笑い「今日はお一人なんですね」とからかうような声をかけた。

「別にいつも一緒にいるわけじゃないぞ?」

「あらあら、付き合いたてのカップルのようで見えて御飯がおかわりできそうな様子でしたのに」

「いや……、結構フランクなんだな店長さん、結構フランク」

顔は隠れて見えないもの、お嬢様然とした雰囲気彼女の意外な言い回しに困惑する真尋。それを見て更に楽しそうに、くつくつと笑う。

「でも、ああやって相性占いをするくらいなもの。それなりに邪推はされるかって思いますけど」

「大体において逃げられない状況つてのは存在するから」

「あらあら……。尻に敷かれそうですね」

誰とは言わないけど、とやはりからかう様な雰囲気。店長。眉間にしわを寄せる真尋は視線を逸らすと。ふと、部屋の奥に置かれている棺桶が目にと留まった。……何故に棺桶があるのかと不審がり近寄る。

よく見るとそれは棺桶ではなく、棺桶に見立てた何か別な道具のようだ。蓋部分が半透明のケースで、顔面にあたる部分はよく見えない。また内部には妙に肌の白い人形のようなものが置かれており、出来だけでいえばかなり精巧なもののようにも見える。

「あら、興味あります？ それ。新入荷なんですよ」

「新入荷つて……」

「とはいえ非売品ではあるので、必要でしたら注文する必要があるんですけど。あ、蓋は外さないでください？ 結構デリケートな代物なので」

「いやいや、これつてそもそも何ですか、これつて」

まさか本当の死体ではあるまいに、と思っている真尋に。店長は含み笑いのような声。

「ふふ……。レプリカ、です」

「レプリカ……？」

「ええ。撮影用とかに使うやつですよ。中に動物の臓器とかを仕込んで、それっぽく見せるもの。肌は色を塗ったりして質感を出したり、あとは血管を模したチューブの中に色々入れて——」

「あー、いや、デイトール聞きたいわけじゃないんだが……。というか、そういうのつて売ってるものなのか？ こういう店で……」

まさかのホラー映画ないし特撮映画で使われそうな備品、大道具のようだった。何故そんなものがこんな店頭で販売されているのかという話ではあるが、訝しむ真尋に「仕入れ先がアバンギャルドな方針なので」と返される。明らかにそんな話ではないのだが、しかし真尋も追及する気は失せた。

「特注品になりますけど、注文も請け負ってたりもしますよ？ お金はそれなりにかかりますが」

「そりやかかるだろうけど……、っていうか、ここって何の店なんです？ 全く売ってるものの系統に理解が及ばない……」

くつくつと微笑む店長は、何とも言えない胡散臭さがあった。

「一応、服をメインとしてはいますが、まあ色々なんでも置いてあります。機会があったら、またお立ち寄りくださいな。彼女さんを連れて」

「だから違うってのっ。……というか、アレだ。立ち寄ろうにも、この店って色々大丈夫なのか？ このくらいの時間帯で、この込み具合で」

「くくく」

くつくつと笑う店長。若干、頬が引きつっているようにも見える。

「……聞かない方がいいですか？」

「致命傷、とだけ」

「あっ」

察してしまった真尋。流石にいたたまれず頭を下げ、今度こそ店を出た。

そんな彼を見送って、くつくつと微笑む店長。ぼそりと「危なかった」とつぶやいた。

『素晴らしき星の英知の会』と繋がりがああるのも、今の時点では知られると問題だし……。わたくしも、色々進出場所は考える必要があるかしら」

そう言いながら、背後にあるショーケースを開け、腕時計――

―否、腕時計型の十面ダイスが二つとりつけられた妙な形状の装置をいじりながら。

ちらりと、先ほど真尋がうろついていた棺桶を一瞥し。

「それにしても、あの手に持っていた袋のおもちゃは、一体何だったのかしら……」

今度会ったら聞いてみようかしら、と。真尋の知らないところで、龍子を伴って店に訪問できない理由が増えていた。

